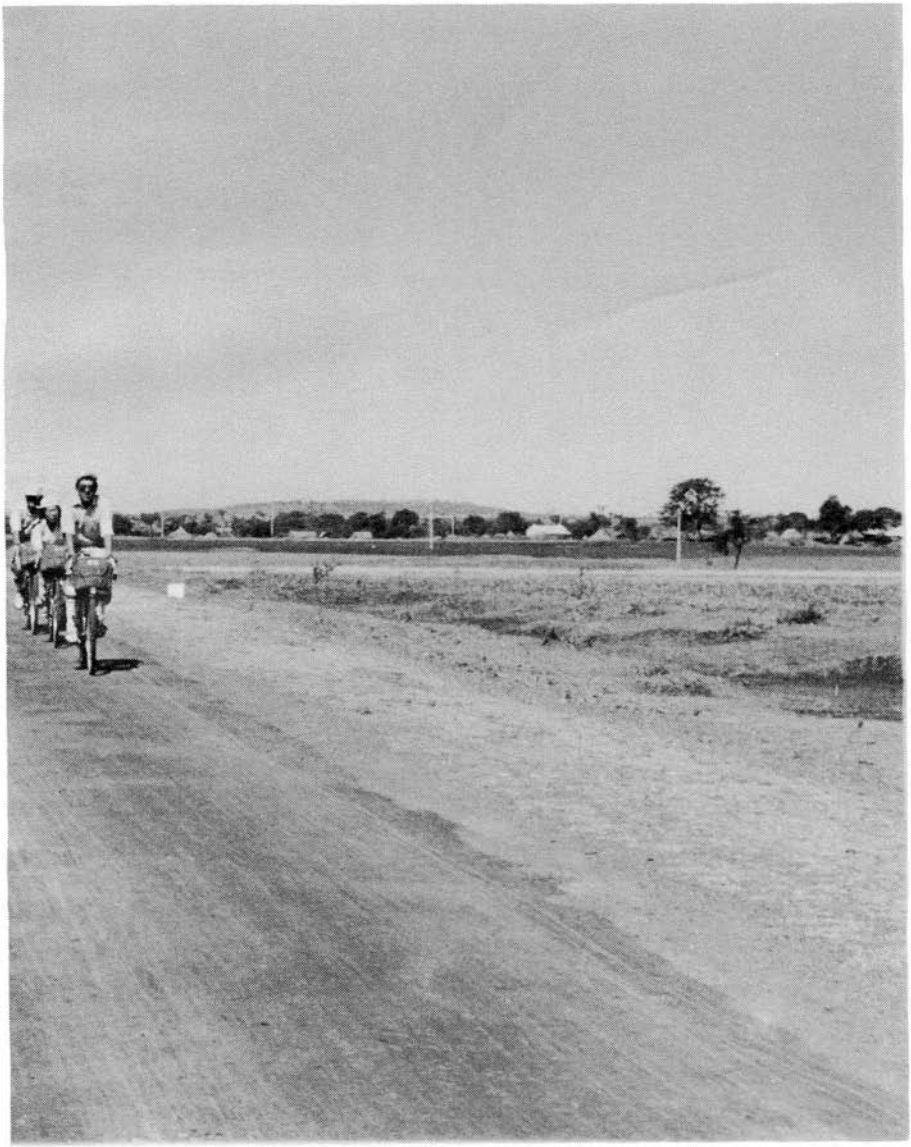
# インド合宿報告書

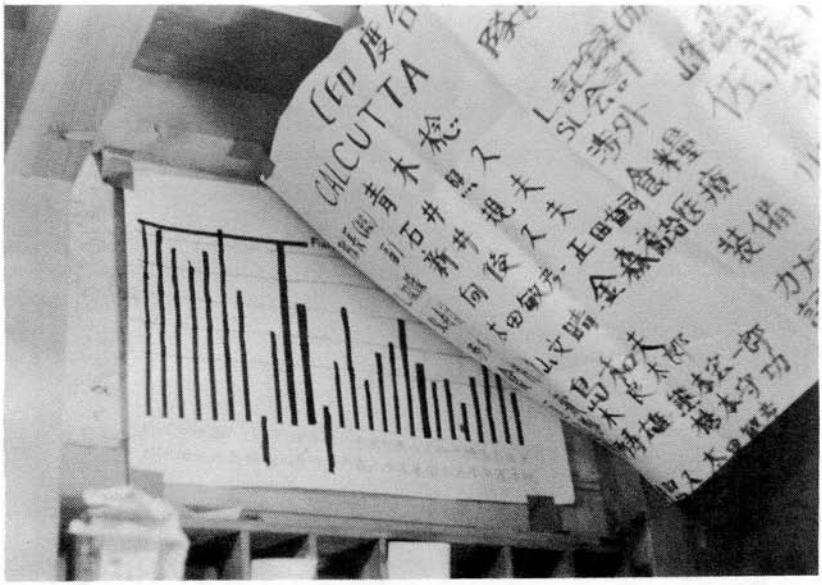
——デカン高原自転車横断——

1978. 2 ～ 4

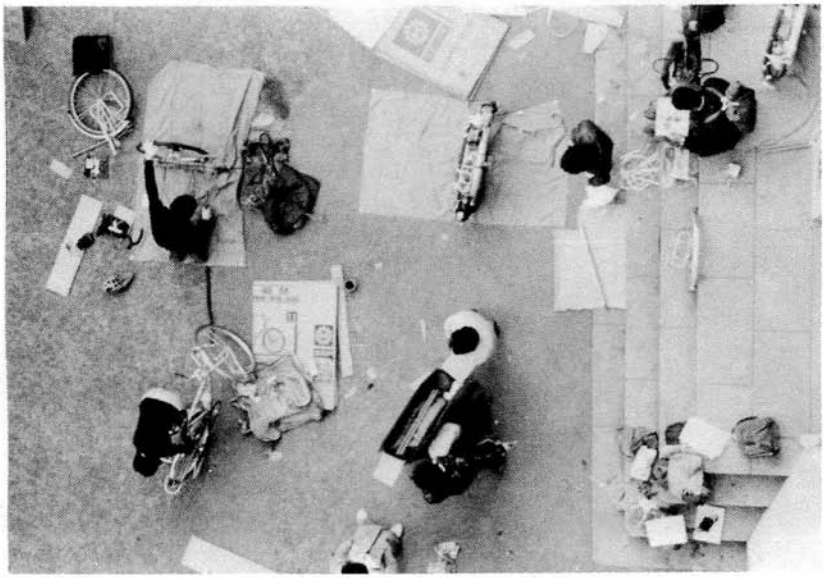
早稲田大学ワンダーフォーゲル部



デカン高原を走る　（ブルダナ付近）




出発を控えた部室（左は積立金表）



自転車の梱包（体育館前　2月14日）

琉球大・与古田さん（中央）と（２月２７日）

州境を越える　（３月１４日）

ブルダナの学校前　マヘッシュさんらと
（３月１３日）

ナグプールまであとわずか　（３月２１日）

ナグプール市のレセプション　佐々井さんとともに
（３月２３日）

体育名誉賞受賞　（５月１０日）

# 目　次

巻頭言

インド遠征を終えて……部長　神沢　惣一郎……2
インド雑感……監督　青木　稔……5
インドの旅雑感……コーチ　土屋　猛……19
脱・Aコーチ的インド回想録……A・コーチ　平木　裕実子……27
インド合宿を考える……主将　新井　規夫……29

計画概要

立案の背景……34
趣旨……35
計画の推移・経過……36
隊員編成……36
行動計画……36
事故対策・連絡方法……36
資金……37

隊の統制……37
隊員表……37
インド合宿までの部活動概要……39
概念図……47

## 具体的準備及び反省 ――海外合宿のテキストとして――

資金計画・会計報告……向後久夫……50
『インドで暮らす』……金森祐治……54
ヒンディー語の学習……太田敏彦……55
『ヒンディー語が話せるのかい？』……正田益司……59
計画書の作成……神保淳一……60
第三次英文計画書趣旨……63
渉外……神保淳一……64
連絡網……太田敏彦……66
事故対策……神保淳一……67
公文書の取得……山田達男……67
事故対策・交通網（カルカッタ隊）……68

事故対策・交通網（ボンベイ隊）……69
公文書（英文・インド大使館宛）……70
（英文・インドユース・ホステル協会宛）……71
（邦文・外務省宛）……72
装備計画……川相智史……73
『事故のこと』……片所寿雄……78
食糧計画……村山文晴……79
『インドの家庭料理』……佐藤巧……81
医療計画……大島和夫……82
『カルカッタ隊の健康について』……安倍己紀男……87
記録計画……新井規夫……89
カメラ計画……山田達男……89
『インド人にカメラを向けて』……青木稔……90
トレーニング計画……峰高正行……91
『自転車のトレーニング』……谷津田輪業・遠藤祐弘……93
梱包……向後久夫……95
みやげもの……向後久夫……96

行動記録


コース図……100
実行動表……102
先発隊行動記録……太田敏彦……104
本隊行動記録（分隊まで）……向後久夫……110
カルカッタ隊行動記録……新井規夫……113
ボンベイ隊行動記録……山田達男……144
本隊行動記録（合流後）……神保淳一……176


在日本部報告


在日本部結成まで……山口純一……186
在日本部連絡日記……三廻部秀男……187
在日本部連絡網……189


寄稿文


日印人物交流に思う……日印協会・鹿子木謙吉……192
相互理解のペダル……青年海外協力隊・藤巻洋……194
インドは……トラベル・メイト社・森脇準一……195

南インドで……大橋正明……196
今の現役が……安田平八……199
山本稔氏との対談から……山本稔・新井規夫……200
新しい道をもとめて……里見昭二郎……202
部活動における海外……青木正……205

## 感想文

インドの医療について感じたこと……安倍己紀男……210
スバル……石井照久……211
熱烈大歓迎　インド編……平木裕実子……212
インドで出会った日本人……新井規夫……214
旅行者か生活者か？……山田達男……217
「悪いやつ」とののしられたこと……太田敏彦……218
インド合宿……向後久夫……219
イェトマル……神保淳一……221
印度合宿雑感……大島和夫……222
バダラにて……川相智史……223
こじき……峰高正行……223

インドで一番印象に残ったこと……村山文晴……224
美しい日本語と私……芥川泰男……225
インド合宿……金森祐治……226
印象に残ったこと……佐藤巧……227
初めてのふれあい……正田益司……228
インド合宿感想文……鈴木良太郎……229
関係者・協力者リスト……232
編集後記……235

# 卷頭言

# インド遠征を終えて

部長　神沢惣一郎

四月一日の夜、早大ワンダーフォーゲル部インド遠征隊が帰国するので、羽田空港に出迎えにいった。次々にゲートを出てくる隊員の様子を見て、私は意外に思った。四十日間も暑いインドで活動したのだから、隊員の顔は赤銅色に輝いていると思っていた。ところが顔色はさえず、目ばかり光っていて、元気に溢れているようには思えなかった。私は気になったが、デリーからの飛行搭乗時間が長かったから、隊員に疲れが出たのだろうと思いなおした。

それから数日後、学生の一人が赤痢にかかっていることがわかり、隔離されることになった。大学の体育館やワンダーフォーゲル部室は消毒され、隊員全員の身体検査が行なわれた。その結果、外に四名の学生が赤痢にかかっていることが判明した。

私はこの経験をみて、今度のワンダーフォーゲル部の遠征は矢張り相当なものであったことを改めて強く感じた。またこれらのことは、結果的にではあるが、他の人たちにインド合宿が難事であったことを強く印象づけることになった。

そこで今回のインド遠征について考えてみると、その特色の第一に挙げられることは、規模が雄大であることである。隊を二手に分け、東はカルカッタ、西はボンベイを起点

として出発し、インド大陸を横断してデカン高原の中心都市ナグプールで合流するという、全行程二千四百キロに及ぶ壮大なプランである。このような壮挙は早稲田大学ワンダーフォーゲル部の歴史においてかつてなかったことである。他にもそう類例はないであろう。

第二の点は今回の遠征には未知の要素が余りにも多かったことである。日本ではインドというと、貧乏と疫病の国という印象が強く、この先入観念には常に悩まされた。この計画をきいたラグビー部長の高野竹三郎氏が「インドはアフリカや南米よりも恐い」といっておられたが、これは多くの日本人のインドに対する感じを卒直にいい表わしたものである。そのため私たちはインドで長年の間研究生活をされてきた我妻和夫氏やその他の人たちにあい、インドの実情についてつぶさにききただした。その結果、その先入観念は徐々に改められたが、それでもインドへの恐怖は隊員が帰国するまでなくならなかった。

第三の点は今回の合宿ではワンダーフォーゲルの本来の姿を実現することができ、その持味を活かすことができたことである。しかも自転車を用い、新しい方向も開拓したことである。このことはワンダーフォーゲル部がミニ山岳部ではないことを明確にし、しかも決定的な形でこれを示したことを意味する。

これまでわが部では三度にわたる海外合宿を行ない、大きな成果をあげてきたが、メインは高山登頂であった。しかし今度の合宿の目標は高さではなく、横断距離の長さであった。しかもその行程において身体と汗でぢかにインドの人たちの生活に触れ、その文化に接する

ことができた。そして隊員はインドが大好きになって帰ってきた。

第四の点はワンダーフォーゲル部がこの壮大なプランを一丸となってなし遂げたことである。このことは体育名誉賞の選考委員会でもいわれ、このことこそ授賞の対象となったものである。この中にはワンダーフォーゲル部三十年の歴史と先輩諸氏の努力も含まれていることはいうまでもない。

最後に、この壮挙を実現するに際してお寄せいたゞいた各位のご尽力に対し、心からあつくお礼を申上げたい。

# インド雑感

監督　青木　稔

すでに夕闇の中、波頭が無気味に光り、白く壁の様に連なり黒い海原からおし寄せる。真昼の暑さをまだ幾分残して海風が流れてゆく。三月五日七時、私はベンガル湾の砂浜に佇んでいた。

インドに来て以来出合った数々の光景、例えばはだしで遊ぶ子供達も、バクシーシと切ない顔でせまってくる子供を抱いた女も、チャイを飲むのに立ち寄る薄汚れた茶屋も、人いきれの暑い裏通りも、それはかつて訪ねたパキスタンやデリーを、なつかしく思い出すものにこそなれ、決してインドそれ自体から受ける大きな驚きはなかった。異国に来た抵抗をあまり感じないままにその生活に入ってしまっている。

それは出発前の煩雑な準備と、インドに着いてからの慌しさ、そして一日七、八十キロを走る自転車の旅で、いささかゆとりのないままにこのブーリーまで来てしまったからかもしれない。

久しぶりに持った静かな時である。

そんなぼんやりと海を眺める心の間隙にふっと入り込む様に、インドに来ている、という

感慨が湧いていた。

カルカッタから、ベンガル湾ぞいにさ程離れずに南下して来た道は、水も豊かで、青い稲の穂の並ぶ水田が散在していた。そして、これから進む中部高原地帯を思い浮べた。

暑く乾いた大地が拡がるに違いない。これからが我々の目指すインドなのだと思った。

足下の砂を手でかくと、砂にもました細かさで夜光虫が点々と輝いている。

〈インド〉

インド中央部を自転車で走破したい、という計画を具体的に聞いたのは、はだ寒い三月の初めである。当時現役の頭にはまだ漠然としたものしかなかったのかもしれないが、私にとってはいくつかの点で興味深いものがあった。

ひとつはインドそれ自体のもつ魅力である。ヒンドゥーやカーストをはじめとする重い歴史の中で、我々は日本と異質の文化に触れ、考える巾を拡げる事ができよう。次には、いわゆる最近一般化しつつあるヒマラヤ・トレッキングとやらの真似ごとではなく、自分達なりの活動を考えている事である。

ボンベイとカルカッタを結ぶ道は、乾いた高原と、農村と、幾何かの産業が散在しているに違いない。七〇％の農業人口を持つインドの、その真中を渡り歩く事は、「村に行け、これがインドだ」というガンジーの言葉を思い起させる。これはまさに学生時代にしか、それもワンダーフォーゲルでしかできえない活動であろう。

たどたどしい説明の中にも、私には現役なりのロマンを求める情熱と、目標をみつけ進み出した強さを感じられた。

インドを選んだ理由を私なりに考えると、ひとつは前の代が検討していたインド北部の遠征計画が素地としてあり、そのイメージが継続した事。そしてその広さを考えると、部員が平素生活に利用しだした自転車を、活動を拡げる道具として取り入れた事。又、近々のインドブームといわれる背景が、無意識のうちに部員達の頭に漂っていた事もあるだろう。

ボンベイとカルカッタを自転車で走破するという感覚は、平常の合宿で見られる二地点間の踏破、というイメージと共に、農村地帯のみを活動地域としている点で、最近みられるテーマの追求といった考え方も入り込んでいる。

道はどうか。泊り場はあるのか。食べ物はうまく手に入るのか。治安はどうか。病気の恐れはないか。言葉は通じるのか。なによりも部員が結束して事に当らなければならない。

幾多の不安があるにせよこの計画は、地域、方法、そしてその規模からしても、部の活動領域を確実に拡げるきっかけとなるに違いない。

私前後の活動を見ると、地域的な開拓性という意味あいが多分にあった様に思われる。その時代にはそれが一つの価値を持ち得たと言えよう。しかし部を卒業してから感じた事は、未知な地域を追っていく情熱は必要だが、それだけでは必ずいきづまりが来るであろうという事である。

部の歴史は日本各地に次々と足跡を残すであろうし、自然を活動の対象とする他の様々のグループをみれば、それこそ全土をなめつくしている事だろう。

インドでの活動は、その危惧に対し一つの答えを出すものと思われる。

各代がそれぞれの方法で活動を創り出してきたその情熱こそが今まで部を支えてきたに他ならず、その姿勢こそが今後も受け継がれてゆくべきものであろう。

「インドで自分を燃やしたい」という現役の言葉を聞いて、計画を進めようと心に決めた。

何度かの話し合いのあと、五月の末に神沢部長の承諾を得る事ができた。

インドは未知数の多い土地なので充分に情報を集め、安全に行動する事。又、何らかのアクシデント、例えば風土病の蔓延や政情の不安が現実のものになった場合は他計画に移行する事。そして貧しい人々の中を、いわば富める国の人間が多人数で行動する、という倫理的な問題を配慮してほしい、という部長の言葉を胸に入れて、インド計画はスタートする。

〈アレンジ〉

オリッサ州に入りカタックに着いてから、我々は大変な歓迎ぜめにあっていた。

八日には赤い制服の地元サイクリストが一時同行をし、途中の小学校で歓迎会を受け、又土地の有力者ビハーリ氏がジープで先導してくれる。デンカナルに着けば、名門と言われるB・Bハイスクールでのレセプションが用意されており、五百人は下らないであろう男女生徒の前で計画の説明と自転車の解説、そして安倍さんと石井が柔道の試技をして大いに受けた。

そのあと地区のコレクター（責任者）ミセス・ダスを囲んでの歓談、夜にはロータリークラブでのディナーに招待を受けた。

九日、二人のインド人がバイクで前後して走り、レセプションのアレンジをする。途中ハイスクールでの三回の歓迎会。道から校舎まで生徒が並び「ウェルカム」の歓声に迎えられ帰りには「さよなら」のコールに送られた。アングルに着き、サーキットハウスでランチが用意され、夜は又ロータリークラブでの会食と、息つく暇もない行軍である。

カタックを出る前のミーティングで我々は以下の点を確認していた。㊀我々は個人のツーリストではなく、WWVの合宿で来ている。㊁この計画を実施するに当って、日印協会その他に、現地での連絡や情報などの依頼をしている訳で、日印協会のパトネイキ氏やサマージ新聞社のラット氏がいろいろと便宜をはかってくれるその好意は、素直に受け入れるべきである。㊂我々の予定通りにいかない事で意気消沈したり苛立つ様ではなさけない。この機会に貪欲にインドを知るべきではないか。㊃我々は二十九代の計画したインド合宿で来ている訳だが、今一度確認すべき事は、この計画が過去二十八年間の先輩諸氏の力の積み重ねの上に成り立っている事。そして実施に当っては、直接間接に多くの人々の助力を得ており、決して現役だけが計画し、行動している訳ではない。

しかし先手先手にアレンジされているこれら歓迎の連続で、我々はいささか心労が重なっていた様だ。

〈そして、三月十日〉

起床係が寝すごし出発が遅れる。連日の暑さと、自分達のペースをつかめない苛立ちから、体力的にも気分的にもまいっているのだ。

カタックで、オリッサ州の要職を歴任したラット氏のはからいで現州知事シャルマ氏と会談の機会を得てからは、知事の命令一下、オリッサ州内での我々は、行く先々で歓迎のレセプションが用意されているのだ。

昨夜のうち合せで、途中ジャルパラとボインダでハイスクールのレセプション、泊る予定のライラコールでも歓迎会が予定されている。

どこかどんよりと砂塵の漂う大地に、今日も雲一つない空がはてしなく拡がる。

カタックからの道はゆるやかな起伏をまじえながら、高原の一角サンバルプールへとゆっくりと登りつめてゆくのだ。途中いくつかの森林地帯をぬけるが、乾燥した土地のせいかさ程大きな樹はなく、まばらな林が拡がっているだけだ。土壁とワラブキ屋根の家が点在する乾いた暑い道でもある。

七時半、茶屋をみつけ日課となったチャイで喉をうるおす。すぐにジャルパラに着くが歓迎する人影は見えない。今日は我々のペースで進めるのか。いささかほっとして動き出したその直後、一年の片所が老婆に追突した。盲目の老人と腰の曲った老婆が路上をゆらゆらと歩いていたのだ。自転車の前輪がアメの様に曲がり、炎天下に老婆が倒れ込んだ。

道路わきの木影にキャリングケースを拡げて寝かせるが痛いのだろう、唸る様な声を出し腰をさすり続ける。盲目の老人は困惑して声高に叫んでいる。「何と言っているのか」「どこが痛いのか」「どうすればいいのか」言葉が解らない。安倍さんが手拭いで湿布をし、片所に精神安定剤を飲ませた。

太田と向後が手前のポリスステーションに事情を説明に出る。

集まり出した人垣の中に英語の解る男が一人おり、「病院は近くにない。十五～二十ルピー渡せばそれで解決だ」と言う。集まった村人達も、又盲目の老人も「ルピー・ルピー」と口にしているのが我々にも解った。安倍さんの話では、出血はないし、打ち身だけなので休息すれば大丈夫だろうとの事だ。気持ちは痛むが、金が一つの解決方法なのだろう。老婆が少し落ち着いてから二十五ルピーの金を渡すと納得した様だった。運良く乗合いバスが通りかかり、新井が老婆をかかえて二人を乗り込ませた。

私は考え方と同時に金の価値の差を感じない訳にはいかない。我々にとって二十五ルピー（七百五十円）は一回の昼メシとコーヒーで終ってしまう。しかし一日働いて五ルピーを得る農村地帯のインド人にとって、その金はいかに大きな価値を持つことか。そして我々は、いかに贅沢な旅をしているのだろうか。

向後がジャルパラの学校の先生ともどってきた。村は国道から五百メートル程入った処に拡がっていたのだ。生徒達が駆け寄ってくる。半袖の白シャツとカーキ色の短ズボン。青

や黄のビーチサンダルを何人かがはいている他は、ほとんどがはだしの少年達だ。ちなみにカーキはインドの言葉でkhaki（土ぼこりの意）からきている。

いつもの様に花飾りをかけてもらい、パパイヤやバナナなどをごちそうになり、二時まで教室を借りて休息と自転車の修理にあてる。絨毯が敷かれ、扇風機が持ち込まれる。生徒が鉄格子の窓にしがみつき、教室の内におし寄せ、終始喧噪の中である。カルカッタで見た標語「More Work. Less Word」を思い浮かべる。しかしこの好奇心は一面素晴しいものがある。このエネルギーが、自分自身を、そして村を、国を、世界を考え出した時、偉大な力を生み出すに違いない。インドはやはり大きな潜在力を持った大国なのだ。

次の村ボインダまでは迎えの人が自転車で先導してくれた。ランチを用意し我々を待ち続けているのだ。ハイスクールに入り、果物やカレー、そして久かたぶりの肉（マトン）が嬉しかった。村の要人が食卓を囲み、生徒がそのまわりからのぞき込む。帰りがけに村で作られる色鮮やかな杖を贈られ出発だ。子供達が走りながら、手を振りながら見送る中、我々はライラコールへと向った。そしてこの時はもう四時を過ぎていたのである。

出発した途端、右手から横なぐりの強風が吹き続けた。落葉の舞う中を、我々は必死でペダルをこぎ続ける。予定の時間を大巾に遅れ、又黒い雲が前方を覆い出しており、前途多難を思わせた。走り出して一時間後、風もようやくおさまりほっとした中、坂を登った茶屋の処で大島の自転車がパンクをした。この時我々は、何かに憑かれた様に、死にものぐるいの

最大スピードで飛ばしていたのである。

雨がぱらつき出しており、暗い夜がもう訪れようとしている。

森林地帯の真中を大きくうねりながら道が続き、林の中にポツンポツンと家の灯が見え隠れしていた。六時にダイナモをつける。近くの家の人々が道端に出ており、我々の事を不思議そうに見ていた。こんな闇の森の道を、それもかなりのスピードで走りぬけてゆく事など、彼等にとって到底及びもつかない事なのかも知れない。

前方にイナズマが走った。一瞬我々の姿が闇の中に浮ぶ。カミナリが何度か鳴り続けた。そんな中で道端に自転車を止めている三人のインド人に会った。私は彼らの処にゆき話しかけると、四時から我々の事を待っていたのだと言う。多分ライラコールの人達だろう。あとで聞くと、レセプションとディナーの用意をしていたのだが、あまりに遅いので迎えに来てくれていたそうだ。しかしライラコールまではまだ二十キロの道のりがある為、近くのバムールという村のインスペクションバンガロー（役人の宿泊所）に今日の宿を用意してくれていた。

急に雨足が早まる。そして森の深い闇にバンガローの灯が見え、その光の中に部員が一人、又一人と走り込んでゆく姿を見て、私は心から安堵していた。

十人程の人達が出迎えてくれる。

私はこの人達の、この好意がなければ、まだ暗闇の森林地帯を、疲れて心細く自転車をこ

がねばならなかった事を考えると、感謝の気持ちで一杯であった。

テラスの椅子に掛け、お礼を言った時、「この近くの森は夜になると、まだトラが出る事があるのです」という話を聞いて再び胸をなでおろした。

変化のある一日であった。疲れはしたが充実した一日だと言えよう。カタック以来、久かたぶりに、生き生きとした部員達の姿を見た様に思う。

八時になり雨が上った。高原に入ったせいか、ここには汲み水があるだけで水道はない。私は近くの茶屋までチャイを飲みに出た。

樹々の上を無数のホタルが飛び交い、雨上がりの森は実にすがすがしかった。道端に降りた奴を手にすると、赤茶色の小さなホタルである。

＜「無事にこれましたね」＞

カルカッタを出て二十四日目の三月二十二日、道端の見慣れた石の道標がナグプールまで六十キロを示している。人家もふえ、通行する人も多くなり、道はもう街の雰囲気を漂わせている。

最後の日になり、石井と金森の自転車がパンクをした。もう大分くたびれているのだ。正田が途中の一本をバカみたいなスピードで飛ばした。

今日で自転車の旅を終える安堵感と、完走した嬉しさと、一抹の寂しさと、そしてこもごものインドの思い出をのせて我々はナグプールの街並みに入っていった。

ボンベイ隊の連中が出迎えにきている。黒い顔だ。元気そうだ。彼らも昨日無事に着いていたのだ。一年は嬉しそうに旅の話を始め、二年は苦労したなという面持ちで、三年はほっとした安堵の色を隠せない。石井も佐藤も平木も血色のいい顔つきである。安倍さんもとうとう最後まで完走してしまった。

在印の連絡所をお願いしていた佐々井さんにここで初めてお会いできた。「無事にこれましたね」と両隊の再会を祝ってくれた。

そう、我々は無事にナグプールまでこれたのである。

宿舎のM・L・Aゲストハウスに落ち着き、さっそくビールで乾杯。再会と横断の成功を祝った。

しばし両隊の苦労話に花が咲く。

〈インドは〉

インドで我々は行く先々で盛大な歓迎を受けた。村の子供達は笑顔に白い歯をみせて駆け寄り、好奇心と歓迎とを体一杯に表わしてくれた。学校ではいつも花で編んだ首飾りを全員がかけてもらい、軽食やチャイをご馳走になった。

私はジュジュマラという小さな村で昼食によばれた時、部屋に真新しい扇風機の回っていた事を覚えている。あれは我々を一時招待する為に取り付けたものに違いない。

又、カタックで出された食事が辛かった為苦労していたのだが、その後のレセプションで

は抵抗なく食べられる味付けがされていた事も、嬉しい心遣いで忘れる事はできない。

心からの歓迎であった。

我々は又、インドで多くの人々に出会った。

ジャレスワールの茶屋で朝から晩までかいがいしく働き、我々のアイドルとなったスバル少年。ズボン一つの姿で注文を聞く仕草が、腰に手を当て、顔を上げこちらを見据えて、りりしく利発でかわいかった。カタックでは終日面倒をみてもらったラット氏。彼は仕用人を呼ぶのに、椅子の横にあるブザーを気ぜわしく鳴らし続けていた。又、日印協会のパトネイキ氏は、料理の味を気にして「ホットか（辛いか）ホットか」と聞く気さくなおじさんだった。彼の二人の娘さんは実にかわいかった。デンカナルのミセス・ダス。彼女の権力は絶大なもので、役人を紹介するのにいつも「アンダー・ミー」と口にした。柔道が見たいといい、我々に試技をさせたのも彼女である。サンバルプールでヒラクッドダムを見学させてくれたミスター・サフー。気ままに動きたがる我々の面倒を良くみてくれた。又、ジャラップの近くでは、親日家のバラック氏の家へ招待された。四年前農業の研修で一年間日本に滞在した事があるそうで、その時に気に入った日本式の風呂があったのには驚かされた。カセットで、藤圭子やらアグネスチャンやらを聞きしばし日本を思ったものである。

思えばインドの人々は実に無理なく、自然のままに生活をしていた。時間に縛られる訳でもなく、我々との約束事に、一・二時間遅れる事などざらにあった。しかし自分達のペース

でやるべき事は確実にやっていた。

実際に生活をして、行く前に持っていたインドのイメージとは違ったものを、私は得る事ができた。

日の出前には、女達がたばね箒で道を掃き出し、朝の村はきれいに掃き清められている。だから、我々の毎日の出発は実にすがすがしいものであった。

朝夕の街の喧噪をみるにつけ、我々をとり囲む学生や子供達の貪欲な好奇心をみるにつけ、私は人々の心の強さと明るさを感じない訳にはいかない。決して貧しさに打ちひしがれている訳ではない。冥想にふけっているのでもなければ、哲学的でも神秘的でもない。過酷な自然の中で、暑く乾いた大地に根を下ろし、すべてのものを自給自足しながら、まぎれもなく今日を生きる人々の中で、我々は生活してきたのである。

準備から一年余り、一人の落後者も出さずにインド大陸を横断できた事は、まず成功であったと言えましょう。

今合宿の実施に当たり、現役を力強くサポートして下さったOBの方々と、インドについての情報や助言をいただいた多くの方々、そして、我々を暖かく迎えてくれたインドの人達に、心からお礼を申し上げます。

又、ドクターとして合宿に参加していただいた安倍さんのおかげで、我々は病気についてことさら心配しないですみました。私には安倍さんが一番インドに溶け込んで生活していた

様に思われます。

さらに、自分達の代の活動の一部をさいて、インドの為に配慮をしてくれた前リーダー諸君の思いやりがなければ、この様にスムースに実現できたかどうかわかりません。

そして私は、計画立案から実施まで、終始結束して事に当った現役諸君、とりわけリーダーの諸君に、心から祝福の拍手を贈りたいと思います。君達の力がなければ、やはりこのインド合宿はできなかった。

（昭和五十三年六月記）

# インドの旅雑感

コーチ　土屋　猛

十年前、我部初の海外合宿（ボルネオ）に参加した時、私は一年生であり、何も知らぬまただ単に「海外に行ける」という喜びが先に立ち、「何の為に行くのか」「何をしに行くのか」などとはろくに考えもせず、上級生やOB・OGの方々が、どれだけボルネオ合宿に力を注いでくれていたのか等は帰国後聞かされたぐらいのもので、まるでのんびりムードの中で参加した私にとって、第三回目のインド合宿は、私がボンベイ隊々長ということもあってか、私自身大変な部の重みを感じていたわけであります。特に今まで主流となっていた山間部主体の合宿から（日本では里道合宿とでも言おうか）、フィールドを平野部に移し、インドという歴史のある国を目指したこと。しかも今までにはない？文化領域の面に足を踏み入れたこと。そして、自転車を足として使用したこと等々、これら一つ一つを見ても早大ワンダーフォーゲル部にとって画期的なことであり、新しいワンダーフォーゲル活動の一つの方向性、生き方を示してくれた合宿にもなったと思われる。それだけに、私がインドで「何をしてこなければならないのか」を考えた時には、普段あまりこのようなことを考えもせずに過ごしてきた私にとっては、大変な立場に立たされたものだと、合宿に近づくに従い緊張させ

られもした。

幸い、帰国後数名の赤痢患者は出したものの、全員無事に帰国できたことは、私にとって何よりも増して嬉しかったことであり、しかも私の場合、十日間早く彼等と別れ単身帰国して来たのでその感が更に増したものでした。大上段に隊長として「何をしてこなければならないのか」などと、格好良く考えはしたものの、突き詰めてみると、彼等が「無事帰国してくれること」の思いが先に立ち、そのようなことは、私にとって大した問題ではなかった。また、私の隊には、佐藤、平木両副隊長と、三年生の山田、神保という有能なリーダー達が、細部に渡り気を配ってリーダーシップ振りを発揮してくれたので、私のやることはほとんどなく（むしろその方が良かったわけであるが）、私にとっては比較的快適に過ごせた合宿であった。

私は現在公立中学校に体育教師として身を置いている関係上、このような活動はこの上もなく願っていたことであり、務めの関係上かなりの問題はあったものの、私が今後教師として生きていく為には、この機会を一つの飛躍台として積極的に考えていくことの方が、大きなメリットがあると考え、むしろ彼等と同レベルに立ってインドの国を見てこようではないかと考えるようになった。ですから私の自分なりの課題としては、インド各地で行なわれている体育活動を主に見て来たいと考え、それにインドの子供達がどんな遊びをしているのか等、自分から積極的に彼等の中に入っていこうと出発前に決めていた。

ボンベイ滞在中、近所の子供達とクリケットをしに行ったこと。カンダーラでハイスクールの生徒と一緒にサッカーをやったこと（先生は困惑した様子だったが、私が日本の体育教師であることを伝え、生徒達も私を仲間に入れてやって欲しいと先生に頼んでくれたので彼等の仲間に迎え入れられた）。シルールとブルダナで学校参観をしたこと。アーメダナガールで学生とバレーボールをして楽しんだこと。パダラで、子供達にサッカーを教えたこと等々、総てがその表われであった。これらの中で特に印象に残ったのは、シルールとブルダナであった。

シルールでは、副隊長の佐藤君を誘って学校（ここの学校は私立で小学校からカレッジまであり生徒数は約千人）を訪ねてみた。

ろくに英語もしゃべれない私ではあったが、図々しさと度胸を持ってして、そこの校長に会見を求め、「私は日本から来ました。私は現在中学校で体育の教師をしています。勉強したいので、是非体育の授業を見学させて下さい。」と話すと、校長は私が訪ねてくれたことを大いに喜んでくれ、わざわざ私の為にカリキュラムを変更してくれ、インド全域にわたり行なわれているという（インド国技とでも言おうか）「コーコー（CHO－CHO）」「カバディ（KABADDI）」「インディアンレスリング」の三種類の体育活動を紹介してくれ、更に、マハラシュトラ州の踊りで「レズィムダンス（LAZIM DANCE）」を男子生徒、三十名ほどで実演してくれたりで私は大いに感激したものでした。

私もお礼に、佐藤君を相手に「柔道」「相撲」を紹介し、最後に国歌の交歓をし、私はインド人との真の触れ合いみたいなものを感じ、良い面（特に優しさ）のインドを知ることができ、私のインド旅行の大きな収穫の一つにもなった一日であった。

又、ブルダナでは、隊員全員がその土地の各家庭に分宿し、インド人との接触を更に深めることになったわけですが、私が特に感激したことは、ここの学校の生徒が、我々の為に学芸会を開いてくれたり、その土地の組体操であろうか、「Mountaing the Pole」を紹介してくれたりで、一般の旅行者ではとても体験不可能と思われることを我々が体験できたことは何よりも幸運なことであった。しかも、どこの土地でもそうであったが、「しらけ」の多い日本の子供達と違って、一生けん命に取り組んでいる彼等の姿を見たことは大いに参考になった。ここの土地は緑も豊富で他の土地に比べて美しい町であった。ブルダナは比較的経済的にも恵まれているのか、学校はホステルの制度があり、親元を離れて勉学に励む子供達が百人ほどいて、軽作業を行ない彼等の生活の足しにし、又彼等の為に教員や学生達が学費等を稼いでやっているのも注目すべきことであった。

インドを旅すると、「好きになって帰ってくる」か、「嫌いになって帰ってくる」かのどちらかであるという。この言葉は私がインドを旅する前情報収集の為に話を聞いて回った際、その多くの方達が言っていたことなのである。「どちらでもない」と言った感想は、私の聞いた限りではなかった。それだけインドという国は、総てにおいて我々に強烈な印象を与え

てくれる所なのである。

「びっくりしたかったら、インドに行こう！」これは、紅山雪夫氏が書いている本の最初の見出しのタイトルであるが、まさにこの言葉がぴったりとくるインドなのである。

びっくりしたことと言えば、貧富の差が、あまりにも大き過ぎること。これはインドを旅した誰もが感じることである。今や日本では「一億総中流」と言われる時代となり、総てにおいて「平均化」されており、少なくとも「衣」「食」においては、何等の差も感じない生活様式に変わってしまっている。

しかし、インドでは豪い差であり凄まじい。我々がボンベイに滞在中大変お世話になったパテル氏（フイルム会社々長）宅は、六階建てのビルを所有し、五、六階を自分達の住居にし、ボンベイの港が一望でき、我々がボンベイに着いた日の夜お邪魔した時には、一同「オーッ」という喚声をあげたほど、素晴らしい夜景が見られ、「こんな家庭もあるのか」と、私の目を疑いたくなるほど、富を得て生活している階層の人間が存在しているかと思えば、これでも人間の生活なのかと思えるほどの生活もある。ろくに、満足な食事にもありつけない人間が、着ない方がまだましであると思われるほど、薄汚なく、しかも所々に穴のあいているボロ布一枚に身をまとい、道端に横たわって生活をしている者達が何と多いことか。これら総ての人達が貧富の差を越え、何等の矛盾？を感ぜずに生活している様は、日本人である私としては「驚き」としか言いようがない。

街中を歩けば、人、牛、車と雑多のごとく往来しており、しかもこれらの動きが、インドならではという感がしないでもなく、我々の目には何等の不自然さも感じさせないから実におもしろい。

デリー滞在中、観光客相手に土産物を売っている十歳ぐらいの子供達（彼等の衣服はそれほど見すぼらしくない）が、我々を見つけるや否や近寄って来て、「これいくらだと思う？」と執拗に尋ねてくる。彼等の物売りのやり方で、我々に値段を言わせ、もしその言った値段が彼等にとって得だと判断するとすかさず、「これを買ってくれ」と言ってくる。私も最初、おもしろ半分に適当な値段を言っていると、更に執拗に付きまとってくるので厄介になると思い、私は「日本では、この値で売っているよ」とかなりの安値を提示すると、さすがにそこは子供で、「それは安いね」と、逆に彼等が驚いてしまい、それ以上は付きまとって来なくなる。しかし、大人達はそうはいかない。次から次へ、あの手この手と、執拗に迫ってくるのには私も閉口した。このような光景は、この国ではどこに行っても見られ、このレベルの階層の人間は、子供から大人まで、その日の暮らしは自分達で得るのではないのかとさえ思えるほどである。しかし、この種の子供達を見ていて感じたのは、その様な生活に悲惨さがないこと、又、明るさを持っていることである。我隊がボンベイに移動する際、途中の停車駅で、一度だけ少女に「バクシーシ」と涙をこぼさんばかりに「物をくれ」と懇願された時には、さすがの私も嫌な所に来てしまったものだと思ったりもした。

日本であれば、「子供にこんなことをさせて」と、すぐさま社会問題化してしまうであろう。このように、いたるところに日本の常識外の生活が、あまりに多く体験できるのである。

インド人が、宗教心に基づき、カースト制に支配されながらも、生活している力強さ。又四十度、五十度にもなるという（我々は三十八度位の体験）インド亜大陸の中にあって、大地に横たわりながらも、必死に生きていこうというその凄まじさ。しかし、私には彼等のそのような生活振りが「みじめだ」などとは思えなかったし、むしろそのことが、インド人の力強さを表現しているのではないかとさえ思ったのも、インドだからこそではなかったのか。

インドには歴史があり、日本の文化もそれによる影響がかなり多い。我々が訪問した中で、スケールの大きいインドも見た。デカン高原最大の都市オーランガバード郊外にある、日本の法隆寺金堂の壁画の原型になったと言われている「アジャンタ窟院群の壁画」の色彩豊かな素晴らしさ。又、岩山を堀り下げ、まるで建造物であるかのように彫刻されている「エローラ窟院群」、この中でもヒンドゥー教のカイラーサ寺院のスケールの大きさ（彫るのに二百年以上要したという）には、我々現代に生きている人間にとって、とても真似はできない。私だけがそう感じるのであろうか。恐ろしいほどの執念がインド人にはあり、敬服させられ、畏敬の念さえ抱いたのである。スケールの大きさがインドにはあり、インド人が持っているスケールの大きさを、我々は知ることができた。

この様に、インドを旅行すると、毎日々々が「驚き」の連続となり、インドを訪れただけ

でも我々にとって教育的な価値が充分あると考える。今の子供達にも是非若いうちに訪問してもらいたい国である。今合宿に参加した学生諸君は私以上に大きな視野に立って考えてくれたであろうし、多大なる収穫があったと確信する。このインド合宿が、今後の部活動に大いに役立ってくれることを願いたい。

帰国後、四月、私の務め先の学校で修学旅行が実施され、その時見学した奈良薬師寺のお坊さんが、説明して下さった中で、現代の若者達と対比させて、インドを取り上げ「貧しさ」と「力強さ」等を強調し話されていたことを考えると、私は今の中学生がそのお坊さんが話されていたことを、どれだけ理解し、又、どれだけ感じて生活しているのか大いに考えさせられました。それだけに学生諸君にとっては、総ての面で勉強になったのではないでしょうか。

まだまだ、これ以外にも数々のエピソード等がありましたが、私が見たまま感じたままのほんの一部を思いつくままに書いてみました。

先にも述べましたが、インドは「好きになるか」「嫌いになるか」のどちらかであると言いますが、私の場合は前者の部類に入ったと言えるでしょう。大いに楽しめたインド合宿でした。機会があったら、また行きたいと思っている「インド」である。

（昭和五十三年十月）

# 脱A・コーチ的インド回想録

アシスタント・コーチ　平木　裕実子

現在では、飛行機に乗って十数時間も飛べば、ぽんと行き着くことができるインドも、その昔は天竺と呼ばれ、三蔵法師が苦難の末に辿り着いた西方の遠国なのである。

インド・インドに明け暮れた私達は、まるで、日本の隣はインドであるかの如くに錯覚しているが、日本との間には、東シナ海を隔てて中国大陸やインドシナ半島の湿潤な国々が延々と横たわっている。裸で放り出されたら、とても気軽に歩いて帰れるところではないのだ。

ボンベイから遠く離れて、テーブルマウンテンが林立する殺伐とした草原を走ったときには、あまりにも異質な風土を目のあたりにして、気が遠くなりそうだった。

貧しい村の、荒廃した教会で、天井からぽとぽと落ちてくる鳥の糞にまみれて寝返りをうつのは、惨めというより、何か奇妙で、多少スリリングな感じでもあった。

そして、私達は何処へ行っても、眼ばかりがギロリと光る黒い顔に取り囲まれて、殺人的な興味の対象になった。彼等の凄まじい好奇心に、私達はとても応えられなかった。黒山の人だかりの渦中で、神経質そうに自転車を見張っている姿は、いま思えば滑稽でさえある。

それでも、地平線から、のっと頭を出す歪な形の太陽に向かって毎朝走り始め、日中は、

首根っこからめまいが起きそうなくらい強い日射しに照りつけられながらもペダルを踏みつづけてゆくうちに、私は段々と、インドに対する免疫性を得ていった。驚かず、惑わず、精神的に疲労することなくインドを旅することができるようになっていったのである。

いま、美わしき祖国日本に、安穏とした日を送っている私にとって、インドは再び遠い国になってしまった。

ただ、時折よみがえってくるインド、それは単なる楽しい思い出ではない。いつも何か、不可解さをかかえている。あれは一体何だったのか？あの単調な自然、それと対照的に一見雑然とした人々の生活は。

単なる観光よりは違う形でインドを見ようとしただけに、すっきりしない疑問を残してしまった。この疑問を解決する為に、もう一度だけなら潤い豊かな故国を離れてもいいと思うこともある。

しかし、遠国まではるばる出かけて行くという冒険性や気迫は見あげたものだが、相手は何しろ、自分の生活の場にいてがっちりと私達を迎えたのだから、彼等の方が強い立場にあったといえる。

今度は、私達の方が、この生活の場で相手を受けとめられるようにして、インド人を極東の島国へ呼んでみたい気がする。

そして、見学すべき所を最大限にアレンジして、レセプションを何度も催してやろうではないか。正露丸でも用意して。

# インド合宿を考える

主将　新井規夫

インド合宿を思えば、あの乾ききった暑さ、荒涼とした風景がまず広々とひろがる。その中に点在する大樹、そして白茶けた畑。ただただ畑を耕す人と牛。「暑いだろうな」と道端に自転車をよせ休む僕達。すべてが単調でカサカサと乾いている。あの景色こそはインドの農村そのものだろう。牧歌的な悠長さは微塵もなく、厳しい自然の中で生活する人間の姿には、同情などさしはさむ隙は全くない。僕達は、僕達自身が創り出し自らが参加することによって与えられた、こうした場面をじっと見つめているだけで精一杯だった。

文字通り極東の離れ小島日本から唐突に現われた僕達を迎えたインド人は、どこでも概して積極的であった。茶屋と呼ばれる道端の小さな店の前に、自転車を置けば、あっという間に二重三重にとり囲まれてしまった。まずは好奇の目で見つめられ、次には英語のできる者が現われてネパーリかと尋ねる。口火が切られるや、次から次へ質問の雨を浴び、その独得の発音にインドを感じた。

Where do you come from ?　　Japan

What is your name ?　　Arai

What's for ?　　Sightseeing by bicycle

以上は質問のベストスリーである。

とうがらしを煮込んだカレーを聖なる右手でこねまわし、チャイと呼ばれる甘っとろいミルクティーで飲み込めばやはりその猛烈な辛さ甘さにインドを感じたものだ。すごい顔をして食べている僕達を彼らはじっと見つめているが、目と目が合えば白い歯をむき出しにしてニッコリ笑う。拙いヒンディー語よりも目で会話することの方が通じたようだ。こちらが笑えば笑いかえし、僕達の自転車の複雑さ、丹念に記録するノートの文字を見ては驚嘆していた。まさにインドを震憾させた四十日と言えよう。

僕達はこうした毎日を送りながら、自分達が果たしてどれだけ正確にインドを理解できたかどうかは別として、日本で読んだ本には書かれていなかった僕達自身の感想をもつことができた。一度に二十七人もの日本人が四十日にわたる延べ体験をしたことは、実際貴重な情報量であろう。これを客観的資料として耐え得る形で報告することは、今後に残された課題であろうし、またそうすることによって、このインド合宿も百パーセント完結するものと思われる。

ワンダーフォーゲル活動の一環として、特に文化面に重点をおいたこの合宿は、やはり僕達でなければできないものであったと思う。その成功の背景には、日頃のトレーニングで培われた基礎体力、それに登山を通して習得される生活技術やチームワークの精神を我部が蓄

えていたからだろうと思われる。計画のデザインに始まり情報収集、予算の編成、資金作り、渉外手続、ひいては言語学習といったいわゆるデスクワーク。これらを一つ一つ解決しながら進められたこの合宿は、今後の海外合宿における、準備のＡＢＣを教える良きサンプルとなるだろう。

今回のインド合宿は計画としては、ひとまず成功したと思われる。この成功の背景には、並々ならぬＯＢ・ＯＧ諸先輩や関係者の皆様の物心両面にわたる御支援があったことをここに深く感謝したい。

最後に自転車を使ったこの試みが果たして我部の活動に、今後どう反映していくかが問題であろう。これは皆でじっくり考えねばならないことであり、一度は批判してみなければいけないだろう。そうすることによって各自の心に生まれてくる発想なり概念をまた再び形あるものにするために暖く育てようではないか。その日のために、へばらない体力と精神力をこれからも、みんなで地道に築いていこうではないか。

# 計画概要

# 立案の背景

## 二十八代インド合宿の挫折から　二十九代インド合宿の立案へ

一九七六年我々二十九代が二年部員となった頃、すでに三年部員の間ではインド計画がほぼ二十八代の統一テーマとして取りあげられ、部は『インドへ』を合言葉に動き始めていた。我々も「海研」のメンバーとして、インドに関する資料集めに奔走していた。しかしそのインド計画は第一次計画書の発刊後、遂に実現への進展はないままに止切れてしまった。この辺の状況は「海外について」石井照久＝彷徨二十八号（P127）に詳しいので参照されたい。

このインド計画の挫折は、当時の部内に多大な影響を及ぼした。十一月には、退部し「インドへ行こう」とする強硬派が部内においてかなりの勢力を占め部はまさに分裂の危機にあったと言っても過言ではないだろう。

こうした背景の中で部の分裂こそは最悪の事態であるという認識のもとに七七年一月当時二年部員であった我々はインド計画を提案するに至ったのである。二年部員の間でも、積雪期活動か、それとも海外合宿かと激論がかわされたが、「なにがなんでも」という強い意気込みを出発点に再び『インドへ』部は動き出した。インド計画を放棄した倉品主将率いる二十八代の人達も、それを快く受け入れてくれ、部は徐々にこの計画にまとまりをみせていった。

以上の経緯は「何故海外へ」「何故インドか」といった重要な議論を飛びこえて実行に踏み切らせた大きな要因であることは否定できない。「初めにインドありき」とも言えよう。

計画立案に際して留意した点を明記しておきたい。それは創部三十年になろうとしているワンダーフォーゲル部がいろんな要素を活動にとり入れながらも、決して山岳地域を出ることはなかったという過去の活動に対する認識を持つに至ったことが重要である。我々はそのことに対する批判という意味ではなく、積極的に一つの新しい方向性を提示すべく、自転車によるインド横断を計画したのだった。このことは距離の追求、山岳地域から文化領域への接近ということをテーマにしたのである。又前回一九七四年夏におこなわれた台湾合宿の成果を踏まえ、我部における海外合宿の可能性追求ということも重要なテーマであった。

# 趣旨

早稲田大学ワンダーフォーゲル部は、我々の代で創立二十九年を数えます。OB諸先輩の中には、我々の父母とかわらぬ年輩の方もおられ、まさに現在ワンゲルファミリーが形成されようとしています。この二十九年の間、我部が脈々と、その開拓性と放浪性という二大精神を基に活動し続けた根底には、真剣にロマンを追求するという精神があったのではないでしょうか。この精神こそ我部の本質であるといえましょう。

ところで、我々大学生というものが置かれている状況を見渡してみると、そこには精神面、物質面に質的変化が徐々にあらわれているといえます。この変化に伴い、すべての既成の価値基準が動揺し、その客観的正統性や現実的有効性が根本から問い直され、現代とは正に、新たな創造的な価値基準が激しく求められる時代であるといえましょう。

この現代に、ワンダーフォーゲル活動を一つの軸として大学生活を過している我々もまた例外なくこの時代の影響を受けて、ワンゲル活動とはいかにあるべきか、活動のどこに価値基準を置くかということを激しく求めざるをえないのであります。大学生の社会的位置や存在理由が混迷している現在、今をいかに楽しむかといった享楽的な意識が大半を支配している風潮の中、我々はここで原点に立ち戻り、真剣にロマンを追求し、一丸となって創造的な活動に取り組みたいのです。

そこで我々は、活動領域の中に文化という面をとらえてみました。過去の形態にとらわれない、そして今までの活動を見直し、さらにこのワンゲルの独創性を満たす地域として我々はインド亜大陸を選びました。インド世界は、我々にとって教科書的知識以外になかなかとらえどころのない地域で、ヨーロッパでもアジアでもない一つの独立した文化圏です。インドの人々は、一時間、一日などという時間の観念がないかわりに、ガンジスの流れに象徴される「悠久」という時の観念をもっています。また、ヒンドゥー教、カースト、様々な言語、風俗、思想の存在する本当の「異境」といえるのではないでしょうか。

具体的プランとして、我々は極東と東南アジアに向けて開かれているカルカッタと、西アジア、アフリカから西欧に向けて開かれているボンベイとの二地点（二、四〇〇Km）を自転車で走破（インド横断）する計画でいます。インドという興味ある国を、自転車をこぎながらす

り抜けていくということは正に、インド体験そのものであると思われます。我々は、この計画を実行すべく、あらゆる障害に対して一丸となって向かっていく心構えであります。

## 計画の推移・経過

### 一、隊員編成

現役合宿であることから青木監督に総隊長をお願いしすべてを総括していただくことにした。また二パーティに分れ独自に行動するためカルカッタ隊の隊長も兼任していただいた。ボンベイ隊では土屋コーチに隊長をお願いした。アシスタントコーチである佐藤OB、平木OGにボンベイ隊の副隊長を、石井OBにカルカッタ隊の副隊長をお願いしそれぞれ実際の行動を指揮する学生リーダーの補佐をしていただいた。特に平木OGには一年生の女子三名の面倒をお願いした。カルカッタ隊のコースには大都市が少なく、医療施設が整っていないことから千葉大医学部の安倍巳紀男氏に医師として参加していただいた。隊の編成はカルカッタ隊十三名、ボンベイ隊十四名計二十七名の団体となった。隊員の全員には、保護者同意書をとらせることとした。

### 二、行動計画

事務手続き上でのトラブルをなくし、スムーズに実行動に入れるよう、先発隊を出すことにした。ニューデリーで本隊と合流した後、二隊に分れそれぞれカルカッタ、ボンベイへ長距離列車で移動することにした。

コースはボンベイロードと呼ばれる国道を主に利用した。道路状況までは、はっきりつかめなかったため一日平均六十〜七十キロでコースをとり、四ラウンド制をとった。約二十日間の行程を四つに分け、四日に一度の割合で停滞地を設け、休養と連絡に当てた。

自転車を使っての行動形態のため行動中の宿泊や食事はすべて現地調達を基本とした。

ナグプールで合流した後は、全員同一行動をとりアグラまで汽車で移動しタージ・マハルなどを見学した後、バスでニューデリーへ戻ることに決定した。

### 三、事故対策・連絡方法

合宿の数ケ月前に、調査隊を現地へ送りコース途上の食料事情や宿泊施設を調べあげたり、伴走車の手配

などを考えたが、医師の参加決定や、詳細な地図が入手できたこと、情報が次第に豊富になり計画の安全性が向上したことなどから中止となった。

事故対策では病人が発生した場合、いかに安全に移動させるかという点が問題となった。これは道路、鉄道、航空網の利用で解決した。

連絡方法は、各ラウンドの停滞地から電報や電話を利用し、インド国内ではナグプールの佐々井秀嶺氏のもとへ又日本には在日本部の窓口を三廻部OB宅にお願いし、そこから部・大学関係者・隊員家族に連絡がわたるよう、とりはからっていただいた。

## 四、資　金

これについては、具体的準備及び反省の項の資金計画のところを参照して下さい。

## 五、隊の統制

我部の活動におけるインド合宿の意味を隊員全員が理解するよう努めた。そのため準備段階に力を入れ、ヒンディー語学習会やインドについての勉強会を実施し、隊員、特に下級生の参加意識を高めようとした。

又、自転車の取り扱いをマスターするため自転車合宿や、ワンダリングを行なった。そして、日常生活から自転車に親しむよう心掛けた。

## 六、隊員表

カルカッタ隊

| | | | |
|---|---|---|---|
| 隊長（総隊長） | 青木　稔（32才） | 理工学部卒 | 東京カラー工芸社 |
| （監　督） | 石井　照久（23才） | 社会科学部　四年 | |
| 副隊長（OB） | 新井　規夫（22才） | 商学部　三年 | |
| 隊員（リーダー）（主将） | 向後　久夫（22才） | 法学部　三年 | |
| 〃（サブ・リーダー） | 太田　敏彦（22才） | 第一文学部　三年 | |
| 〃 | 大島　和夫（20才） | 教育学部　二年 | |
| 〃 | 村山　文晴（20才） | 商学部　二年 | |
| 〃 | 片所　寿雄（20才） | 商学部　一年 | |

隊員　金森　祐治（19才）　法学部　一年

〃　正田　益司（20才）　政経学部　一年

〃　鈴木　良太郎（19才）　政経学部　一年

〃　橋本　守功（20才）　法学部　一年

医師　安倍　巳紀男（24才）　千葉大医学部五年

ボンベイ隊

隊長（総副隊長）　土屋　猛（29才）　教育学部卒　目黒第六中学校

（コーチ）　佐藤　明義（22才）　社会科学部　四年

副隊長（A・コーチ）　平木　裕実子（22才）　第一文学部　四年

副隊長（A・コーチ）　山田　達男（21才）　教育学部　三年

隊員（リーダー）　神保　淳一（21才）　政経学部　三年

〃（サブ・リーダー）　川相　智史（21才）　第一文学部　二年

〃　峰高　正行（21才）　商学部　二年

〃　芥川　泰男（19才）　第二文学部　一年

〃　興水　正明（21才）　社会科学部　一年

〃　佐藤　巧（19才）　社会科学部　一年

〃　馬淵　勝利（18才）　政経学部　一年

〃　石渡　悟美（20才）　第二文学部　一年

〃　坂元　由美子（19才）　第一文学部　一年

〃　矢吹　雅子（21才）　第二文学部　一年

〃（不参加）　中島　正人（19才）　教育学部　一年

# インド合宿までの部活動概要

## 1977年3月

| | |
|---|---|
| 24日 | 予餞会の席上，東西南北誌上で計画発表 |
| 29日 | インド合宿準備委員会発足 |
| | 自転車によるインド横断を決定する。 |

## 4月

| | |
|---|---|
| 4日 | 第1次計画書の目次作成 |
| 9日 | インドに関する情報の資料化 |
| 18日 | 第1次計画書作成準備 |
| 25日 | 新監督・コーチ・4年生に計画の概要を説明 |
| | 趣旨・資金計画・月単位のプログラム・自転車 |
| 27日 | 冬合宿について |
| 28日 | インド合宿積立金（1.5万）徴収日 |
| 29日〜5月2日 | ＜新歓合宿＞ |

## 5月

| | |
|---|---|
| 3日〜5日 | ＜雪上訓練合宿＞ |
| 7日 | 隊員編成を設定 |
| 8日 | 法政WVとのサッカー大会後3・4年会 |
| | 第1次計画書の検討 |
| 9日 | インド合宿計画趣旨完成 |
| 10日 | インド合宿第1次計画書完成 |

＜錬成合宿＞　5月25日〜5月30日

6月

| | |
|---|---|
| 2日 | 印準委 |
| | 第１次計画書の補強 |
| 3日 | 監督・コーチと会談 |
| | 神沢部長・インド合宿を正式に許可する |
| 9日 | 簡易計画書・目次作成 |
| | インド便り・目次作成 |
| 13日 | 簡易計画書完成　→19日 |
| 15日 | インド合宿説明会（新人・２年対象） |
| 20日 | 簡易計画書・全ＯＢへ郵送 |
| 22日 | 新人と個別面接 |
| ＜前期試験＞ | |

7月

| | | |
|---|---|---|
| 2日 | 女子の参加について | 前期試験 |
| | 自転車の購入について | |
| | 資金　　夏休みの集団アルバイト | |
| 4日 | 第１次英文計画書の作成 | |
| | 対外的計画書の準備 | |
| | 前半期積立金の徴収 | |
| 5日 | インド情報・筑波大　我妻和夫先生 | |
| | １４代鈴木ＯＢ　8／1よりボンベイ渡印 | |
| 9日 | 英文計画書原案完成 | |
| 11日 | インド情報　藤井氏・森脇氏 | |
| 13日 | ４年生女子と女子問題を討議 | |
| 16日〜20日 | ＜トレ合宿＞ | |
| 22日〜27日 | ＜実技・妙高＞ | |
| 30日 | 第１次英文計画書完成 | |

8月

| | |
|---|---|
| 4日 | トラベルメイト・森脇氏へ第1次英文計画書 |
| ～ | ＜夏合宿＞ |
| 18日 | |
| 24日 | 集団アルバイト |
| ～ | |

9月

| | |
|---|---|
| 6日 | アルバイト終了 |
| 8日 | トラベルメイト社　チケットについて |
| ～ | 渡航手続きについて |
| | ＜実技・尾瀬＞ |
| 14日 | |
| 17日 | 監督・コーチと会談 |
| 24日 | 3・4年会，代表委員内定 |
| 26日 | 部員会（年間反省・夏合宿反省・新役員公表） |
| 27日 | インド情報　三廻部ＯＢの友人 |
| | 委　係編成決定 |
| 28日 | 委　冬までの予定　ワンダリングについて |
| | インド隊員構成 |
| 29日 | 委　自転車ワンダリング |
| | 冬合宿日程 |
| | 監督・コーチと会談　　年間方針 |
| 30日 | 対外用正式計画書完成 |

10月

| | |
|---|---|
| 1日 | 部員会　係編成の発表 |
| | 委　年間方針の検討 |
| | 秋合宿について |
| 3日 | 神沢部長と会談　インド合宿コース決定 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 4日 | 秋合宿コース決定 | Big Box 体力測定 | トレーニング |
| 6日 | ＯＢ理事会（経過報告・資金について） | | |
| 7日 | 部員総会 | | |
| 8日 | ㊍ 第２次英文計画書<br>個人面接について | | |
| 11日 | 秋合宿計画書完成 | 医療講習 | |
| 12日 | 大橋氏によるヒンディー語教室第１回 | | |
| 13日 | ㊍ インド合宿連絡網・事故対策 | | |
| 14日 | 監督・コーチと会談　秋合宿について<br>年間方針・女子部のあり方 | | |
| 15日 | インド合宿説明・スライド大会 by 我妻先生 大橋氏・森脇氏 | | |
| 16日 | 太田・峰高　ヒンディー語の学習開始 | | |
| 17日 | 監督・部長と体育局へ挨拶　　計画発表 | | |
| 18日 | ㊍ 冬合宿までの予定<br>秋合宿について<br>個人面接の総括 | | |
| 19日<br>〜<br>22日 | ＜秋合宿　奥秩父縦走＞ | | |
| 24日 | ㊍ 秋合宿報告会 | | |
| 25日 | 大橋氏によるヒンディー語教室第２回 | | |
| 26日 | アルバイトについて<br>インド合宿の係編成発表 | | |
| 27日 | 監督・コーチと会談　秋合宿について<br>年間方針の説明 | | |
| 28日 | 部員会　年間方針について | | アルバイト |
| 29日 | アルバイト開始　〜11／7 | | |
| 31日 | ㊍ 自転車合宿について<br>冬合宿について<br>インド合宿について | | |

11月

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1日 | 前川氏・高橋氏に会う | アルバイト | |
| 2日 | ㊍ 自転車合宿計画書作り | | |
| 3日 | 谷津田輪業　遠藤氏訪問 | | |
| 4日 | 日印協会訪問 | | |
| | ㊍ 自転車購入について | | |
| 5日 | ㊍ 第2次英文計画書 | | |
| | 自転車購入 | | |
| | 冬合宿計画・山小屋負荷・調査 | | |
| 7日 | 監督・コーチと会談 | | |
| | 自転車合宿について | | |
| 8日 | 部員会　自転車合宿について | | トレーニング |
| | 自転車の購入（今越輪業） | | |
| | 池田教授訪問 | | |
| 10日 | ＜山小屋負荷・調査＞ | 自転車を受け取る | |
| ～ | 11日　監督・コーチと会談　連絡網について | | |
| | 12日　アジア・アフリカ語学院訪問 | | |
| 13日 | | | |
| 14日 | 第2次英文計画書完成 | | |
| | 部員会　自転車合宿について | | |
| | ㊍ 山小屋負荷隊報告 | | |
| 15日 | 東外大訪問 | 自転車スクーリング | |
| 16日 | 毎日新聞社　永元氏訪問 | | |
| 17日 | インド大使館訪問 | | |
| 18日 | 監督・コーチと会談 | | |
| | 冬合宿の小日程について | | |
| | 会報・同意書 | | |
| 19日 | | | |
| ～ | ＜自転車合宿＞ | | |
| 22日 | 参加医師決定 | | |
| | 千葉大医学部　安倍己紀男氏 | | |

24日　㊍　自転車合宿報告
　　インド合宿の隊員編成
25日　パスポート用写真撮影
26日　㊍　ビザの取得・英文計画書の補強
27日　会報「インド特集」の相談会
28日　監督・コーチと会談
　　自転車合宿・冬合宿計画書提出
29日
30日　コレラ予防注射第1回

L講習会
スクーリング
トレーニング

12月

1日　㊍　情報の整理
2日　OB理事会（募金・合宿の進行状況報告）
3日　部員会　自転車合宿の反省
　　インド合宿隊員発表
　　冬合宿計画発表
5日　監督と会談　同意書について
6日
7日　コレラ予防注射第2回
8日　㊍　渡航手続きについて
　　同意書発送
9日　監督・コーチと会談
　　第3次計画書について
　　冬合宿について
　　外務省訪問
11日　記録会（皇居5km）
14日
～　<冬合宿>
29日

パスポートの取得

## 1978年1月

8日　監督宅でコース再検討

9日　部員会

11日　㊍　冬合宿の反省

　　自転車ワンダリング計画

　ＯＢ理事会

12日　監督・コーチと会談　冬合宿の報告

13日　部員会　冬合宿の反省

　　インド合宿に向けて

　　隊員編成と各自の役割り

15日

〜　上層部　自転車ワンダリング

16日

17日　㊍　事故対策プラン

　　連絡方法

18日　監督・コーチと会談　各係進行状態の報告

19日　ＯＢ会　事故対策プラン決定

　航空券予約証明書入手

20日　部員会

21日　海外合宿経験者との話し合い

24日　ビザの申請開始

25日　㊍　インド便り　梱包計画

26日　監督と会談

　㊍　資金の使用法について

28日　神沢部長と会談　試験及びストライキ対策

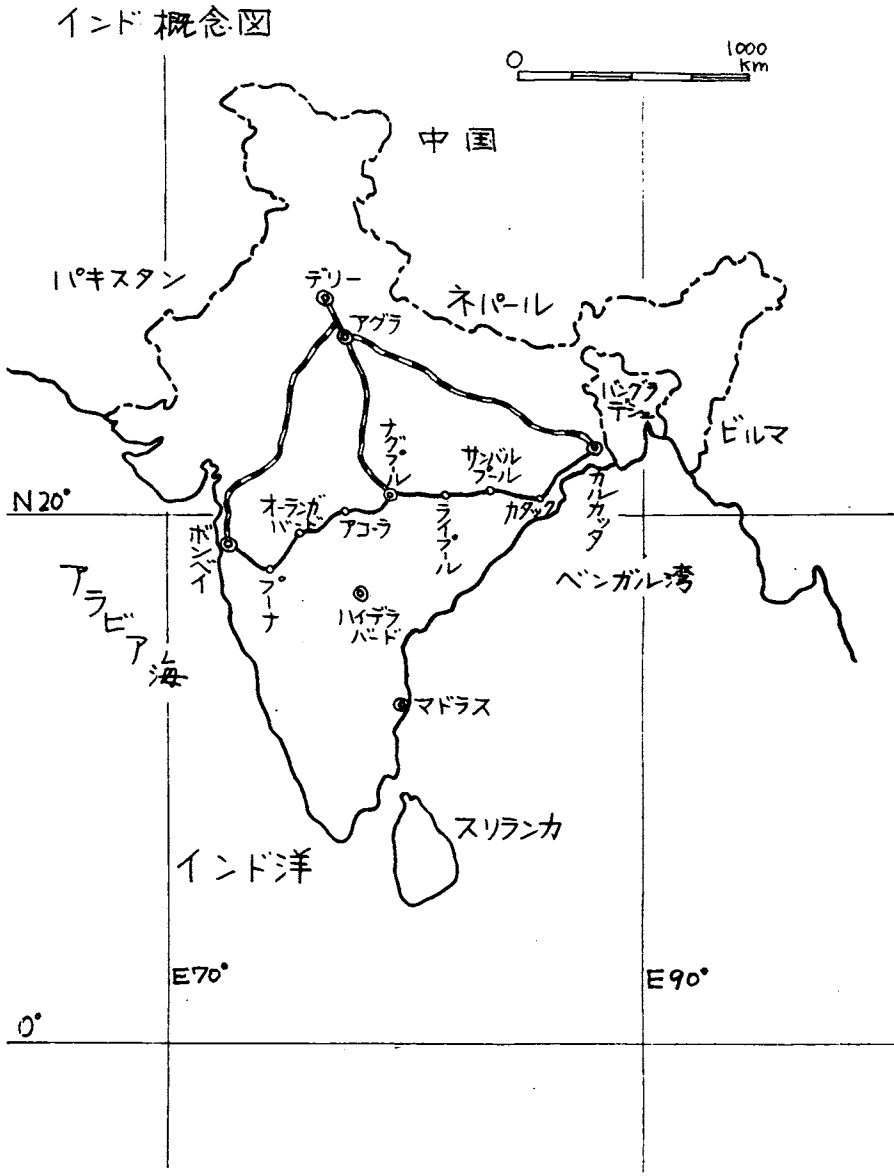
　監督・コーチと会談

種痘予防注射

トレーニング

2月

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1日 | ビザ完全取得 | | |
| 2日 | 体育局・協議会に計画書提出 | | |
| 〃 | 自転車ワンダリング | | |
| 3日 | | | |
| 4日 | 予餞会 | | |
| 6日 | インド便り発送　監督・コーチと会談 | | |
| 7日 | ＯＢ理事会 | | |
| 9日 | 健康診断　by　関先生・安倍氏 | | 甘泉寮合宿 |
| 10日 | ＯＢ主催壮行会 | | |
| 11日 | 上層部最終ミーティング | | |
| 13日 | 先発隊出発 | | トレーニング |
| 14日 | | 自転車梱包 | |
| 15日 | | | |
| 16日 | 体育局へ出発の挨拶 | | |
| 17日 | | | |
| 19日 | 甘泉寮に現役宿泊 | | |
| 20日 | 本隊出発 | | |


インド概念図
0
1000 km
中国
パキスタン
デリー
アグラ
ネパール
バングラデシュ
ビルマ
ナグプール
サンバルプール
カルカッタ
カタック
N20°
オーランガバード
アコーラ
ライプール
ボンベイ
プーナ
ベンガル湾
アラビア海
ハイデラバード
マドラス
スリランカ
インド洋
E70°
E90°
0°

# 具体的準備及び反省

## ——海外合宿のテキストとして——

# 資金計画・会計報告

向後久夫

海外合宿においては、資金の調達が大きな問題となる。我々のインド合宿においても例外ではなかった。

一、資金調達の方針

部員は、トレーニング、その他の部活動に支障をきたさないようにと考え、家庭教師、その他のアルバイト等をして、資金を調達し、毎月最低一万五千円ずつ積み立ててゆくことにした。また、上級生は春合宿後アルバイトをし、夏合宿後、秋の早慶戦・早稲田祭の時期には全員でアルバイトをすることにした。それでも不足額が出るので、その分はＯＢ会の寄附をあおぐ予定であった。

しかしながら、五月の計画の段階においては、不足額があまりにも大きいため、アルバイトによる積立金の他に、各自親からの援助という形で調達額を補なうことにした。

最終的には、監督・コーチ・上級生の個人負担は親からの援助を入れ三十二万円、下級生の個人負担は親からの援助を入れ二十四万円とした。それに先輩の残してくれた海外遠征資金、さらにＯＢ会からの寄附により、資金をまかなうことになった。

二、予算計画

当初の計画では、新入生で部を去ってゆく数も考え合わせて、現役部員を二十名とした。しかしながら、冬合宿の終わった段階において、参加できる部員が二十一名いたので計画を変更し、さらに監督・コーチ・四年部員・医師を加えて、最終的に隊員二十七名による計画にした。

予算の計画をつくるにあたっては、各係ごとに購入品リストを作り、価格を一応調べた上で予算表を提出させた。また実際に品物を購入する際にも、なるべく安価にするべく、馴染の店に価格を交渉したり、ＯＢに御世話になったりした。

滞在費を決めるにあたっては、町で生活するという点を考慮して、インド旅行経験者の話しを総合し、一日いくらというように生活費を決めて、各ラウンドの初めにまとめて手渡すことにした。また現地の交通機関の料金や宿泊代は滞在費の分からまとめて支払うことにした。

三、外貨の取り扱いについて

通貨の持ち出しでは、すべて現金で持ち出すのは、

盗難・紛失等の危険があるので、一部をUSドルの現金で、他をUSドルのトラベラーズチェックに換金して持ち出すことにした。インドにおいて、ルピーのトラベラーズチェックもあると聞いたが、換金の煩雑さ、主要都市ではドルのトラベラーズチェックにしてもルピーへの換金が可能との情報が入ったので、すべてドルで持ち出すことにした。

現地においては、先発隊に鉄道料金、バス料金等を旅行会社に前払いしてもらった。(旅行会社は、現地通貨のルピーよりも、USドルを好む。)先発隊の残金と、本隊の所持金の合計を、デリーにおいてボンベイ隊・カルカッタ隊にそれぞれ二分した。各隊とも、各ラウンドの初めに必要と思われる金額と予備の金額とをドルからルピーに交換し、隊員一日当り二十ルピーの生活費を日数分まとめて渡すことにした。宿泊費や一緒にする食事の代金は別に、会計がまとめて支払うことにした。

資金の面では、我々は海外遠征資金が使えたので、助かった。これからも、海外合宿を考える場合には資金は一番の問題となるので、海外遠征資金の積立てということは重要であろう。

最後に多額の寄附をしていただいたOB・関係者の方々にはこの場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

## 昭和53年度インド合宿会計報告

53年4月現在

1. 収　入

| | 費　目 | 金　額 |
|---|---|---|
| 1 | 上級生負担金 | 2,880,000 |
| 2 | 下級生負担金 | 2,880,000 |
| 3 | 監督・コーチ負担金 | 640,000 |
| 4 | OB負担金 | 960,000 |
| 5 | 海外遠征資金 | 760,000 |
| 6 | OB寄附金 | 991,610 |
| 7 | 一般寄附金 | 140,000 |
| 8 | 雑収入 | 99,434 |
| 計 | | 9,351,044 |

2. 支　出

| | 費　目 | 金　額 |
|---|---|---|
| 1 | 渡航費 | 3,766,000 |
| 2 | 渡航手続費 | 189,720 |
| 3 | インドでの支出 | 2,612,845 |
| 4 | 保険費 | 230,070 |
| 5 | 装備費 | 111,840 |
| 6 | 医療費 | 45,846 |
| 7 | 食糧費 | 52,490 |
| 8 | 記録・カメラ費 | 223,608 |
| 9 | 通信費 | 124,517 |
| 10 | 事務費 | 95,700 |
| 11 | 資料費 | 78,600 |
| 12 | 雑費 | 538,670 |
| 13 | 立替金 | 573,000 |
| 14 | 貸付金 | 466,000 |
| 15 | 残高 | 242,138 |
| 計 | | 9,351,044 |

3. インドでの支出

| | 費　　目 | 金額（ルピー） | 金額（日本円） |
|---|---|---|---|
| 1 | 食　糧　費 | 12,053 | 361,590 |
| 2 | 宿　泊　費 | 7,213 | 216,390 |
| 3 | 生　活　費 | 39,868 | 1,196,040 |
| 4 | 交　通　費 | 14,810 | 444,300 |
| 5 | 通　信　費 | 1,413 | 42,390 |
| 6 | 雑　費 | 2,778 | 83,335 |
| 7 | 宿泊費（バンコク） | 522（米ドル） | 125,280 |
| 8 | 宿泊費（デリー） | 360（〃） | 86,400 |
| 9 | 食事代（バンコク） | 123（〃） | 29,520 |
| 10 | 雑　費（バンコク） | 115（〃） | 27,600 |
| 計 | | 78,134（ルピー）<br>1,120（米ドル） | 2,612,845 |

※　1ルピー＝100パイサ＝30円

1ドル＝240円

パイサ以下は省略

# 『インドで暮らす』

金森祐治

朝五時に起きます。すがすがしい朝です。昨日買っておいた朝食を食べます。ビスケットとオレンジとバナナです。紅茶もわかしました。一人分三ルピー（九十円）位です。

六時前に出発です。太陽はまだ出ません。街にはそろそろ、インド人の姿が見られます。皆、片手に水を入れたツボを持ってキジ打ちです。道路わきにしゃがんでいます。なんと素朴な。そしてインド人は余った水は、ちゃんと道路にうち水をしながら帰るのです。

私たちは西へ向かっているので、日の出はふり返らないと見る事はできません。でもたまにふり返って見る日の出はとても美しかったです。

三本目、そろそろ暑くなり出します。十時ごろになると、日射が猛烈に強くなります。一本とって、皆茶屋へ。一杯のチャイ（ミルクティー）三十五～五十パイサ（十円～十五円）。お腹のすいた人は、お菓子を。これは五パイサから二十パイサ。あっ監督がさかんに「アウルチャイ、アウルチャイ」と言っております。「お茶、おかわり」といっているのです。私はねこ舌である為、皆より飲むのがおそく、いつも一杯かぎりでした。でも暑いさ中、熱いミルクティー。なかなか、うまいです。

十一時半、目的地につきました。三人ほど宿さがしに出発しました。どうやら見つかったらしく、一人が帰ってきました。さあ、宿まで移動です。宿はレストハウスかインスペクションバンガローでした。どちらも格安で全員で五ルピーという日もありました。昼メシです。食欲はありません。ジュースとバナナにしました。ジュースはインド製。よく冷えていました。一本一ルピー。バナナ、一ルピー五十パイサ。五本食ったら街へ散策。明朝のメシの買い付けもかねます。あっおいしそうなトマトがあります。小さいですが真赤です。明朝はトマト。市場らしき所には、おばあさんやおばさんが、野菜を前にして、「買わんかね、安いよ」というような顔をしてすわっています。ナスも売っています。ひとしきり話をしてトマトを一キロ三ルピーぐらいで買いました。ふくろがないのでバンダナに入れました。あとはまたビスケットとオレンジです。

宿にかえって自転車の手入れをします。そこでどっとインド人が押しかけます。ドアをドンドンたたき、「What is your name ?」をくりかえします。とてもつき合

いきれないので早速ドアの中にひっこみます。
四時半〜五時にかけて、少ししのぎやすくなります。七時までに晩メシをくえという事なので、また街へ。晩は、ライスでないと。ライスとチキンカレーとダヒーをたのみます。ダヒーがないという事なので、チャイをたのみました。このカレーを食うと、大体満腹になったような錯覚におちいります。もう食べられないとだれもが思うようになります。あとサモッサを三つ食べました。計五ルピーでした。宿に帰ってミーティングをして、八時にねました。外のインド人はもうみな家へ帰ったようです。とても静かです。あ〜ねむ。

# ヒンディー語の学習

太田敏彦

インド合宿の準備のひとつとして、峰高と私は、九月から三ケ月間、ヒンディー語を勉強した。日印協会主催のヒンディー語教室で、先生は、東京外国語大学で講師をなさっていた、ザベリ氏だった。生徒は五人ほどの小さな教室で、家庭的な雰囲気のもとで、授業がおこなわれた。

まず、ヒンディー語の文字を覚えた。一見奇妙な文字であるが、一週間ほどで、ほぼ覚えられた。その特徴を一言でいえば、ローマ字のアルファベットとは異質で、むしろ日本字の五十音と同じつくりだ。つまり、一個の文字は、例えば、ア、ス、ロ、といった、母音または子音＋母音の音を表わし、子音のみを表現する文字は例外的だ。ローマ字のように、子音を表わす文字と母音を表わす文字とがあり、その組み合わせで語をつくる文字とは、まったく違う。

この点に関連して、したがって発音は、子音のうしろに、ほぼ（例外はあるが）常に母音が伴っているという点で、日本語に似ている。だから、発音の面では、ヒンディー語は、日本人にとって、すんなり入っていける言語だとおもう。（ただし、語尾は子音が多い。）

発音の面では、と今書いたが、文法もかなり日本語に近い面がある。語順が似ている。一例をあげれば、「このハンカチは汚ない。」とヒンディー語でいえば、

イェー（この）ルーマール（ハンカチは）マイラー（きたない）ヘー（です）。

となる。また、「私はヒンディー語を話します。」は、

メン（私は）ヒンディー（ヒンディー語を）ボルター（話し）フン（ます）。

である。文尾の「ヘー」や「フン」は、英語でいうところのビー動詞だ。しかし、否定文となると、否定語の「ネヒーン」は動詞または形容詞の前に置かれ、

メン・ヒンディー・ネヒーン・ボルター・フン（私はヒンディー語を話しません）。

となる。

これに関連して、おどろいたことに、ヒンディー語には、前置詞ならぬ後置詞というものがあり、これが、日本語の助詞と同じ感覚で使えるのだ。例をあげよう。

ガル（家）コ（へ）

ガル（家）セ（から）

ラル（ラル　人名）カ（の）ガル（家）

「コ」、「セ」、「カ」がそれぞれ後置詞である。「家へ行け。」というときは、

ガル・コ・ジャオ（行け）。

という。また、日本語の助詞とはちがうが、「…の上に」は「パル」といい、「…の中に」は「メン」という。これもまた後置詞である。

メズ（机）パル（の上に）

バクス（箱　英語のボックス）メン（の中に）

というように、日本語と同じ語順で使う。

モンゴル語や朝鮮語のような、アルタイ語族に属するといわれている言語ならいざ知らず、英語やドイツ語などと同じ、インド＝ヨーロッパ語族に属するといわれているヒンディー語に、日本語とこれだけの類似点があるとは、想像もしなかったことであり、大きな驚きだった。文字のつくり、語順に限ったはなしで、これ以上の比較は私にはできないが。

先にヒンディーの文字のことを、奇妙な文字だと書いたが、しかし、考えてみると、これはローマ字が奇妙でない「標準的」な文字である、という視点から見た感想であり、何ら根拠のあるものではない。この視点にたてば、漢字やカナなど、実に奇妙だろう。ローマ字も、初めてみる人にとっては奇妙な文字である。文字というものを全く知らない人がみれば、あらゆる文字は、奇妙な記号ではないだろうか。また、このヒンディー語の文字は、サンスクリット語の文字と同じデヴァナガリー文字であり、仏典を通じて日本に入り、今でも、寺などでよく見かける文字である。一説によると、日本語の五十音は、サンスクリット語を参考にして作られた、とのことだ。日本の文化にとって縁浅からぬ文字であり、「奇妙」などと言えた義理ではなかった。

人称や時制の変化では、英語などと同様で、やはりインド＝ヨーロッパ語族の言語だな、と感じさせられたが、

結論として言えば、ヒンディー語は日本人にとって、入門しやすい言語だから、ヒンディー語地域に行くなら、ぜひとも勉強していくべきだ。たとえ少ししか知らなくても、それだけで相手の反応はちがうのだから。

ヒンディー語の学習は発見の連続で、また教室の雰囲気もよく、たいへん楽しい体験だったのだが、いかんせん、短い学習期間では、文法的知識に終ってしまい、あまり実用にはならなかった。隊員（特に一年生）が、片言ながら、実際に通用するヒンディー語の知識を得たのは、ひとえに、大橋正明さんのヒンディー語教室のおかげだ。

大橋さんは、三度にわたってヒンディー語を全員に教えてくれた。テキストを自ら編集し、内容は、簡単なあいさつ、会話、買い物の仕方、食事の注文、数など、実用的なものであり、文字もローマ字とした。また、長い在印の体験から、言葉以外の、実際に役立つ知識も教えてくれた。彼一流の、あの絶妙の話術に、我々はぐんぐん引きこまれていったものだ。インドで話したヒンディー語は、すべて、大橋さんに教わったことだった。

このほか、九段下のインド料理店で食事を共にし、料理の種類を教えてもらったり、彼がヒンディー語を学んでいたアジア・アフリカ語学院の、インドの祭りに招いてくれたり、彼との楽しい思い出はつきない。大橋さんほんとうにありがとう。

ヒンディー語の学習には、一年生が非常に熱心で、大橋さんのテキストをくりかえし読み、覚えていた。最後に、私と峰高のつたない知識も、デヴァナガリー文字と、若干の文法的知識を、熱心な一年生たちに伝えるのに役立ったことを付け加えておきたい。

# 大橋さんのヒンディー語教室

大橋さんのヒンディー語教室は，10月12日，10月25日，2月9日（甘泉寮合宿中）の3度にわたって行なわれた。次にそのテキストの一部を紹介する。

## HINDI語　会話練習

for WWV by ÔHASHI

買物へ

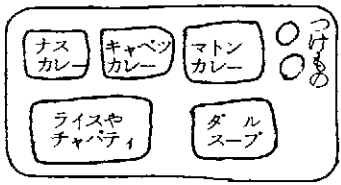
| | |
|---|---|
| 1. これは高い，安くしろ | yeh manghi hai, sasta karo ! |
| 2. これは何ですか | yeh kyâ hai ? |
| これは自転車です | yeh sâikil hai. |
| 3. あれは部屋ですか | kyâ woh kamrâ hai ? |
| 4. これはいくらですか | yeh kitnâ hai ? |
| これは1ルピーです | yeh êk rupee hai ? |
| 5. これを下さい | yeh dîjie ! |
| 私は水がほしい | mê pânî cahatâ hun. |

飢死しないために

| | |
|---|---|
| 1. 食堂はどこですか | vôjan-lay kahân hai ? |
| 飲み水はどこですか | pînê ka pâni kahân hai ? |
| 2. 食事を下さい | khânâ dîjie. |

食事について

1. 定　食（ターリー）
右図が一般的




2. 菜　食（ベジタリアン）――――いわゆるHindu教徒の店
肉　食（ノンベジタリアン）――――回教徒・シーク教徒の店

ゲップをしながら現金払い

| | |
|---|---|
| 請求書を下さい | bil laiye. |

# 『ヒンディー語が話せるのかい？』

正田益司

授業のフランス語には全く興味がわかないけれど、インド行きのためのヒンディー語にはさすがに熱が入った。大橋さんの講義は必死で聞き、プリントはボロボロになるまで復習し、太田さんをつかまえては教えを請い、一年部員同志では単語の問題を出し合うなど、まるで入試を目前に控えた受験生の様な日々が続いた。しかし、教わったままのヒンディー語が本当に通じるのだろうか、という疑問は皆が持っていたと思う。それが解消されたのは、デリーのアシュトン・モテルに着いた時だった。出迎えたインド人に誰かが「ナマステ（今日は）。」と言うと、ニコッと笑って「ナマステ」と言い返してくれる。荷運びを手つだってもらって「ダンニャワード（ありがとう）」と言うと、「アッチャー」と言ってうなずく。現地で初めて使うヒンディー語は一応通じたのである。でも、まだ「サンキュー」が言えた程度にすぎない。僕達の習ったヒンディー語にはっきりと自信をつけてくれたのは、マラウディーンというじいさんだった。皆で二階のベランダに出て、夕暮れ時のインドの光景に見入っているかたわらで、彼は内職のサリーを縫っていた。ヒンディー語を試したくてうずうずしていた僕は、さっそく彼に話しかけてみる。「ナマステ。メーラ・ナーム・ショウダ・ヘイ。アープ・カ・ナーム・キャー・ヘイ？（今日は。僕は正田といいます。あなたのお名前は何といいますか。）」息を飲む一瞬。「メーラ・ナーム・マラウディーン」日本では試すすべもなかったヒンディー語が、インドで実際に通じた喜びをいったいどう表現したらよいだろうか。僕達はうれしくて、思わず互いの顔を見合わせたものだった。僕や峰高さんは次々と彼にヒンディー語の単語や文を教わり、彼の方も日本語に興味を持っていろいろと聞いてくる。そうやって覚えたものは、今だにはっきりと思い出せる。そして、ヒンディー語に自信が持てる様になると、まるで大金でも身につけた様な余裕すら持って実行動に臨む事が出来た。ヒンディー語は田舎に行く程に威力を発揮する。英語の出来る者が殆んどいなくなるからだ。スケッチの係でもあった僕は、回りに集まってくる子供や若者に、知っている限りのヒンディー語で話しかけ、動植物などの名前を絵を通して覚える事が出来た。知識欲が深まると、太田さんの持っていたテキストの中から役立ちそうな文を抜き出してはすぐ使ってみる。それがうまく行くと、今度は名

詞の部分だけ替えて応用するなどして、しまいには簡単な会話のやりとりも出来るようになれた。

〝インドへ行って来た〟という者がよく「ヒンディー語は全くやっていかなかったけれど、何の不自由もなかった。」というのを耳にする。たしかにそうかもしれない。しかし、彼らはおそらく、インドの風景以外の何も見てこなかったにちがいない。「お前、ヒンディー語が話せるのか?」とこちらの顔をのぞきこむ時の、親しみのこもった笑顔や、「これがガーイだよ!」と言って、わざわざ牛を引っぱって来た子供達の嬉しそうな目に、彼らは出会ったことはないだろう。僕は、つたなくもヒンディー語を学んでおいた分だけ、思い出も多く持てた様に思う。

# 計画書の作成

神保淳一

五十二年四月に入ってから、我々はいよいよ計画書作りの具体的作業にとりかかった。

一、和文計画書

第一次計画書

三年・二年で内容を分担して、第一次計画書作成に入った。内容としては、次の十四項目である。

一、趣旨
二、隊員編成
三、大日程
四、概念図
五、各隊小日程及びルート図・高度差表
六、資金計画
七、月単位予定表
八、各係計画　装備・自転車・食糧・医療・気象・記録
九、交通アプローチ　日本→インド・インド国内
十、渉外手続
十一、現地交通網　飛行機・鉄道

十二、現地情報入手先リスト　デリー・カルカッタ　ボンベイ他

十三、インドの概要　文化・宗教・カースト・交通・政治・行政・貨幣・言語・食料・気象

十四、各州概説　マハラシュトラ・マディヤプラデシュ・オリッサ・西ベンガル

この第一次計画書は五月九日に完成した。配布対象は、部長・監督・コーチ以下全部員・関係OB・関係者とした。

第二次計画書

このあと、全OBを配布対象とした第二次計画書を作成した。部長の許可がおりた後、第一次計画書を元にして六月十一日完成し、十八日に発送を完了した。内容としては、次の十項目である。

一、趣　旨
二、隊員編成
三、大日程
四、概念図
五、各隊小日程及びルート図・高度差表
六、資金計画
七、月単位予定表
八、各係計画　装備・自転車・食糧・医療・気象・記録
九、交通アプローチ　日本↔インド・インド国内
十、渉外手続

第三次計画書

合宿を真近に控えた一月上旬、最終版として第三次計画書が完成した。これは、第二次計画書作成以降進めていた連絡網・事故対策・各係計画等をまとめ編集したものである。また、これは関係者及び全OBに配布した。内容としては、次の八項目である。

一、趣　旨
二、概念図
三、隊員名簿
四、資金計画
五、各係計画書　個装・団装・食糧・医療
六、連絡網　本隊と在日本部及びナグプール
七、事故対策・交通網
八、連絡網　在日本部と部関係機関・OB会

## 二、英文計画書

和文計画書と並行して、我々は英文計画書の作成にあたった。トラベルメイト社を通じて、また、外務省、YMCA、ユースホステル、日印協会等の関係機関を通じて、我々の計画をインドにおいて広めるのに非常に役立ち、計画をスムースに運ぶことができた。

### 第一次計画書

第一次計画書は、元ワンゲル部員の中井さんに英訳を依頼し、七月三十日完成した。この計画書は、トラベル・メイト社の森脇さんを通じて、インドのパテルさんの元へ届けられた。内容としては、次の四項目である。

一、趣　旨
二、計画概要
三、日程表
四、地　図

### 第二次計画書

第一次計画書の内容を補強し改めて、十一月上旬に第二次計画書が作られた。前述の中井さんに加えて、新井の友人の福原君もこの作業に協力してもらった。この計画書は、正式に関係諸機関を通じてインドへもたらされた。内容としては、次の八項目である。

一、大学紹介
二、ワンダーフォーゲル部紹介
三、計画概要
四、趣　旨
五、隊員リスト
六、大日程
七、小日程
八、地　図

### 第三次計画書

さらに、第二次計画書を修正して、最終版の第三次計画書を作った。十二月七日に完成し、項目は前のものと変わりないが、表現上でのいくつかの修正を加えた。やはり関係諸機関を通じてインドへもたらされた。次に第三次英文計画書の趣旨を紹介する。

## OBJECTIVE OF THE TRIP（第三次英文計画書趣旨）

The Wander Vogel Club of Waseda University (Japan) is planning a 40-day bicycle trip to India from the middle of Feb. to the end of March, 1978.

We realize that India is too big a country for us to get a good perspective within our short stay. However we hope to further our understanding of India by bicycling across the Decan plateau. By the same token, we would like the Indian people to know a little bit about our country through these encounters between your people and our participants along the way.

There are several reasons why we are making this trip. For one thing, by using the bicycle we can go places on our own feet and strength, which we feel is the essence of what we practice in our club. Another thing is, if we take the train, chances are we might end up visiting only those tourists' attractions, just like many other tourists. Whereas by bicycle, we can go wherever we want at our own disposal and see the less commercialized parts of India which can't be found in the school textbooks in Japan.

We feel that India differs from Europe and the other parts of Asia, not to mention Japan, in its culture and in many other ways. We hope to find out what kind of country India really is, by getting to know the local people we meet along the way, especially with those who live in the rural areas, pursuing their own ways of living and speaking only their local tongues, other than English.

We sincerely hope that this trip will turn out to be a great success and also contribute to the better mutual understanding between our two countries, especially between the younger generation.

# 渉外

神保淳一

一、渡航便の決定と切符の取得

費用・人数・日数等の制約から、旅行代理店はトラベルメイト社、便はタイ国際航空と決定した。先発隊はオープンチケット、土屋コーチは同社のパックツアーに繰り入れてもらった。

二、ビザ・パスポート等の手続

五十二年十二月中に、パスポートの申請をすませ、冬休み明けに、全員取得後ビザを申請した。いろいろな方面からの口添えがあり、観光ビザで無事許可された。イエロー・カードについては、コレラ（十一月末・十二月初旬）種痘（一月下旬）の接種により取得した。また、さらに安全を期して、破傷風予防接種を二回行なった。

三、保　険

太田を通して、東京海上火災の海外旅行傷害保険に加入した。

四、空港での出入国手続

添乗員がいないため、バンコクとデリーでの事務手続が心配されたが、バンコクでは旅行代理店及びタイ国際航空の人たちのとりはからいでスムースにいった。また、デリーでは、すべてクマールさん（インド政府観光局勤務）のお世話になり、ほとんど支障なくいった。

五、現地関係者との連絡

さまざまなルートから、在印邦人等を紹介してもらい、手紙によりコンタクトをとった。拠点（デリー・カルカッタ・ボンベイ・ナグプール等）に必ず一ケ所を連絡先として確保した。

六、隊員リスト・名刺作成

各隊員の氏名・住所・パスポート番号・年令等の和文・英文リストを作った。三年生以上は、和文・英文の名刺を作った。

七、部員保護者の同意書

同意書は、計画説明・同意要請及び署名を各々の親元へ送り、十二月下旬全員の同意を得た。

八、現地での移動・交通

バンコクでは、到着後空港～ホテル間往復の送迎バス付であったので、問題はなかった。デリー到着後は先発隊の手配によってバスで宿舎へ移動した。デリー～カルカッタ・ボンベイ及びナグプール～アグラ間の鉄道については、出発前にトラベル・メイト社を通じ予約は

とれていたが、さらに先発隊が予約を確認した。これらの予約は正確で、スムースに移動できたのは、予想外であった。

九、連絡網

拠点の都市（デリー・カルカッタ・ボンベイ・ナグプール）は連絡所ないし宿泊所を決定し、二隊分散後は、第一ラウンドの停滞地であるカタックとプーナのYMCAへそれぞれ電報をうち、それ以降はすべて、ナグプールの佐々井さんを連絡先とし、日数をずらせて連絡することにより、互いに他方の状況を知るようにした。また日本との連絡は、各拠点・停滞地より在日本部へ電話・電報で連絡することとした。

十、事故対策

事故を四段階に想定し、移動手段として、定期バス・鉄道・タクシー・トラック（非常時）の利用による病院への移動を考えた。

十一、旅の技術・情報の入手

インド旅行経験者に会い、情報を集めることに奔走したが、内陸部デカン高原に関する情報は、ほとんど得られなかった。鈴木豊OB・森脇さん（トラベル・メイト社）から入手した、ロードマップやルート図、唯一の内陸部経験者である青年海外協力隊の藤巻さんからの情報、そしてナグプール在住の佐々井さんからの手紙といったものが役に立った。そのほかは、写真や手紙でデカン高原を想像するのがせいぜいだった。

旅行技術・大都市の情報等については、多くの人々から直接、また書籍・写真等を通じて得ることができた。そして、それらをまとめて、「旅の技術・資料集」として数度作成し、部員の啓蒙に努めた。

十二、超過重量・荷物

装備・食糧・医療等の団装、そして自転車を含めた個装で、出発時は一人二十キロの制限を一人当り五キロほどオーバーした。これは、トラベル・メイト社の配慮で別便輸送（土屋コーチの乗った便）してもらい解決した。同様に、帰国時にも一人当り十キロのオーバーであったが、クマールさんのおかげで無事税関を通過することができた。

十三、サイクロン被害への寄付

五十二年十二月、インド・ベンガル湾南岸を襲ったサイクロンの被害が報道されたが、さいわい計画のコースには被害はなかった。赤十字社へ十万円の寄付を行なった。

# 連絡網

太田敏彦

インド合宿をおこなうにあたり、ボンベイ・カルカッタ両隊相互の連絡、そして両隊と在日本部との連絡を密にし、互いの状態を把握することが必要だと考えた。

まず、集結地のナグプールに、連絡先になってくれる人が必要だ。幸い、仕事でボンベイに行かれたOBの鈴木豊さんが、ナグプールに佐々井さんという日本人が住んでいるという情報を持ちかえってくださった。さっそく佐々井さんに手紙で計画を説明し、連絡先のことをお願いすると、快く引きうけてくださった。佐々井さんは、仏教を伝道するお坊さんだった。

連絡の手順を、次のように決めた。

一、先発隊がデリーより、在日本部へ電話、ナグプールの佐々井さんへ電話か電報を入れる。
二、本隊到着後、デリーから在日本部へ電話。
三、カルカッタ、ボンベイより、それぞれ在日本部へ電報。佐々井さんへ電話か電報。
四、カルカッタ隊は、カタック、サンバルプール、ライプールより、ボンベイ隊は、ブーナ、オーランガバード、アコーラより、それぞれ各ラウンドの停滞地から在日本部へ電報。佐々井さんへ電話及び電報。
五、ナグプールで合流後、在日本部へ電話。
六、デリーより在日本部へ電話。

四の佐々井さんへの電話で、両隊相互の連絡をとろうと考えたが、実際問題として、インドの地方都市間の電話連絡は通じないことが多かった。通じたとしても、多分、数時間を要するだろう。

また、両隊相互の連絡のために、カルカッタ隊はカルカッタからブーナへ、ボンベイ隊はボンベイからカタックへ、それぞれ宿泊予定にしていた現地のYMCAあてに、電報を打つことにした。

# 事故対策

神保　淳一

事故対策については、病気・けが・事故等考えられる場面を想定して、いくつかのモデルケースにそって対策を考えた。また付添は、副隊長・サブリーダーの順であたることにした。鉄道の時刻表、定期バス運行の情報を得て交通網図を作成し、事故対策網にとり入れ、また病院設置状況を加味して、一月上旬に最終案ができ上がった。

モデルケース

一、二～三日で回復する病人・事故者
　最寄りの病院で入院・治療後、回復を待って次の停滞地へ移動。他のメンバーは行動。

二、一週間～十日程度の療養を要する者
　最寄りの病院で入院・治療後、回復を待ってナグブールへ移動。他のメンバーは行動。

三、長期入院・治療を要する者
　最寄りの病院で入院・治療後、大病院（各ラウンド停滞地）へ移動。他のメンバーは停滞。

四、盗難・故障その他で行動できない場合
　各ラウンド停滞地へ移動。他のメンバーは行動。

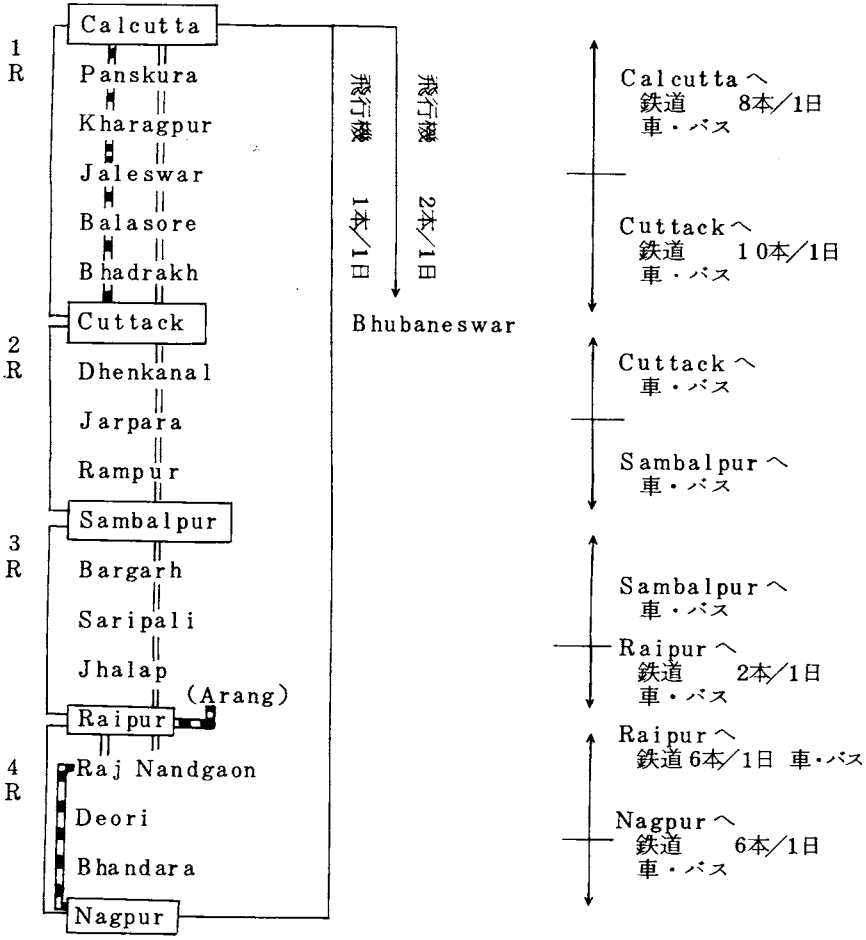
# 公文書の取得

山田　達男

現地での我々の行動をよりスムースにするため、各関係機関あてに、早稲田大学総長、体育局長、日印協会会長名で、我部に対しての推薦状を発行していただいた。内容は以下の通りである。

在日インド大使宛　　早稲田大学総長
インドユースホステル協会宛　　早稲田大学総長
　　以上英文
日印協会宛　　早稲田大学体育局長
毎日新聞外信部宛　　早稲田大学体育局長
外務省文化事業部宛　　早稲田大学体育局長
在印日本国大使宛　　日印協会会長
　　以上邦文

# 事故対策・交通網（Calcutta隊）



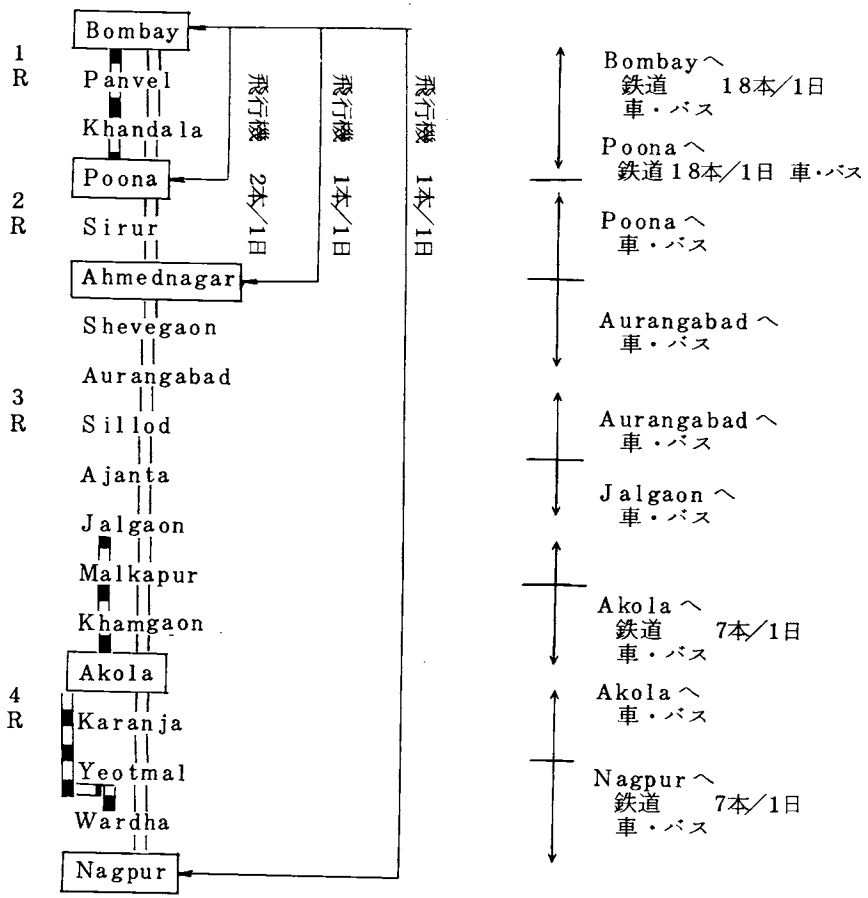

各ラウンド停滞地から大都市への移動

1. Cuttack ——(Airline)— Calcutta —(Airline)— Delhi
   —(Airline)— Nagpur

2. Sambalpur ═ Cuttack　以下同上

3. Raipur ▬ Calcutta —(Airline)— Delhi
   Raipur ▬ Nagpul

# 事故対策・交通網（Bombay隊）




各R停滞地から大都市への移動

1. Poona —(Airline)— Bombay —(Airline)— Delhi
—(Airline)— Nagpur

2. Aurangabad —(Airline)— Bombay —(Airline)— Delhi
—(Airline)— Nagpur

3. Akola Bombay —(Airline)— Delhi, Akola Nagpur

WASEDA UNIVERSITY
TOKYO JAPAN

OFFICE OF THE PRESIDENT

December 9, 1977

His Excellency Eric Gonsalves
Embassy of India
Tokyo

Dear Sir:

The Wander Vogel Club of this University plans to make a 40-day bicycle trip of your country from mid-February through the end of March next year. While in India, the members will undoubtedly have many occasions to get to know at first hand her history, culture, and her people, and I recognize that the value inherent in such direct exposure and contact will be immeasurable both from the viewpoint of intellectual impact on their young minds and from the viewpoint of the promotion of mutual understanding and friendship. I should appreciate it very much, therefore, if Indian Government authorities concerned will give kind consideration and assistance to the members to facilitate their trip in your country.

Thanking you in advance, and with best wishes which I hope I may have occasion to present personally, I am

Sincerely yours,

Sukenaga Murai

President
Sukenaga Murai

SM:mu

Enclosure

WASEDA UNIVERSITY
TOKYO JAPAN

OFFICE OF THE PRESIDENT

December 9, 1977

Mr. R.S. Padki
Secretary
Youth Hostels Association of India

Dear Mr. Padki:

The Wander Vogel Club of this University plans to make a 40-day bicycle trip of your country from mid-February through the end of March next year. While in India, the members will undoubtedly have many occasions to get to know at first hand her history, culture, and her people, and I recognize that the value inherent in such direct exposure and contact will be immeasurable both from the viewpoint of intellectual impact on their young minds and from the viewpoint of the promotion of mutual understanding and friendship. I should appreciate it very much if you will extend kind consideration to their plans.

Thanking you in advance for your attention.

Sincerely yours,

Sukenaga Murai
President

SM:mu

体育 第 1 5 5 号

昭和53年 1 月 17 日

外務省 文化事業部

部 長 大鷹 正 殿

早稲田大学 体育局

局 長 滝 口 宏

このたび、本大学ワンダーフォーゲル部が、日印親善のため、インドに遠征いたすことになりました。

背木 稔監督を隊長とするOB、医師、学生など30名からなる一行は、自転車によりインド亜大陸を横断し、真のインドの姿に触れ、現地の人々ならびに学生と交歓活動を行なう予定であります。

つきましては、その実施に先立ち、計画ならびに実施について、ご指導、ご協力を賜わりますよう、ここにお願い申し上げます。

早 稲 田 大 学

# 装備計画

川　相　智　史

国内で数度、自転車による行動を経験したが、そのままのスタイルをインドに適用できるわけでもなく、本からの知識、インド体験者、自転車関係者などの話から、装備を取捨選択していった。とにかく、重量制限がわずらわしかった。特に留意したことは、次の事柄です。

。自転車が活動に耐うる装備と技術

。フォーストビバーク（あくまでもインドでの）に耐うる装備

。軽量化

自転車

㈠　購　入

門外漢でもあるし、いいものを選ぶときりがないので、仕様の特別な注文はせず、既製車を購入することにした。

。輪行仕様車であること。

。オーブンサイドタイヤでサイズ $26\times1\frac{1}{2}$ であること。

。十段変速であること。

以上の点に留意し、数社の車種を選定し、交渉にあたった。その結果、宮田自転車のジュネスとルマンに決定した。付属品として、キャリア、トウクリップ、水筒とケージを全員につけ、輪行袋も購入した。

㈡　輪行・修理

輪行の方法、点検などのスクーリングを宮田自転車、今越輪業、早稲田自転車クラブからインストラクターを招き、全員に対しておこなった。特に、装備係は今越輪業において、修理、その他の基礎事項の指導を仰いだ。そして、自転車合宿、ワンダリングにより、輪行、点検、修理の徹底をはかった。

㈢　パッキング

アタックザックまたは天幕袋とフロントバックを併用した。当初いろいろな案が出たが、移動の際、最も機能的であるし、フロントバックは機内持ち込み時のバックとして利用できる点から採用した。ただ容積の点で市販のものは小さく試作品を作るべきだったとの声もあった。ザックは後のキャリアにつけることにした。

㈣　インドにて

パンクは多かった。パンク修理しても、焼けついた道路にすぐに乗り出すと、タイヤ内の圧力が上がり、修理したパッチが浮いてきて、空気漏れが起き

やすくなる。また、行動の中断を最少限におさえるためにも、パンク時はチューブを交換することにした。空気入れはフレームポンプを携行したが破損が激しかった。ムシゴムも消耗が激しく、パッキン式のものがよかったように思う。次に、道路の状態が悪く、ネジ類のゆるみ、ハブのゆるみ、リムのくるいが目立った。点検の励行が必要だ。トゥクリップは、長距離を走るとき体力の消耗を軽減してくれる。行動中の水の件であるが、チャイやサントラで補給すれば、五百ミリリットルの水筒で十分まかなえる。医療用とパンク修理用に二リットルポリ二本を携行した。

## 天幕

フォーストビバーク的な状態を予想し、天幕を携行することになった。重量の問題、用途の点から、カヤのついた簡易的なものを作成することにした。本体は使用してない天幕のフライを利用し、カヤは上野の米軍放出品をあつかっている松崎商店で天幕用のカヤを購入した。フライの内側にマジックテープを使用し、カヤをとりつけられるようにした。ポールは塩化ビニールで連結式に作成した。

現地では両隊は一度も使用しなかった。二～三月の内陸部では気候的には必要を感じなかった。マラリアなどが気にかかるが、防虫クリームを使用して、野宿も可能である。ホテル、ゲストハウスなどでもベランダで寝るほうが涼しくて快適だった。

## ラジウス・コッヘル

日本食・予備食とのかけあい、水の煮沸のため携行した。

ラジウスがインドに普及しているのには驚いた。携帯していったものとあうかどうかは別だが、市場にはラジウスのパーツを売っている。石油も市場で手に入る。白ガスはどうだろうか。

## 個装

行動中の服装を紹介すると、ポロシャツに半ズボン、ハイソックスにズック靴、帽子、サイクリング用の革手袋という出立であった。ポロシャツというのは首の日光からの保護という観点からあえてエリつきのものにした。半ズボンは膝の自由がきくし、第一、長ズボンでは暑い。ハイソックスは転倒時の足の保護の点から、ズックは底の堅牢なものがよい。帽子、手袋は必携である。概して、肌をあまり太陽にさらすのはよくない。疲労しやすくなるようだ。以下、主な個装を上げると、

。Yシャツ（白）・ズボン
レセプション用に使用した。女子はスカート。
。薄手のセーター
一見、利用価値がないように思えるが、けっこう、使用した。
。シュラフ
夏用シュラフがちょうどよい。ポンチョライナー、封筒型シーツもいい。
。ライター・ボールペン
日本での話通り、役に立ちます！
。錠
自転車の鎖とともに、室の錠用にもう一つあると便利。インドは錠の文化。
。丸食
個装にしたが、徹底をはかるべきだった。赤痢などの伝染病予防のために。
。重要品袋
首から下げるもの、腹巻き型の二種類採用したが、一長一短。パスポートやトラベラーズチェックを入れた。
。サングラス
思ったより日差しは強くないが、しないより、したほうがよいでしょう。

総括

まず、自転車が走行不能となるような故障もなくホッとした。新車だったことに起因すると思うが、門外漢がこういった活動をする時は、毎日の点検ぐらいしかできないし、ぜひやるべきことだ。その他の装備に関しては、ずい分いらない物を持っていった気もするが、あれはあれでよかったように思う。

# 団体装備表

| | 品目 | 数量 |
|---|---|---|
| 1 | フライ | 2 |
| 2 | コッヘル | 1 |
| 3 | ラジウス | 2 |
| 4 | 石油ポリ | 1 |
| 5 | メタ | 3 |
| 6 | 医療箱 | 1 |
| 7 | 病人食 | 1 |
| 8 | 予備食 | 1 |
| 9 | 日本食 | 1 |
| 10 | カメラ | 3 |
| 11 | フィルム | |
| | ネガカラー | 45 |
| | 白黒 | 45 |
| | リバーサルカラー | 10 |
| 12 | ポリタン | 3 |
| 13 | 修理工具 | 1 |
| 14 | 自転車用修理工具 | 1 |
| 15 | 距離計 | 2 |
| 16 | カセットテレコ | 1 |
| 17 | 渉外用土産物 | |

※ 以上は1パーティ分

# 個人装備表

| 品目 | 数量 | 品目 | 数量 |
|---|---|---|---|
| 1 ズック靴 | 1 | 27 学生証（ＩＤカード） | 1 |
| 2 トレーニングタイツ | 1 | 28 ビザ・パスポート | 1 |
| 3 バミューダー | 1 | イエローカード | |
| 4 長ズボン | 1 | 29 重要品袋 | 1 |
| （女子はスカート） | | 30 ビニール袋 | 2 |
| 5 半袖ワイシャツ | 1 | 31 手拭 | 2 |
| 6 ポロシャツ | 1 | 32 革手袋 | 1 |
| 7 長袖シャツ | 1 | 33 エレキ一式 | 1 |
| 8 ウインドブレーカー | 1 | 34 替電球 | 1 |
| 9 帽子 | 1 | 35 替電池（アルカリ） | 1 |
| 10 ハイソックス | 2 | 36 トイレットペーパー | 2 |
| 11 薄手セーター | 1 | 37 個人医療 | 1 |
| 12 下着 | 適量 | 38 丸食 | 1 |
| 13 夏季用シュラフ | 1 | 39 金 | |
| （ポンチョライナー） | | 40 辞書（自由） | |
| 14 替靴ヒモ | 1 | 41 洗面具 | 1 |
| 15 細引 | 1 | 42 自転車 | 1 |
| 16 ナイフ | 1 | 43 輪行袋 | 1 |
| 17 武器（スプーン） | 1 | 44 軍手 | 1 |
| 18 ライター | 3 | 45 水筒 | 1 |
| 19 マッチ | 2 | 46 ザック（天幕袋） | 1 |
| 20 サングラス | 1 | 47 予備書類 | |
| 21 地図 | | （住民票・抄本・写真） | |
| 22 磁石 | 1 | 48 チェーンロック | 1 |
| 23 自転車用修理工具 | 1 | 49 鍵（２年以上） | |
| 24 計画書 | 1 | 50 空気入れ（２・３・４年） | |
| 25 筆記具 | 5 | 51 ホイッスル（３年） | |
| 26 時計 | 1 | 52 名刺（３年以上） | |

# 『事故のこと』

片所寿雄

「あっ！」と思った時にはすでに遅かった。痛がる老婆とうろたえる私。私にできたことは、ただあやまることだけ。医師の安倍さんが老婆の手当てをしてくれ、私には精神安定剤までくれた。ふと我に帰り自転車を見ると、前輪がひどく曲っている。とても走れそうにない。老婆の方は先輩方のご尽力により二十か三十ルピーで一応けりがついた。老婆にけがをさせた私は、幸か不幸かかすり傷だけだったので、今度は自転車の番である。

太陽が強く照りつける中を、私の自転車を直すために一キロ程戻った小学校へ行った。その小学校の一教室を借り、もう一人の装備係である橋本に手伝ってもらい、前輪のタイヤ、チューブ、スポーク、ハブを取り除きリムだけにしてみた。するとリムはスポークによる緊張から開放され、衝突の時の衝撃を再び表現するかのように思うように曲った。自分でこのリムを直すすべを知らぬ私は、信用をしてはいなくともインドの自転車屋をたよるしかなかった。彎曲したリムをどう直すのか見ていたら、平らな所にリムを置き、浮いている両端に乗り、反対に出ている所を手で引っぱってかなり歪みを直してしまった。私は小学校に戻り、今度はリムとスポークを着けて再び持って行った。すると何やらガラクタのようなものの中から取り出してきたのが、何と、リムの振れをとるための調整台だったのである。私と橋本は驚いた。こんなインドの、それもおよそ人口も百人に充たないであろうこんな農村の自転車屋に、こともあろうに調整台があったとは。私たちには全く信じられないことだった。自転車屋はその調整台を器用に使い、リムの横振れを彼の可能な限り直してくれた。縦振れもかなりあったが、ずいぶんよくなった。私は彼に修理代はいくらかと聞くと、私のリムを直してくれたその欲のないインド人は、二ルピー五十パイサだと言った。私は彼の技術と親切とに五ルピー払った。（金を持つ人間のエゴかも知れないが。）

私はインドにおける様々な相反の中で二つが融合するものを見たような気がした。金と心。金でほとんどのことが解決するし、金なしでもほとんどのことが解決する。私にはインドが、インド人がそのような気がしてならない。

彼らは今あるものですべてをやってきた。そしてこれからもまたそうであろう。私は今では使いものにならな

いリムを、どうしても捨てる気になれない。そして今でもあの老婆のことが気になってしかたがない。

# 食糧計画

村山文晴

## 一、準備段階

食糧計画の基本方針は「現地食主体」ということでした。インドでは、現にインド人がそこで生活しているわけで、当然食糧は手に入るはずです。また〝郷に入れば、郷に従え〟で、インドに行ってボンカレーを食べるなどということは笑い話にもなりません。（しかし現実にはその笑い話が起こりましたが）。もちろん、全隊員の四十日分の食糧をすべて日本から持っていくなどということもできません。

基本方針としては現地食主体ですが、次のような場合を想定して、少々の日本食を持っていくことにしました。

まず、病人が出た場合の病人食、次に食糧が手に入らない場合としての予備食、最後にインド食がどうしても食べられない者が出た場合、日本食としての調味料類、の三種類です。

## 二、現地にて

### (一) 病人食

現地では、予想以上に病人、特に下痢をする者が多く病人食は大変役立ちました。ただビスケットは現地でも十分に手に入れることができ、味も値段も申し分なかったので必要ありませんでした。またアルファ米でおかゆを作り、それに江戸むらさきや梅干をのせたりして、予備食・日本食を病人食として使うことが多くありました。

### (二) 予備食

これは、当初食糧が手に入らない時に使うということでしたが、そのようなことは全くなく、停滞地やその他インド食に飽きた時などに、一種の楽しみとして使われたようです。ただ、カレーについてはナンセンスという声が多く、不評をかいました。

### (三) 日本食

これも、予備食と同様楽しみとして使われたことが多かったようです。梅干は腹によいということでかなりの量を持っていったのですが、インド食には塩分が乏しく、塩分の補給ということで役立ったように思われます。すしのこ、お茶漬、味の素はほとんど使い道がありませんでした。

以上のように、日本食を持っていったわけですが、現

地の食糧だけでもかなり補給できたのではないかと思います。病人食、日本食はともかく、予備食の量が少し多すぎたように思われました。

## 食糧計画表

| 品目 | 数量 |
|---|---|
| 病人食（10食分） | |
| 1. はちみつ | 500g× 2 |
| 2. コンデンスミルク | 100g×10 |
| 3. ベビーフード | 130g×10 |
| 4. ビスケット | 1000g |
| 予備食（90食分） | |
| 1. みそ汁 | 90食分 |
| 2. ラーメン | 30食分 |
| 3. カレー（ヒートパック） | 30食分 |
| 4. とり飯（ジフィーズ） | 15食分 |
| 5. すき焼（〃） | 15食分 |
| 6. アルファ米 | 45食分 |
| 日本食 | |
| 1. しょう油（ジフィーズ） | 250g |
| 2. みそ汁 | 20食分 |
| 3. だしの素（味の素） | 85g |
| 4. 〃（けずり節） | 200g |
| 5. すしのこ | 150g |
| 6. ふりかけ | 10袋 |
| 7. お茶漬 | 30食分 |
| 8. 緑茶 | 1000g |
| 9. 江戸むらさき | 400g |
| 10. 缶詰 | 750g |
| 11. のり | |
| 12. 梅干 | 250個 |
| 13. 漬物（ジフィーズ） | 36g |

※ 以上は1パーティ分

# 『インドの家庭料理』

佐藤　巧

インドの家庭料理について書けと言われたが、我々は実際インド家庭で暮したわけでもなく、大きなことは言えない。私が食べた家庭料理は、二度か三度だけなのであるが、恐らくそれは日常食ではなく、彼等が我々をもてなすためにふるまったごちそうに相当するものであろう。ここでは一番印象に残ったブルダナの家庭料理を中心に筆を進めて行こうと思う。

我々はひょんなことからコースを変更することになりブルダナという町にたちよった。この町は人口こそ多くはないが、あか抜けていて教育的にも進んでいるようであった。この町で我々はとても厚い歓迎をうけ各家庭に分宿した。私はDr. BHAVESという英語の教師であり又農業の研究もし、自らが農業経営者である人の所へ泊った。日本に於ても店屋物と家庭料理が違うように、インドのそれもかなり違う。その大きな相違点はスイートであるが、これについては後で触れたい。まず食器であるが、日本のように一つ一つに違った食べ物をよそって食べるのではなく、大きな銀色の金属の皿、それは皿というより果物でも盛るようなお盆のような代物であるが、それに四つか五つぐらいの金属のカップがついていて、この中に各種のカーリーと呼ばれるスープ又はシチュー状のものを入れて食べる。この一セットが自分に与えられた食器のすべてである。あとはそのお盆にライスやチャパティをよそってもらい、カップの汁に浸して食べたり、あるいは直接ライスに汁をかけて指でぐちゃぐちゃこね混ぜて口の中にほうり込むのである。

ナグプールではこの食器が大きなバナナの葉に替り、カップは何かの葉をつまようじのようなもので編んだ容器に化けた。この辺の主食は何と言っても小麦を平たく伸して焼いたチャパティという、そう日本でいえばお好み焼きの具のないもの、であった。ライスは我々のために特に用意してくれたらしい。実際、BHAVES氏はライスよりチャパティを多く食べていた。おかずはダルカレーと呼ばれるまめをつぶしてカレー粉（厳密に言えば何種類もの香辛料）で煮たもの、キャベツとジャガイモと人参をカレー粉で味を付けたコビバジェという煮ころがしと、ミッサラと呼ばれるまめのスープ（ダルカレーとは違ってつぶしてないまめ）、タマネギとトマトとリンブー（レモン）のサラダ、それからダヒーと呼ばれるヨーグルト状のもの、チャクニーというわさび色をした香

辛料と塩、これらをライスに混ぜたり、チャパティにつけたりしてポイポイ口の中にほうり込む。我々もまねして見たが、とても彼らのようにはいかない。まるで手品のようである。これだけでもかなり満腹になるのに、食後にはスイートという地獄のデザートが待っている。これはその名の通り甘い食べ物で、その家の主婦が腕によりをかけて作る。これを食べないことにはその家の晩餐は終らない。インドでは、客にどんどん食べさせるのが習慣になっているらしく、客が右手で容器をふさいで、「バス、バス（もう十分だ。）」と言わない限り、次から次へとおかわりを持ってくる。このスイートだけはどんなに「バス、バス」と言っても婦人が満足するまでは食べなくてはならない。我々はこのスイート攻めに会って吐き気がするほど食べさせられ、やっとかんべんしてもらった。このスイートは各家庭の自慢料理でその種類も限りなくあるらしい。ここに私が経験したスイートを羅列したいと思う。例一、小麦とミルクのスイート（甘さはそれ程強くないが独特の鼻につく臭いがある）。例二、小麦の油炒め（甘さが強く、油っこいので口がくどくなる。一見じゃがいもをつぶしたように見える）。例三、カネガー（小麦粉に砂糖を加えて油で揚げたもの。丸いドーナツのよう）。例四、サントラとバナナとチェクーとダヒークリーム（ミルククリームの中にサントラとバナナとチェクー（ピンポン玉大の果物でカキのような味）を入れたもの、フルーチェ的味。一番うまかった。例五、クリーム（うすいピンク色でミルクと砂糖から作る。コンデンスミルクをさらに煮つめたようでダヒー的すっぱさがある。続けて食べていると吐きそうになると川相さんが言っていたが同感である）。

食事の最後にライスにダヒーをかけて食べると、その客は再びその家を訪れるという伝えがあるそうだ。満腹だった我々もそれは断り切れなかった。インド人の暖さに触れた思いがしていた。

# 医療計画

大島和夫

〈概　略〉

。衛生状態が悪い。

。亜熱帯である。

。医療設備が、不備である。

。自転車で行動するため、外傷が多いと思われる。

医療計画を整えるに当たっては、以上を特に考慮に入れ、最終チェックを、関先生、安倍さんにお願いした。医療箱については、大きなタッパーを購入し、内服薬・外傷薬・器材・蚊取線香と、それぞれ一つのタッパーの中に入るようにした。そして、英文・邦文のリスト及び使用法の一覧表をそれぞれ作った。

＜予防接種＞

予防接種は、品川の検疫所でコレラを二回、種痘を一回、西北診療所で破傷風二回を行なった。しかし検疫所の人の話によると、コレラの予防接種はほとんど効き目がなく、気休めにしかならないとの事だった。

また、この接種によりイエローカードも作成した事になった。

＜病気に対する処置・予防＞

熱帯地方の病気に対する処置や、病気の症状などについては、本や話により時たま異なっている事があるので、関先生、安倍さんを交え、インド合宿での統一見解を出した。ここでは、主なものを挙げておくことにする。

◎コレラ

＜症状＞　発熱・腹痛・残便感・下痢（米のとぎ汁状）

＜処置＞　抗生物質の投与→入院

◎赤　痢

＜症状＞　下痢（粘血便）・腹痛

＜処置＞　抗生物質・塩分の投与→入院

◎肝　炎

＜症状＞　発熱・食欲減退・はき気・黄疸

＜処置＞　致命率は低いので、大病院へ移動・入院

また、合宿中の医療的な取り決めとしては、

一、生水・生ものは、絶対避けて、食事もよく火の通ったものとする。

二、定期的に、体温測定・症状・体調の記録をとる。

三、病名がはっきり判断できるまで無理をしない。

四、毎日、十分な休養をとる。

五、病人がでたら、症状のいかんにかかわらず、医者にすぐ見せることを原則とする。

六、おかしい様子の人間がでたら、すぐに対処できるように、常に想定して行動する。

以上、六点を原則とした。

＜合宿中＞

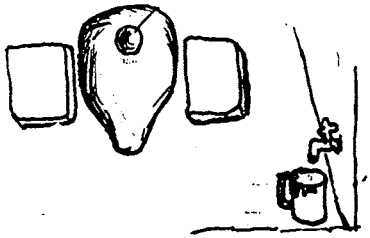
両隊とも、大きな病気・怪我等はほとんどなかった。下痢は、ほとんど全員が経験したが、行動にさしつかえる程のものは二、三件であった。抗生物質の服用・休養

病人食等によって回復した。生水を禁じたこと・日頃培った体力などがものをいったようだ。

〈反省〉

定期的な健康チェックを行なったが、ボンベイ隊では後半多少不規則となってしまった。両隊とも、調子の悪い者の処置として、バスでの移動や停滞などがとられたが、ともに適確であったと思われる。薬品は、ほとんど使用せず、ボンベイ隊では途中オーランガバードで半分を処分したが、現地でほとんど入手できることを知らなかったことも加えて、もう少し柔軟性をもたせてもよかったかもしれない。

最後に、薬品の購入等にあたってお世話になった、青木正OB・中邨OBには厚く御礼申し上げます。



個　人　医　療

| | |
|---|---|
| 風邪薬 | 1 |
| 整腸剤 | 1 |
| バンドエイド | 10 |
| 手拭 | 1 |
| 防虫スプレー | 2 |
| ビタミン剤 | 1 |

＜医薬品・医療箱＞外傷薬・内服薬

| 効果 | 薬品名 | 数量 |
|---|---|---|
| 消毒・外傷 | マキロン | 3 |
| 〃 | アルコール | 4 |
| 湿布・炎症止 | パテックス | 5袋 |
| 〃 | サロメチール | 5 |
| 抗生物質軟膏 | アクロマイシン軟膏 | 5(25gチューブ) |
| 目薬 | 大学目薬 | 5 |
| 〃 | アクロマイシン眼軟膏 | 3 |
| 抗生物質 | アクロマイシン | 100 |
| 抗マラリア剤 | MP錠 | 25 |
| 解熱 | アスピリン | 25 |
| 風邪薬 | パブロン | 30 |
| 〃 | ル　ル | 60 |
| 整腸剤 | 正露丸 | 50 |
| 緩下剤 | サラリン | 25 |
| 精神安定剤 | セルシン | 25 |
| 強心剤 | 救心 | 25 |
| ビタミン剤 | ビオタミン25 | 50 |
| 抗ヒスタミン剤 | レスタミン | 50 |
| 気つけ・虫さされ | アンモニア | 1 |
| 虫よけ | 防虫スプレー | 2 |
| 熱中症 | 食塩 | 1 |
| 抗生物質 | ペニシリン | 20(Cal隊のみ) |

※　以上は1パーティー分

## 器　　材

| 器材名 | 数量 |
|---|---|
| ガーゼ | 5 |
| 包帯　4裂 | 2 |
| 〃　6裂 | 2 |
| 〃（弾力）　4裂 | 6 |
| ハサミ | 2 |
| つめ切り | 2 |
| サポーター（ひざ） | 2 |
| 〃（足首） | 2 |
| 〃（太腿） | 2 |
| 紙バン | 5 |
| 布バン | 5 |
| 脱脂綿 | 100 |
| バンドエイド | 50 |
| 体温計 | 2 |
| 油紙 | 3 |
| 三角巾 | 3 |
| 眼帯 | 3 |
| カミソリ | 2 |
| トゲ抜き | 2 |
| 耳かき | 2 |
| 蚊取線香 | 80 |

※　以上は1パーティ分

# 『カルカッタ隊の健康について』

千葉大医学部
安倍　己紀男

遠征中、命にかかわるようなアクシデント疾病等が、全くなかった。これは、日本での医療計画の綿密さによることが大だと思います。また日頃のトレーニングにより培われた体力が、ささいな病原菌・疲労・暑さなどの悪条件をふきとばした結果でしょう。

カルカッタ隊について言えば、ほぼ、うまく各々が自分の健康管理をやっていたと思います。たとえ病に伏せても、長びかせず治してしまうことができた。これも、トレーニングのたまものでしょう。

出発前（カルカッタにて）

新井・大島・村山・正田らが下痢発熱等を訴えて元気がなかった。この時は、発病した者達がみな甘い黄色い御菓子を食べていた。食中毒の疑いが濃い。

一R（ラウンド）

カルカッタでの下痢はほぼ完治して、一Rにのぞんだ。大島だけ最初の日はきつそうにしていたが、二日目には、よくなった。三日目の夜、宿泊地において金森が発熱と下痢を訴え病に伏せる。熱三十八度三分、脈拍八十。上腹部痛あり、吐き気および嘔吐あり、次の日の昼頃下熱した。話を聞くと、コロッケ様の食物を八ケ食べたとのこと。理由はよくわからないが、インドではとにかく食べ過ぎるとたんに具合が悪くなる。腹一杯になったなぁと思うほど食べると、もうダメである。金森の場合もそれであったようだ。病原菌は不明。

二　R

大した事はなかった。このころから、村山が風邪に悩まされていたようだった。症状は、発熱と咳、後には咳だけであった。頑固な咳にずい分長く悩まされていた。計画段階で咳に対して配慮をしていなかったのがくやまれた。彼の場合、幼少時卵のアレルギーがあったということで、ほこりなどの異物に敏感であったのかもしれない。

三　R

このラウンドで、新たに発病した者はいない。健康状態が皆よく、快適。

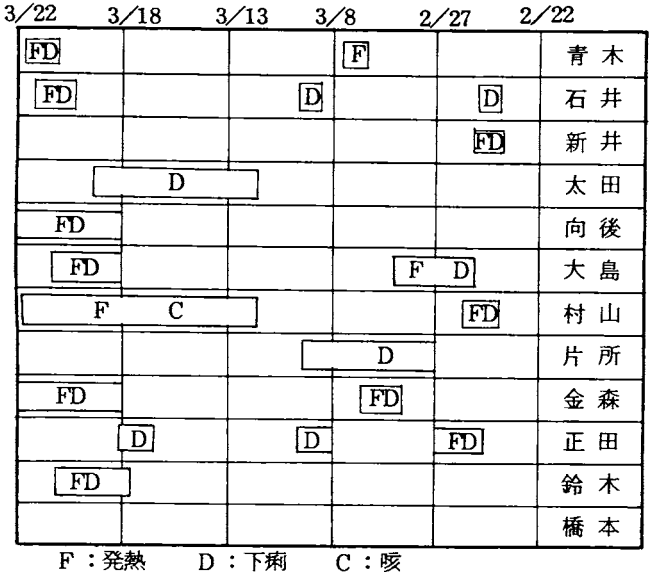
四　R

病気が多発した。ラウンドごとに、新たに発病したもののみを数えてみると、出発前…五人、一R…三人、二R…三人、三R…〇人、四R…六人と四Rがやはり、目立って病気が多い。青木監督・石井さん・金森・鈴木が比較的重かったようです。症状は皆、発熱と下痢。三月

十八日、鈴木、金森、向後発病。三月十九日石井発病。三月二十日青木監督発病。まるで伝染を疑わせるように続発した。行動中に菌を培養することなどできないので診断はつけることができないが、赤痢等考えられる。しかし、皆回復がはやいのには驚いた。石井さんなど夕方に四十度近く発熱しながらも、夜には下熱。翌朝は、下痢をしながらも元気に走ったのだから。

まとめとして、今回の遠征では生水を禁止していたし生野菜もとらなかった。この原則は最後まで守り得たと思う。それにもかかわらず、やはり下痢が多かったのはなぜなのか疑問の残るところである。下痢と発熱というのが共通の症状だったけれども、発病因子として、ほとんど食べ過ぎという事があったのが非常に興味深い。食い過ぎと言っても日本で考える食い過ぎではなく、腹五分目位を過ぎるといけなくなる。私自身、ナグブールでまわりからとめられながらも、昼食をつい腹一杯食べてしまって、その晩からダウンしてしまった。

全経過をみて、出発前と四Rに、特に病気が多かったわけですけれども、これも、興味深いです。カルカッタでの病気は、食中毒で、インドにまだ、不慣れであったということだと思います。四Rでの病気の多発は、気のゆるみということよりもやはり疲労が蓄積してしまって、病気に対する抗抗力が弱まってしまったのだと思います。三週間も行動がつづけば、自分では気がつかなくても、やはり身も心もすり減ってくる。そこへ病原菌がとりつくと言うわけです。




F：発熱　D：下痢　C：咳

# 記録計画

新井規夫

一、方　針

インド合宿では、デカン高原の農村部を自転車で移動していくという活動の特異性を重視しフィールドワークに重点をおき考えた。インド人との生活(衣・食・住)、インドの自然（都市部・農村部)、隊の行動。以上三つに対象をしぼり隊員全員がこの作業に参加することにした。又これとは別に個人日誌は必ず書くことにした。

二、具体的な記録分担

㈠　隊長日誌

㈡　行動記録

㈢　各係の記録（装備・食糧・医療・会計・カメラ・スケッチ）

㈣　インド人の生活（服装・食事・住居）

㈤　インドの自然

㈥　隊員の生活記録

三、反　省

インド人の衣食住を観察し、記録することによって、「インド人の生活」というものをとらえたかったのだが、一ケ所に定着しての活動でなく、毎日移動していきながらの活動であったこと、インドに関する学習不足や記録するという作業になれていなかったことなどから大きな成果はあげられなかった。出発前の準備として、ある程度の訓練が必要であることを痛感した。また部の性格上フィールドワークといった作業に、まだまだ馴じみがうすいのだが、今後、この分野における活動を期待するとともに、具体的方法論の確立がのぞまれる。

# カメラ計画

山田達男

一、方　針

海外合宿において、写真による記録は文章による記録とともに重要である。我部の国内合宿では、写真は単なるスナップ程度にしか利用されてこなかったが、入手可能な資料の少ない海外の場合、我々の撮影した写真の一枚一枚が、これからの貴重な資料として残されていくという重要な意味を持っている。

そこでインド合宿では、写真を記録用・スナップ用と、その用途に応じて撮影を行った。

二、使用機材（二パーティ分）

。三十五ミリ一眼レフカメラ　四台
。三十五ミリ小型ＥＥカメラ　二台
。ストロボ　二台
。リバーサルカラーフィルム三十六枚撮り　二十本
。ネガカラーフィルム三十六枚撮り　九十本
。白黒フィルム三十六枚撮り　九十本

三、反　省

事前にカメラ係内での打ち合わせが不足していたため、当初の目的であった用途別の写真撮影が、あまりうまく行なわれなかった。またフィルムの本数が多く、結果的には八十パーセント程しか消化できなかった。

四、合宿後の処理

撮影済みの全部のフィルムの現像を行い、ネガカラーフィルム、白黒フィルムについては、すべてベタ焼きをとり、番号をつけてファイルした。また記録用のアルバムを作成した。

## 『インド人にカメラを向けて』

青木　稔

インドの人々は総じて写真を撮られる事に抵抗がない様だ。ラジナンダガオンで下校時の女学生にレンズを向けた時笑いながら散ってしまった事と、女性に幾分の抵抗があっただけで、どちらかと言えば我々を取り囲み、カメラに積極的に向ってくる事が多かった。サンバルプールで街を歩くと、子供達が「フォト、フォト！」と叫んで集まったし、又通りすがりの男は自分の自転車の前で、撮れといわんばかりに胸をはった。

民衆にカメラを向けるという事には、ある種の抵抗が私にはあった。我々サイドの記録のために貧しいと思われる人々を撮るという事であるが、生活してゆくうちにその気持も消し飛んだ。何しろ撮られる事に積極的である。しかし逆に自然のままの生活を撮りたいとする気持は、すぐにレンズの前に入り込みポーズをつける人々の為に、かえって思い通りにいかない事が多かったと言えよう。

ジャレスワールでは、我々の部屋にすぐ入り込んでくる態度のでかい男がいた。私は〝悪人〟と呼んでいたが、

出発の前に写真を撮ろうとカメラを向けると、いい服に着がえてくるといってきかなかった。あくの強い好奇心と同時に、その奥にある純な気持を知った様でうれしく好感を感じたものである。

私は日を追うにつれ、どうしても写真を撮りたいという衝動にかられていった。それはインド人の目の為だ。目が私を引きつけてやまなかった。ほとんどの人々がはだしで、やぶれたシャツやズボンをはいていたが、目は輝いていた。この目はアーリア系の鋭い目だが、それだけではかたづけられない。生活がその人の顔を造ってゆく様に、厳しい自然に対峙し生き続けてきた歴史の、その積み重ねの中で備わった、それは強く自信に満ちた眼差しなのだ。

ライプールへの道すがら、耳と鼻に小さな花飾りをつけた一人の少女に出会った。カメラを向けると、切れ長の大きく澄んだ目でみつめ返した。インドで我々を見つめていた多くの目と共に、その少女の眼差しが今も頭に焼きついている。

# トレーニング計画

峰　高　正　行

インド合宿は、自転車を使用しての合宿であったが、これといって自転車向けのトレーニングは行なわなかった。自転車を使用してのトレーニングは、都内においては、交通状況からして危険なため、秋に自転車合宿（富士五湖付近）インド合宿前に自転車ワンダリング（房総半島・三浦半島付近）において行ない、また日常の通学などに極力自転車を使用することによって少しでも自分の自転車に慣れることに努めた。日常のトレーニングはこれまで通り、ランニングに筋力あるいはサーキットなどを行ない体力の向上につとめた。冬合宿前は、片足屈伸、垂直ジャンプなどを取り入れて、特に下半身の強化を行なった。一月に入り十七日からトレーニングを開始したが、試験あるいはレポートの提出などで部員の足並みがそろわず、週二回の早朝トレにきり変えた。そのためインド合宿という大合宿の割には十分なトレーニングが行なえたとはいえない。

それでは、十一月からインド合宿までのトレーニングの生々しい実状をトレーニングノートから書き出してみ

ることにします。

十一月十一日、かなりいいペースで走った。学習院短大の前あたりまで熊本はついてきたが長い坂のダッシュのあとは、まったくいくじがなくなった。シッタゲキレイするが、ペースはぐっとおちた。熊はけっこうまいっているようではあったが上級生がもうひとりいればもっと走れたと思う。もの足りないので記念会堂前でダッシュ七本を追加。

十四日、小雨のため記念会堂内を走る。正田が途中遅れる。新人は片足屈伸ができないため罰トレをやらせた。正田はしりに傷があり腹筋の時いたむので体をかたむけて腹筋をしていた。坂元は盲腸の傷のため休み、矢吹は女子一人のため消極的でやる気が顔にあらわれていない。

十六日、早朝トレ、四キロの時正田が病院の坂で遅れる。病院横の下りで片所が遅れる。トレーニングが終ったころ金森がひょっこり現われる。「寝坊しました。」罰トレ六キロ、村山が自転車で伴走する。大島は足のねんざで今日も休養。

十二月二日、正田が病院の坂の所で遅れ、片所がガソリンスタンドの坂で遅れた。四キロなのでどうにかついてきてほしいものだ。中島はサブザックをしょって女子といっしょにトレーニング。太田さんが五分ぐらい遅刻。女子は片足屈伸が、佐藤は根性なく腹筋ができなかった。あとで罰トレをやらせる。

七日、早朝、昨日コレラの第二回目の注射のためメニューを減らす。トップの新井さんにゆっくり走ってもらったので遅れる新人も出なかった。正田曰く「毎日これぐらいのペースだったらなー」。石渡遅刻「電車に乗り遅れました。」罰トレで四キロ走らせる。女子のペースは非常に遅い。球技はサッカー。この時だけはりきる新人がいる。

八日、今日は久しぶりに六キロを走った。前半太田さんのペースが速く新人少々疲れぎみ。片所は一周目で遅れる。二周目に入り今まで遅れたことのない熊本が急に根性をなくし遅れ最後は片所にもぬかれて醜態をさらす。サーキットの順序を新人は覚えていない。こんなことでは困る。最後のジョッキングの時暗くて足元が見えず村山がけつまづいて痛そうにしていた。要注意である。

十一日、記録会。桜田門集合。土屋コーチ及び木ノ内OB、三廻部OBの御参加をいただき総勢二十六人で皇居一周マラソンを開催。順位は一位峰高十七分十九秒、二位三廻部OB、三位木ノ内OB、四位新井さん、五位山田さん、六位土屋コーチ、以下省略。記録的には十七

分台一人、十八分台十二人と満足のゆくものであった。なによりも新人の記録の大幅な更新は冬合宿、インド合宿に向けて仲々心強い気がする。しかし、驚くべきことはOBの力。特に三十に手の届こうとしている、木ノ内さんと土屋コーチの力であります。現役はもっと、もっと奮起する必要がある。

一月二十四日、三キロを走った。正田根性なく遅れる。学短前のあたりで早くも遅れガソリンスタンドを過ぎると押すと体が反ってしまう。病院の坂では女子にぬかれそうになる。芥川が遅刻してランニングの時立たされたままでトレ後罰トレで五キロを走る。早朝は気温が低く体が堅いため、十分なウォーミングアップが必要であるから皆もっと早くきてほしい。川相がバスケットの時、右手の小指を脱臼してしまった。インド合宿前なので怪我には十分気をつける必要がある。

二月一日、矢吹が風邪のひきはじめのため休む。女子に気合いを入れるため最初からとばして走る。すぐに石渡が少し、坂元が大きく遅れる。中島を先行させ、女子につく。トレ後自分のペースで走っていては、体力の向上にはならないことを強調しておく。坂元は風邪がなおりきっていないようだ。また遅刻のため、インド合宿前に罰トレを課す。

以上がインド合宿までのトレーニングの大まかな実状であります。何度も名前の出て来たやつ、名前の出なかったやつ。しかしインドでは全員完走することができました。

## 『自転車のトレーニング』

（新宿）谷津田輪業
遠藤祐弘

これについて一筆書いてほしい、と帰国あいさつをかねて新井キャプテンが私の店にやってきた。私は、ユースホステル活動に熱心で、かつサイクリングマニアということで、今回ご縁ができたわけだが、実は、れっきとした〝元ワセダ・マン〟。現在は、自転車の商いを天職とする身分だ。なのに不覚にも、このインド合宿に関する新車の購入が、宿敵ケイオー・ボーイ（元）の店からなされたと知って、腹の虫がしばらくおさまらなかった。そこへこの原稿依頼である。ウンザリだが、私のすきな道だし、同じ学窓に育ったことで、しぶしぶ引き受けてしまった。

サイクリングのトレーニングは、やはり、サイクリングを通してするのが最上だろう。そのポイントとしては、

一、めざすサイクリングの形態に応じた方法（国内・国外、小人数・大人数、経験の多少、地形や気候の違いを想定、などを考える）。

二、今回のような合宿型の行事では、上手な団体行動の遂行色が強いので、役務や荷物の分担も早々に考えて、トレーニングを開始せねばならないようだ。

三、期日、コースの決定・未決定やメンバーの顔ぶれによっても、トレーニングの方法はかなり違う。

こんどのように、ふだんサイクリングをあまりしないメンバーに、改めてトレーニングを指導する場合は、もっと基本的な方法をとるのが当然で……

一、自分のからだに合ったサイズのサイクリング車を選ぶ（同時に用途に合ったものをとる）。

二、手もちの自転車を使用する場合は、そのように改造する。

三、走行距離を学生なら一日百キロぐらいは、らくに走れるようにする（山岳地では五十～六十キロでも普通）。徐々に力をつける。

四、団体走行上の注意では、接触事故やちぎれて迷子にならぬような、連携に気をつける。

五、自分の車の簡単な整備（ネジしめ、サドルやハンドルの曲り直しなど）ぐらいは、できるようにする。パンクの修理、スポーク交換、ブレーキ・変速機ワイヤーの交換ぐらいも、やれた方がよい。

このように、自転車のトレーニングといっても、別段改まった方法はなく、その目的に応じて様々だ。要は、自分の自転車を自分の手足のように扱えるようになればよい。

あとは、サイクリングの内容に合った走り方についていくしかないので、そのように努力するしかないだろう。学生と一般、男と女、大人と子供、経験の多い少ない、趣味の違いなどは、必要に応じて考えるより仕方ないことだ。

# 梱　包

向後久夫

飛行機の荷物は、エコノミーでは二十キロまでなので、初めは、それ以内でおさえる方針でいたが、装備・食料等の関係から無理ということがわかった。旅行社のほうで一人二十五キロまでは運ぶことができるという約束をもらった。しかしながら、計算するとそれでも運びきれないことがわかる。旅行社に相談すると、同じ日に別便でツアーを組んでいる。引き取り人さえいればそれで運んでやっても良いということになり、ちょうど土屋コーチがその便に乗ることになって万事うまくいった。

梱包の方針としては、装備・食糧とも関連するが、むだなものは一切うけつけず、極力各自の持物も装備表にあげられている物だけにしぼらせ、手荷物の方に重いものを入れさせるようにした。自転車の場合には、分解して輪行袋に入れただけでは飛行機の積み降しで破損する心配もあったので、シュラフ等クッションになる物や軽い物を一緒に、段ボール箱に入れていくことにした。それでもデリーに着いてあけてみると、段ボールが破れていたり、さらに一台は後輪のクイックレバーのシャフトが曲がってしまっていた。そのままでも何とか走れたので良かったが。その他の装備・食糧・医療に関しては、現地で分かれる時にそのまま持っていけるように、隊別に段ボール箱にパッキングをした。

段ボール箱には、税関において自分達の持ち物であることがわかりやすいように大きな紙を貼り、WWVと書き、さらに通し番号をつけた。中味が何であるか聞かれた時に困らないよう英語で中味を書いたものを箱に貼っておき、さらに他の空港でおろされることがないよう、大きな文字で TO-NEW DELHI と書いておいた。実際デリーの空港では、自分達の荷物であることが一目でわかった。もっとも、大きな段ボール箱は我々くらいのものであったが。さらに空港での諸手続を考えて、各梱包物の英文リストを作り、求められればすぐ提示できるようにしておいた。

先発隊　三箱…六十キロ
　すべて二十キロにおさえ自転車をつめた箱のみ。
本　隊　二十七箱…五百七十八キロ
　一人二十五キロまで許されていたが、一箱を二十キロ前後におさえ、残り物を別の箱につくる。各自の自転車の箱と、装備箱二個、医療箱一個、残り物の箱一個。

土屋コーチ　十箱…百十八キロ
自転車の箱一個と、食糧箱六個、装備箱二個、医療箱一個。

帰りは、自転車の段ボール箱を捨て、輪行袋だけとした。重量を軽くする為である。輪行袋の切れている所はあて布やガムテープ等で補強した。乾電池など使用しない物、残った医薬品・修理工具等はすべてニューデリーのユースホルテルにおいてきた。それでも重量オーバーであったが、インド政府観光局のクマールさんの援助により、何とか運ぶことができた。バンコクにおいては、航空会社に折衝して税関を通さずそのまま機内に積み込んでもらった。

## みやげもの

向後久夫

準備段階から、インドの人々と連絡をとっていたので、現地で会った時にお礼をということと、インド旅行経験者の話や、本を読んだりして、賄賂がかなり有効なことを知っていたので、土産物を準備していった。空港（税関）、警察、その他あらゆる場所で、いついかなる時にも、日本の品物をあげると喜ばれるということを聞いていたので、偶然インドの人々に世話になった時のことなども考えて合わせいろいろと持ってゆくことにした。

インドに行って、予定していた人々に渡したことはもちろんであるが、その他にもいろいろとお世話をしていただいた人々にさしあげることができた。しかしながら、お世話になった人々が多すぎて、必ずしも満足のいくものをさしあげることができなかったことは残念であった。特に、日本の絵葉書のように目でみて実際に日本を理解できるものをたくさん持ってゆくべきであった。

一、電卓　インドでお世話になった、日印協会の方々等に。
二、ペナント　YMCA、ユースホステル、交流した大学等、団体に。
三、クレパス　ニューデリーでお世話になったバーノット氏のお子さんに。
四、お茶　ナグプールでお世話になった佐々井上人に。
五、扇子　宿泊で世話になった人々や学校等に。
六、はり絵　〃
七、百円ライター　宿舎を聞くため警察に、また親切にしてくれたインドの人々に。百円ライターは人気があり、日本人だとわかると百円ラ

イターを持っていないかと、いたるところで聞かれた。

〃

八、ボールペン

何か役に立つだろうと持っていったが実際には、休憩した小学校に記念としてあしあげてきた。

九、風呂敷

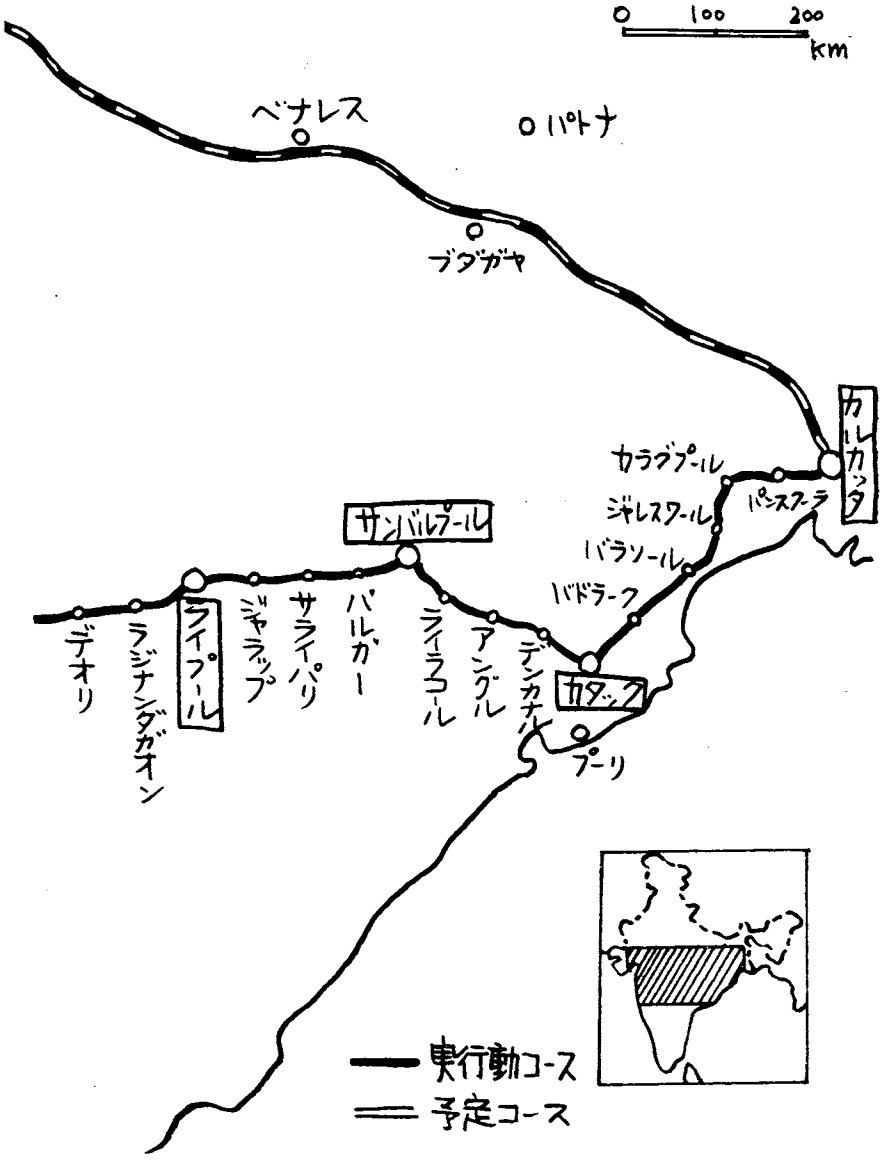
世話になった学校、さらに、交流した大学に。枚数が少なかったのが非常に残念だった。絵葉書をみせても、東京と信用せず、カルカッタと言うものが多かった。早稲田大学の絵葉書はナグプール大学に。

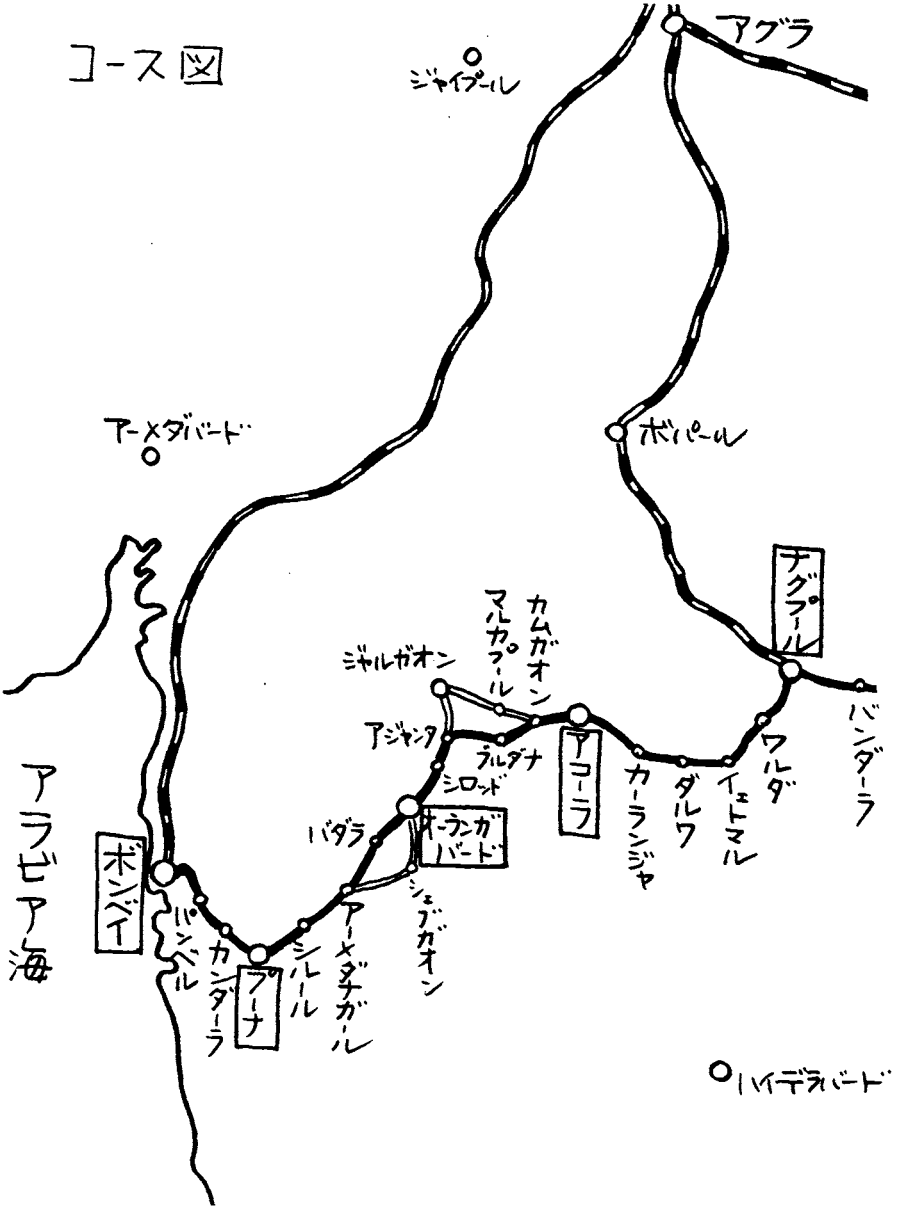
十、絵葉書

デリーのネルー大学で日本語の教材に本を欲しいということを聞いていたので、一人一冊ずつ本を持参した。

十一、文庫本

# 行動記録


0 100 200
km
ベナレス
パトナ
ブダガヤ
カルカッタ
カラグプール
ジャレスワール
バラソール
バドラーク
パンスパーラ
サンバルプール
ライプール
デオリ
ラジナンダガオン
ジャラップ
サライパリ
バルガー
ライラコール
アングル
デンカナル
カタック
プーリ
実行動コース
予定コース


コース図
アグラ
ジャイプール
アーメダバード
ボパール
ナグプール
バンダーラ
ワルダ
イェトマル
ダルワ
カーランジャ
アコーラ
カムガオン
マルカプール
ジャルガオン
アジャンタ
ブルダナ
シロード
オーランガバード
バダラ
シェブガオン
アーメダナガール
シルール
プーナ
カンダーラ
パンベル
ボンベイ
アラビア海
ハイデラバード

| | カルカッタ隊 | | ボンベイ隊 | |
|---|---|---|---|---|
| 3／9 | アングル | 60.0 km | 停滞 | |
| 10 | ライラコール | 95.0 | シロッド | 62.4 km |
| 11 | サンバルプール | 64.6 | アジャンタ | 30.0 |
| 12 | 停滞 （ヒラクッドダムへ） | | ブルダナ | 57.0 |
| 13 | バルガー | 58.2 | 停滞 | |
| 14 | サライパリ | 68.4 | カムガオン | 61.3 |
| 15 | ジャラップ | 70.6 | アコーラ | 49.4 |
| 16 | ライプール | 85.0 | 停滞 | |
| 17 | 停滞 | | カーランジャ | 76.2 |
| 18 | ラジナンダガオン | 68.6 | ダルワ | 34.4 |
| 19 | デオリ | 71.8 | イェトマル | 45.2 |
| 20 | バンダーラ | 79.4 | ワルダ | 66.2 |
| 21 | 停滞 | | ナグプール | 75.6 |
| 22 | ナグプール | 60.4 | ナグプール滞在 | |
| 23 | ナグプール滞在 | （P.W.カレッジ，ナグプール市，YMCA歓迎会） | | |
| 24 | 〃 | （ナグプール大学歓迎会，ホーリー祭） | | |
| 25 | 〃 | （青年会歓迎会） | | |
| 26 | ナグプール | ▬▬▬▬ | アグラ | |
| 27 | アグラ滞在 | （タージ・マハル，アグラフォートへ） | | |
| 28 | アグラ | ═══ | デリー | |
| 29 | デリー滞在 | | | |
| 30 | 〃 | （日本大使館，デリー稲門会へ） | | |
| 31 | 本隊出発 | デリー発 15：10 | バンコク着 21：30 | |
| 4／1 | | バンコク発 10：15 | 東京着 22：00 | |

# 実　行　動　表

| | | | |
|---|---|---|---|
| 2／13 | 先発隊出発 | 東京発　9：15 | バンコク着　18：00 |
| 14 | 佐藤・太田 | バンコク発　10：30 | デリー着　14：15 |
| 15 | 山田 | | |
| 16 | | | |
| 17 | | | |
| 18 | | | |
| 19 | | | |
| 20 | 本隊出発 | 東京発　9：15 | バンコク着　18：00 |
| 21 | | バンコク発　10：30 | デリー着　14：15 |
| 22 | デリー滞在 | | |

| | カルカッタ隊 | | ボンベイ隊 | |
|---|---|---|---|---|
| 23 | デリー発　8：15 | | デリー発　8：00 | |
| 24 | カルカッタ着　6：30 | | ボンベイ着　7：15 | |
| 25 | カルカッタ滞在 | | ボンベイ滞在 | |
| 26 | 〃 | | 〃 | |
| 27 | バンスクーラ | 70.4 km | バンベル | 50.8 km |
| 28 | カラグプール | 41.6 | カンダーラ | 44.8 |
| 3／1 | ジャレスワール | 66.0 | プーナ | 67.2 |
| 2 | 停滞 | | 停滞 | （市内観光） |
| 3 | バラソール | 52.0 | シルール | 68.8 |
| 4 | バドラーク | 71.0 | アーメダナガール | 50.4 |
| 5 | カタック | 94.0 | バダラ | 55.0 |
| 6 | 停滞 | （ブーリーへ） | オーランガバード | 57.0 |
| 7 | 〃 | | 停滞 | （エローラ観光） |
| 8 | デンカナル | 57.2 | 〃 | |

# 先発隊行動記録

太田敏彦

## 二月十三日　東京→バンコク

二月十三日、早朝。先発隊の三人（佐藤・山田・太田）は、世田谷の山田宅から羽田へ。いよいよ五十日間の旅がはじまる。青木監督、現役の仲間たち、トラベル・メイトの森脇さん、自転車の輸送を買ってでてくれた元部員の馬場、それに栢沼君ら法政大WVの面々の見送りをうける。

ヒンディー語を「少々」かじったということもあり、先発隊に参加することになったが、仲間より一週間長く旅を楽しめることがうれしくもあり、申しわけないようでもある。

タイ航空のTG六〇一便で出発。離陸の瞬間はゾッとする。生きた心地がしない。初めての飛行機だ。

十二時二十分、台北着（現地時間）。初めて外国の土をふむ、と考えるのだが、空港ではその実感もわかず。香港に十四時四十五分着（現地時間）。数千キロを短時間で飛ぶジェット機のおそろしいスピードに、今さらながら感心する。

ベトナム上空をすぎ、機は十八時ごろバンコク着。軍用機が多い。外に出ると、湿った暑い空気がおしよせる。日本の梅雨どころの気候ではない。A－PEX（旅行会社）の人の出迎えをうける。自転車等は、ボンド・サービスにあずけ、税関のチェックも受けず、外に出る（帰国時には、非常にきびしくなっていたが）。

ビルマから続いているハイウェイを通って市内へ。日本語ペラペラの女性ガイド（ジュリーの大ファンだと言っていた）が案内してくれる。街には、旧式の日本製自動車がいっぱい。おまけに、僕らの泊るホテルは、日本人の経営だという。まるで日本に占領されているみたいだ。

食事のあと、A－PEXのK氏（日本人）の好意で、市内を案内してもらう。

## 二月十四日　バンコク→デリー

七時、モーニング・コールがかかる。朝食をとり、空港へ。

外気は暑く、むっとする。制服を着た生徒たちが登校する。道ばたの簡素な食堂で朝食を取っている人々がみえる。いつもと変らぬバンコクの朝なのだろう。

車が信号でとまると、貧しい身なりの新聞売りの少年

たちが走りよってきて売ろうとする。これも、いつも変らないのだろう。

空港は日本人でいっぱいだ。ほとんど、旅行を終えて帰る人らしい。待合室で、飛んでいるハエをふとみると、日本のハエよりずっと小型で、胴体はオレンジ色をしている。やはりここは、日本を遠くはなれているのだな、とハエをみて改めて思う。

バンコクは、日本とはいろいろ因縁のあるところだ。じっくり観察すれば、数々の問題がみえてくるだろう。一日で去っていかねばならない我が身が、ちっぽけなものに思えた。

十時半発のTG三〇三便にのりこむ。去年、ハイジャック事件のあったダッカ空港を経由し、十四時半デリー着（現地時間）。政府観光局のラジ・クマールさんが出迎えてくれる。クマールさんにはデリー滞在中、あれこれとお世話になることになる。

タクシーでバーノットさん宅へ。ここでまずトラブルがおこった。タクシー代のつもりで払った十五ルピー（約四五〇円）が、なんと、荷物を運んだポーター代だというのだ。幸い、そばにいた男が取り上げて、運転手に渡してくれたが、ポーターは、「おれは働いた。金をくれ。」と、つかみかからんばかりの勢いで叫ぶ。こちらも「NO」と叫び、そのまま去った。

タクシーが信号待ちをしていると、こじきが大勢寄ってくる。ひとりのこじきは、松葉づえをつき、あわれっぽいしぐさで、指のない手をさし出す。あわてて車の窓をしめる。なんとも恐ろしいところに来てしまった！

デリー郊外の静かな住宅地、バサント・ビハールにあるバーノットさん宅で、奥さんの、ネルー大学で日本語を教えている土井さんにもてなされる。先のクマールさんも土井さんも、気持ちのよい、愉快な人たちだ。

宿は、デリーの中心地、コンノート・プレースのそばの、サニー・ゲスト・ハウス。ひとり十六ルピーの安宿だ。宿については、悪いウワサをきいていたので、外に出ても、ようすをみに宿にもどったりしたが、心配はないようだ。

ミルク・バーというレストランで食事。一人分約十ルピー。一日目のデリーは、いろいろなことがあって、ショックをうけたが、いい勉強になった。

## 二月十五日　ニューデリー

在日本部に、無事デリーに着いたことを知らせね

ばならない。バーリアメント通りの電話局へ。日本との通話は、二時間ほどかかるという。待つ。

局でチャイ（甘いミルクティー）を売っている。街角で買ったサモサ（イモのギョーザ）とチャイで朝食をすませる。なかなかうまい。そうじ役の少年が、机や床を、ゆっくりとふいている。

佐藤さん、山田は、日本大使館にあいさつ。前もって電話をいれるが、こちらの公衆電話は、まずダイヤルを回し、つながると同時に五十パイサ・コインを入れる。入れるタイミングが狂うと通じない。

十時、本部の三廻部さんにつながる。

ステート・バンク・オブ・インディアで換金。銃を持った守衛が、ものものしい。

もう少しましなホテルに泊まろうということになり、バーノットさんの事務所（インド・トラベル・サービス）で、コンノート・プレース近くの、メトロホテルを紹介してもらう。やっと落ち着けそうだ。

ユータス（旅行会社）で、列車の切符を確認。

夕食はバーノットさん宅で、奥さんの土井さんにごちそうになる。パサパサの米、豆カレー、カリフラワーとイモのカレー、マトン、サラダ。さっぱりした辛さで、おいしい。

ここではじめて、バーノットさん本人にお会いする。彼は人なつこく、堂々とし、相手を飽きさせない魅力を持った、すばらしい人物だと、一同感服。東京オリンピックの選手団長として、来日している。日本語も達者である。

## 二月十六日　ニューデリー

八時ごろめをさます。かなり冷えこみ、毛布二枚でも寒いくらいだ。トーストとチャイの朝食。

自転車輸送等の件でユータスへ。毎日新聞社の佐藤さんを、ディフェンス・コロニーのお宅に訪ねる。ユースホステル協会が、僕らの計画を心配してくれている、とのことで、協会のバドキさんに紹介される。ボンベイ隊は、オーランガバードとジャルガオンで、ユースに泊めてもらうことになる。

マルチャ・バザールの店で食事。イモや野菜のカレーなどを腹いっぱい食い、三人で十五ルピー（約四五〇円）という安さだ。

ジャイ・シン・ロードにあるＹＭＣＡを訪問。カタックとブーナで、ＹＭＣＡに泊まることにする。

中央電報局から、ボンベイ、カルカッタ、ナグプールに連絡の電報を打つ。電話が通じないため。長距離電話

は、かなりの時間、待たねばならない。
大倉商事の田中さん宅で歓待される。インドのビールも、うまいものだ。

## 二月十七日　ニューデリー

ホテルで、トースト、オムレツ、チャイの朝食。午前中は日本大使館へ、奥田一等書記官にお会いする。
日本できいた話や、在印の日本人の話とは逆に、大使館は、われわれに大変親切にしてくれる。紹介状の威力だろうか。奥田さんは、昼食に招いてくださる。
フマユーンの墓などを見物したあと、大使館にもどり、奥田さんと、マルチャ・バザールの中華料理店「富士屋」へ。ビールと水炊きをごちそうになる。インドと日本の文化、将来の可能性などの話に花をさかせる。奥田さんは、相手が学生なので心を許してか、外交官らしからぬ、くだけた話を聞くことができた。外に出ると、はげしい雷雨。こんなことは、珍しいそうだ。
ホテルへもどると、ミキという名の、チベット人の女の子の訪問をうける。日本に留学していたとのことで、日本語はとてもうまい。一時間くらい話す。
夕方、オールドデリーの街にでかける。ニューデリーが近代的な都会であるのに比べ、オールドデリーは、イギリスのインド統治以前からの街で、ごちゃごちゃしていて汚くみえるが、われわれの眼には、エキゾチックな魅力に充ちている。
デリー門の近くで、盛大な結婚式をみる。馬や自動車などの行列は花で飾られ、楽隊が、にぎやかな音楽を奏でている。

## 二月十八日　ニューデリー

再びオールドデリーを探訪。まず、有名な回教寺院、ジャーマ・マスジッドへ。ここからは、オールドデリーの街のごちゃごちゃした建物、せまい道が、一望のもとにみわたせる。
小さな食堂で、プーリー（揚げパン）、ダール（豆）、カレー、チャイの食事をとる。インドの食べものにも、だいぶ慣れてきた。街の小さな食堂は、あまり衛生的な感じはしないが、けっこうおいしいし、とにかく安い。大いに愛用する。
チャンドニー・チョークのバザールを歩く。広くもない道に、大勢の人、荷車、牛車、うっかりすると、ぶつかってしまう。大声をあげて物を売り歩く男、「チョロ、チョロ！（どいてくれ）」と叫びながら牛車を進める男

など、など、たいへんな喧騒だ。顔をかくした、回教徒の女たち。洗練されたニューデリーの人々と違い、この人たちは、伝統的な服装を守っているように、みうけられる。

商店は、衣料、雑貨、食料品、日用品、自転車屋など、日常生活に必要なものがきちんとそろっている点では、日本にもひけを取らないとおもう。トランジスタラジオやステレオを売る電気屋には驚く。これらの小さな商店が続いている。道ばたには、床屋、くだもの屋、それに乞食。

オールドデリーの中にはいり、はじめてインドという異文化の一端にふれられたようだ。ぐったり疲れる。

二月十九日　ニューデリー

ニューデリーにある各州政府の観光局へいくつもりだったが、きょうは日曜で休みだった。

自転車を組み立ててみる。ホテル前の道端で営業している自転車屋に、工具を借りたりする。料金は、はじめは、アズ・ユー・ライクといっていたのだが、終ってから、法外な値段をふっかけられ、結局二十ルピーも取られてしまう。

デリー市内をサイクリング。クトゥーブ・ミナールや国会議事堂、インド門などを見物。

二月二十日　ニューデリー

ステート・バンクで換金。タイ航空で、帰国便予約の確認。ユータスで鉄道料金の支払い等。ルピーで払ってくれと言われていたので、今朝わざわざ換金したのに、外国人の支払いはすべてドルと決められているなどと言いだす。トラブルが起ったが、結局、換金した時の領収書を渡せばよいことに落ち着く。

マップ・セールス・オフィスで百万分の一の地図が手に入る。かなりくわしい、立派な地図で、値段も一枚一ルピーと、非常に安い。

オートモービル・アソシエイションの事務所へゆくが、道路情報は、ボンベイ、カルカッタの事務所へ行かなければ、わからないとのこと。

州政府観光局へ。オリッサとマハラシュトラでは、かなりの資料が手に入る。

夕食は、ユースホステル協会のバドキさんにごちそうになる。奥さんと娘さんに紹介され、楽しい会食をすることができた。

夜は空港に、土屋さんの出迎え。〇時四十分のアリタリア機で到着。荷物の通関がだいぶ手間取ったが、二時

過ぎに終り、三時、ホテルにもどる。

二月二十一日　ニューデリー

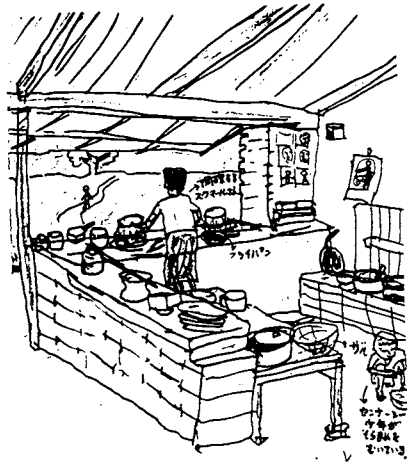
ホテルで朝食後、土屋さんも加わり、YMCAへ。ボスのジョー・ソロモン氏を表敬訪問。

YMCAからユータスへ。きょうも、切符の交渉などで、二時間くらいかかってしまう。まったくやっかいな仕事だったが、これで、ほぼ終わりだ。

午後には、空港で本隊の出迎え。一週間ぶりの再会である。バーノットさんが回してくれた大型バスに、クマールさんの弟さんがつきそってくれる。

到着予定の十四時十五分を一時間以上遅れ、十五時半に到着。クマールさんのおかげで、通関もスムースにゆく。バーノットさん、クマールさんには、ほんとうにお世話になった。全員、元気で出てくる。

宿舎は、ハウス・カスにある、アシュトン・モーテル。静かな住宅地だ。荷物を整理し、部屋に落ちつく。いよいよ本番だ。



# 本隊行動記録（分隊まで）

向後久夫

## 二月二十日　東京→バンコク

朝早いにもかかわらず大勢のOBの見送りを後に、羽田を飛び立つ。現役は初めて飛行機に乗る者が多く、機内にても窓外の移りゆく影色に驚嘆の声を発するものが多い。房総半島が見える、伊豆半島が見えると、機内でも我々の座席だけがさわがしい。午後一時過ぎ、台北空港に到着。待合室では様々な土産物を売っているが、まだここは日本語が通じる。次の経由地は香港である。

我々の飛行機が飛びたつというので、バスゲートに向かう。バスの後ろで皆が来るまで待つことにして、待っていたが、数人の部員が全然来ない。空港の女子係員が早く乗れと英語で催促するので、こちらも片言の英語で部員を待っていると答える。いくら待っていても来ないので、女子係員は興奮してきて早口の英語でしきりに捲したてている。もうこっちは何を話しているのか全くわからない。しかし身振りから、怒っているのだけは解かる。耐えかねて、峰高が下りのエスカレーターを昇り返して探しにゆく。ここで女子係員は怒り心頭に発したらしく、ペラペラ早口の英語で捲し立てているが、こちらは、よけいに英語が理解できなくなってくる。途方に暮れていると、建物の外を走ってくる一団がある。我らが部員達である。ここでまた女子係員は新たに怒り出す。しばしバスにも乗れずに待たされるが、やっと乗り込むことを許してくれた。空港の待合室を通らなかった為に起きた香港での出来事である。英語の大切さを認識するとともに、これから先のことがちょっと不安になった。

タラップを一歩おりるとムッとする湿気を多く含んでバンコクの大気が身体を包み込んだ。外国に本当に来たんだという感じがこみあげてきた。今日はこのままバスでホテルまでである。

## 二月二十一日　バンコク→デリー

雨の中バスは昨日通った道を空港へと向う。途中、道路には水が溢れているが、道端では、傘もささず、靴もはかずに少年が新聞を売っているのが目に止った。空港のチェックインもスムースに運び、再び飛行機に乗る。今日はいよいよインドに着く。

バングラデシュの他は赤一色で、ガンジス川が重なりあうように幾筋も流れている。機内からみると、その流

れも模型をみているかのようだ。川にはさまれた陸地には、川に沿って、あるいは、縦横に、曲がることなく道らしきものの筋がみえる。バングラデシュをすぎると、いよいよインドの地である。機下の土の色も赤から黄褐色へと変わってくる。そろそろヒマラヤの山々がみえるかも知れない。バングラデシュで機内がすいたので、皆ヒマラヤを眺めようと右側の座席へと移る。「ヒマラヤだ。ヒマラヤが見える。」との声に席をたつと右側にくるものもある。窓に顔をつけてくいいるようにみている。カメラのシャッターを押す。まぎれもなくヒマラヤがはるか遠くその偉大な姿をみせつけているのである。機内からはなかなか見ることができないというヒマラヤが、僕達の前にみえるのである。これは善いことの前兆かなと思いながら一人納得していた。

デリーの空港に到着する。「暑い。」これが飛行機を降りての最初の感想である。空港は殺伐としている。その感じが砂漠を思わせ、暑さを一層演出する。建物の中に入る。二階ガラス越しに先発隊三人と別便で先に到着していた土屋さんの顔がみえる。先発隊の顔はもう日焼けして頼もしい。入国手続きで、早くもボールペンを要求される。日本で聞いていた通りだ。これから先何を要求されるやらと思っていたけれど、日本で連絡をとっておいたクマールさんがいたので助かった。税関も自転車を三台開封しただけですみ、税関を通りぬけるとはじめて先発隊と直接対面することができた。皆、自信に満ちた顔をしている。

## 二月二十二日　ニューデリー

七時起床。インドにて初めての朝が明けた。太陽が赤く大きく、朝もやの中に姿を現わしている。東京のように大きなビルは見当らないが、家並が見渡すかぎり続き、その間には木々の緑もかなりみうけられる。今日は荷物を二隊に分け、自転車の梱包を解き、そのあと三隊に分かれ、挨拶や換金等に向かう。

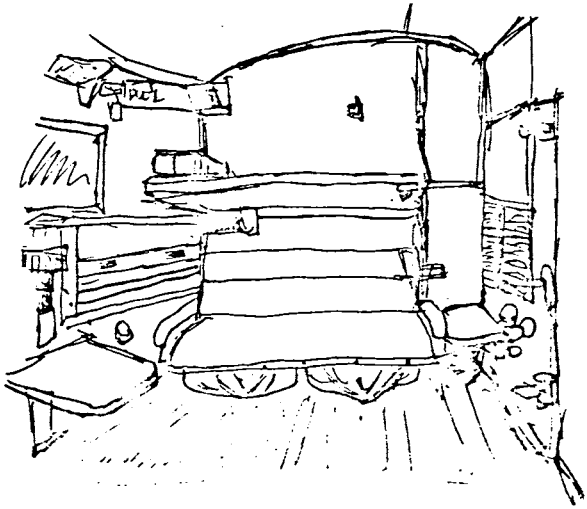
初めてデリーの市街へくりだす。四人でタクシーに乗っていったわけだが、タクシーの中では道をだまされはしないかと地図とにらめっこしながら乗っていた。降りると、前のタクシーに乗っていた者達が運転手ともめている。料金でもだまされたのかなと思って近づくと、案の定料金のことで争っていた。途中、通りに沿って堀っ建て小屋とでもいうような建物がずらりと並び、野菜・果物・菓子などを売っていた。ジャンパス通りには土物屋が軒を並べて、我々をよびとめていた。一番目についてきたのは乞食である。それも殆んどが小さな子供達で、

バクシーンと言ってきては身体にさわろうとする。髪は不潔だし、身体にはボロをまとい、裸足なのでさわられるのもいやなものである。チョロチョロと言って追い払おうとするにもかかわらず後をついてくる。なんともいやなものである。夜、ユースホステルに招待され、ソ連の若者達と談笑するが、その帰り再び、タクシーの料金でもめる。

## 二月二十三日　カルカッタ・ボンベイへ

五時起床。今日はいよいよ我らが自転車の旅の出発地カルカッタ、ボンベイへと向かって分かれる日である。六時過ぎに荷物をトラックに積み込み、オールドデリー駅へと向かう。オールドデリーの街並は、ニューデリーと比べて繁雑である。また家とは言えないような、だれたトタンとむしろでできた小屋がずっと並んでいたりする。そんなところからも朝の煙がわき出してきていた。人の数も多く、通りのバザールはごったがえしており、トラックもなかなか進まない状態であった。オールドデリーの駅舎は赤レンガでできており大きい。前の通りには、牛車、人力車、自転車力車、オート力車、自動車が道いっぱいに溢れ、その混雑ぶりは新宿の歩行者天国にも負けない。違うのは、周囲にビルがなく、自動車もスマートなものではなく、人々がみなよごれているようにみえるということだけである。丁度、僕達が映画にたまにみることができる、戦後初期のような感じである。

ボンベイ隊がカルカッタ隊より早く出発するので見送る。プラットホームで、一年、二年、三年の顔を、また土屋さんをみて、二十日以上あうことはないんだな、頑張れよと思いながら別れた。



# カルカッタ隊行動記録

新井規夫

## 二月二十三日　カルカッタへ

出発前、最後の上層部ミーティングを開く。「郷に入らば郷に従え」とすべてインドベースに合わせること、又各自が自分の体をベストの状態に維持すること……この二つを確認し合う。日本での準備をしっかりやっているので、コースに対する不安や、トレーニングを積んで臨んだので体力面の不安もない。旅に自信をもって臨めばいいだけだ。気候に対する適応さえしっかりできればいけるだろう……と今は楽観視している。七時五十分オールドデリー駅第二ゲートよりボンベイ隊を運ぶ汽車が動き出す。いよいよインド合宿は始まった。彼らと会うのは一ケ月後である。「ナグプールで」を合言葉に見送る。我々カルカッタ隊も、八時十五分第四ゲートより出発する。

今日は丸一日汽車の旅。一等のコンパートメントの鉄格子から見える風景は、いつまでたっても畑とバニヤンの木ばかりだ。集落に近づくと、レンガ作りの干しあがった褐色の建物、ほこりっぽい大地にぼう然と立ちすくむ人、寝ている人、じっと何かを見つめている人、牛までもやせこけ、力なくわずかな水留りに群がっている。駅に着けば物ごいをする子供の目がなんともいえず、つい目をそむけてしまった。バクシーシーとは何かをねだる時の言葉だが子供達はバブゥーバブゥーと言って鉄格子のすき間から手をさし出す。何かを与えてしまえばそれはとても傲慢なことにちがいない。じっと子供らの鋭い目をみつめ、早く動け早く動けと思っていた。すべてがいくつかのパターンに集約される。単純で、静かな風景、ただこの鉄道だけがものすごい音をたてて走っている。

さて、これから一ケ月行動を共にするカルカッタ隊の十三人の面々を紹介しておこう。一年から。片所、彼は緻密で落ち着きのあるメカニックマン。カメラと自転車修理を担当。男のロマンを追求するのは食糧担当の金森。スケッチをさせれば職人はだしの正田は渉外担当。最近めつきり体力をつけた健康優良児の鈴木、記録担当。黙する中にも闘志を秘めた橋本、装備担当。それぞれにたくましい。そして番当役の二年生は、我隊のナイチンゲール、大島。そつの無さでは定評のある食糧チーフの村山。三年にうつって、語学のセンス抜群の太田、我隊の財政

を一手に握る鬼の会計、向後。隊の要として学生リーダーを務めるのはこの私。次に、現役の行動を冷静に見つめる石井副隊長。熱帯医学を志し今回特別に参加していただいた安倍医師。そして最後は、ミスターワンゲル青木総隊長である。

## 二月二十四日　カルカッタに到着

六時汽車の中で目ざめる。きのうの日没も素晴らしかったが、カルカッタの街の間から上った太陽は大きい。カルカッタに六時半定刻に到着。バテルさんの部下のグーハ氏に会う。彼がタクシーを準備してくれる。一台の車に自転車を三～四台ずつトランクにしまいこむ。結局四台チャーターする。値段は彼にまかせる。出発するやなんとインド人を連れた大橋さんを発見する。いっしょに日本山妙法寺へ。

日本寺には矢野さんという青年がいて、お師匠さんがスリランカに行っている間の留守番役をしているとのこと。大橋さんは一度ここに寄っているらしく、彼の字で「大陸横断を貫徹せよ」という貼紙が寺に入るや目に入る。自転車を一室にしまいこみ、全員本堂の二階に寝場所を定め一息つく。全くカルカッタまで大失敗もなくきてしまった。要所〻〻のつなぎに、頼れる人間を配地しておいたからだろう。ともかくうまくいってる。

九時より全員朝食を外でとる。その後三隊に別れ市内へ。連絡・挨拶まわり・情報収集。僕達は大橋さんの友人で京大山岳部の秋田さんに会う。彼の住むラマクリシナミッションで電話連絡を試みたが通じず断念。ミニバスで市中央のG・P・O（General Post Office）に大島・片所・橋本・正田を連れて行く。インドの青年に強引に五十ルピーで雇わされ、電報の打ち方を教えてもらう。ニューデリーのバドキ氏、在日本部へ打つ。

Calcutta・OK

午後二時、全員日本寺に戻る。皆、まだ生活に慣れない為、暑さと疲労でまいってしまい寝てしまう。五時から七時。本堂でおつとめをさせられる。『南無妙法蓮華経――無妙法蓮華経』とたいこをたたきながら、ひたすら経をとなえ続けた。蚊にはさされるし、足はしびれる。僕達十三名がどなるように読むお経と、力いっぱいたたくたいこの音が本堂にこだまし、大変な〝おつとめ〟となる。それでもインドの子供達や大人が二人、三人と連れだって、本堂に入りお祈りをして帰っていく。宗教が生活に根づいている。七時半～八時半。食事をするため外出。街は暗いが昼間とはうってかわって活気に満ちていた。どこも人だらけといった感じを持つ。まるで祭りの晩である。食後、OB全員へ分担して手紙を書く。

## 二月二十五日　自転車を組み立てる

五時半起床。すぐに朝の"おつとめ"にかかる。外まわり組と本堂組とに別れる。外まわり組は矢野さんに率いられ寺を出てお経をとなえながら近くの池を一周し戻るのである。出だしからしておかしなことになった。まずは宗教との出会いだ。

矢野さんという青年は頭も丸め、すっきりした顔をしている。北半球の大陸を二年半にわたって旅を続け、そろそろ日本へ帰るという。静かな人だ。午前中、自転車を組み立ててしまう。秋田さんが遊びに来る。彼はあと三年間、ベンガル語の勉強を続けるという。笹ケ峰にある京大ヒュッテをとてもなつかしんでいた。今頃はあのヒュッテも雪におおわれていることだろう。

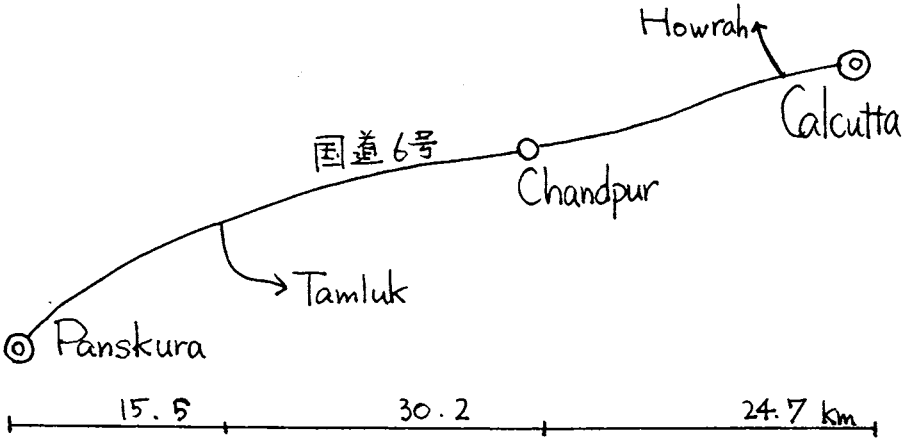
そろそろ旅の疲れが出てきたのか、大島・正田が下痢をする。「インドの洗礼」とはうまい表現だが、本人は非常に苦しそうだ。吐気・発熱が特徴的。安倍ドクターが頼もしい。午後の"おつとめ"は五時～七時。八時半まで夕食をとりに全員外出。寺の入口には常に鍵がかけられているので、いちいち下男のジャムーを呼んであけてもらう。すべて室という室、窓に、鍵がきっちりかけられている。やはりインドだ。大橋さんの友人、サバーシュは今日ブダガヤに帰った。自分の顔を描いた大きな名刺はとてもユーモラスだ。九時半就寝。

## 二月二十六日　市内見物

五時起床。五時半より二組に別れ"おつとめ"。午前中は市内見物にあてる。インディアン・ミューゼアムへ。予定ではヴィクトリア・メモリアムへも寄るはずであったが、皆、見物よりも涼しいところで寝ていたいといった状態。日本を出発して六日目。極度の緊張と環境の異変に体が順応しきれないようすであったし、人疲れもするようだ。僕自身、お昼をとった頃からだるく、食欲も減退し、元気もなくなってしまう。皆、意欲的に、インドを吸収しようということを合言葉に、市内見物に臨んだのであるが……。

午後二時。日本寺に集合。四時までにきのう組み立てた自転車の調子をみるため、寺の周辺を実際のってみることにする。僕は、寺に帰る頃には、もう起きていられず横になる。三十八度三分の熱、吐気・下痢と「洗礼」を早くも受けてしまう。"おつとめ"、夕食、すべてぬいてねむり続ける。七時より上級生ミーティングをし、明日から始まる実行動に向けて細かに最終的な確認をすます。九時就寝。

2月27日　Calcutta→Panskura（70.4km）




二月二十七日　実行動開始

五時全員起床。食事を簡単にすます。六時半に日本領事館の藤田さんが車で迎えにきてくれる。全員パッキングをすませ、体操をして出発。三日間ではあるが、いろいろと世話になった矢野さん、それにジャムーに別れを告げる。ジャムーは目頭を熱くし別れを悲しんでいた。大島に正田、不覚にもこの自分まで下痢に苦しみながらの出発。藤田さんがブルーバードで僕達を国道六号まで引率してくれる。ハウラ駅周辺がものすごい混みようで車と人力車、バス、トラックのむちゃくちゃな往来に疲れた。

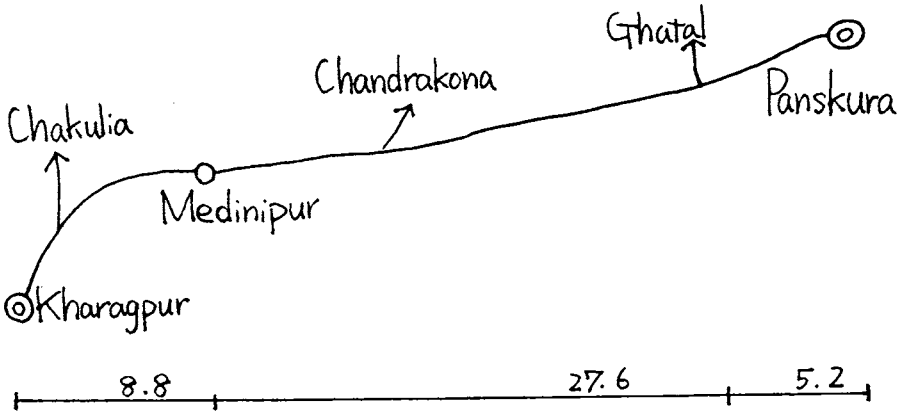
八時四十五分。国道六号の手前で一本とり藤田さんと別れる。九時四十五分。快調にとばす。道路は予想以上に整備されていて十五km／hはかたい。コリサコという部落に到着約四十五キロ走る。いいペースだ。ここで一本お昼もとることにする。喉もかわき、ココナッツを全員飲む。三十パイサで注文したのに、いざ勘定という時になって六十パイサであると主張される。太田と向後がしぶとく交渉する。結局六十パイサ支払う。気づいたら六十～七十人の子供や大人にとり囲まれていた。八十二才だという村長もでてきて隊長に握手を求める。英語がわずかに通じるので、なんとか理解できる。十一時より半分の隊員がお

昼、半分が自転車の見張りにつく。しかし盗まれるというような心配は無いようなので安心する。
午後二時出発。途中二ケ所休みを入れ、六時、バンスクーラに到着。九十キロ走ったことになる。案外楽に来てしまった。暗くなりかけ、急いで宿を捜す。警察でたずねるが管轄外だと言ってとりあってくれない。ライターをプレゼント。Thank you for your advice. 急にニコニコと愛想の良い笑いを浮べ、一人の男がホテルを案内してくれた。ロイヤル・ホテルというので期待していついていったが、Roy Hotel であって、国道沿いのドライブインというところだ。ホテルとは宿屋ではなくて、小さな食堂という意味なのであった。食事付きで七十五ルピー。下痢の止まらない何名かは、アルファ米にみそ汁、梅干しに江戸むらさきを食べる。他はチャパティーにカレー、チャイを夕食とする。
ともかく、今日は、予定通り計画を一歩実行にうつすことができた。宿屋の確保がこの旅の鍵となろう。

二月二十八日　日本人サイクリストに会う

六時起床、全員で体操。六時半までにパッキング、四十五分までに簡単に朝食（チャイ、ビスケット、みかん）をすます。沸騰させた水を各自の水筒に入れさせる。出発前に自転車の点検をさせ七時五分出発。八時、一本目はデヴラという町のバザールで休む。日本での下調べでは、朝十時頃にならないと茶店はあかないのではないかということだったが、このバザールでは早朝から開店営業しているようだ。八時五十分、前方よりオレンジ色のタイツをはいた日本人サイクリストに出会う。彼、与古田さんは二月一日にボンベイを出発し、単独でカルカッタをめざしてサイクリングを続けているという。一本とり休憩する。彼の話では道路にそう起伏はなく、舗装もされていて心配はないとのことだった。これから彼はネパールへ行き、再びインドに戻り、アジアハイウェイを通ってギリシャまで行くそうだ。気が遠くなる話である。日本人が頑張っている。記念写真をとって別れる。
十時五分カラグプールの街へ到着。今日は下痢も直り元気の出た大島と一年の片所・橋本を偵察に出す。偵察とは毎日二年一人、一年二人でトリオを組み、目的地での宿屋捜しを意味する。十一時四十五分、片所が戻ってくる。十二時本隊移動。ツーリスト・ロッジというところに決める。三室とれてベッドは七つ。一ベッド二人で部屋割する。四時までフリーにする。太田と二人で街をまわる。路上の床屋さんに散髪してもらう。二ルピー。四時にいったん集合し、再び七時半までフリー。夕食は上

## 2月28日　Panskura → Kharagpur (41.6km)

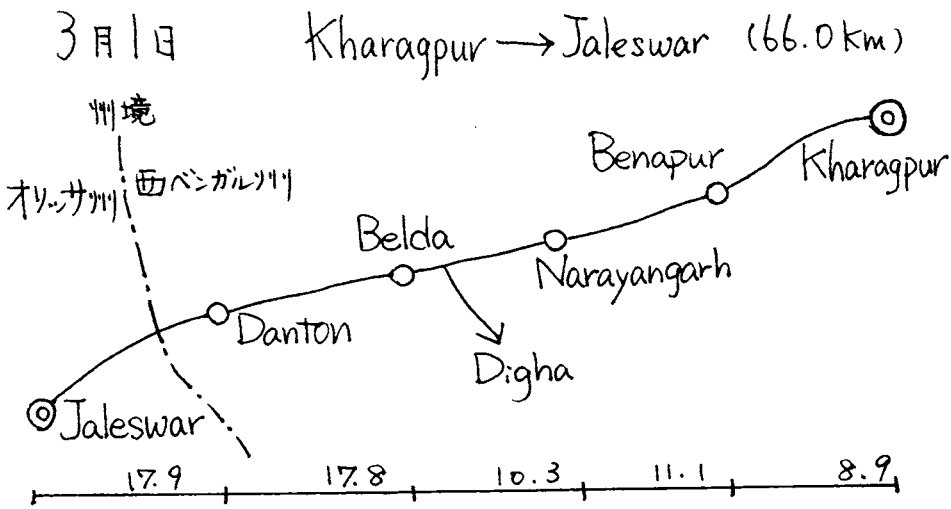



層部のメンバーで出かける。食べていると、すぐうしろの席のインド人が倒れる。安倍さんが診察し癲癇であると判断、処置をして二十分程様子を見る。さすがに頼もしかった。

七時半、ロッジの屋上に集合しビールを飲む。

二日間走ったが、ちょっととばしたなあと思えた時は二十km／h位でている。十五km／hのスピードはそうむつかしくはない。六十～七十キロの走行距離だから、午前中に目的地に着ける。午後はゆっくりとフリーにし時間を与えたい。

道は田舎に入ればタクシーはめっきり減り、代って長距離トラック・バスの往来が激しく危険だ。インドでは、人々が裸足で歩くせいか、ガラスやくぎといったパンクの原因になる物がおちていないので助かる。路面もまだまだそれ程熱くはならない。日本の七月下旬の気候だ。慣れればたいしたことはない。湿気がないだけに日陰に入れればとても涼しい。



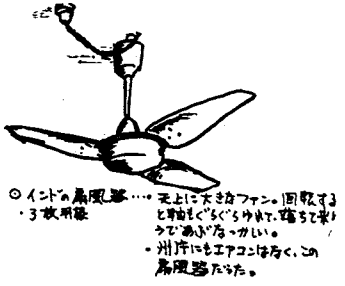

三月一日　西ベンガル州からオリッサ州へ

四時半起床。五時、簡単に朝食（ミルク・ビスケット・みかん）をすまし五時四十分、星が出ている暗がりの中出発。朝方は冷える。国道をそれ、四m位の舗装道路を走る。今日から太田の作ってくれたルート図が役に立つ。距離もほぼ正確で信頼できる。片所・正田の下痢が慢性化してきたが、熱や吐気がないので走らせる。八時半頃ベルダという街をぬけようとした時に、一年の橋本が自転車で子供を傷つけるといった事故があった。すぐに医療係の大島がマキュロンをぬってあげ、その場をとりつくろう。かすり傷でたいしたことはなかったようなのでほっとする。集落は田舎であれ、人がごったがえしているので、ゆっくり注意して走らねばならない。また村をぬけ単調な一本道の続くところでも、とばす必要はないだろう。ロードレースではないのだし、ゆっくりすりぬける位がいい。十時頃、州境をぬけオリッサ州へ入る。言葉も文字もオリヤ語になる。見慣れたヒンディー語から、ダルマがころがっているようなオリヤ語へかわる。州境は難なくぬけ、西ベンガル州に別れを告げる。十時四十分。今日の偵察は二年村山、一年鈴木、金森のメンバー。インスペクション・バンガローを三十分位でみつけ出す。十一時半、皆、外に出

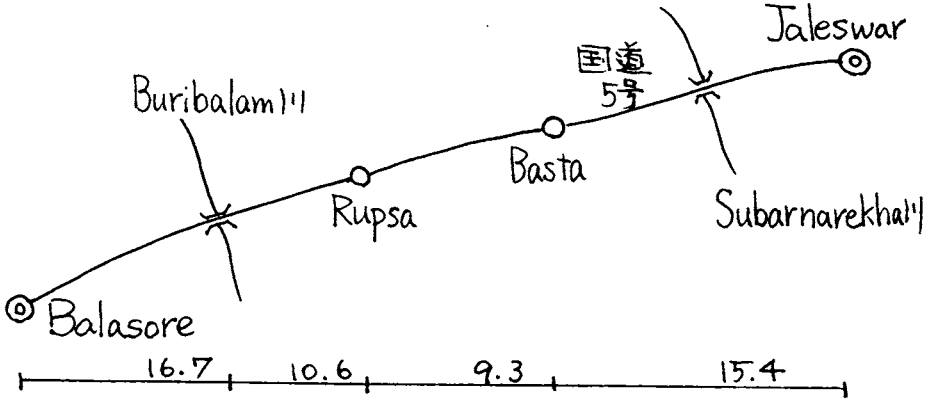
て外食。そして散策。午後四時集合しミーティングを開く。偵察や四時のミーティングというものがルール化され出し、カルカッタ隊の旅のスタイルというものができ始めてきた。再び七時までフリーにする。今晩はこの村に結婚式があり、八時半まで見学の時間にする。爆竹を鳴らし、花火を豪華につけ、真昼のような明るさの中を、新郎が車で運ばれていった。車を中心にオーケストラ・音楽に合わせて踊る子供、村じゅうの人間が道をふさぐ、にぎやかな祭であった。

## 三月二日　停滞する

深夜十二時半頃、金森がトイレで激しく吐く。大島と安倍ドクターの診察では食中毒とのこと。朝までに三度吐いたらしく、ぐったりしている。五時起床し、予定通り六時出発の用意はする。ドクターの診察では、金森の様態はかんばしくなく、動くのは無理であるとのことであった。上層部ミーティングをひらく。第一ラウンドが最初から六泊と長く、そろそろ疲れがたまっていることも考慮し、このバンガローで一日停滞し休養にあてることに決定する。朝食後自転車係の片所を中心に、各自、自転車を念入りに整備する。点検後、片所が一台一台隊員の自転車を細かい点までチェックしてくれた。四時にミーティングをもつことにし、それまでフリー。十一時に、学校の先生が僕達を迎えに来てくれた。安倍ドクター・新井・向後の三人で学校へ行く。校長先生に絵葉書をわたす。教室を四つまわる。　それぞれの教室では、真剣なまなざしで見つめるインドの子供達を前に、自分達の自己紹介や今回の旅の概要を黒板を使って説明した。教室では、すべて英語で授業をしているらしく、教科書も英語で書かれているものが多かった。もう一度先生に挨拶して、バンガローに戻る。皆、概して寝ているものが多く、二つしかないベッドがいっぱいになっていた。夕食は日本食を使うことにする。ボンカレー・アルファ米・梅干しも出す。久し振りに食べる日本のカレーはうまい。九時就寝。



3月3日　Jaleswar → Balasore (52.0 km)




三月三日　　ベンガル湾を見る

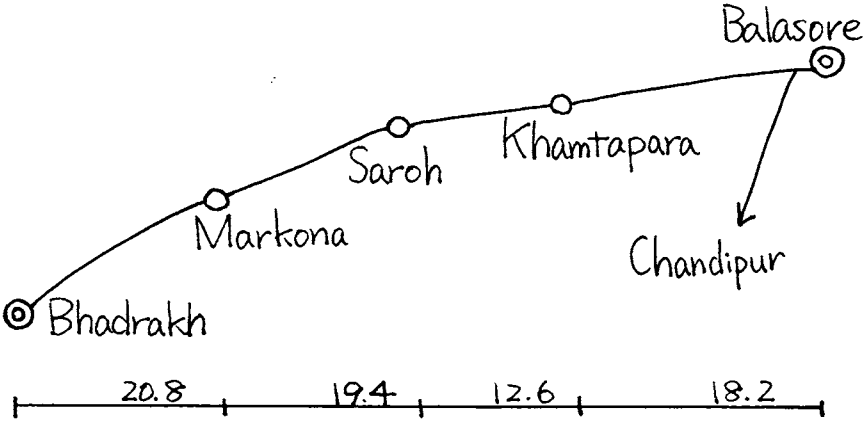
五時二十五分、橋本が起こしにくる。蚊にくわれ、朝方になるまでぐっすりねむれなかった。橋本の遅刻も手伝い出発は六時二十分。金森は元気をとり戻したようす。安倍ドクターの診察もOKだった。今日はひじょうに暑い。バラソールに十一時頃到着。なかなか大きな街であった。偵察を出すが、すぐに「ホテル・ムーンライト」を見つけ出す。部屋割りをし、各自の室へ自転車をしまいこむ。

十二時半より自由参加でチャンデブールへ出かけることにする。ここは、ベンガル湾から二十キロの街であって海見たさに自転車で、もうひとこぎしようという訳である。一年は鈴木だけ、二年生以上、安倍ドクターを除き全員参加。ドクターは、あいつぐ病人の看護で疲れてしまったらしい。よくやってくれて心強い。

畑の中の一本道を、暑いさかり自転車をとばしたが、ベンガル湾は遠浅のおだやかな海。約一キロ位は遠浅が続き、泳ぐどころではなかった。近くに軍事基地らしきものがあり、ものものしい警戒体制がとられていた。

三時半にホテルに戻る。一年達はくだものを買いこんで食べていた。

## 3月4日　Balasore → Bhadrakh　(71.0km)




### 三月四日　平穏に過ぎた一日

五時起床。ホテルの狭い廊下に一列になって体操する。健康チェックでは、金森はあと一息。片所の下痢がまだなおらないようだ。安倍ドクターは元気を取り戻してくれた。二十分から食事。（紅茶・パン・ミカン・トマト）五十分にホテル・ムーンライトを出発。ちょっとルート捜しでまごつく。朝日がとてもきれいだ。風もなく穏やかな薄曇りの朝の中をとばす。バスやトラックは二十分に一台位。並木道は我々のものである。二本目から国道五号に入る。急にバス・トラックの数が増え、神経を使う。道路工事をいたるところでしている。ほとんど女がやっている。竹のザルに砂利を入れ頭にのせて運んでいる。足はもちろん裸足であるが、水のきれた水田のように、白くひびわれていて痛ましい。

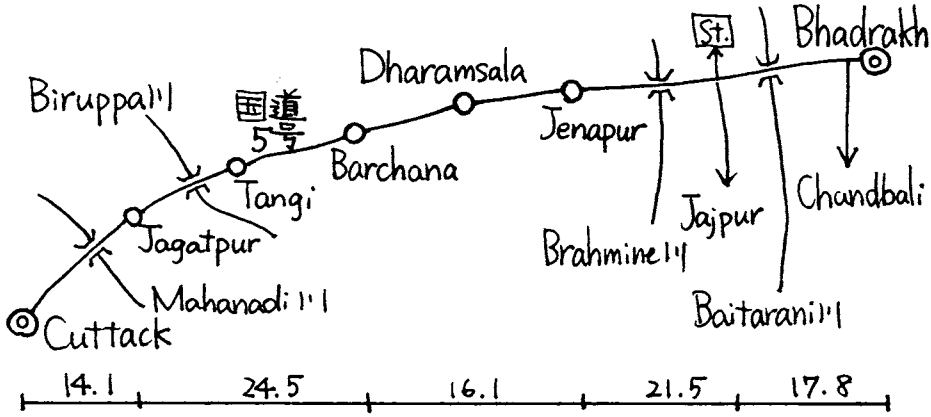
今日の目的地バドラークには十時五十分に到着。村山、金森、片所を偵察に出す。約三十分で捜し出す。だんだん渉外がうまくなってきた。宿泊費が、予算額よりもひじょうに安くあがっているので、ゆったり室をとる。それでも七十一ルピーだから一人約五ルピー（百五十円）だ。十二時十分まで三年会で予定を検討する。夜の集合を三十分延長し七時半までとする。また、明日からカタック入りしカタックでの三日間の予定を検討する。ブー

リーへの観光も考える。
夕方、珍らしく雨が降る。雷も鳴り出し、ちょっとした日本の夏を想い出してしまう。
七時半。雨も上がり涼しくなったところで乾杯。ビールがうまい。隊長の青木監督が元気なく、三十八度の熱があった。明日三十八度の熱がある場合は、安倍ドクターと太田がつき、鉄道かバスでカタック入りすることにする。監督は三十二才なのであった。九時就寝。

## 三月五日　カタック入り

五時起床。監督の様態も良いようで、まず安心する。バトラークの街を五時五十分に出発。走り出してすぐ向こうからくるジープに止められる。カタックの新聞社のものだと言ってインタビューされる。ニコン(NIKON)で写真もとられる。今日の行程は、全コース中一番長い日で九十四キロである。タンジーという小さな町でお昼(十一時五十五分〜十三時)ここまで四本かかる。休んだところが医者の家の前で、主人である医師がわかりやすい英語でカタックの町のようすやYMCAの場所を教えてくれた。親切に地図まで書いてくれる。昼食後、最も暑い時間帯であったが、カタックまで二十分位だというので午後一時炎天下の中出発する。町に入り茶屋で一本とる。その時の温度計は三十八度を示していた。暑いはずである。太田がヘッドで大島、正田を偵察に出し、全員待機。井戸の水を頭から何杯もかぶるが十五分もすると乾いてしまう。水が飲めないというのがとてもつらいことだった。チャイを四〜五杯飲みがまんする。正田が戻ってくる。すぐ出発。YMCAは街のはずれ高級住宅街の一角にあった。入ってみたものの日曜日で係の人が留守。だだっ広い車庫のような所で休む。一時間程して、代表者のD.moha-

## 3月5日　Bhadrakh → Cuttack　(94.0km)




city氏が現われる。ものすごく早い英語でまくしたてられる。少々怒っているのは、予定が一日遅れたのに連絡をしなかったからしい。明日からのことは明日話そうと言い帰ってしまった。そのうちに日印協会のPatnaik氏が自転車でのりつける。彼の話しでは、カタック到着予定日であった昨晩は百人からなる人間が僕達を待ちうけレセプションを催していたとのこと。彼も少々怒った口調。たいへんな迷惑をかけてしまったものだ。彼の紹介でオリッサ州最大の新聞社サマージブレスの会長Mr. Radharath Rathに会う。R氏は大変有力者らしい。簡単な挨拶をすませ帰る。今度はP氏の日印協会事務所へ案内される。皆、歩く元気もなく一刻も静かなところで休みたいといった口調。疲れている。YMCAにいったん戻る。R氏が夕食を用意してくれるというので再びサマージブレスへ出向く。R氏と明日、ブーリーへの観光を話しミニバスの手配をたのむ。すべてまかせてくれと、予定をあちら側のペースで組まれてしまった。待ちに待った夕食はいつになっても出ず、結局街の食堂で好きなものを食べろという始末。疲労と空腹から、皆不平不満のかたまりとなる。十時三十分YMCAに戻る。十一時十五分まで三年生三人で今後の予定を組みなおす。

## 三月六日　ブーリーで休養

朝七時起床。七時四十分YMCAを出発。オリッサ州の州知事に会うというので、レセプション用の服装をし八時にサーマジプレス前に集合する。ミニバスをチャターしたはずであつたが、なんとトラックであつた。カルカッタでみた乗り合いを思い出す。九時十五分カンダギリに到着。ここはジャイナ教の寺があり自由見学にする。約一時間後、州知事の官邸でMr. Bhagawat Dyala Sharma 氏と会見する。サマージプレスのR氏も同席する。ここで出された紅茶は、くどさがなくうまいと評判となつた。すべてのスケジュールはR氏の考えに従つており、次はコナラクのサンテンブル見学となつた。みんな、暑いさ中トラックにゆられ疲れてしまっていること、ブーリーへ直接行ってゆっくり休みたいという願望が満たされず、あちこち予定外の行動を強いられたので、不満の色を隠せないようだ。

インド人の方で、極力楽しんでもらいたいという好意とこちらの意向とがくいちがってしまつたのは残念だつた。二年生の二人がともに元気がないことも困つたものだ。目的地ブーリーには四時半に到着。ベンガル湾沿いにあるユースホステルに泊ることになる。二人の日本人旅行者に会う。オリヤ語の新聞に僕達のことがでているとボーイに知らされる。夜、近くのホテルでビールを飲み、第一ラウンドの行動をふりかえる。

## 三月七日　再びカタックへ

六時頃、みな起床し、砂浜に出る。日の出をじっと待つ。石井副隊長は一人で泳ぎ、インド人をびっくりさせる。ハードスケジュールではあつたが、環境のよいこのユースでの一泊は休養となつた。簡単に朝食をすませ、九時トラックで出発。ヒンドゥー教の寺院に案内されたが、ヒンドゥー教徒以外は入ることができないと、断固入寺を拒否される。ダウラギリの日本山妙法寺へ直行する。依田さんという日本人の坊さんに会い、日本茶・ようかん・トマトなどを御馳走になり、全員大喜びであつた。依田さんは母親とともに八年間ここで生活しているという。宗教の力は絶大である。生半可な気持ちでは、とても長続きはしないだろう。

一時半カタックのサマージプレスに戻る。停滞地ですべき仕事、換金、在日本部・佐々井さん・カルカッタの日本寺・領事館への電報連絡をすます。またOBへの手紙も手わけして書く。いよいよ明日より第二ラウンド。コースに対する不安はない。問題はむしろパーティー内の結束・協力体制をうまくまとめることだろう。

ସାରବେରେ ବାସାନ୍ତ ଆସିଥିବା ଭ୍ରମଣକାରୀ ବନ୍ଧୁ ଗୋପବନ୍ଧୁ ଭବନରେ ସମ୍ବର୍ଦ୍ଧନା

## ଡ଼ି. ଏସ. ଓ. ରାଜ୍ୟ ପରିଷଦ ବୈଠକ

କଟକ, ତା ୪।୩।–ଡ଼ି.ଏସ.ଓ. ଓଡ଼ିଶା ରାଜ୍ୟ ପରିଷଦ ସମ୍ପାଦକ ଶ୍ରୀ ଚିତ୍ତରଞ୍ଜନ ବେହେରା ଜଣାଇଛନ୍ତି ଯେ, ଚଳିତ ମାର୍ଚ୍ଚ ୧୭, ୧୮ ଓ ୧୯ ତାରିଖରେ ଘଭରକେଲା-ଠାରେ ଡ଼ି. ଏସ. ଓ. ରାଜ୍ୟ ପରିଷଦର ୭୫ ଜଣିଆ ସଭ୍ୟମଣ୍ଡଳୀର ସାଧାରଣ ବୈଠକ ଅନୁଷ୍ଠିତ ହେବ । ୧୭ ତାରିଖ ଅପରାହ୍ନରେ ଶିକ୍ଷାସଙ୍କଟବିରୋଧୀ ଛାତ୍ର ସମାବେଶ ଅନୁଷ୍ଠିତ ହେବ । ୧୮ ଓ ୧୯ ତାରିଖରେ ସଭ୍ୟମଣ୍ଡଳୀର ଘରେଇ ଆଲୋଚନା ହେବ । ଏଥିରେ ସାଂପ୍ରତିକ ଛାତ୍ର ଆନ୍ଦୋଳନ ପରିସ୍ଥିତି ତଥା ମାର୍କସବାଦ-ଲେନିନବାଦ-ଶିବଦାସ ଘୋଷ ଚିନ୍ତାଧାରା ଉପରେ ଆଲୋଚନା ହେବ । ରାଜ୍ୟ ପରିଷଦର ସାଧାରଣ ସଭ୍ୟଙ୍କ ସମେତ ବିଭିନ୍ନ ଅନୁଷ୍ଠାନ ଓ ଅଞ୍ଚଳସ୍ତରୀୟ ଶାଖାମାନଙ୍କର କର୍ମକର୍ତ୍ତାଗଣ ଏଥିରେ ଯୋଗ ଦେବେ । ଯେଉଁ ପ୍ରତିନିଧି-ଦେଇଥିଲେ । ସଭାପତି ଶ୍ରୀ ନାଗ ପଦୋନ୍ନତି କ୍ଷେତ୍ରରେ ଅତଳ ଅବସ୍ଥା, ବାସଗୃହ ସମସ୍ୟା, ପିଇବା ପାଣିର ଭଳତ ଅଭାବ ଓ ଅନ୍ୟାନ୍ୟ ସମସ୍ୟା । ନେଇ ଅଭିଯୋଗପାତ କରି ସେସବୁର ତ୍ୱରିତ ସମାଧାନ ପାଇଁ ଉପାଚ ଜାରଖାନା କର୍ତ୍ତୃପକ୍ଷଙ୍କ ପାଖରେ ଦାବୀ କରିଥିଲେ ।

## ମଧୁସୂଦନ ନୈଶବିଦ୍ୟାଳୟ ସୋସାଇଟି

ମଧୁସୂଦନ ନୈଶ ବିଦ୍ୟାଳୟ ସୋସାଇଟି ପକ୍ଷରୁ ବର୍ଷବ୍ୟାପୀ ସାହିତ୍ୟ ଚକ୍ରର ଉଦ୍‌ଘାଟନ ଉତ୍ସବ ଅନୁଷ୍ଠିତ ହୋଇଥିଲା । ଏହି ଉତ୍ସବରେ ବିଶିଷ୍ଟ ସାହିତ୍ୟିକ ଶ୍ରୀ ନବକିଶୋର ପଣ୍ଡା ଓ ପ୍ରାଧ୍ୟାପକ ଶ୍ରୀ ବୃନ୍ଦାବନ ଆଚାର୍ଯ୍ୟ ସଭାପତି ଓ ଉପସ୍ଥିତ ଭାବରେ ଯୋଗ ଦେଇଥିଲେ । ସାଧାରଣ ସମ୍ପାଦକ ଶ୍ରୀ ବିଦ୍ୟାଧର ବାରିକ ପ୍ରାଚୀ-ସାରସ୍ୱତପଥ ଠାରୁ ବର୍ତ୍ତମାନ ଯଗ ପର୍ଯ୍ୟନ୍ତ ଓଡ଼ିଆ ସାହିତ୍ୟର ବିଭିନ୍ନ ଦିଗ ସମ୍ପର୍କରେ ଆଲୋଚନା କରିବା ନିମନ୍ତେ ଉଚ୍ଚିଷ୍ଟ ଏକ ଆଲୋଚନାଚକ୍ର ସମ୍ପର୍କରେ ସୂଚନା ଦେଇଥିଲେ । ଶ୍ରୀ ଆଚାର୍ଯ୍ୟ ସାହିତ୍ୟ ଓ ସଂସ୍କୃତିର ଉନ୍ନତି ପାଇଁ ସୁଯୋଗନୀୟ ସାଧନାର ଆବଶ୍ୟକତା ଓ ସାହିତ୍ୟର ଗଣାତ୍ମକ ବିଚାର ଚଳନା ସମ୍ପର୍କରେ ଗୁରୁତ୍ୱ ଆରୋପ କରିଥିଲେ । ସଭାପତି ଶ୍ରୀ ପଣ୍ଡା ମୁଖ୍ୟ ଅତିଥି ଶ୍ରୀ ବି. ପି. ବାସ ସ୍ୱାଗତ ଭାଷଣ ଦେଇଥିଲେ ।

---

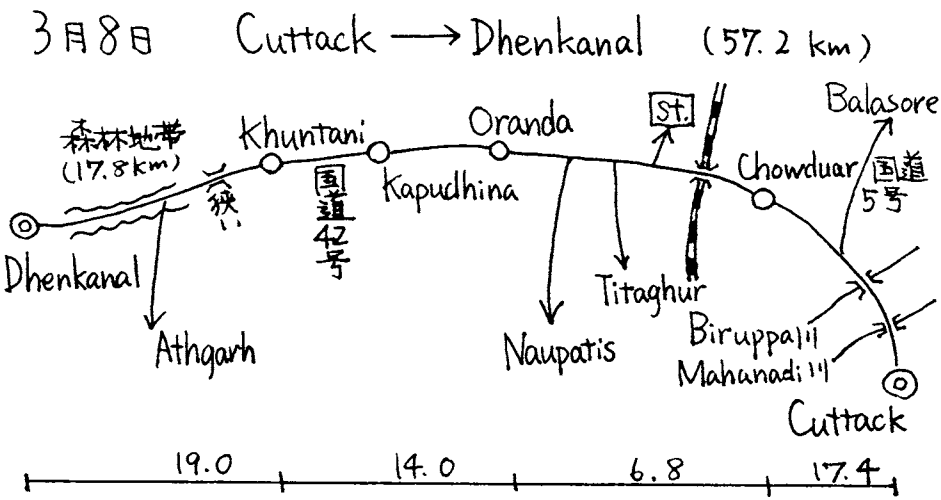
## ସ୍ୱାମୀ ପ୍ରଣବାନନ୍ଦଜୀ ମହାରାଜଙ୍କ ଜନ୍ମବାର୍ଷିକୀ ପାଳନ

(ନିଜ ପ୍ରତିନିଧିଙ୍କଠାରୁ)

ରାଉରକେଲା, ତା ୪ । ୩–ସ୍ଥାନୀୟ ହିନ୍ଦୁ ମିଳନ ମନ୍ଦିର ତରଫରୁ ସ୍ୱାମୀ ପ୍ରଣବାନନ୍ଦଜୀ ମହାରାଜଙ୍କ ଜନ୍ମବାର୍ଷିକୀ ପାଳନ କରାଯାଇଛି । ଏ ଉପଲକ୍ଷେ ସଦସ୍ୟମାନେ ଆର. କି. ଏଚ.ର ରୋଗୀମାନଙ୍କୁ ପୁଷ୍ପ ଓ ଫଳ ବଣ୍ଟନ କରିଥିଲେ । ମୁଖ୍ୟ ଚିକିତ୍ସକ ଡାକ୍ତର ଟି. କେ. ଘୋଷ ମୁଖ୍ୟ ଅତିଥି ଭାବରେ ଯୋଗ ଦେଇଥିଲେ । ଅନୁଷ୍ଠାନ ତରଫରୁ ଏକ ଦାତବ୍ୟ ହୋମିଓପାଥିକ ଚିକିତ୍ସାଳୟ ସହର ପଞ୍ଚାସବ ଶ୍ରୀ ପାଣିଗ୍ରାହୀ ଉଦ୍‌ଘାଟନ କରିଥିଲେ । ସର୍ବଶ୍ରୀ ବି. ସରକାର ଓ ସୁବ୍ରତ ରାୟ ସ୍ୱାମୀଜୀଙ୍କ ନିଷ୍କାପର ଜନସେବା ନେଇ ଆଲୋଚନା କରିଥିଲେ ।

### ରକ୍ତନିୟନ୍ତ୍ରିତ ମଜଦୁର ସଭା

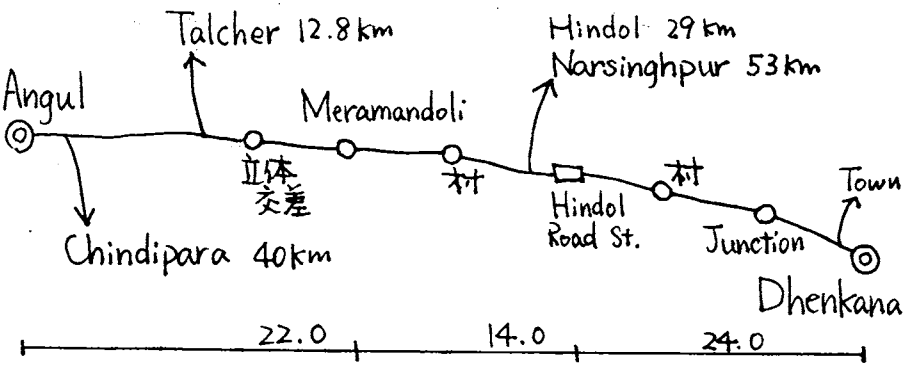
ରକ୍ତନିୟନ୍ତ୍ରିତ ମଜଦୁର ସଭା ନାମରେ ଏକ ନୂତନ ଶ୍ରମିକ ସଂସ୍ଥା ଏଠାରେ ଗଠନ କରାଯାଇଛି । ସର୍ବଶ୍ରୀ ରାଜକିଶୋର ସାମନ୍ତରାୟ, କେ. ସାମଲ, ବୃନ୍ଦାବନ ସାହୁ ପ୍ରଭୃତି ଲୋକ ସଭାର ମହାପାତ୍ର,




三月八日　Under Me

朝七時半、たいへんお世話になったサマージブレスを後にする。出発の際写真をとられる。途中、約一時間程二台のオートバイが伴走してくれる。しばらく鉄道の線路沿いに走る。森林地帯を走り一本とる。ここで神林OGからさし入れられたテトラパックのオレンジジュースの広告用の写真をとる。果たして採用されるかどうか疑問である。三本目、赤シャツ部隊が僕達を出迎えてくれた。彼らはサイクリストだそうで、今日の目的地、デンカナルから出迎えに来たのだそうだ。仲良く記念撮影をしてからいっしょに走る。すぐに数キロ先の学校で熱烈な歓迎を受ける。全校生徒が僕達十三名を注意深く見つめている。花の首輪をかけられると、皆にこやかにならざるをえない。こんな経験はだれも初めてなのだ。教室に入り黒板を使ってインドと日本の地図を書き、僕達の旅を説明してみた。皆、好奇の目でじろじろ見つめるだけで、反応がない。三十分程で出発。いつのまにかジープまで伴走に加わる。正午、デンカナルに到着。この地区の最高指導者ミセス・ダスの指示で、僕達はすっかり食事、宿、午後の予定とアレンジされてしまった。彼女はしきりにこの地区における行政組織を説明しつつUnder Meを連発。自分の権威が高いことを強調していた。

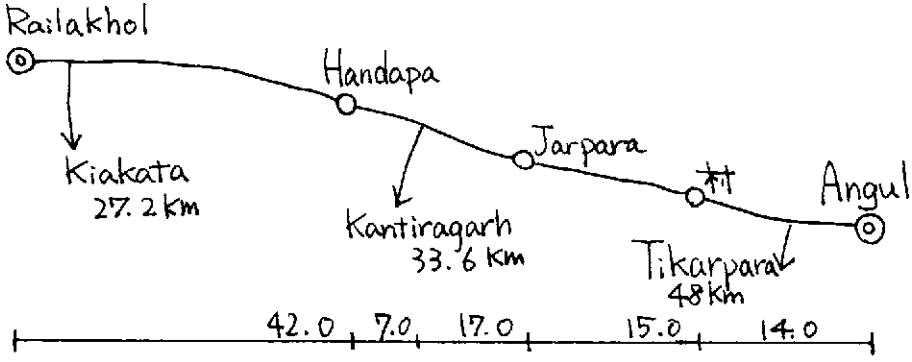
## 3月9日　Dhenkanal → Angul　(60.0 km)




### 三月九日　スター誕生

六時起床、七時出発。朝食はビハーリさんが約束通り、六時半に用意してくれた。僕達との約束を時間通り守ってくれたのは彼が最初で最後であった。一年の片所がカゼ気味で、他のメンバーは良好と、いい状態で出発。デンカナルの街並の終わるところまでビハーリさんはスクータで伴走してくれた。忘れられない人である。引き続き今日の目的地アングルまで、二人の男がオートバイで伴走し、行く先々の学校でのレセプションをアレンジしてくれた。すべてミセス・ダスの指示なのだろう。アングルの街に着くまでに結局三つの学校を訪問する。どこも道路から校門までこざっぱりとした清潔な制服の生徒達が二列に並び、待ちうけていた。女生徒に花の輪を首にかけられて入場する我々は、ちょっとしたスター気分となり、こちらも精一杯応待する。ほんとうに心のこもった歓待であったのだ。アングルの街に入るやロータリークラブの人達に会い、冷たいリムカ（清涼飲料水）を御馳走になる。サーキットハウスに案内され昼食。七時からのロータリークラブ主催の夕食会までフリーにする。ここでもインド人にとり囲まれる。窓をたたいて話そうとするその熱意には応じないわけにはいかない。特にカレッジの学生ときたら猛烈に好奇心が旺盛である。

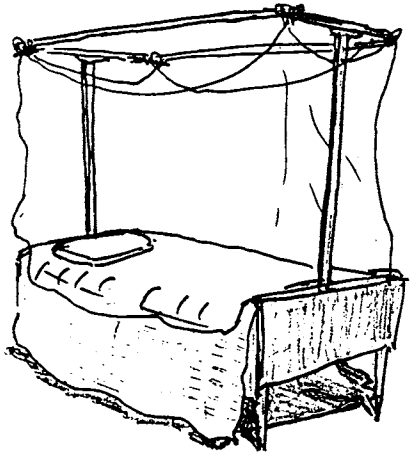
## 3月10日　Angul → Railakhol　(95.0 km)



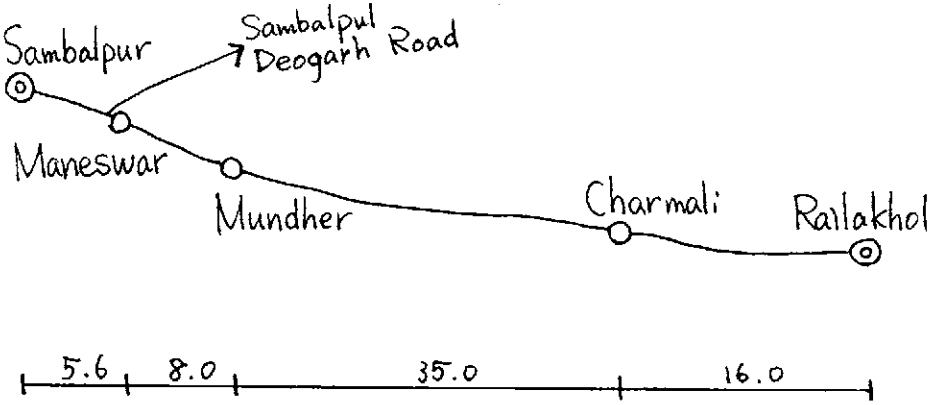

### 三月十日　Accident will happen

五時五十分に朝食（ビスケット・バナナ）六時二十分に出発。一本目安倍ドクターが犬をひくという小事があった。朝食が貧しかったので、ゆっくり休みお茶をのむことにする。が、茶屋はなかなか見あたらず、七時半ようやく見つける。皆今日はペダルが重い、重い、と疲れ気味。八時二十分出発。しばらく走ったところで、一年の片所が通りがかりの老婆をよけきれず、ひいてしまう。前輪で腰のあたりを強くうったらしく、倒れて立てない。すぐに彼女を抱きあげ、道路より草場へ運ぶ。輪行袋をひろげ、横になってもらう。安倍さんの診断では骨に異常はないとのこと――安心するが、ひざと腰が痛そうで涙を浮べ何かを訴える。言葉が通じず、全くお互が理解できないのは悲しいことだ。太田と向後にジャルパラの警察に行ってもらい病院と医師の手配を、一方、村山と正田には先の街のようすを調査に行ってもらう。片所の自転車も重症であった。前輪のリムがかなり歪んでしまい、走行不可能。軽合金のもろさを目のあたりにする。通りすがりのドライバーに事情を説明し、老婆と同行していた男や、集まった人達の話を通訳してもらう。三十ルピー与えればいいとあっさり言う。金で解決できる問題でもないので当惑する。向後が、学校の先生を連れ戻る。

先生と協議した結果、二十五ルピーを与え、バスで彼女の住む村へ運べばいいだろうとの指示に従う。警官もそれでよいだろうとの判断。ひとまずバスにのせこの事件を片づける。向後に先導してもらい、学校まで自転車をころがして行く。老婆の処置に対し一抹の不安が残る。十時に到着。事故もあり、みな精神的にぐったりしてしまった。教室に案内されフルーツと茶をいただく。レセプションに招かれたというよりは、やっかいにころがりこんだと言った方が正確だろう。十一時より一室をかり二時まで休むことにする。片所と橋本は自転車修理。スポークをすべてはずし、歪んだリムを自転車屋にもっていく。とてもユニークな発想で歪みを直す。見ていて感心させられる。一方学校では一年の金森や正田が生徒達を相手に奮闘していた。二時十五分ライラコール目指して再出発。片所の自転車もなんとかいけそうだ。十キロ先のボインダから五人自転車で迎えにきてくれた。予定では昼食をボインダでとるはずだったがなかなか来ないのできてくれたのだ。予定を大幅に遅れボインダの町へ入る。ここでも町をあげての歓迎を断わりきれず、寄っていくことにする。ファンタオレンジも出され全員歓喜する。料理はどれも辛さがぬかれているのが、ミセス・ダスのとりはからいだろう。四時十五分出発。途中二年大島の自転車がパンクしてしまい、すぐにチューブ交換をする。装備係の片所も、すっかり立ちなおり、修理もすばやくすませる。六時を過ぎた頃から雨曇でおおわれ始め、雷まで鳴り出す。雨も降り出す。街燈のない道をダイナモの光を頼りに走る。文字通りまっくら闇。原始の暗闇である。インスペクションバンガローに、全員ぬれねずみで逃げ込む。なんとか今日の一日をおえる。いろんなことが集中した日であった。



3月11日　Railakhol → Sambalpur (64.6km)

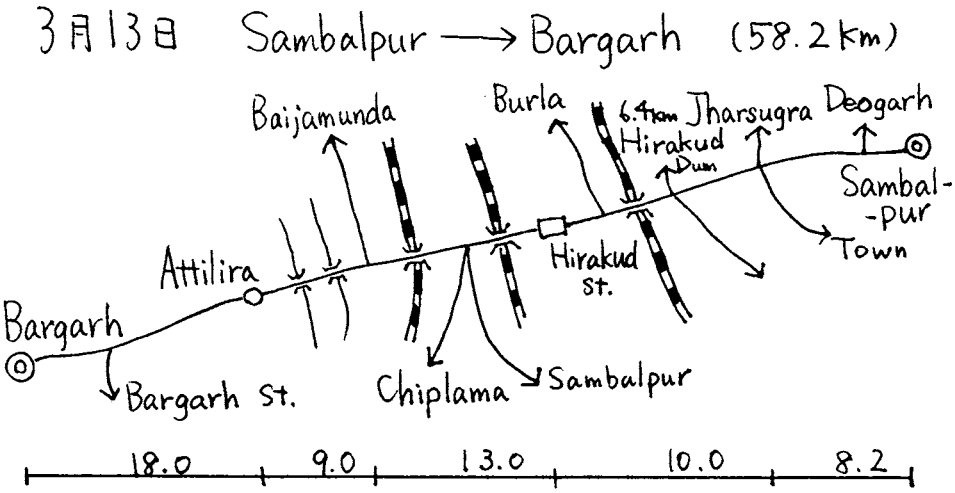



三月十一日　第二ラウンド終了す。

六時起床。体操をし二十分までに出発の準備をすませる。三十分より朝食。昨晩の残り物を朝食として食べる。七時出発。最初の一本目でランブールに到着する。ここは、三月十日到着予定であつたため、僕達を昨晩は待ち受けていたらしい。役所の応接間で食事をごちそうになる。この第二ラウンドは、すべて新聞に僕達の旅の日程が詳細にのつたためか、どこへ行つてもスターになつていた。特にこの地区のコレクター、ミセス・ダスによつて特別な配慮がなされているらしい。彼女は学校役所関係にはすべて連絡をしたらしく、この日もコース途上の小さな村で、昼頃つかまつてしまう。午後二時までゆつくり休むことにする。ちようどこの村で結婚式があるらしく、太鼓や笛で花嫁、花婿を祝福していた。村の人達がみんなで祝う素朴な式はとてもなごやかな風景に思われた。サンバルプールめざす途中、森林地帯を走つているところ、あのなつかしのR氏にお会いする。彼はサンバルプールで開かれる会議に出席するらしい。一週間ぶりに再会したのだが、カタックでの三日間はひどく昔のような気がしてならなかつた。四時にはサンバルプールの街に入る。ツーリスト・バンガローを捜し出し泊まることにする。今日で前半戦は終了である。

## 三月十二日　恐怖のアレンジ

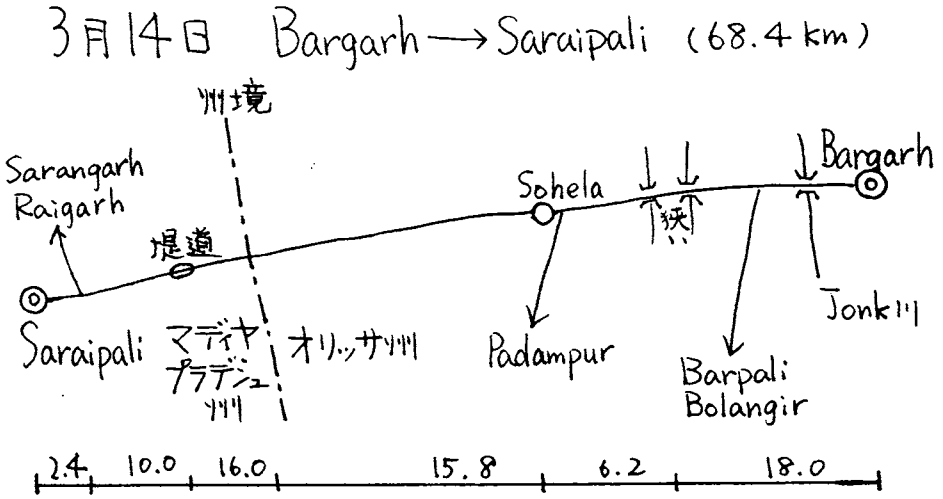
七時に起床し、共同通信の森田さんに手紙を書く。カタックからはついに出さずじまいであった。七時半青木隊長・石井副隊長と朝食をとりに外出する。茶店でミルクと天ぷらのようなコロッケを食べる。九時、この街の役人とバンガローで会い今日一日のスケジュールを協議する。こちら側は極力休養に使いたいし、あちら側は熱烈な好意でいろいろと僕達を歓迎するプランを組もうとする。しかし、第二ラウンドでは、さんざんあちらペースでひっぱりまわされくたくたになってしまった。この苦い経験から、極力おさえてヒラクッドダムの見学のみを約束する。車で見学させてくれるはずだったが、いくら待っても車は現われず、結局一時間半も待たされる。ミニバスとジープ二台に分乗する。安倍さんはスクーターに。十一時半ダムの入り口でパスポートのチェックを受ける。アジアでは一番大きいダムであると説明されたが、なるほどバカでかいダムであった。予定を予想通り遅れ一時にロッジ到着。すぐフリーにしたいところだったが昼食は用意しているからと二時まで強引に待たされる。全員満足に朝食も食べず、約束の九時に集合し十時四十分まで待たされたあげく、約束通り十二時に解散できずじまいだったので腹もへるし腹もたつ次第。　Hungry people tend to get angry.　と役人と半ば口論してしまう。結局 Indian Pace にまきこまれてしまった。しかし彼らもそうすることが僕達に対する一番のもてなしであると考えてのことなのだろう。改めて時間に対する感覚のちがいを痛感させられた。




三月十三日　第三ラウンドに入る。

五時起床。五時半朝食。きのう、時間に対してうるさくいっておいたのでみんなの動きがいい。向後と石井副隊長は換金のため残り、遅れてくることになる。六時十五分、外で体操をして出発。珍しいのか、バンガローの窓から旅行者が身をのり出して僕達を見つめていた。今日からボンベイロードと呼ばれる国道六号に入る。舗装状態もよく快適にとばす。二本目、青年海外協力隊員として農業指導をしていた藤巻さんが一年半滞在していたアタリラで休む。日本人に会ったことがあるという人が多かった。三本目九時半、今日の目的地バルガーに到着。街に入るやジープがきて、僕達はバンガローに案内された。十二時からランチ、六時から夕食を用意してくれるというので、それだけ約束してフリーにする。四時、石井さんと向後が到着。午前中換金を済ませ十二時半にサンバルプールを出たそうだ。

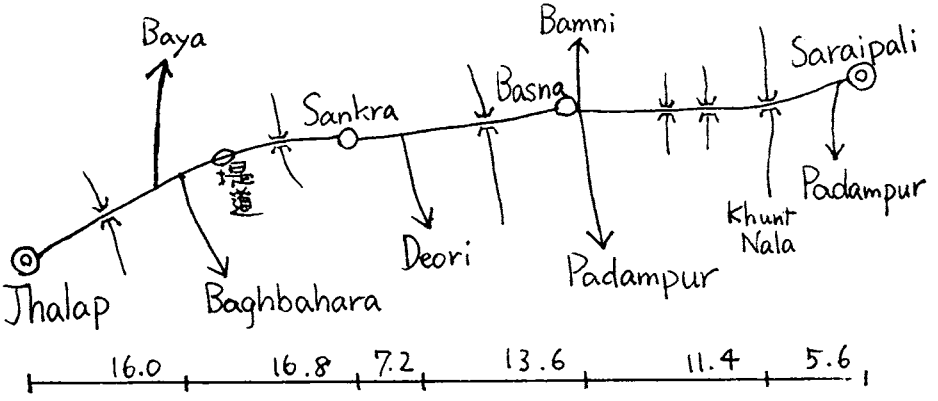
今日は余裕のある一日だった。就寝前に、三月二十二日までの小遣い二百ルピーを向後から一人一人受け取る。日雇い労働者だなといって笑う。このラウンドからリーダー養成も兼ね二年生に指揮をとらせる。三ラウンドは大島に四ラウンドは村山にまかせることにする。




三月十四日　マディヤ・プラデシュ州へ入る

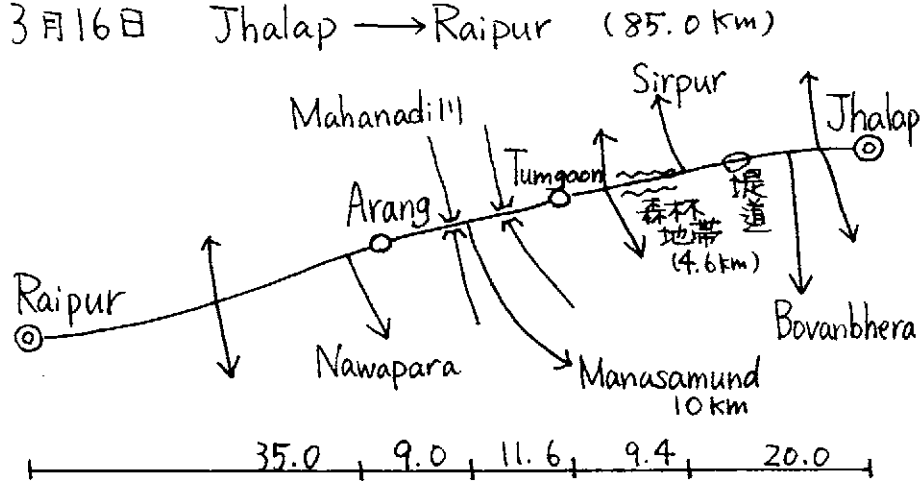
六時半。ビスケット二パックを食べ出発。ちょっと貧弱な朝食である。一本目ソヘラの町に七時半到着。大休止をとりバナナ、オレンジ、チャイを食べる。八時五十分オリッサとマディヤプラデシュとの州境に着く。レセプション攻めのオリッサ州ともお別れである。第一ラウンドが試行錯誤の連続、第二ラウンドはレセプションの連続と特色づけられる。三本目に入るや、がらっと風景がかわる。広大な砂漠の中をひたすら進む。遠くに砂山が点在しているだけで、真に異国を感じさせられる。十時半サライパリの街の手前で大休止をとり、村山、片所、金森を偵察に出す。レストハウスを捜しあててくる。全員移動し、食堂に自転車を入れる。簡単に上層部でミーティングをひらき予定を決定する。四時までフリーにする。今晩の夕食はカレーとアルファ米・すき焼・みそ汁と日本食。土地の人なつっこい子供達が珍しそうに見るなか舌づつみをうつ。七時日本に農業留学したというインド人が、ジープでやってくる。明日寄っていくことを約束する。夕食後、青木隊長が「がんばれ節」を歌ってくれる。この歌は合宿中に全員が歌えるようにしたい。一年生に安曇節を教える。今晩は片所・金森の二人に教える。なかなかのみこみが早いのに隊長をはじめ僕も感心する。

## 3月15日　Saraipali → Jhalap（70.6km）




### 三月十五日　日本留学生J・バリク氏宅訪問

五時星空の下起床。大方のメンバーは外でねる。大島が手際良くみんなを動かしている。体操をすませ五時三十五分朝食。ビスケット一箱、みかん二こ、バナナ三本それに昨晩作っておいた紅茶が冷たくておいしい。六時出発。日の出は六時十五分位か。とてもきれいだ。六時五十分、きのう宿に遊びにきたインド人J・バリク氏の家に立ち寄る。日本に一年間農業留学をしたそうだ。試験農場や灌漑施設など、氏の自慢の数々を見学する。家の中を案内され、お茶を御馳走になる。留学中に録音したテープをきかせてくれる。アグネスチャンは好評であった。インドには珍らしい日本式の風呂もあり驚く。日本留学の賜物であろう。七時半出発。サンクラ、ピソラを経て、今日の目的地ジャラップに十時四十分に到着する。途中、野生の猿が目立つた。偵察隊はこの街唯一のレストハウスを確保してくる。すぐに予定を決めてしまいフリーにする。四時集合、六時夕食、九時就寝といつも通りである。ここジャラップはとても小さな村。茶屋は道路沿いに五軒位。くだもの屋が一軒で、僕達がみかんを買い占めてしまう。みんな井戸で洗濯。あいかわらず二十～三十人の子供達にとり囲まれるので、だれも外に出たがらない。太田が一人歌を堂々披露し大喝采をあびる。




三月十六日　スピーディで優秀なインドの警察

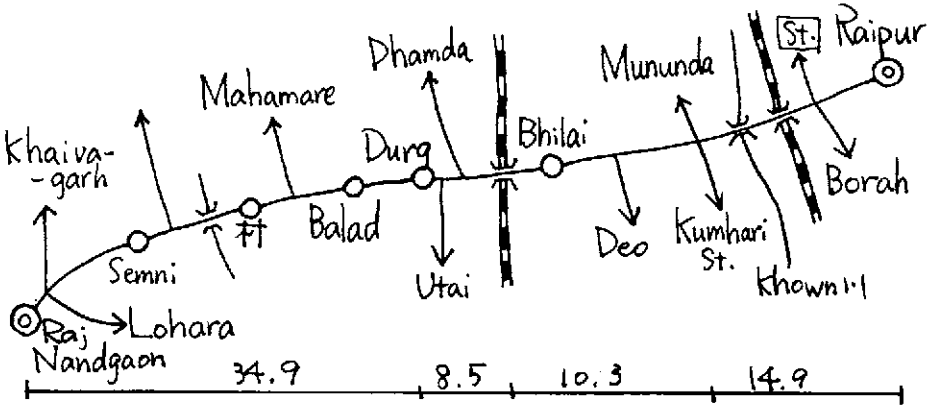
五時起床、六時出発といつも通り。森林地帯の中で最初の一本。二本目、装備係の片所が自転車の虫ゴムを買い足す。二ラウンドより虫ゴム破損の事故が目立つ。原因は強くしめすぎること、空気入れの取り扱いが乱暴なこと、それにインド製の虫ゴムは弱く破れやすいことなどがあげられる。三本目、のども乾き腹もへる。トップの大島は街の喧噪を嫌い、はずれまで行つて一本とる。おかげで茶もみかんも買うことができず皆大いに不満。「大島はちよつと弱気じやないか」と青木隊長はこぼす。ライプールの街に入つたのが十一時四十分。その建物の大きさ、密集度に驚く。カタックよりよほど大きい。カルカッタ以来の大都市である。村山・正田・鈴木が今日は偵察に出る。三十分程で大通りに面したブーナムホテルを見つけ出す。一泊四十ルピーと高級である。人数が多いのでラディカホテルにも泊まる。部室割をすませ、隊長の室で今後の予定を決める。残つている緊急予備日をここで消化するか否かを検討する。結局安全策をとり、一日の予備日を持つて最後まで臨むことにする。従つてここでは予定通り二日滞在。二時昼食をホテルの食堂で全員いつしよにとる。食べながら第三ラウンドの総括をする。食後屋上で自転車を各自点検する。四時にいつ

たん解散し八時までフリーにする。太田がフリーの時間カメラを持って市内を散策した際に子供達にとり囲まれ、ポケットから財布をすられてしまう。警察に届けておいたため、夜には犯人は見つかり、金も明日かえってくることになる。スピーディで優秀な警察に驚く。ここライプールは都会であることを知らされる。夜、隊長の室で酒をのむ。この長期の合宿、皆酒を飲んでいないせいか、酔いが早い。隣の室への迷惑も忘れ大声で唱う。隊長が又「がんばれ節」をうたう。何度きいてもいい歌だ。就寝自由。

## 三月十七日　停滞日は休養にならず

起床時間自由。毎日の習慣からか、五時に目がさめてしまう。蚊にくわれて熟睡できなかった。今日は午後五時までフリー。太田が十時にナグプールの佐々井さんへ電話を入れる。ボンベイ隊は予定を一日遅れ二十日にナグプール入りする予定であるとの情報を得る。どうやら皆元気にやっているらしい。安心する。十一時洗濯をすませ外出。郵便局へ、手紙を出しに行く。いちいちスタンプを押すのを確認する。一人で裏道を歩きまわる。同業種の店がブロックをつくって軒をつらねているのが特色である。映画館がよく目につく。庶民の娯楽の場なのだろう。思いきって入る。一・七五ルピー。満員に近く、館内は熱気で溢れていた。勧善懲悪ものかと思って見ていたが、ボンベイが舞台のモダンな映画であった。観衆がいっせいに大笑いしたりため息をついたり、なごやかである。二時にホテルに戻る。三時、隊長・副隊長と人力車で街の入口の沼まで行く。炎天下、僕達をのせて坂をこぎ上るのを後ろから見ていて気の毒になる。坂の途中でおりることにする。一・七五ルピー。青木隊長は沼で水浴びする水牛の群をバチバチ撮る。五時、ホテル内の食堂に全員集合。食事は七時からでないと食べられないというので茶を飲み解散する。門限は八時。大島と買物をした際、インド国旗を見つけ買って帰る。これが評判良く、OBや関係者へのおみやげに使おうということになる。安倍ドクターが下痢気味らしく元気がない。あと一ラウンド頑張ってほしい。他の隊員も今日一日は、ライプールの街を探検と冒険に興じたらしい。みんなインドでの生活にも慣れたせいか単独行動が目立つ。夜になってカゼ気味であるとか腹の調子が悪いといいだす隊員が続出する。どうも遊びすぎてしまうようだ。

## 3月18日　Raipur → Raj Nandgaon (68.6 km)



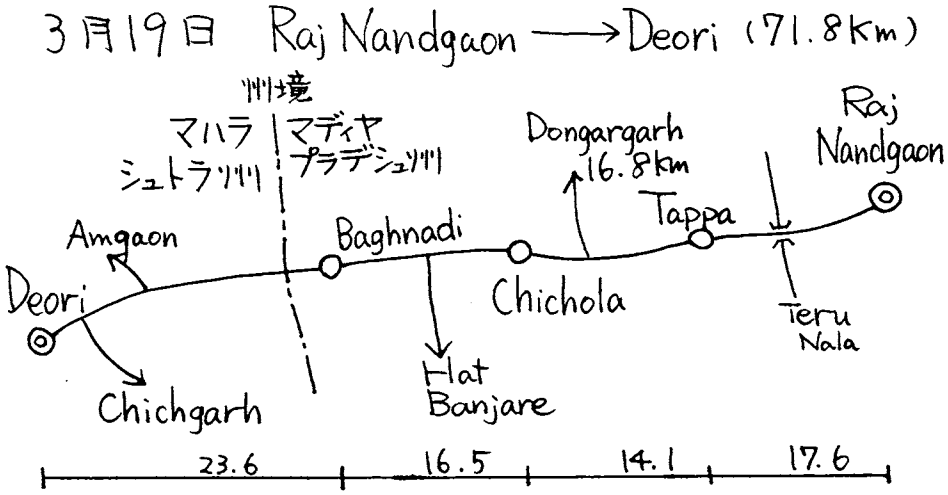

### 三月十八日　最後ラウンドに入る

ブーナムホテルは片所が、ラディカホテルの方は金森が起床係。五時五十分までに全員外に集合する。雨が昨晩降ったらしく涼しくて気持ちがいい。鈴木・正田それにずっと元気だった向後が下痢。停滞するとどうしても金を持っているせいか、食べすぎや飲みすぎにはしってしまう。薄暗い中、六時定刻に出発。今日からの第四ラウンドは二年村山が行動を指揮。声はかすれているが体調も良くなったようで心強い。トップは一年にやらせる。六時五十分一本目をとる。製鉄工場群が左側に目につく。煙突からのまっ黒い煙が空をおおっている。ここで働く人達、自転車、トラックで道路は混雑し気をつかう。三本目に入り、やっとだだっ広いいつもの景色に戻る。路上には猿のグループがたわむれ、注意して見れば両側の並木にリスが登り降りしている。この道はナグプールへ続く道。道の左側に時折石の標識がおかれNagpur278、Nagpur240とどんどん数字が減っていくのを見るにつけ、合宿が終わりに近づいていることを感じる。十時、今日の目的地ラジナンダガオンに到着。村山の指示で大島、橋本、片所が偵察。その間全員待機。シーク教徒が目につく。十一時大島が戻ってくる。十一時四十分レストハ

ウスに落ち着く。政府の役人用に建てられたレストハウスは、予約なしでは貸りられないと言われてきたが、案外うまく貸りられるので助かっている。上層部ミーティングで予定を決め、六時までフリーにする。安倍ドクターの診察では鈴木・金森・向後が重症であるとのこと。隊長・副隊長と街を歩きまわりインド国旗を捜すが、手頃なのは見つからなかった。郵便局で切手を七種類買って帰る。切手を見ているとインドという国がぼんやりと浮かびあがってくる。夕食は六時から。病気の三人にはアルファ米とみそ汁を食べさせる。鈴木が全く食べたがらない。九時就寝。

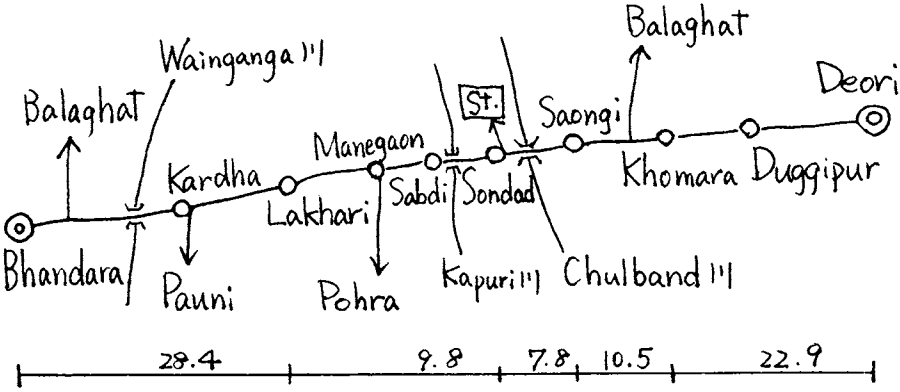
## 三月十九日　石井副隊長倒れる

今日で出発してからちょうど四週間がすぎた。五時起床。橋本・片所はすぐおかゆ作り。全員で体操をし四十五分まで安倍ドクターが鈴木・金森を診察。それまでに他の者は食事をしパッキングの準備。ドクターの診断では鈴木は三十九度二分→三十六度三分に、金森はほぼかわらず三十七度四分の体温で、まあ走れるだろうとのこと。病人食をとらせ六時半に出発する。走り出してすぐ、Nagpur 201 km という標識を見る。無理をすれば一日で走破することも可能な圏内に入った。七時十五分一本目をとる。並木で休む。副隊長の石井さんが今朝から下痢。熱もあるようで、急激に体調をくずしていて苦しそうだ。八時十五分チチョラの十二 km 手前の小さな村で一本。三本目はチチョラと州境の間で一本とる。すべて十 km／h 位のスローペース。十時四十分マディヤプラデシュとマハラシュトラの州境に着く。ゆっくり走ってきたが案外あっさりと今日のめどもたつ。石井さんの容態はきわめて悪く、すぐ安静にする必要があるとドクターに言われる。十一時先発隊を出し宿の手配に先行させる。十五分後石井さんを含め病人ばかりで出発。二十分程ですんなりデオリの街に入る。すぐ先発隊と合流する。レストハウスは予約済みで使用できないとのこと。




村山達が村の公民館を貸りに出かけた。　公民館は広いが、ベッドもなくだだっぴろい建物。長びくので僕も行ってみる。貸りられないというレストハウスに、ちょうど政府の役人が帰り支度をしているところだったので事情を話す。パスポートを提示し病人のいることを話すと、親切にも一室貸してもらえることになる。公民館の申し込みを断わり、一室だがベッドのあるレストハウスに決める。十二時四十分全員移動。すぐに石井さんをベッドにやすませ金森、鈴木も寝かせる。明日二十日にはボンベイ隊はナグプール入りの予定。こちらもあと百四十キロ。なんとしてもこの計画を成功させねばならない。石井さん、金森鈴木それに下痢をしている向後・安倍ドクターに病人食を食べさせる。石井副隊長は三十九度八分と高熱。上層部ミーティングをひらき明日の行動を話し合う。石井さんはきのうの鈴木の症状に非常によく似ている。明朝三十七度以下に下らねばここにもう一泊停滞することに決定する。四時より一年正田・片所・橋本が食当を開始する。明日の水と病人食の用意、紅茶も作らせる。ダヒーを丸食に一杯（四・五ルピー）買ってきて蜂蜜を入れ病人に食べさせる。みんな食欲はある。七時半までに全員夕食をすませる。七時半石井さんにベビーフードのりんごを食べてもらう。熱も三十六度八分と三度も下がり安心する。それにしてもカルカッタ隊は十三人中約半数が体調をみだしている。ひどい状態である。

## 3月20日　Deori ⟶ Bhandara　(79.4km)

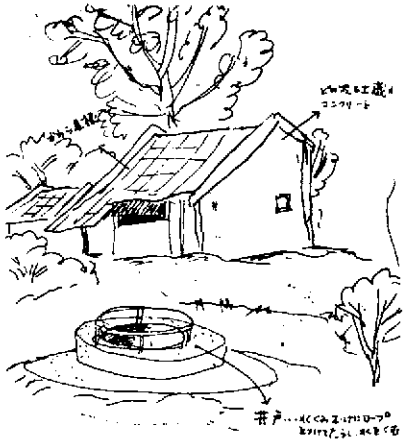



三月二十日　病人部隊頑張る。

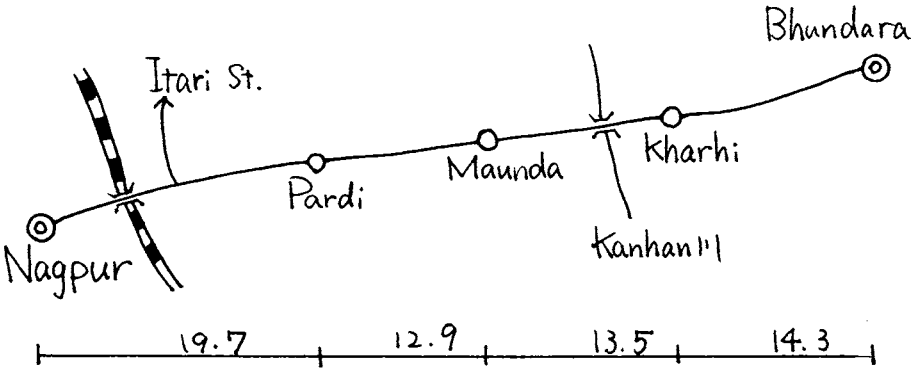
五時起床。レストハウスの前バニヤンの木の下でまるくなって体操。約半数の隊員が病気なので、体操する隊員はわずかでさびしい。四十五分までに朝食をすませパッキングをすることにし、その間安倍さんは患者の診察。今朝の食事は豊富である。紅茶、ビスケット、トマト、買ってきたばかりのダヒー。これに蜂蜜をたらすとうまい。石井さんにはベビーフードを食べてもらう。熱もなんとか平常に戻る。青木隊長が心配だ。六時半出発する。二本目サコリの街に到着。ここからナグプールまでちょうど百キロとなる。行こうと思えば今日にもナグプール入りは可能だ。三本目ラクハリに九時四十五分到着。おいしいサントラを皆で買って食べる。三こで一ルピー。今日の目的地バンダーラに十一時十分到着。ここは大きな街。村山、正田、片所が偵察に出る。これが最後の偵察になるかもしれない。一時間程待つ。正田が笑顔で戻ってくる。レストハウスもサーキットハウスも予約済みとのこと。ホテルを見つけ出したらしい。正田をトップに移動する。ホテルは繁華街のどまん中にあり、正面にガンディーの白い銅像が立っていた。室割をすませ隊長の室で上層部ミーティング。ここで二日滞在し休養することに決定する。ここまできたらあせる必要はない。

## 三月二十一日　あと一歩

九時隊長の室で全員朝の健康チェック。金森がひどいようだ。青木隊長と向後が下痢、石井さんは待望の堅い便が出たらしく大喜びしていた。午前中一人バザールへ行きブラブラする。サントラが安くてうまい。四つで一ルピー。野羊をぶつ切りにして売っていた。床屋に入り顔を剃ってもらう。四十パイサ。その足で食堂へ入り、サラドーサにチャイを二杯注文する。一・二五ルピー。図書館にも入る。どこへ行ってもガンディーとネルーの写真がかざられている。Father of India とガンディーの写真の下に書かれていた。午後再び国境捜しに出かける。ラジャスタンからきた遊牧民のグループが目についた。男は大きく体もがっしりしている。立派な髭をはやし、するどい顔をしている。彼らは羊を売りに来ているのだ、と砂糖キビジュースをいっしょに飲んだ男が教えてくれた。国旗は手に入らずじまい。帰りにじゃがいもを二キロ買う。ふかして食べたが塩がきいてなんとも言えない。おいしい、おいしいと又買出しに出る。今度は三キロそれに生卵十五個買って帰る。ホテルの従業員に料理してもらう。二ルピーなり。七時半健康チェックをする。太田がナグプールの佐々井さんへ電話を入れる。今日の十一時にボンベイ隊は到着したことが確認された。いよいよ明日あいつらに会えるのだ。



## 3月22日　Bhandara ⟶ Nagpur（60.4km）




### 三月二十二日　ナグプールへ

五時起床。今日もドクターはいつも通り四人の隊員の体調を診断。朝食、朝の体操とこれもいままで通り。六時出発。出発前の健康チェックでは病人が数名。ついに全員OKという日は一日もなく最終日を迎えてしまった。ナグプールまで六十キロの道程。二十km／hで走ればわずかに三本である。ところが写真を撮ったり、休んだり、ゆっくり五本とってナグプールの街に入る。入ったところが峰高と川相がひょっこり顔を出す。まぎれもなく峰高と川相であった。待っていてくれたらしい。突如金森の自転車がパンクする。ボンベイ隊の連中が待っているところまであと五百メートルというところ。すぐに片所が中心になってパンク修理をするが、またパンク。しかたがないのでそのまま走らせる。すでに人だかりの山。もう見なれたものであるが……。その中にちらちらとなつかしい部員の顔を遠くから見つける。トップの村山が日の丸をそしてラストの僕がインドの国旗をなびかせての入場である。山田と堅い握手をかわしこの計画の成功を喜ぶ。佐々井さんもみえる。「成功です。成功です。」としゃがれた声で何度もうなずくのが印象的だった。佐々井さんとはどんな人かと半年も前から送られた手紙を見つつ想像していたが――きさくなお坊さんであった。バンザイ!!

# ボンベイ隊行動記録

山田達男

## 二月二十三日　ボンベイへ

午前七時前、新しい一日の始まりが人々の気配に感じられる頃我々はオールドデリー駅に着いた。いよいよここで東西にカルカッタ隊とボンベイ隊が分れる。約一ケ月後の再会を期し、七時五十八分一足先にボンベイ行の急行がホームを離れた。一等寝台のコンパートメントはかなりゆったりとしており気分が良い。列車は三〜四十分も走るとデリーの都市部を抜け農村地帯に入る。ゴミゴミとした雑踏の中と違ったもう一つのインドの世界が拡がってくる。

ここで各コンパートメントを回って我々ボンベイ隊のメンバーを紹介しよう。一年生は観察力鋭い芥川、ガンバリ屋の輿水、常に話題を提供する佐藤(円)、小柄ながら力強さを感じさせる馬淵、女子は銀縁眼鏡の向うに笑顔の覗く石渡、ガンバリ屋の坂元、黙する中に真の強さを感じさせる矢吹の三人である。二年生はオットリとした中に強い思想を感じさせる川相、体力でバンバン進む峰高の好対照なコンビ、彼らを見守るリーダー陣は、ボンベイ隊隊長土屋さん、副隊長佐藤さん、女子のおもり役平木さん、私の相棒役でいろいろとパーティーをまとめてくれるサブリーダー神保、それにボンベイ隊リーダーの私と、以上十四人の大部隊である。

午後一時前にボーイが運んできた昼食をとり、ひと眠りする。しばらくして目を覚ますと猛烈な暑さである。それに乾燥していて車内が砂ボコリでいっぱいである。車外に目を向けると果てしない砂地が続いている。気候の厳しさを感じさせる風景だ。八時に夕食をとり、十時過ぎにはベットに入る。

## 二月二十四日　挨拶回り

六時にモーニング・ティーが運ばれる。長かった列車の旅もあと一時間程でおしまい。デリーから二十四時間の長い旅路であった。七時四十五分、ボンベイ・セントラル駅に列車が滑り込む。パテル氏の出迎えを受ける。氏とは日本を出発する直前に、トラベル・メイト社の森脇氏に紹介され帝国ホテルで一時間程話をして、いろいろとお世話願うことになっていたのである。パテル氏の車と、タクシーに分乗して宿舎となる日本寺に向かう。午前中は土屋・山田は日本領事館・パテル氏事務所、佐藤・川相は東京銀行・YMCA、神保・峰高は日印協会・YHにそれぞれ

挨拶に回る。日本領事館では堀野領事の大変な歓迎を受け、明日の夜歓迎会を開いていただくことになった。パテル氏には日本寺が宿舎として狭いという気遣いから、氏の持っているマンションの一室を我々に開放していただくことになった。午後日本寺からパテル氏のマンションに移りゆっくりとする。五時頃から三人ずつに分れて夕食をとり、七時にマンションの一番上の階にあるパテルさんのお宅に全員で訪問する。豪華な室内に皆圧倒されながら時の過ぎるのを忘れ長居してしまう。

## 二月二十五日　ジューフー・ビーチへ

六時に起床する。朝食は昨日の夕食と同様に二〜三人ずつに別れてとる。ボンベイの街は比較的きれいで、あまりインドらしさを感じさせない。隊員の食べているものもパン類が中心のようである。九時前からマンションの前で自転車を組み立てる。実行動に入る前に今日は四十〜五十キロメートルの行程で足ならしがてら海水浴に行こうということになったのである。十一時過ぎに出発。途中二〜三度道に迷ったりして一時にはジューフー・ビーチという海水浴場に着く。その向こうにインド洋が果しなく広がっている海岸はあまりにも汚く、水も濁っている。結局泳いだのは土屋さんと一年が二〜三人で、あとの者は昼寝を決め込む。昨日、今日と昼も一時を過ぎると暑さは最高潮となり、頭がガーンとしてくる。三時前に帰途につき、一時間程で到着、六時までフリーにする。

七時過ぎに馬淵を除いた全員が高台にある日本領事館にタクシーで乗りつける。英国風のその建物にいささか場違いの感を受けるのか皆神妙な顔をしている。まず庭に出てビール・ウイスキー・ジュース等で喉を潤し談笑する。その後の食事は日本食で、インド風の食事に悩まされていた我々は、久方ぶりの味に感激する。領事館の方々のもてなしに感謝しつつ十時過ぎに帰途についた。

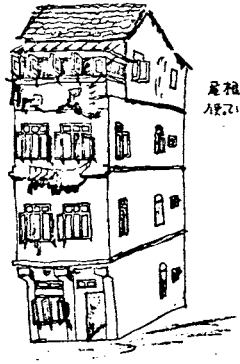
## 二月二十六日　休養

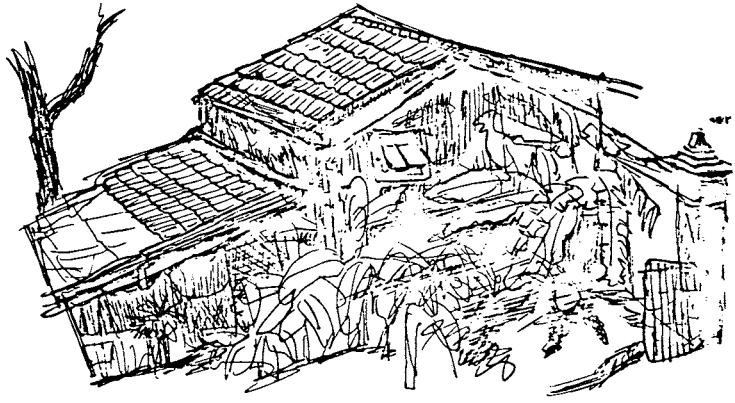
七時に起床。この時期のボンベイは日の出がちょうど七時前で、この時間はまだ肌寒いくらいである。昨日と同じように分散して朝食をとりに行く。

私と佐藤さんを除いた、本隊として出発してきた隊員は、昨日まで一週間の間ほとんど休養なしに行動してきたので、今日は一日休養とする。ただ明日の朝ボンベイの街をスムースに抜けられるよう、神保と川相にルート調査をしてもらい、私と峰高は日本へ電報を打ちに行く。二時過ぎ宿舎に戻ると、神保がマヘッシュさんというインド人のサイクリストを連れてきていた。二時間程、我々

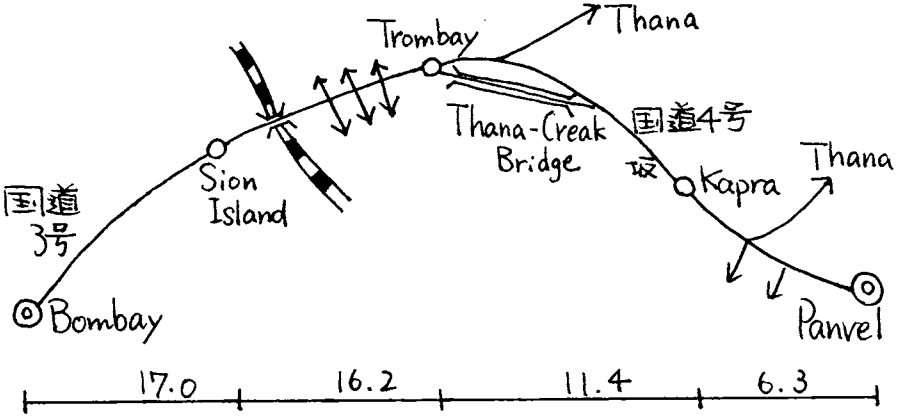
のコースの状況を聞き、これまで途中アジャンタビレッジ〜ジャルガオン〜マルカプール〜カムガオンであったコースを、アジャンタビレッジ〜ブルダナ〜カムガオンとする。ブルダナにはマヘッシュさんの家があり、いろいろとお世話願えることになった。

明日からはいよいよ自転車での行動に入る。七時過ぎパテルさんに挨拶に行く。パテルさんの好意は我々にとってほんとうにありがたいものだった。八時からミーティングを行う。芥川・石渡・坂元・佐藤さん・私が下痢をしている。明日からの行動の抱負を聞くと、皆不安は感じているらしいが、元気な声が返ってくる。九時に就寝にする。



## 2月27日　Bombay → Panvel（50.8km）




### 二月二十七日　バンベルへ

五時起床。昨日買っておいたパン・トマト・バナナ・オレンジを朝食として食べる。自転車でのパーティ行動で、十四人が一つの集団で走るのは危険である。前後二つのパーティにメンバーを分け、前のパーティーを神保、後ろのパーティを私が見るようにして行動する。ボンベイからブーナまでの一ラウンドは、先発パーティ、土屋平木・神保・峰高・芥川・佐藤(巧)・矢吹・後発パーティ佐藤・山田・川相・石渡・坂元・輿水・馬淵とする。先発パーティ六時五十分、後発パーティ七時にそれぞれ出発する。

ボンベイの街は中心部のあたりは道もきれいで、街並みも整然としているが、いわゆる下町に入って行くと道も混雑してきて走りにくい。一時間程で市街地を抜け視界が開ける。バック・ベイ（Back Bay）にかかる長さ二キロメートルぐらいの橋を渡り、ナショナルハイウェイ四号線に入る。時間が十時を過ぎる。十時を過ぎると非常に暑くなってくる。まだあまり暑さに馴れていないせいもあるが頭がボーッとしてくる。最後の一本を暑さに苦しみながらバンベルに十一時三十分に到着。渉外の峰高ら三人に宿を探させる。三十分程でホテルを見つけ、部屋に入る。全員を集め、七時半にミーティン

グをやるが、それまで昼食・夕食の時間も含めてフリーにすること、水作り・自転車の点検はフリーの時間に行うこと、ゆっくり体を休めることの三つを指示して自由時間にする。

食堂はホテルの下にあり都合がよい。ここはホテルと言ってもただうすぎたない部屋にベットが四つ程置いてある程度で、日本で言えば蚕棚の簡易宿泊所のようなものである。外を見ると暑い日差しにかげろうがたっている。気温はたぶん四十度ぐらいになっているであろう。そんな中を佐藤(巧)が一人で石油を買いに行く。日本を出発して今日でちょうど一週間、皆そろそろ疲れが出てきているが、一年の中では彼が一番元気だ。私は昨日からの下痢がひどくなり、昼食・夕食は病人食のビスケットを軽く食べ、半日寝てくらす。芥川は私よりもっと悪く熱を出している。明日熱が下がらない場合は、バスでカンダーラへ行かせることにする。

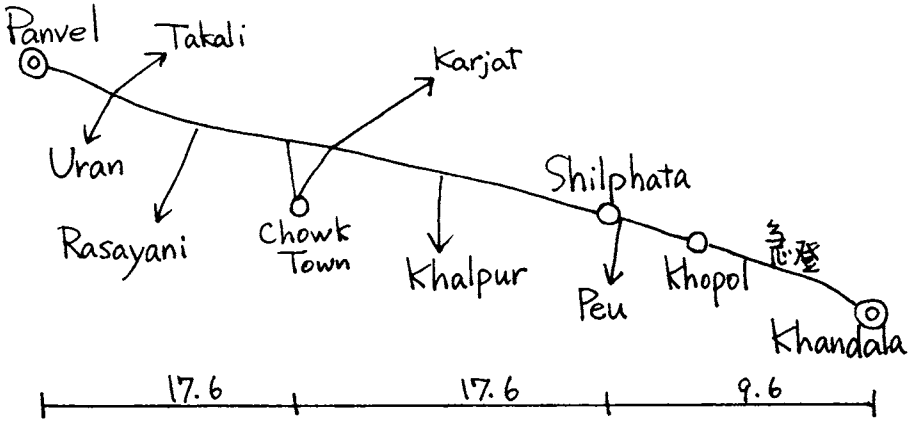
七時半からミーティングを行い、八時半に就寝にする。

## 二月二十八日　カンダーラへ

四時半起床。昨日の反省から出発時間を早め、目的地に早く到着するように予定を組む。まだ外は真暗であるが、六時に先発パーティーが、六時十分に後発パーティーが出発する。芥川は熱が下がらないので佐藤さんに付き添ってもらいバスで行かせる。ライトの明かりだけをたよりに走るので、トラックが通るたびに恐ろしい思いをする。日本の国道と同じように、トラックの深夜便が多いらしく、けっこう交通量がある。一本も走ると夜が明けてくる。インドの農村の光景の中で、朝は一番すばらしい。昼間の閑散とした光景に比べ、なんと言っても活気がある。朝もやのあがっていく中を快適に走る。

八時半にコボリという村に着く。ここで先発・後発両パーティが合流する。ここからはこれまでの道とはうって変って西ガーツ山脈を標高差にして六百メートルを一気に登り、デカン高原に上るわけである。ボンベイ隊のコースの中で最もきつい所だ。九時前に覚悟を決めて走り始める。十分も行くと先発パーティーの矢吹が遅れており、神保と平木さんがいっしょに登っている。峰高以下男子は先に行ったという。そうこうしているうちに、後発パーティーの中でも、石渡・坂元の二人の女子が遅れ始める。川相と一年生の男子を先に一本分だけ行かせ、私は女子といっしょに登る。日本の峠道からは考えられないような急勾配だけに、女子ではちょっと無理かもしれない。とうとう自転車に乗っては登れず、自転車を押しながらトボトボ行く。コボリから標高差にして四百メートル程登

## 2月28日　Panvel ⟶ Khandala　(44.8 km)



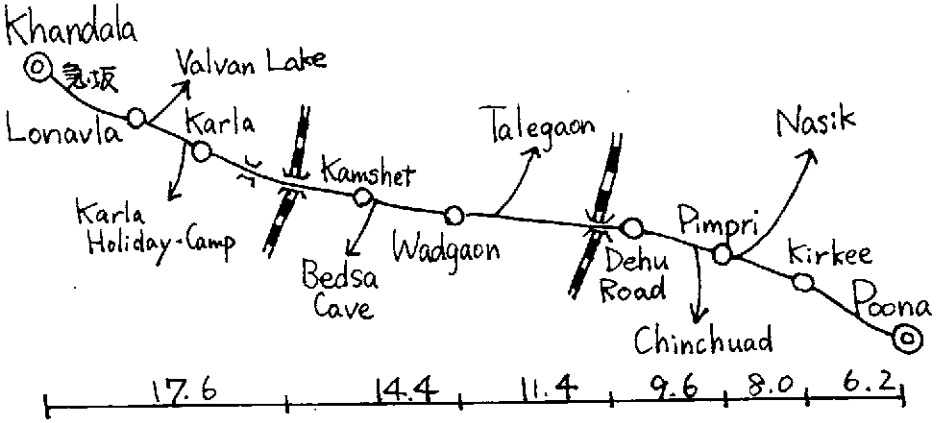

ただろうか、川相・峰高以下男子が休んでいた。土屋さんと佐藤(巧)は先に峠の上まで行ったという。ここでしばらく休んで平木さん・神保・矢吹の来るのを待つ。川相・峰高に下に様子を見に行ってもらう。佐藤さんと芥川を乗せたバスが目の前を通る。皆羨望のまなざしで見る。矢吹はとうとうダウンしたとのこと。しかたがないので車に乗せていってもらう。残りの者は峠の上まで四十分また自転車をこぐ。峠の上の茶屋で土屋さんが待っていた。ここで大休止をとり昼食にする。神保と峰高には、先行してもらい宿の手配を頼む。十二時に出発。四十分程でカンダーラに到着し全員が揃う。神保の努力でゲスト・ハウスが使えるようになり、一時半ゲスト・ハウスに落ち着く。きびしい一日だった。昨日と同様七時までフリーにする。全員昼寝を貪る。土屋さんが日本から持ってきた桜の花の塩づけにお湯をかけた桜湯が好評で、たちまち一びんなくなる。体が疲労していて塩分を要求しているのであろう。

七時半にミーティングを行い、八時に就寝する。

## 三月一日　プーナへ

四時起床。昨日よりまた三十分出発時刻を早くして、先発パーティー五時二十分、後発パーティー五時半に出

## 3月1日　Khandala ⟶ Poona（67.2km）




発。真暗な中を走り出す。芥川は体の調子も良くなり、他の者も全員元気である。平担な道を快調にとばすと言いたいところだが、舗装が悪くなかなか距離が進まない。

単調なデコボコの道に気分を悪くしながら走っていると、突然「バーン」という大きな音がする。全員自転車を止めてみると、佐藤さんの自転車のタイヤが裂けている。装備係の川相と興水が何とか直そうと努力するが結局だめで、タイヤ、チューブとも新しいものに交換する。タイヤのほうはスペアーが一つしかないので、もう一度こんなことが起きたら、自転車が一台使えなくなってしまう。

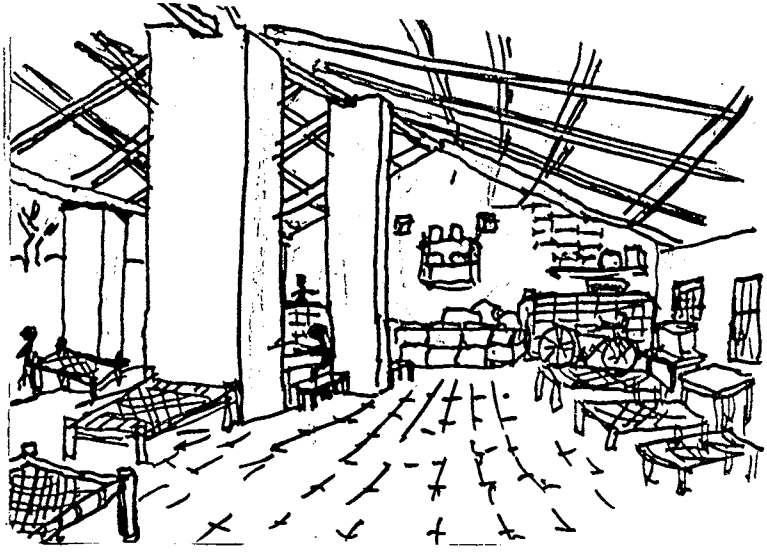
十一時二十分にプーナのＹＭＣＡに到着する。プーナでの宿舎はＹＭＣＡに頼んである。まず昼食を食べてから、宿舎となるサンガム・ホステルに向かうことにする。プーナは人口八十万のインド中部の中都市であり、観光客も比較的たくさん来るところである。昼食は駅の近くの中華料理屋でとる。インド風でない味に一同ホッとした笑顔がこぼれる。皆あまり口には出さないが、インド料理のカレー味にはいささか閉口しているようだ。昼食後、市内の北部にある宿舎に向かう。今日で一ラウンドを終了、明日は停滞日である。まず自転車の整備をさせて、夕食までフリーにする。夕方、ＹＭＣＡの方々の訪問を

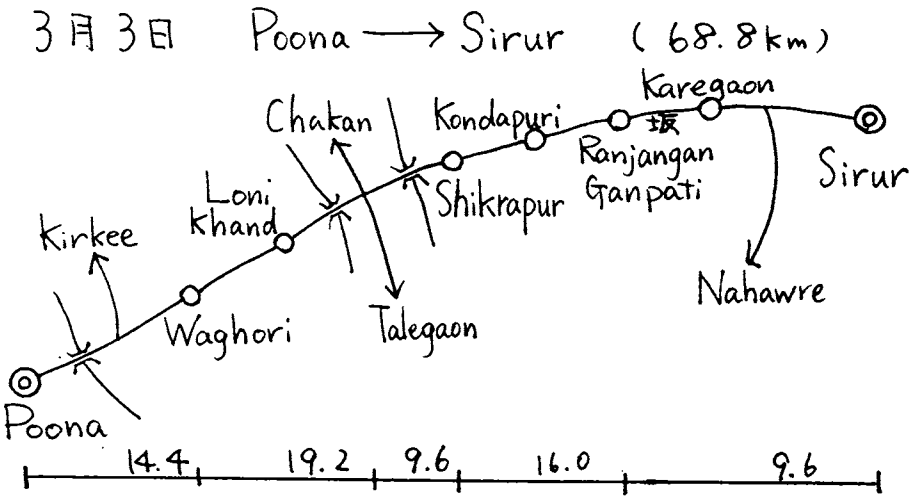
受ける。二〜三十分話をして、明日の午後、市内観光のバスを仕立ててくれることになる。七時半に宿舎内で夕食をとって、九時から一ラウンドの反省を行なう。初めての海外での自転車旅行ということではあるが、行動自体はけっこうスムースにいったように思う。ただ生活面でそろそろインドのペースに馴れてきたので、気のゆるみがみられるようになってきた。二ラウンドはその辺りが、もっと出てくるであろう。うまく気を締めていかなくてはいけない。就寝はフリーにするが、皆けっこう早く寝る。YMCAで、カルカッタ隊からの電報を受けとる。元気にカルカッタでやっているようだ。

## 三月二日　停滞日

八時半から朝食なので、八時に全員起床する。午前中は全員で出発前にお世話になった人達やOBの方々に絵葉書を書く。峰高と私は、日本とナグプールの佐々井さんに電報を出しに行く。十二時半に宿舎で昼食をとって、一時半から市内観光にまわる。市内の名所・旧跡をまわるが、あまりたいしたものはなく、暑さにまいってただ疲労感だけが残る。六時に宿舎にもどる。

七時半に夕食をとって、九時に就寝する。






## 三月三日　シルールへ

四時起床。特別に四時半に朝食を作ってもらい、先発パーティー五時二十分、後発パーティー五時半に出発する。今日から先発パーティー、佐藤・神保・峰高・佐藤(巧)・馬淵・坂元・矢吹・後発パーティー、土屋・平木・山田・川相・芥川・輿水・石渡と、メンバーを入れ替える。うまい食事も、寝ごこちよいベットも、しばらくはお別れである。

二ラウンドは、アーメダナガールを経てオーランガバードまでであるが、この道は一ラウンドのナショナルハイウェイ四号線とは違い、日本風に考えれば二〜三級国道といったようなものである。したがって道幅も狭いし、舗装もあまり良くない。ただ一つの利点は、交通量が減ることである。ブーナの市街地を抜け、北東に向う。ブーナまでとはまわりの風景が変わっているのに気がつく。テーブル・マウンテンがやたらと目につき、視界がぐっと広がる。乾燥地帯、デカン高原に入ってきたのだ。

途中の部落で大休止してゆっくりとチャイを飲む。この辺りの村はのどかな木立の中にある。静かなよい雰囲気だ。日本の農村とは違った良さがある。

十一時半にシルールに到着。シルールの町は予想していたよりも大きく、高校や診療所もある。町の中に入

って一軒の茶店の前で止まると、百人はいるだろうか、ものすごい人垣に囲まれる。神保と峰高は町はずれにあるゲスト・ハウスに宿の交渉に行くが、州政府の役人が来るとかで断わられる。この町にはホテルもないのでどうしようかと迷っていると、英語の話せる牧師さんがやって来て教会を使わせてくれるという。非常に助かる。昼食をとってから町の東側にある教会に入る。あまりきれいではないが、文句も言ってられない。今日は四時までフリーにして、夕食は日本から持ってきた予備食を食べることにする。教会の前に子供達が集ってきた。私たちは町の人気者になってしまったようだ。土屋さんと佐藤さんはインドの教育事情の視察とかいって町の学校へ出かけていく。土屋さんは日本では中学校の先生をしているので、体育の授業に参加して一席ぶってきたそうだ。一年生は、子供達からマラティー語を勉強している。しかしちょっとした気のゆるみから、矢吹のタバコが盗まれてしまった。私たちの荷物が置いてある教会の中まで子供達を入れてしまったのが失敗であった。もっと注意しなければいけなかったようだ。

四時に食当を開始する。予備食は全部で四種類、六食分を持ってきたが、そのうち今日はアルファ米にボンカレーを食う。五時過ぎに夕食をとる。ボンカレーもインドまで来て食べるとこのうえなく美味に感じる。

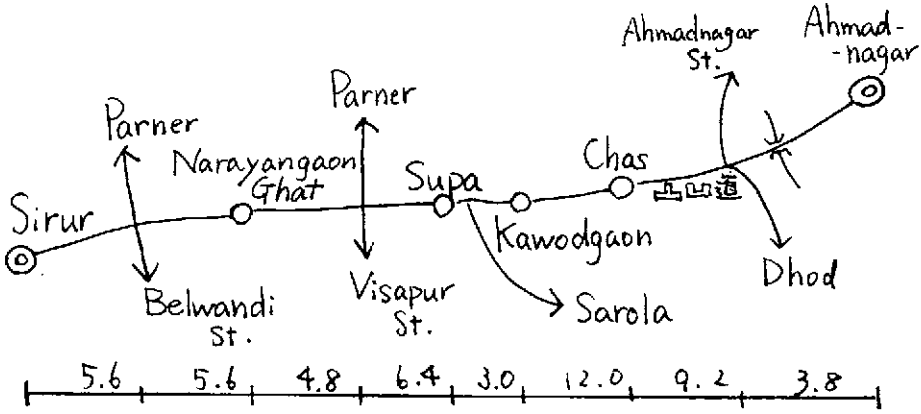
八時にミーティングを行ない、九時に就寝する。

## 三月四日　アーメダナガールへ

五時起床。いつものように前日のうちに買っておいたパン・バナナ・オレンジなどを朝食にして、先発パーティーは六時二十分に、後発パーティーは六時半に出発する。

今日の行程は短く、五十キロメートル程なのでゆっくりと走る。九時五十分にアーメダナガールに到着する。一軒の茶店の前で、全員自転車を止めてチャイを飲んでいると、昨日と同様に人垣に囲まれる。神保と峰高が宿泊場所に、市内にあるアーメダナガール・カレッジの寮が使えるよう交渉してくる。十時半に寮に入る。二人に一部屋空部屋を使わせてくれる。昨日のことがあるので部室にはインド人達を入れないように注意して、夜七時まで夕食時間を含めてフリーにする。神保と私は寮を管理している大学の事務員の人といっしょに、大学の食堂で昼食をとり、大学構内を案内してもらう。午後になって宿舎に戻る。皆洗たくをしたり、日記をつけたり、手紙を書いたりしている。合宿も中盤戦に入って、そろそろ疲れがでてくる頃だ。私もデリーに居る時にお世話にな

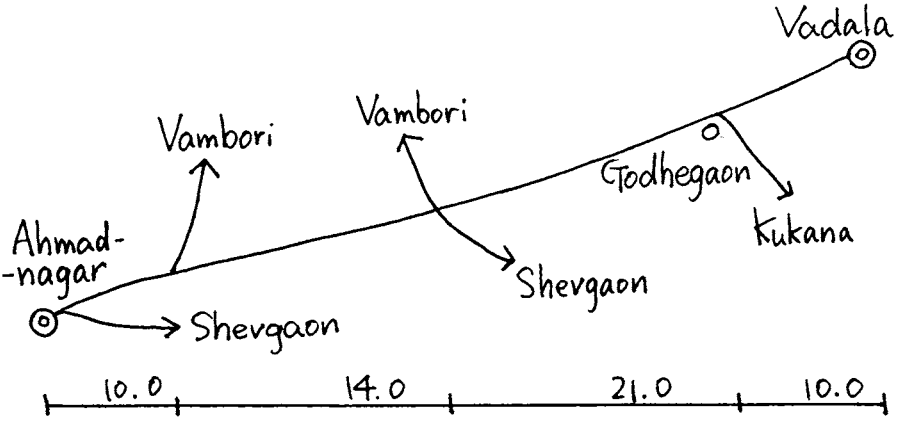
## 3月4日　Sirur ⟶ Ahmadnagar (50.4km)




ったユースホステル協会のバドキ氏に英語で悪戦苦闘しながら手紙を書き、大学の構内を散歩する。今日は行動時間が短かかったので、ゆっくりと時間を過すことができる。

七時から土屋さん・佐藤さん・平木さん・神保・私で明日の予定について話す。計画ではシェブガオンを経てオーランガバードに行く予定であったが、バダラという所を経てオーランガバードに行くルートのほうが距離的にだいぶ近くなるのでバダラ経由にする。七時半から全員でミーティングを行ない、予定の変更を伝え、九時半に就寝する。

3月5日　Ahmadnagar → Vadala (155.0 km)




## 三月五日　バダラへ

五時半起床。先発パーティー六時四十五分、後発パーティー六時五十五分に出発する。人口三十万のアーメダナガール市街を抜け二本分なだらかな登りの道を行くと、突然前の視界が開ける。広大な景色が我々の目を奪う。薄茶色の大地が地平線まで続いている。しばらくの間うっとりと眺めて、快適な下りの道を気分よくとばす。

九時半にバダラに到着する。神保・峰高も実行動に入ってから毎日宿泊場所の交渉をやってもらっているのでスムースに行く。今日は村の西側にあるゲスト・ハウスに泊れることになった。

ゲスト・ハウスとは州政府の役人などが巡回旅行の折に泊る施設で、一般の旅行者も州政府の許可があれば泊れるということであったが、我々はその場で交渉して泊めてもらった。施設は、だいたい一棟で二ブロックに分れており、一ブロックには部屋が二部屋とトイレ、二〜三個のベット、ソファー、テーブルなどが置いてある。料金は一ブロックだいたい十五ルピー（四百五十円）くらいであった。

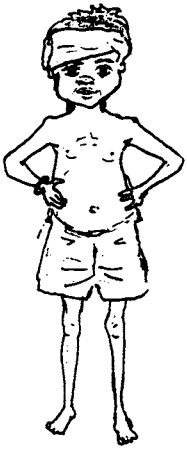
四時までフリーにして、夕食は予備食を食うことにする。バダラの村はこれまでの宿泊地の中で一番小さな村であろう。村の真中にバス停があり、そのまわりに茶店

が三〜四軒あるだけで雑貨品を置いているような店は見あたらない。バスはブーナとオーランガバードの間を一時間おきに走っているという。

昼過ぎから非常に暑くなる。日本から持ってきた温度計で計ってみると室内でも三十七度ある。外では軽く四十度を越えているだろう。事実、十分も外に居ると頭が痛くなってくる。こんな時は昼寝をするに限る。

四時から食当を始める。今日のメニューは野菜ラーメン。日本から持ってきたインスタントラーメンに、玉ネギ・ニンジンなどを入れる。五時過ぎに夕食とする。日本茶を飲んでホッと一息つく。夕食後、外も涼しくなったので、散歩に出かける。村のはずれにハリジャン（不可触賤民）の住むワラで作った小さな小屋掛けがある。カースト制は複雑だと言われるが、特にハリジャンの生活は貧しい。

七時半からミーティングをして、八時半に就寝する。



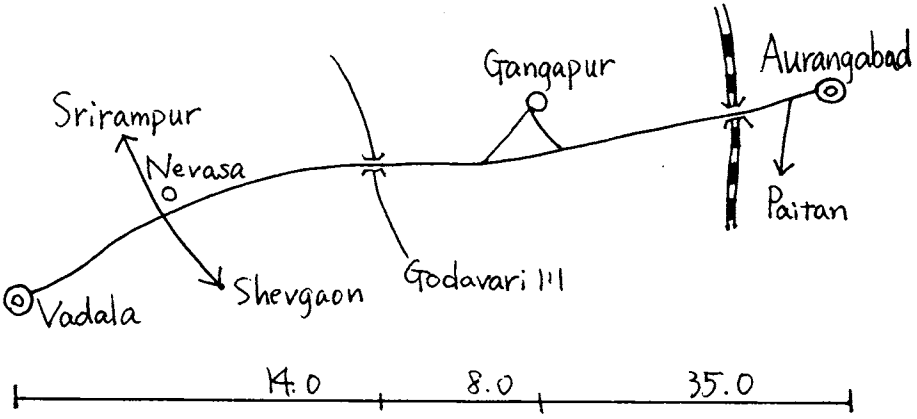
## 三月六日　オーランガバードへ

四時半起床。先発パーティー五時四十分、後発パーティー五時五十分に出発する。今日で二ラウンドも終わり、合宿も折り返し点に着くことになる。走り出してすぐに石渡の自転車のキャリアが壊れる。針金で補強してすぐに出発する。

七時に地平線から太陽が昇る。広大なインドの地ならではの日の出だ。すばらしい朝の景色の中を快適に走る。出発して二〜三時間はそれほど暑くないので、すがすがしい気分で快適に走ることができるが、十時を過ぎるとかなり暑くなってくる。今日もオーランガバードまであと一本という辺りから、急に暑くなってきて自転車をこぐのが嫌になる。

十一時前にオーランガバード市内にあるユースホステルに到着する。全員まず食堂に入って、ビン詰めのジュースで乾杯、前半戦御苦労さん。明日から九日まで停滞となり、このユースホステルでお世話になる。土屋さんと相談して三日間の予定を決める。明日は石窟寺院のエローラ・ケーブと市内の名所を観光バスに乗って回り、明後日はユースホステルの人の紹介でマラトワダ大学へ行き、午後現地の新聞社

3月6日　Vadala → Aurangabad (57.0 km)




の人と会う。九日は昼間はずっとフリーにして休養、夜ユースホステルのメンバーの家へ二〜三人ずつ夕食に呼ばれることになる。

一時に全員で昼食をとったあと、六時までフリーにして、夕食は近くのホテルのレストランで全員一緒にとる。久方ぶりのアルコールに酔いがまわるのも早い。

十時に就寝する。

## 三月七日　市内観光

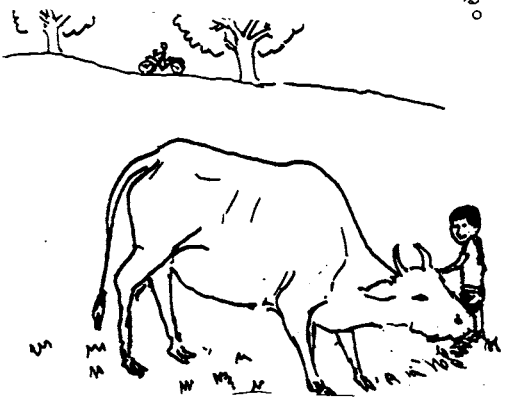
七時半に起床する。昨夜は蚊の猛襲にあって、時間的にはかなり寝たはずだが疲れがあまりとれていない。八時に朝食をとって、九時ユースホステル前に来た観光バスに乗ってエローラ・ケーブと、市内の名所をまわる。しかし皆疲れているせいか、あまり名所・旧跡に関心を示さず、かえってグッタリとする。

五時半にユースホステルに戻り、ユースホステル内の食堂で夕食をとって早めに寝る。

## 三月八日　停滞日

七時半起床、八時に朝食。午前中は、峰高と私は日本の本部とナグプールの佐々井さんに連絡をとりに行く。他の者はマラトワダ大学へ行く。二時に昼食をとって、三時から地元の新聞記者の人達と会う。ざっと我々の計画を話し、質問を受ける。十日の朝刊に載るということだ。七時に夕食をとって、七時半からユースホステルのメンバーと交換会をする。二〜三曲歌を交換して談笑する。明日は今日集まったメンバーの家に夕食に呼ばれる。

十時に就寝する。



## 三月九日　停滞日

七時半起床、八時に朝食。九時から自転車の整備を行なう。前半戦も終わり自転車もかなりガタがきている。ていねいに点検させる。自転車の整備終了後から五時までフリーにする。考えてみればまる一日フリーになったのはボンベイ以来である。

最近隊員の間で買い物がはやっている。インド風のシャツやインド人がよく被っている帽子（ガンディー・トピー）を買ってきては自慢しあっている。私は今日一日ゆっくりと本を読んだり日記をつけたりしながら過す。このところ、前半戦元気だった者が調子が悪いということが多い。あと十日間なんとかスムーズに行ってほしい。その意味で今日一日の休養は大変有効だった。

夕方五時から上級生でミーティングを行ない、五時半から全員でミーティングを行なう。インドに馴れてきて気のゆるみが出てきたという意見が多く出る。三ラウンドは気を締めて行こう。

夕食は二人ずつ別れて、昨日会ったユースホステルのメンバーの家で御馳走になる。なかなか楽しい夜だった。

十時に就寝する。

सायकलवरून भारताच्या दौऱ्यावर निघालेल्या जपानी तरुणांचे पथक औरंगाबादला आल्यावर त्यांचे यूथ होस्टेलपाशी घेतलेले छायाचित्र.

# जपानी विद्यार्थी-विद्यार्थिनींचा भारतात सायकल प्रवास

औरंगाबाद येथे आलेल्या या तुकडीत चार विद्यार्थिनींचाही समावेश आहे.

वासेडा विद्यापीठातील या क्लबतर्फे मोठ्या सुटीच्या काळात विद्यार्थ्यांच्या तुकड्या इतर देशांत भ्रमण करतात त्या देशाचा थोडाफार जवळून परिचय व्हावा म्हणून हे जपानी विद्यार्थी सायकलवरून प्रवास करीत आहेत.

हे विद्यार्थी विमानाने भारतात आले. त्यांच्यापैकी एक तुकडी कलकत्ता येथे ऐली तर दुसरी मुंबईला आली. या दोन्ही तुकड्यांनी सायकलीवरून नागपूरपर्यंत जाण्याचे ठरविले असून त्या दोन्ही तुकड्या नागपूरला एकत्र येतील तेथून मग ही सारी मंडळी आग्रा मार्गे दिल्लीला जातील व दिल्लीहून विमानाने टोकियोला रवाना होतील.

औरंगाबादेत असलेली तुकडी २७ फेब्रुवारीला मुंबईहून निघाली पनवेल, खंडाळा, पुणे, शिरूर, नगर, वडाळा

औरंगाबाद, दि. ९ – जपानमधल्या वासेडा विद्यापीठातील वेंडर व्होगल क्लबतर्फे भारताच्या काही भागांचा सायकलवरून प्रवास करणारे जपानी विद्यार्थी गेले तीन दिवस औरंगाबाद येथील यूथ होस्टेलमध्ये मुक्कामाला असून ही तुकडी उद्या सिल्लोडमार्गे नागपूरकडे रवाना होईल.

येथे मुक्काम करीत ही तुकडी ६ मार्चला औरंगाबादेत आली. आता सिल्लोड, अजिंठा, इलढाणा, खामगाव, अकोला, कारंजा, यवतमाळ, वर्धा येथे मुक्काम करीत ही तुकडी २० मार्चला नागपूरला पोहोचेल.

काल 'यूथ होस्टेल' येथे पत्रकारांशी बातचित करताना या तुकडीची सल्लागार हिराकी युमिको (२२) हिने सांगितले की, या एकूण सफरीसाठी आम्हांला प्रत्येकी दहा हजार रुपये खर्च येईल. यापैकी ९ हजार रुपये आम्ही वैयक्तिक पैशातून खर्च करणार आहोत. हजार रुपये आम्हांला क्लबतर्फे मिळतील.

ही सफर बरोबर खर्चाची आहे. तेव्हा तुम्ही सारे कसे [illegible] घरांतील अडचणी अशी शंका एका पत्रकाराने व्यक्त केली असता हिराकी युमिको म्हणाली, नाही, आम्ही सारे मध्यम वर्गांतील आहोत फेब्रुवारी व मार्च हे महिने विद्यापीठाच्या सुटीचे असतात, असे सांगून ती म्हणाली की, तुमच्या येथील अन्न खूप तिखट व तेलकट असते.

या सफरीसाठी ज्या सायकली ही सारी मंडळी वापरताहेत त्या अवघ्या ५–७ मिनिटांत निरनिराळ्या सुटया भागात अलग करून पाठ शोही बांधता येतात.

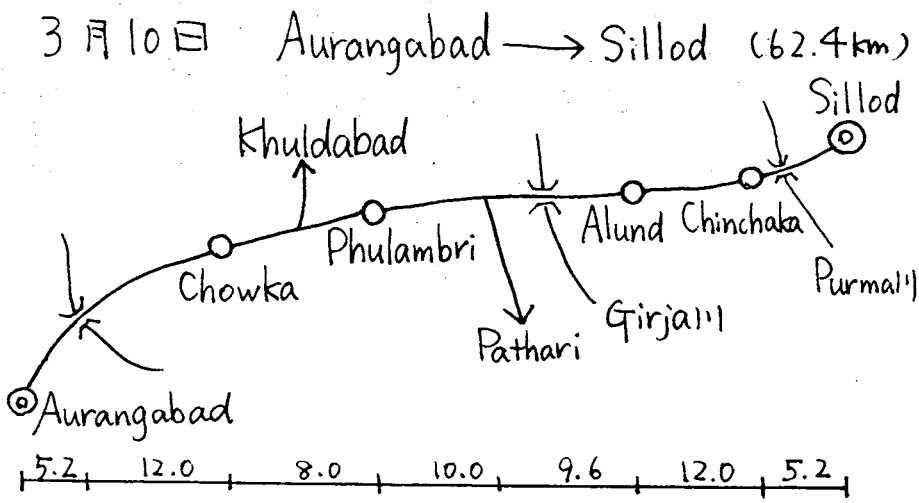
शिरूरला आम्ही कबड्डी व खो खो हे भारतीय खेळ पाहिले. आम्हांला ते खूपच आवडले. जपानला परत गेल्यावर आम्ही तेथील मुलांना शिकविणार आ

या पत्रकार परिषदेच्या यूथ होस्टेलचे कर्नल मोडक उपस्थित होते.

# सर्वोत्कृष्ट प्रकाशित

पुणे, दि ९ – १९७३ या तील सर्वश्रेष्ठ लघुकथेसाठी हजार रुपयांचे कै. [illegible] तोषिक लवकरच जाहीर ह असून त्याकरिता विचारात घे जाणाऱ्या २३ कथांचा संग्रह नुकताच प्रकाशित करण्यात आ

यापैकी १० कथा पुरुष कांच्या असून १३ कथा स्त्री ले कांच्या आहेत. कथाकारांपैकी मुंबईतील, ९ पुण्यातील व बा वाई, खिंडी व वळणगाव ये आहेत. मराठवाड्यातील को




## 三月十日　シロッドへ

五時起床。五時半に特別に朝食を作ってもらい、六時半に出発しようとするが、雷を伴って雨が降り始める。インドに来て以来、本格的な雨になったのは初めてだ。出鼻をくじかれた感じで、三十分程待つ。七時を過ぎると雨も小降りになってきたので、先発パーティは出発する。後発パーティーは出発直前に輿水の自転車のタイヤがパンク、修理に手間どり七時四十分に出発する。

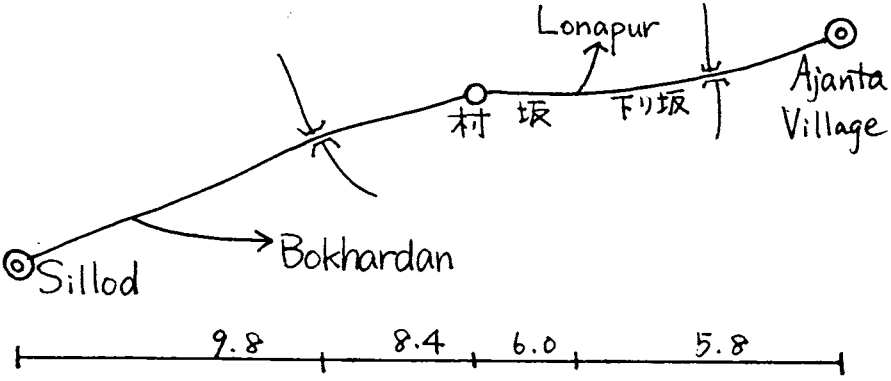
今日から三ラウンド、コースはアジャンタ・ブルダナを経由してアコーラまである。コースを変更したのでブルダナで停滞が一日入る。三ラウンドのパーティー編成は、先発パーティー、土屋・神保・川相・芥川・馬淵・石渡・矢吹、後発パーティー、佐藤・平木・山田・峰高・輿水・佐藤(巧)・坂元である。

オーランガバードの市街地を抜け、ゆるやかな登り道を登り切ると、下りが続く。快調にとばし、一本で二十五キロメートル近く進む。三本目で先発パーティに追いつく。石渡の自転車のドロよけのネジが飛んでしまったらしい。新しいネジをつける。平木さんが先発パーティーに入って、先発パーティーは先に出発する。石渡の自転車が直ると、峰高の自転車の調子がおかしくなる。ここで結局一時間近くロスする。

十二時シロッドに到着する。神保と川相が宿泊場所にゲストハウスを使えるよう交渉してくる。また自転車のまわりに人垣ができる。今朝の新聞で我々の記事が載ったのでなおさらだ。一人一人新聞に載っている写真と顔を見比べている。ゲスト・ハウスに入り、七時までフリーにする。この村はけっこう大きく、小さい城まである。買い物をしたり、子供達と遊んだりして時間を過す。神保は学校で授業をしてきたらしい。

七時半にミーティングをして九時に就寝する。外ではまた雷雨になっている。

## 3月11日　Sillod → Ajanta　(30.0km)




**三月十一日**　アジャンタ村へ、アジャンタ・ケーブ見学

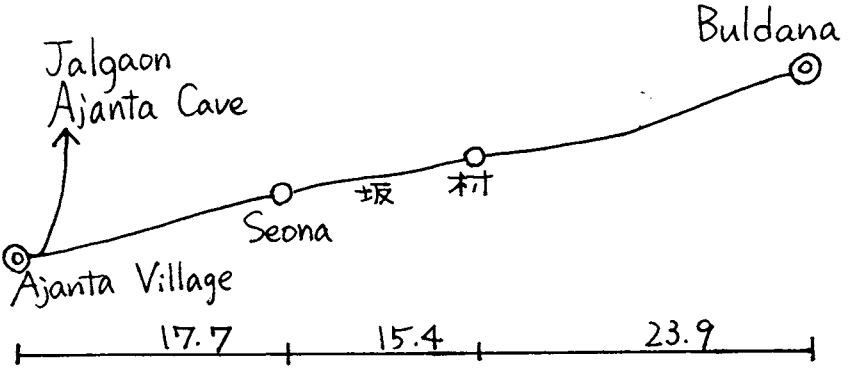
五時起床。先発パーティー六時十分、後発パーティー六時二十分に出発。今日の行程は三十キロメートルと短い。アジャンタ村に着いてから、仏教遺跡であるアジャンタ・ケーブを見学に行く予定である。

八時半に城壁に囲まれたアジャンタ村に着く。この村では、ボンベイで会ったマヘッシュさんの紹介で、小学校に泊めてもらえることになっている。まず校長先生のお宅でチャイを御馳走になり小学校へ行く。一段落してから十時のバスでアジャンタ・ケーブに向かう。二時まで時間を切って自由にまわらせる。エローラ・ケーブの時は多少疲れがあったのかもしれないが、比べてみるとアジャンタ・ケーブの方がすばらしい気がする。美しい壁画に見とれながらゆっくりとまわる。四時のバスでアジャンタ村に戻る。

小学校に帰ってみると、ブルダナのマヘッシュさんが子供達六人を連れて自転車で迎えに来てくれていた。再会を喜ぶ。今夜の夕食は日本から持ってきた予備食を二食分出して全員でいっしょに食べる。子供達はボンカレーの味に異様な顔をしていた。

夕食後六時半から小学校の先生のお宅でチャイを御馳走になり、七時半にミーティング、九時に就寝した。

## 3月12日　Ajanta → Buldana (57.0km)




### 三月十二日　ブルダナへ

五時起床、五時半朝食。インド人は朝食をしっかりと食べる習慣がないらしく、マヘッシュさんや子供達はあまり食べない。先発パーティー六時十分、後発パーティー六時二十分に出発する。ブルダナへの道は、前半はジャリ道の山道である。インドに来て初めてのジャリ道に四苦八苦しながら進む。八時半に途中にあるヒンドゥー教の寺院で大休止する。このヒンドゥーの寺院は、デカン高原の北側の端にあるという感じで、ここから北側を眺めると五百メートルぐらいの標高差があって、下のほうに大平原が広がっている。日本人にはちょっと想像もできない景色だ。

この寺院を過ぎると道がきれいに舗装されて走りやすくなり快適にとばす。十一時半ブルダナのマヘッシュさんの事務所のあるYLRCカレッジのキャンパスに着く。マヘッシュさんと今後の予定を話し合う。宿泊場所は今日は上級生と一年が二人ずつ分れて、それぞれマヘッシュさんの知り合いの家で泊り、明日は学校の教室を使わせてもらうことにする。今日の予定は、まず今日泊る家へ行き昼食をとって、三時にまたこのキャンパスに戻る。代表者三名が地元のラジオ放送局のインタビューを受け、残りの者はバザールに出かける。その後学校のバスで遠

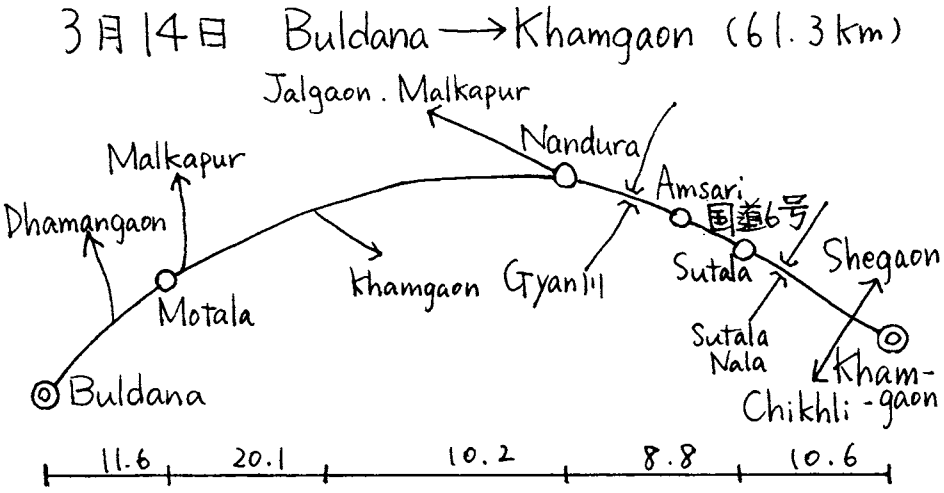
足に行くというものである。

私は石渡とともに今日いっしょに行動したサバルカール君の家で昼食をとる。少し休んで三時からマヘッシュさんとともに、平木・芥川・私の三人でインタビューを受け、四時から、マヘッシュさんと親しい子供達・学校の先生といっしょに総勢三十人程で学校のバスを使って五十キロ程離れた村まで遠足に行く。このバスは大変なオンボロバスで、行きは急な下り道を快調に下って行ったが、帰りはその道を登り切れず途中でエンコする。時間はもう九時前だ。真暗な中をブルダナまで二キロメートル程の道を歩く。しかし皆、不平も言わずかえって楽しげに歩いて行く。隊員達もそのうち調子に乗って、紺碧の空や校歌を歌い出す。なかなか楽しい遠足だった。

## 三月十三日　停滞日

七時半起床。九時にYLRCカレッジのキャンパスに集まる。話を聞くと皆大歓迎にあっているそうだ。今日はまずサトウキビ畑を見学に行き、昼前に学校内の授業風景を見学する。昼食をそれぞれ昨日泊った家でとって、四時に荷物を持って集まることにする。私はマヘッシュさんといっしょに昼食をとる。彼はブルダナで社会福祉の活動をやっている、ソーシャル・ワーカーだと言う。彼のおかげで昨日・今日と大変楽しい時間が過せたし、インドの家庭生活を見ることもできた。

昼食後、二時間程昼寝をしてゆっくりと体を休ませる。四時に全員荷物持って集合、また地元の新聞のインタビューを受け、その後、小・中学生が演じてくれるマラティーダンス（マハラシュトラ州に伝わる舞踊）を見る。夕食をまたそれぞれ分れて御馳走してもらい、十時に就寝する。




## 三月十四日　カムガオンへ

五時半起床。マヘッシュさん・子供達・学校の先生と別れを惜しんで、先発パーティー六時五十分、後発パーティー七時に出発する。一昨日バスで通った急な下り道を快適にとばして、標高差五百メートルを一気に下る。

十時にナンドゥーラに着く。ここからナショナルハイウェイ六号線に入る。ボンベイ以来初めて「ナグプールまで〇〇キロメートル」という道案内を見て、一同感激する。この合宿もいよいよ終盤戦に入ったという実感を持つ。

カムガオンに十一時半に着く。マヘッシュさんの紹介で、医科専門学校に泊れるようになっている。到着後すぐに学校の先生に連れられて昼食を食べに行き、その後はフリー。ちょっと買い物をして宿舎に戻る。平木さんがインド服の上下（クルタとピジャマ）を着て男子隊員の目を悩ませる。ブルダナで受けたラジオインタビューの放送が五時からある。ラジオを借りて聞くが、自分の話しているつたない英語を聞いて自己嫌悪を感じる。

六時から学校の歓迎会を受け、七時に夕食をとりに行く。学校で車を用意してくれたのだが、それがなんと救急車で、一台に十四人全員が押し込まれる。救急車のまわりには五十人ぐらいの人だかりができ握手ぜめにあい

しまいには石まで投げつけられる。まるで売っ子スターか気違いにでもなったような気分だ。

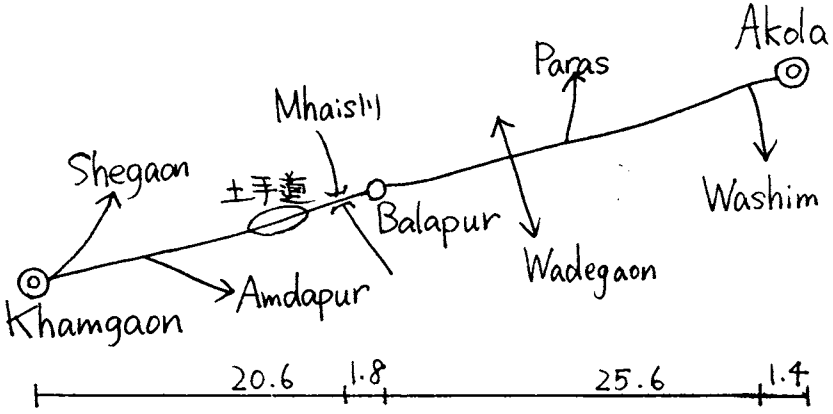
異様な気分のまま、夕食をとり学校に戻る。このところの歓迎ぜめで、皆少し疲れ気味である。九時に就寝する。

## 三月十五日　アコーラへ

五時半起床。学校の先生に挨拶をして、先発パーティー六時四十分、後発パーティー六時四十五分に出発する。カムガオン市内を真直ぐ抜け、朝の光の中を快調に走って行く。三十分程行くと先発パーティが戻ってくるのに出会う。道を間違えたとのことだ。地図が確認してみると確かに方向が違う。来た道をまた戻ることになる。これで約一時間ロスした。市内まで戻り分岐を反対側に行ってしばらく走ると、アコーラ・ナグプールという道案内が出て来た。インドの道路案内は時に不親切なことがある。

アコーラに入る手前で、ロータリークラブの人の出迎えを受ける。マヘッシュさんを通じてアコーラでの宿泊を頼んでいたのだ。十一時半にアコーラに到着する。マヘッシュさんがブルダナからオートバイでやって来た。アコーラでの手配に手違いがないようにと心配して来てくれたのだ。ロータリークラブの代表の人とマヘッシュさんと協議する。最初はブルダナでのように分宿してくれと言われたが、隊員が疲れているので断わる。またその他にもいろいろとスケジュールを組んでいてくれたが、ロータリークラブの歓迎会を除いて全て断わることにした。ともかく宿泊場所が見つかるまでロータリークラブのメ

## 3月15日　Khamgaon → Akola (49.4km)




ンバーの家に二人ずつ分れて昼食をとって休んでいてくれと言うので、二人ずつ分れる。メンバーの家へ行き、シャワーを浴びて昼食を御馳走になり、ロータリークラブの代表と電話で宿泊の件について話をする。すると、今日はこのまま泊ってくれと言う。先刻の話と違うので抗議すると、どうしようもないと言われる。隊員の疲れが激しいので分宿するのは心配である。一方的な電話に頭に来て、しばらく不貞寝をきめこむ。四時頃ロータリークラブの代表から電話があり、全員市内の美術学校に一緒に泊れることになる。先刻の電話で腹を立てたことを恥じ感謝する。五時に全員美術学校に集まる。

今日で三ラウンドは終った。これまでボンベイ隊の隊長として働いて下さった土屋さんが、仕事の関係で四ラウンドは参加せずに明後日日本に帰られる。夕食は近くのレストランで、土屋さんへの感謝会をする。ビールを飲みながら、これまでのコースの思い出話に花が咲く。土屋さん本当に有難うございました。

就寝をフリーにするが十一時過ぎには皆寝てしまう。

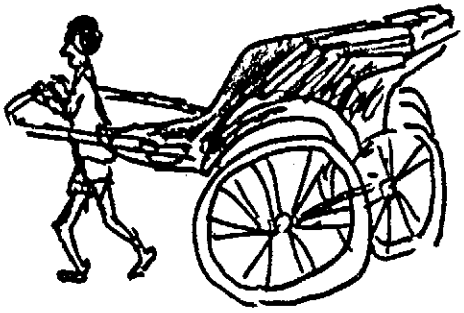
## 三月十六日　停滞日

八時起床、今日は夕方五時までフリーにする。皆自転車の整備をしたり、買い物に行ったりしている。私は昨夜から激しい下痢と腹痛に苦しめられる。疲れがでてきた上に、昨夜のビールがきいたらしい。昼食もあまりとらずただひたすら休む。他の者の健康状態はまあまあのようだ。考えてみれば土屋さんは一度も下痢に苦しめられずに日本に帰るのだから大したものだ。メンバーのほとんどが、一～二回は苦しめられている。

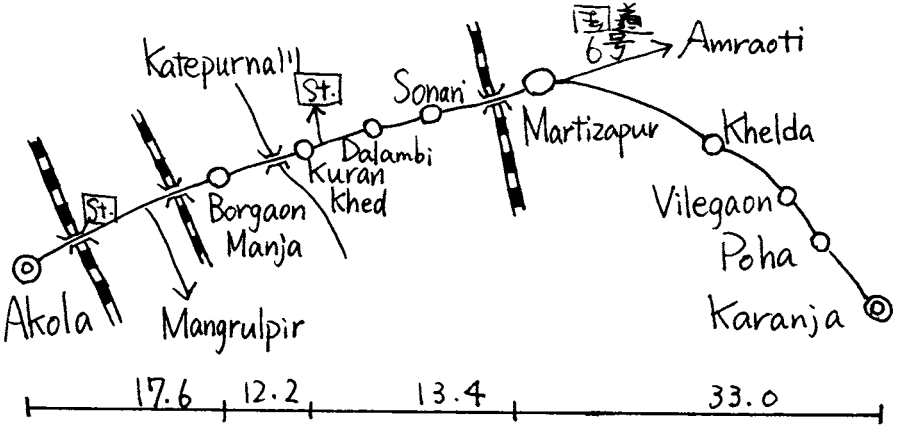
五時から上級生でミーティングを行ない、五時半から全員でミーティングを行なう。ブルダナでの印象がよかったこと、四ラウンドは最後なので心おきなくやるなどの意見が出る。七時半から九時までロータリークラブの歓迎会に出席した後、十時に就寝する。

## 三月十七日　カーランジャへ

五時半起床。帰国の途につく土屋さんの見送りを受けて先発パーティー七時、後発パーティー七時十分に出発する。いよいよ今日から最終コースの四ラウンドだ。泣いても笑ってもこれで最後なんだから、しっかりやっていきたい。パーティ編成は、先発パーティー、平木・神保川相・佐藤(巧)・馬淵・矢吹、後発パーティー、佐藤・山田・峰高・芥川・輿水・石渡・坂元である。四ラウンドのコースは、ナショナルハイウェイ六号線を離れ、カーランジャ、ワルダを経てナグプールに至るものであ



## 3月17日　Akola → Karanja（76.2km）



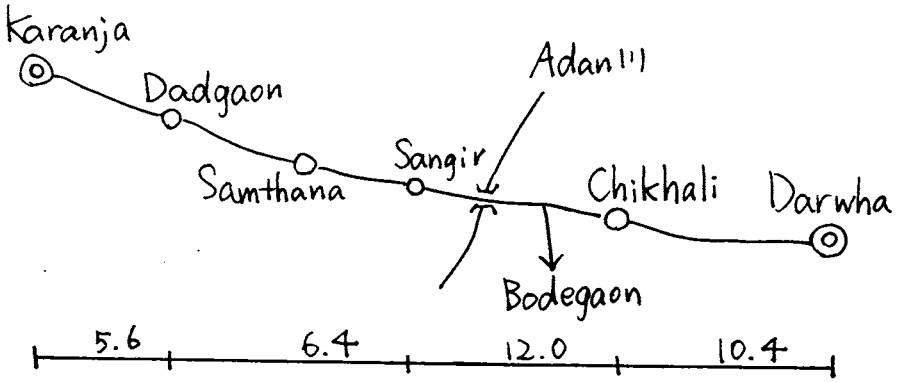

る。

出発して一時間半でマルティザプールに着く。ここからナショナルハイウェイ六号線を離れて、道幅の狭い地方道を行く。もう三月も中旬なので、十時を過ぎると暑くてたまらなくなってくる。時間が過ぎる割に距離が進まない。十一時半、やっとの思いでカーランジャに着く。神保と川相が宿を探すがなかなか見つからず苦労する。一時にようやくホテルに入る。しかしホテルと言っても一部屋にベットが十三個ギッシリと詰っていて、トイレも外に借りに行くような所である。

七時までフリーにする。皆疲れているのかあまり外に出ないで昼寝をしている。佐藤さん、平木さん、神保と相談して、明日のコースをダルワまでにして、一日分の行程を二日で走ることにする。

九時に就寝する。

## 3月18日　Karanja ⟶ Darwha (34.4km)

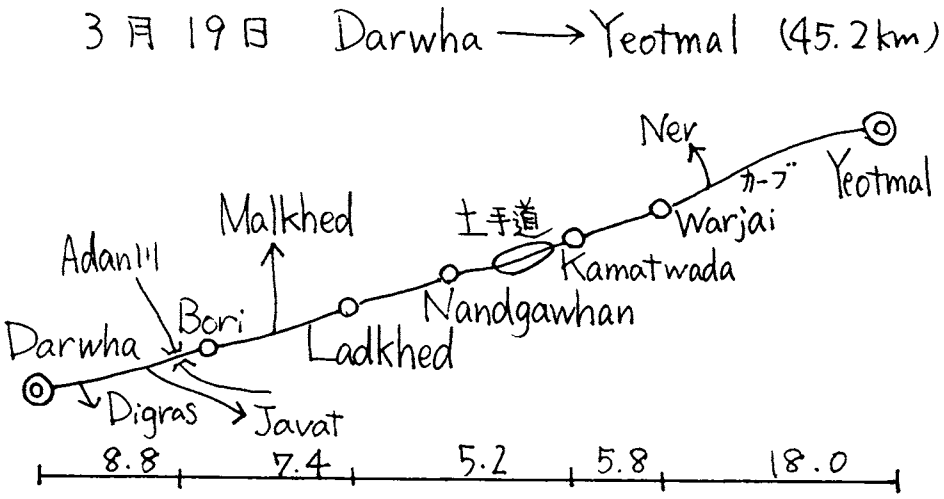



### 三月十八日　ダルワへ

五時半起床。先発パーティー六時半、後発パーティー六時四十分に出発。予定を変更したので今日は三十五キロメートル程の短い行程である。ナグプールに近づくにつれて、回りの景色は変ってきた。二ラウンド、三ラウンドでよく見られたテーブルマウンテンは姿を消し、緑が多くなってきたように思う。一本目を走行中、前からトラックが来たので道の端によける時、石渡が石にひっかかって転倒し、後を走っていた四人が転倒してしまった。幸い誰も怪我をしないで済んだが、危険なことだ。全員に自転車の走り方を注意する。

九時十五分ダルワに着く。神保と川相がゲストハウスに宿泊の交渉に行っているというので帰ってくるのを待つ。その間、警察署の庭で休ませてもらう。十時半にやっと交渉がまとまり川相が戻ってくる。神保と川相・峰高には宿泊場所探しでずい分働いてもらっている。ここのゲストハウスは食事も作ってくれるというので頼むことにする。村はずれにあるこのゲストハウスはなかなか雰囲気が良い。久方ぶりに今日は落ち着けそうだ。

十二時に昼食をとり、フリーとする。テラスに出て、平木さんが日本から持ってきた岩波新書の「イギリスとインド」を読む。なかなかおもしろい。他のメンバーは




ゆっくり昼寝でもしているようだ。

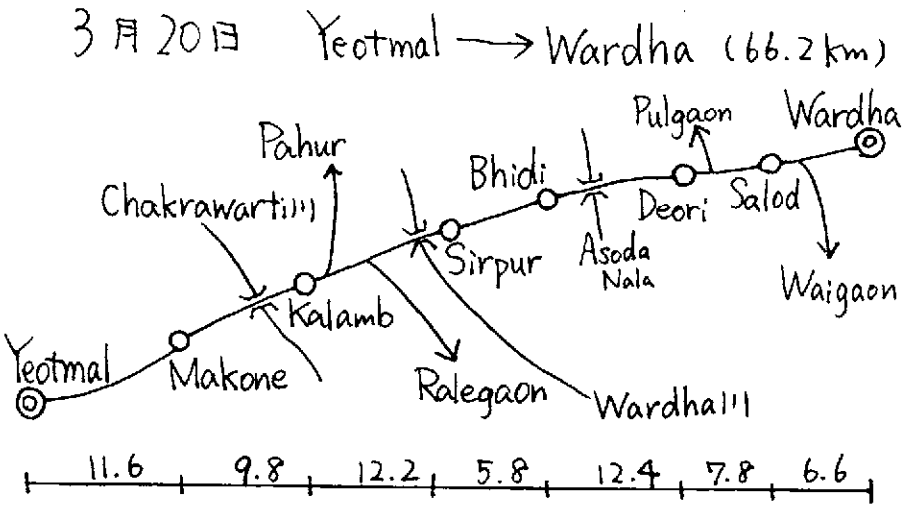
六時半に夕食をとり、八時半に就寝する。

## 三月十九日　イェトマルへ

五時半起床。六時過ぎに朝食を作ってもらい、先発パーティー七時、後発パーティー七時十分に出発する。芥川が下痢をしていて調子が悪いらしい。佐藤とパーティーを入れ替える。私もアコーラ以来の下痢が良くならず苦しいが、なんとかあと三日間やり通さなくてはならない。

二本目を走行中、途中の村で石渡が七～八才の女の子に自転車をぶつけて軽い怪我をさせる。村の人達が集まってきて大騒ぎになってしまう。カスリ傷なので一応手当てをして、佐藤さんと私が謝るが、回りに居る大人達がなかなか納得しない。要するに金を出せということらしい。しかたなく十ルピー出して立ち去ったが後味の悪い出来事だった。十時にイェトマルに到着する。神保、川相の努力で神学校の寮に泊れることになる。宿舎に十一時に入る。

七時まで昼食・夕食の時間を含めてフリーにする。このところ隊員の間でトランプが流行っている。フリーの時間になると、必ず四～五人集って二時間でも三時間で




も続けている。悪いことではないが、せっかくインドまで来てなぜ……？という気になる。もう合宿も残り少ないのだから時間を有効に使ってほしい。

七時半からミーティングを行なう。ミーティングの後、この神学校でパーティーがあるというので大半のメンバーが出かけて行く。なかなか楽しかったそうだ。八時半就寝する。

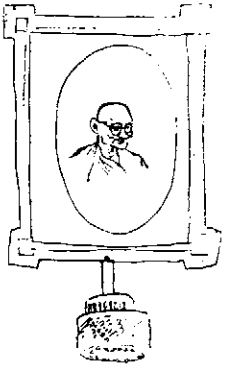
## 三月二十日　ワルダへ

四時半起床。先発パーティー六時五分、後発パーティー六時十五分に出発する。出発して十五分程で道を間違えているのに気付く。同じ方向に道が二本平行して走っているのだが、このまま行くと全然違う所に行ってしまう。戻るのも面倒なので、畑の中の小道を通って正しいルートに出る。道端に立っているナグプールまでの距離を示した里程表の数が徐々に減っていくのがなんともうれしい。六十六キロメートルと比較的長い行程をけっこう順調に進み、十一時半にワルダに到着する。

ワルダはインドの父とも言われるマハトマ・ガンディーが生まれた土地だ。アコーラからナショナルハイウェイ六号線を真直ぐ行かず、このワルダを回るルートにしたのは、ガンディーの故郷であるワルダを通りたいが為

であった。最初はガンディーが生まれたセバグラム・アシュラムに泊る予定であったが、我々の通るコースからかなり離れること、隊員の疲労を考えてキャンセルして市内の州立の観光客用宿泊施設に泊ることにする。この施設はこれまで泊った施設の中で最上の部類に入り、ツインの部屋にシャワー、トイレが付いていて、十ルピーである。久方ぶりに一人に一個のベットが与えられた。

今日は四時までフリーにして、夕食は最後の予備食である、スキヤキのジフィーズを二年生が作ることにする。四時食当開始で五時半に夕食ができる。久方ぶりの日本の味に満足する。夕食後七時からミーティングをして、明日は最終日であるから一層気を締めて行くよう注意する。八時に就寝する。神保は九時前にナグプールの佐々井さんに電話をして、明日到着することを連絡する。

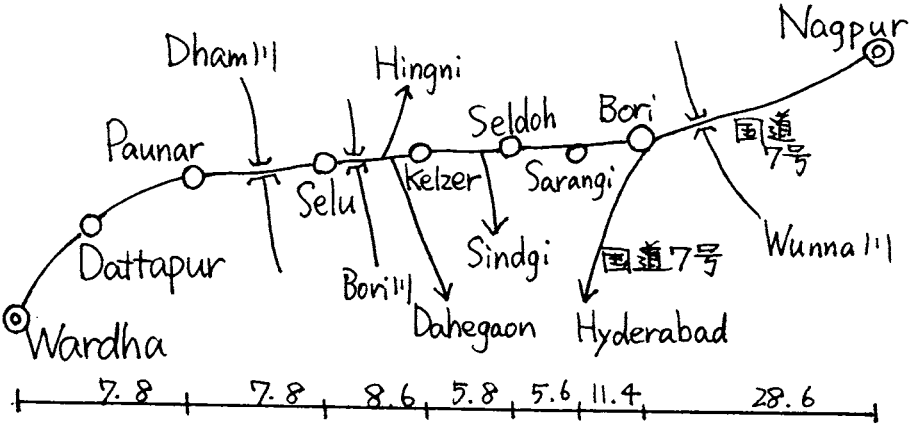


## 三月二十一日　最終日、ナグプールへ

四時起床。先発パーティー五時十分、後発パーティー五時二十分に出発する。いよいよ今日が最終日である。あと七十五キロメートル走れば実行動も終りである。夜明け前の道を久方ぶりにライトをつけて走る。意識しないでもペースがどんどん上っていく。ナグプールまで七十キロメートル、六十キロメートル……と里程表の数字が少なくなって行くたびに、これまでの長かった道のりが思い出される。ボリという村に八時過ぎに着く。ここで大休止をとる。ここからナショナル・ハイウェイ七号線に入り北上する。ナグプールまであと三十分というところで、先発・後発両パーティーが合流して、一列になって進む。里程表の数字が一キロメートル単位で少なくなっていくごとに興奮してくる。市街地に入った所で、橙色の法衣をまとった佐々井さんの出迎えを受ける。佐々井さんと握手して、歓迎のしるしである花飾りを首にかけてもらう。隊員の一人一人の顔を見る。皆うれしそうだ。到着時間は十時十五分だった。

佐々井さんにお世話してもらった宿舎のMLAゲスト・ハウスに十一時に入る。カルカッタ隊は明日ナグプール入りするそうだ。とにかくまずジュースで乾杯する。五時から全員で最終のミーティングをすることにして、それまでフリーにする。昼食をとってゆっくり体を休める。

## 3月21日　Wardha → Nagpur（75.6km）




五時からパーティー反省をする。私自身、下痢に苦しめられ決して楽な行程ではなかったが、計画は多少の変更はあったにせよ順調に進んだし、女子の隊員も予想以上にやってくれた。また現地の人達との交流もけっこううまく行ったし、印象に残る出来事も数多くあった。全般的に見れば、一応の成果はあったものと思う。とにかく皆、御苦労さんでした。

七時から市内のレストランでボンベイ隊だけの打ち上げ会をする。

## 三月二十二日　カルカッタ隊と合流

きのうは皆遅かったので、今朝は八時に朝食。佐々井さん、そしてきのう訪れた日本人旅行者とともに、自転車でカルカッタ隊の出迎えに、ナグプール市の東の入口へ行く。九時半ごろ到着。

十時には遅くとも到着するだろうと、皆が待つが、いっこうにやってこない。だんだん心配になってくる。何か事故でもあったのだろうか……。

十一時ごろ、まわりが騒がしくなった。街頭に並んでいるインド人の声援や注目を浴びて、トップを走る隊員の姿がみえた。皆走り出した。村山、そして石井さん入場。しかしそのあとが来ない。何でも、金森が直前でパンクしたらしい。ドジな野郎だ。十五分くらいして、監督以下安倍さん、新井、太田、向後、大島、一年と続々到着。一人一人と握手する。最後に青木監督と新井に握手する。合流バンザイ!!　一ケ月ぶりの感激の再会。四ラウンドで半分くらいが病気で倒れたそうだ。何となくやつれてみえるが、両隊の予定通りの合流に、疲れもふきとんでしまった。

佐々井さんが先頭にたって、宿舎のM・L・Aゲスト・ハウスへ。昼間はほとんど入手不可能なビールを佐々井さんが用意してくださり、両隊の無事合流を祝い乾杯!!

皆、さっそく自慢話をまじえて、話がはずむ。午後は休養と自転車のパッキングをすませ、夕食をにぎやかに囲む。

# 本隊行動記録（合流後）

神保淳一

## 三月二十三日　ナグプール

朝食後、全体で反省会。十時前に佐々井さんが来て、P・W・カレッジ（仏教系の学校）へ全員で行く。ナグプールは、インドでは珍しく住民の八割が仏教徒だそうだ。ここでも、例によって、花輪攻めのレセプションで大歓迎をうける。

昼食は、佐々井さんの住んでいるマヌケさん宅で、ターリーをいただく。そのあとは午後四時までフリーとし、各自市内見学等、街へ出ていった。

新井と二人で、銀行へ換金に行く。八十一万円もの大金（約三万ルピー）をかかえて、宿へ帰る。まわりのインド人が、皆強盗にみえて、非常に不安であった。

四時から、ナグプール市のレセプション。市長以下の盛大な歓迎。例によって花輪攻め。そのあと、YMCAのレセプションへ行く。卓球の対抗試合に、大島・片所・川相と続々登場するが、いずれもあえなく完敗。我々は、ただすわっているだけで、他に出し物はなし。何となく、さらしものという感じ。運営やプログラミングのまずさが非常に目立ち、疲れも手伝ってイライラした気分で宿へ戻る。

## 三月二十四日　ナグプール

今日は、朝から午後四時までフリー。みやげを買いに街に出る。ナグプール市は、人口約百万の都市。街並も整然としており、地方の総合中核都市といった印象をうける。

サリーやら工芸品など買い込んで皆が戻ってきた。六時からは、ナグプール大学のレセプション。本部のキャンパスは千八百人の学生数だが、他に十五のカレッジ、十の学部があり、相当大きなユニバーシティである。

夕食は、佐々井さんの知人スガタさん宅でいただく。今夜から丸一日、ホーリーの祭が始まる。三月の満月の日に全国で行なわれる、色水をかけあう祭である。ちょうど今晩は、皆既月食があり、再び月が姿を現わしたころホーリーが始まった。街中が騒然としてきた。スガタさん宅で、女の子たちのかわいい歌と踊りに対抗して、我々も日本の歌や踊りを披露する。

夜、石井さんと太田が街へ出かけて、無惨な姿で戻ってきた。ホーリー洗礼の第一号。

ナグプール市レセプション
でのスピーチ

## GREETING

We'd like to express our feeling of appreciation and gratitude for holding a joyous reception for us.

We are a group of students from Waseda University in Tokyo, Japan. Waseda University is a leading university with almost a hundred years of history and forty thousands students. The students in Waseda have been noted as being steady and with inward strength which make the university so unique in a country where things tend to be the same all over the place.

This character also holds true for us. For the last thirty years since the foundation of the club, we have throughly covered mountains in Japan, and also our predecessors have made trips like this abroad three times. We have been very active in camping and wandering through the fields and mountains.

We left Tokyo on February twentieth. After arriving in New Delhi, we devided the group into two parties and have bicycled across the central India for the city of Nagpur, each starting from Bombay and Calcutta.

Being in a country where things are so different from those of Japan, we spent our every single day making new discoveries with great astonishments.

During the trip, we visited the legacies in Ellora and Ajanta, just to name a few. Getting exposed to the great long historicities of India, we couldn't help but admire what your ancestors had accomplished.

We enjoyed the great hospitarities we received from the people we met on the way, and we can definately say that it sure was worth coming all the way form Japan.

We had an impression that people in India are well adopted to the climate and surroundings which are not at all soft on people, and we feel that this is a real strength of the people which must be the reflection of the long persistand history.

We believe that this experience will give us the great insight and make our lives more fruitfull ones.

In Japan, it is now spring, a time when the climate gets milder and the cherry tress are in full bloom. It would be wonderful if you ever could come to Japan and see us again.

In closing, let me hope and pray that this trip can contribute to the further understandings between the two countries and I hope you feel the same way.

MAYOR
OF NAGPUR

दूरध्वनि :
कार्यालय { ३३२६०
{ ३१५५१/१८
निवास

महानगरपालिका, नागपूर

उपस्थित प्रमुख अतिथिगण, महानगरपालिका के माननीय पदाधिकारी, माननीय सदस्यगण तथा अधिकारी, कर्मचारी वर्ग तथा निमंत्रित भाईयो ।

एशियाई देशोंमें में सब से छोटा किन्तु औद्योगिकरण के क्षेत्र में सारी दुनिया में नाम चमकानेवाले देश जापान के नवयुवक विद्यार्थी, विद्यार्थियों का मैं सहर्ष स्वागत करता हूं । भारत और जापान, इन दोनो देशों में मित्रता के संबंध सदियों से चले आ रहे हैं । सांस्कृतिक दृष्टिकोण से भी कई बातों में, दोनो देशों में समानता है । कला तथा संस्कृति के क्षेत्र में जापान तथा भारत ने एकात्म-रूप लाने की कोशिश की है । अतिथियों के स्वागत-सम्मान में जापान का नाम संसार में अग्रगण्य रहा है । आलंपिक खेलों में जापान ने उच्चांक कायम रखा है । इन सब से बढ़कर, भारत के प्रति सौहार्द-मैत्री का दृष्टिकोण रखने में जापान हरदम आदर्श रहा है ।

पीढ़ीयों से चलनेवाला स्नेहभाव प्रकट करने के लिये एवं भारतीय सांस्कृतिक पहलुओं का दर्शन एवं अभ्यास करने की दृष्टि से, नये युग के ये जापानी नौजवान विद्यार्थी-गण हमारे भारत देश में आये हैं, इस बात से हमें बहुतही आनंद हुवा है । हमें विश्वास है कि विश्व-मानवता का दृष्टिकोण ध्यान में रखते हुए, जब किसी भी देश का कोई भी नागरिक दुसरे देश की संस्कृति का अभ्यास करने के विशिष्ट ध्येय से वहां जाता है, तो इससे दोनो देशों के बीच स्नेह, मैत्री, प्रेम-संबंध बढते हैं ।

दौरे पर आये हुए हमारे विद्यार्थि-अतिथि हमारी मित्रता, भावनाएं एवं प्रेमपूर्ण सदीच्छाएं, जापान की जनता की जनता तक पहुंचाएंगे तथा दिन प्रति-दिन दोनों देशों के संबंध अधिक से अधिक दृढ़ होंगे यह सदिच्छा व्यक्त करते हुए, तथा अपनी शुभकामनाएं व्यक्त करते हुये, मेरे दो शब्द पुरे करता हुं ।

ध न्य वा द

(श्रीराम बंध)
महापौर
नागपूर महानगर पालिका

गडकरी

# ナグプール市長のメッセージ

アジアの国々のうちで最も小さいにもかかわらず工業化という点では全世界にその名を輝かせている国，日本の若い男女学生諸君を私は喜んで歓迎いたします。インドと日本，この両国の友好関係は何世紀も続いております。文化的な面でもいくつかの点で両国の間に共通性があります。芸術と文化において，日本とインドは同じ姿を保つ努力をしてきました。客人達に対する歓迎についても日本は世界中で有名となっています。オリンピックが開かれ，日本は首位の座を占めました。そういった事にも増して，インドに友好の目を向ける日本は常にあこがれとなっております。

代々の友情を明らかにするために，またインド文化のいろいろな面を見，また研究するために新しい世代に属する日本の若い学生グループが私達のインドに来られた，このことを私共は大変嬉しく思います。私の考えによれば全世界は一つであるのだから，どこかの国の一市民が他の国の文化を学ぶという特別の目的をもってそこを訪れるならば，その事で両国の間には，愛情・友情・親交が増すことになります。

お会いした私共の学生のお客様が，友情と人情，そして愛に満ちた善意を日本の人という人に伝えるだろうし，また日々両国の関係を親密にならしめるだろうといった希望を明らかにしつつ，さらに私の好意を示しつつ，ここにペンを置きます。

ありがとう。　　ナグプール市長

Shrirām baidy

## 三月二十五日　ナグプール

今朝も夕方までフリー。市内は、ホーリーで大変な騒ぎ。食事のために、宿を少しでも出ると、日本人という珍らしさも加わって集中攻撃を浴びる。宿の付近は市の郊外なのでそれほどでもないが、バザールではもう大変。赤・青・黄・緑などの原色の色水をかけられ、ほとんど皆、何ともあわれな姿で帰ってくる。今日は、ほとんど店も休みで、街中カラフルな色水で染まり、人々もすごい格好だ。一気に民衆のエネルギーが爆発するかのようなすさまじい祭りである。

夕方、最後のレセプション。地元の青年会主催のもので、わりとシビアな質問を受ける。新井が中心に答えるが、なかなかむずかしい。夕食をごちそうになり宿へ。

インドに着いて以来、ずいぶんと悩まされたレセプションであるが、これですべて終わり。もう、「アレンジ」や「プログラム」といった言葉を聞かされることもないだろう。

## 三月二十六日　ナグプール→アグラ

六時半に起きて、タクシーに分乗して駅へ。七時に来るはずの佐々井さんがなかなか来ない。八時四十分ごろ佐々井さんがやって来る。汽車は二十分遅れのアナウンスがある。朝食を各自駅前ですませて、九時四十分に発車。佐々井さんには、言葉で言い尽くせないほど、本当にお世話になった。今後の一層の御活躍と御健康をお祈りして別れる。汽車は、一路アグラへ。

車内では、適当に別れる。今度も一等寝台車で快適。昼すぎにターリーをとる。一ケ月前、ボンベイへの車内で同じように食べたのが、ついきのうのことのようだ。サントラを籠でいくつか買い込んできたが、できが悪くいささか不評。相変らず車内はホコリっぽく、暑い。風景は、ずいぶん緑が多く水田風景もみられる。ずっと砂漠のような荒涼たる風景を見慣れてきたので、信じられない気がする。夕方にチャイが出て、八時に夕食。

うとうとしていると、起床係の正田と芥川が起こしにくる。夜中の一時半、アグラ・カント駅到着。予想外に小さく、ほの暗い構内には、人がゴロゴロ。汽車を待っているのか、それともここを宿にしているのだろうか。

タクシーに分乗して宿へ。小ぎれいな一戸建ての別荘のような建物が並んでいる。

## 三月二十七日　アグラ

十一時に食堂に集まって昼食。きれいな庭園が広がり花が咲きみだれている。同じインドでも、何という違いだろう。

一時から、予約しておいたバスで、アグラ市内観光。最初は、アグラ・フォートへ。デリーのレッド・フォート同様、巨大なレンガ造りの城壁。ムガール王朝の繁栄がしのばれる。周囲の芝生や植え込みは非常に手入れがゆき届いて美しい。内部の塔からは、純白のタージ・マハルがみえる。

タージ・マハルは、オーランガバードで見たビビカマクバラ（タージ・マハルのコピー）の二倍以上ある。本物はさすがである。大理石の細工、左右対称の建築、美しい前庭、どれをとってもすばらしい。白い建物が前庭の堀に映り、緑が一層きわだってみえる。ここは、第五代皇帝シャー・ジャハーンの妃の墓であるが、十七世紀初め二十二年の歳月をかけて造られた。スケールの大きさには圧倒される。

次に、大理石の細工場へ。アグラは観光都市だけに工芸品を中心にみやげもの屋が多く、日本語のできるインド人も多く、値段の交渉も楽しみの一つだ。

夕食にハンバーグが出る。皆感激!!

## 三月二十八日　アグラ→ニューデリー

朝食後、バスでデリーへ向かう。途中、セコンドラという、ムガール朝三代皇帝アクバルの墓を見る。タージ・マハル同様、墓といっても、日本では考えられないほど豪勢なものだ。権力の象徴のために、こういったものを造ったのだろうか。それにしても、何という強権であったことだろう。

一路ニューデリーへ。一時ごろ、なつかしいユース・ホステル前に到着。一ケ月たって、デリーもずいぶん暑くなった。部屋割り、予定を発表して八時までフリー。

上級生は、あいさつ回りなどをふり分けて、皆みやげを買ったり、散歩したり。ニューデリーは、さすがに日本人が多い。特に、コンノート広場や州政府売店などでは、不意に日本語であいさつをされたりして、ビックリしてしまう。夕食は、皆豪華に中華料理などを食べてきたようだ。

## 三月二十九日　ニューデリー

朝食後フリー。皆、街へ散らばる。

みやげもの屋をのぞいても、ナグプール→アグラ→ニューデリーと、だんだん物価が高くなってきた。こんなことなら、ナグプールで買っておくのだったと思ってみても後の祭。

三時半、上級生でバーノットさん宅へ遊びにいく。バーノット夫人（土井さん）が呼んでいた宝石商がやってきて、宝石をみせてもらう。土屋コーチが帰国するときずいぶん宝石を買い込んでいったそうだ。

そのあと、大倉商事の田中さん宅へ。日本の新聞をみせてもらう。円が高騰し、一$＝二百二十三円になっている。出国時は、円高は好都合だが、ドルを持ち帰ると、これでは大損である。高校野球やオーブン戦などいろいろな事があったろう。ブランクを埋めるのが大変だ。それから、成田空港開港直前に、管制塔が爆破され開港が延びたらしい。これで帰国は羽田着になった。

夜は、オールドデリーにある高級インド料理店へ。最後のインド料理の晩餐に舌づつみをうつ。

## 三月三十日　ニューデリー

今日も一時までフリー。デリーは、ニューデリーとオールドデリーに分かれるが、全く対照的な都市である。騒然としたチャンドニー・チョークのバザールと近代的なジャンパス通り・州政府売店が象徴している。

一時にユースに集合して、パッキングをすませる。

そのあと、全員で日本大使館へ。鈴木全権大使、奥田一等書記官らと会い、インドの現状、外交政策などの話をうかがう。

七時にクラリッジホテルで、早大出身者の会合によばれる。日本航空の中村さん、防衛庁の村上さん、JNU大学留学中の大場さん、NHKデリー支局の田中さん、大使館の人たちなど十人くらい集まり、急きょニューデリー稲門会が結成された。中村さんが初代会長となり、新井の角帽をプレゼントする。

皆、インドにきて一～二年の人がほとんどだが、五・六月の盛夏は五十度を越えるので、水風呂の中で寝るとか、犬がだらしない格好（両手足を広げて地面にうつぶせになる）をするのは、体表面積を極力拡げて熱の発散を促すためだとか、いろいろおもしろい話を聞く。

楽しい気分で、遅くまで最後のインドの夜を過す。

## 三月三十一日　デリー→バンコク

朝食後、十一時までフリーにして、最後のインドをみてまわる。十二時すぎにユータスのバスがきて空港へ。

荷物は、小荷物として機内に持ち込めなくなった。一人平均三十Kgとなり、一人当り十Kg（＝二万円強）の超過料金を払わなくてはならなくなったが、クマールさんのおかげで、何とか話をつけてもらいパスする。入国のとき税関をフリーパスできて荷物を開けずにすんだのもこの超過料金を払わずにすんだのも、すべてクマールさんのおかげだ。この人がいなかったらどうなっていたことか。

四時十分、いよいよTG三〇四便で離陸。きた時は、ちゃちで心細い気がしたデリー空港にも、愛着をおぼえる。ほとんどの荷物を機内預けにしたので、ショルダー一つの身軽さ。

・ダッカには六時着。まもなく闇の中に、イラワジ川、メナム川のデルタ地帯に街の灯が点々とみえる。

バンコクには十時半に到着。ムッとくる暑さ。空港に入るが、肝心の旅行会社の人たちがいない。三月から規制が厳しくなり税関内に入れなくなったそうで、窓越しに姿がみえる。何とか税関を通過して、バスでまたニューアマリンホテルへ。四十日ぶりに風呂に入る。

## 四月一日　バンコク→東京

七時のモーニング・コールで目が覚める。昨夜は一時過ぎに寝たので、皆寝不足気味。朝食後、ドンムアン空港へ。手続は、旅行会社ですべてやってくれて、今回もスムースに税関に入る。ドル安なので、この免税店で使う方が得である。皆、酒やタバコなどを買い込む。

十時四十分、定刻出発。すぐに朝食。香港、台北のトランジットでは、免税店へ入って買物。楽しみにしていた機内食であったが、いいかげんうんざりしてきたころ、三回目の機内食で、握り寿司が二つでる。いよいよ日本も近い。

日本時間に時計を合わせて、夜九時半。下には、東京の夜景が広がる。デリーやバンコクとは格段に、大きく明るい。これほどきれいな街だとは、今まで思ってもみなかった。機内も騒がしくなってきた。皆、興奮気味である。

十時半、無事着陸。あとは税関を通過するだけ。神沢部長以下、OBの方々、隊員の家族など出迎えの人たちの顔が浮かぶ。どういう顔をして、何から話そうかなどと、変なことばかり頭に浮かんでくる。

とにかく終わった。御苦労さん!!

# 在日本部報告

# 在日本部結成まで

専任理事　山口　純一

青木正前監督が辞意をもらし始めたころ、現役が海外合宿をやりたい意向を持っているという話を聞いた。その後、紆余曲折があって、OB会が全面的なバックアップすることを約束して、青木稔君に新監督をお願いすることになった。その青木新監督からの最初の協力要請がインド合宿であった。

第一回の海外遠征（台湾）以来、現役が海外に出かけるときは、OB会として協力をして来ている。その協力内容は、計画のチェック、在日本部と資金援助である。「金も出すが口も出す」ということで、海外に出かける必要性とか、装備、食糧にいたるまで口を出さずにはいられないのがOBである。しかし、それは計画に対する関心の深さと、WWVへの愛着の故なので、現役諸君には、やかましいかもしれないが、勘弁して頂きたいと思う。

ところで、今回の合宿については五十二年六月二十三日に理事会を開き合宿の概要を青木監督から説明を受けた。従来とちがって「山」から離れるということ、自転車を使うということについて、又計画が未熟であるという点で、大分異論もあったが、新分野開拓の面における意義を汲んで、本計画への支援を可決した。その後毎月の常任理事会には、監督、現役が出席して、計画の進渉状況が報告され、OB側からはアドバイスがなされた。また前回までのように海外合宿対策本部は置かず、理事会の委託を受けた常任理事全員がその任に当ることになった。その役割は①東京連絡所②募金活動③遭難対策本部である。

十二月二日、再び理事会が開かれ、完成した計画書の発表と、OB会での募金計画が決められた。（一口五千円、目標額百二十万円）募金期間が一ヶ月と短かかったにもかかわらず、現役から全OBへのDMや、OB会報（インド特集）などの側面援助もあり、目標を大巾に上回る百五十万円がOBの好意で集まった。誌面を借りて各位にお礼を申し上げる。特に神沢部長、渡辺顧問、清水講師からは多大な御寄附をいただいた。

一月の常任理事会は、プラン全体を詳細に復習し、全員が計画に知悉するようにした。

二月の常任理事会は現地及び日本の連絡網の決定と、現地からの定時連絡の打合せを行い、また歓迎会の計画立案を行った。

なお、常任理事及び本部スタッフとして活躍して呉れたのは左記の諸君である。（敬称略）

蓬田俊夫、土屋正忠、土屋猛、矢口哲三、三廻部秀男、赤津隆昭、田嶋達夫、木の内嗣郎。

# 在日本部連絡日記

三廻部　秀　男

二月十五日　十三時三十分

「インドから電話！」、うちの母様のうわずった声、「よし！」と受話器へ走る。インドの女性交換手だろうか、なにやら英語でまくしたてる。要領を得ないままに、OH, YES, YES, OK, OK! 先発隊、山田の声、とぎれとぎれに聞こえる。人の声って、どこにいても変わらない。回線の具合、すこぶる悪い。一時不通。しばらくして今度は太田の声、「先発隊、無事、デリーに到着」「だまっていると金をふんだくられる、本隊は注意するように！」

異国で苦戦の模様ありあり。

同日　夜

ニューデリーより電報。

BUJI TOCHAKU 15 NICHI 8 JI TOSHIHIKO OTA

これで電話、電報による試験コンタクトOK。

二月二十二日　十二時三十分

ニューデリーより電話。「本隊、無事到着、二十三日より行動開始しま～す。」峰高の元気な声、インドからとは思えない。

二月二十五日

カルカッタ隊より第一報。（海老名）

EBINA CALCUTTA OK. 2/24. NORIO ARAI

二月二十七日

ボンベイ隊より第一報。

BUJI TOCHAKU 24 FEBRUARY T. YAMADA

三月八日

カルカッタ隊より電報No.2

ARRIVED IN CUTTACK SAFELY ON 5TH SCHEDULED TO START ON 8TH CALCUTTA PARTY

うーんなるほど、とにかく無事ということだろう。一方、予定ではもう届いているはずのボンベイ隊からの電報が来ない。

三月九日　十九時三十分

ボンベイ隊、山田より電話が入る。予定にない電話連絡なので、もしやと思う。「今、オーランガバード

にいる。カルカッタ隊からの連絡がナグプールへ入っていない。心配して電話した。うちの隊は順調にいっている。プーナからは予定通り電報を打った。」

同日　夜

ボンベイ隊より相前後して二通の電報。

一、BUJI POONA TOCHAKU YAMADA TATSUO
MASAYNKI　MASAYNKI って何のこと？

二、BUJI AURANGABAD TOCHAKU MINA GENKI
BOMBAY PARTY T. YAMADA

インドは各都市によって電報事情に差があるのか？

三月十四日

SAMBALPUR OK NORIO ARAI

カルカッタ隊より実に簡潔な電報。

三月に入ると隊員父兄より多くの問い合せあり。「今、ムスコはどうしているでしょうか」「えーっ、はい！元気でやっております」……と答える以外にスベがない。どうしているかと問われても。

三月十七日

ボンベイ隊より電報。

WE ARRIVED AT AKOLA 15TH MARCH T. YAMADA

両隊とも順調にいっている。残りもわずかである。

三月十九日

RAIPUR OK NORIO ARAI

カルカッタ隊より。あとは最終目的地ナグプールまで、明日に向かってペダルをこげ!!

新聞に「インド北部に大龍巻、死者多数」の記事、キャプテン新井の父兄より心配の電話が入る。もちろん両隊に影響はなかった。

三月二十三日　二十二時五十分

ナグプールより山田の声。「両隊とも全員無事到着、帰りの航空機は羽田か成田のどちらに着くのか、もし成田ならバスのチャーターたのむ」「了解」

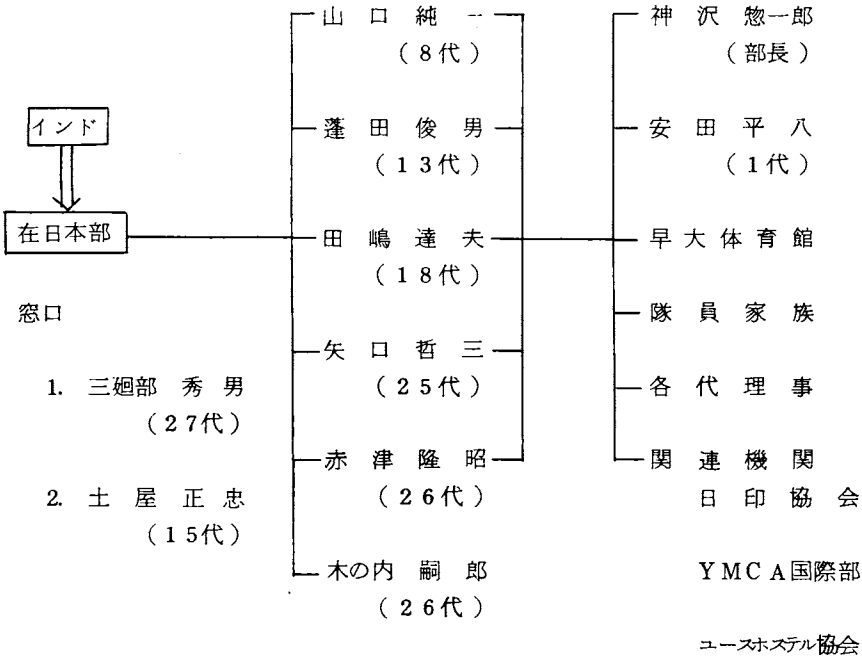
到着は羽田の予定である。

三月三十一日　十一時五十五分

ニューデリーより太田の声、「予定通りのFlightで帰国します」国際電話のやりとりも、ようやく慣れてきたがこれが最後の連絡となる。

完

# 連絡網在日本部


インド
在日本部
窓口
1. 三廻部 秀男 （27代）
2. 土屋 正忠 （15代）
山口 純一 （8代）
蓬田 俊男 （13代）
田嶋 達夫 （18代）
矢口 哲三 （25代）
赤津 隆昭 （26代）
木の内 嗣郎 （26代）
神沢 惣一郎 （部長）
安田 平八 （1代）
早大体育館
隊員家族
各代理事
関連機関
日印協会
YMCA国際部
ユースホステル協会

# 寄稿文

# 日印人物交流に思う

## 早大ワンゲル自転車隊インド平原走破を記念して

(財)日印協会　文化交流事業部担当
理事　鹿子木　謙　吉

七世紀の中葉、玄奘三蔵が中国から陸路カシミールを経て印度を訪れたときは、それこそ何年もかけて、死を覚悟での旅だったに違いない。

面白いことに、それから約一世紀後、七五二年、東大寺の大仏開眼の式典に南インド出身のバラモン僧、菩提僊那が導師を務めたという。彼は直接印度から渡来したのではなく、中国に滞在していたところ、招かれて奈良に来たのだそうだ（三省堂選書四十二「日本とインド」九頁参照）この辺りが日印人物往来の始まりの様である。

さて、ずっと下って、今世紀の初頭には岡倉天心がはるばる海路印度に渡り、インド旅行中、詩聖ラビンドラナート・タゴールとの出会いがあった。翌年（一九〇二年）彼は「東洋の理想」を著している。

そうして今日、印度と日本の間は十三時間半の航空路で結ばれており、毎年二万人以上の日本人が印度を訪れている。まさに小さくなった地球。それ故、人物交流の上でも考慮せねばならない新たな問題が生じている。

それは、初めて印度を訪れたときに受ける強烈な印象「カルチャー・ショック」として表現されているものとかかわりがある。そして、当人が帰国してから、「印度が好きになった」と答える人と「厭になって」帰国する人とにはっきり二分される結果が問題の所在を暗示している。

即ち、現代の日本文化（欧米合理主義型文化の延長線上にあるものと想定して）とインド文化の対照があまりに鮮明で、落差が大きいことに起因しているようだ。つまり、欧米近代文明の色メガネでみると、貧困、非能率、混沌、がインドの映像として浮び上ってくるだろうし、これを否定するメガネで見る場合、自然及動物と共存する人間、宗教心、素朴さなど、我々が失いかけている「豊かさ」をインドで見出すだろう。

だが反対に日本は「インド人にとってビックリ」なのである。それはインド文化の多様性に起因している。つまり、単一民族、単一言語の日本が驚きの根源なのだ。それは一ルピーの紙幣に象徴されている。各州には言語を中心にその地域に根ざした伝統文化が脈々と生きている。印度という囲いの中に、二十二ケ国が共存していると考えた方が良いのかも知れない。人物交流を進める上で心すべき点である。

次にインド人の物の考え方と日本人のそれとの違いである。これはインドの風土、永い歴史が背景となっているのであろうが、しばしば我々に違和感やフラストレーションを感じさせる原因となる。これは良く引き合いに出される事例だが、富者が貧者に施しを与える場合、日本では、優者が劣者に恵みを与える関係が想定され、心情的にも両者の間に暗黙の認識が存在しているのだが、印度では貧しい人が施しを受けるのは当然、つまり貧者が富者に善行を施す機会を与えてあげるのだと理解される。これには面白い事実がある。或る時、或日本人観光客が大勢の乞食に囲まれた。あまりしつこくねだられ、要求通り与えるのもしゃくだと、わざと困った振りをして「実は私は無一文でこれからホテルに帰る車賃もない。どうか一文恵んでくれないか」とふざけ半分手を差しのべたら、囲りの乞食が「それは気の毒だ」と少しづつの浄財を呉れたのは良いのだが、その汚れた（本当はきれいな）銭の処分に困り、別の所で乞食を見つけ、全部呉れてやり、ほっとしたという話しである。

最近、印度との往来が頻繁になったこともあり、特に若い人達の間で「インド文化研究会」「インド映画を鑑賞する会」など意欲的にナマのインド文化に接し、印度をより理解しようとする動きが出て来ているのは喜ばしいことだ。

要は日印間のパイプが数多くあることが好ましいが、とかく文化交流というと、能、歌舞伎、お茶、生花など高次元の芸能、文化の押つけ輸出を安易に考え勝ちだ。その前に印度の庶民にも理解され易い、民衆レベルの文化交流、現代の我々の生活の紹介が先づなされるべきだと思う。

近年急に印度各地で、日印友好団体の設立が増加している（分かっているものだけで三十五ケ所に及んでいる）のだが、これらが健全に発展して、我々の良きパートナーとなり、日印間の交流の有力なパイプとなる様、我々も出来る限りの援助をすべきだと考える。

昨春、早大ワンゲル隊がインド大平原を東西から自転車により走破したとの朗報に接した。途中各地の村人との交流を深めたと聞いているが、この壮挙は観光客も殆んど訪れていない地域の訪問だけに、隊員個人の印度理解に役立ったことだけに止らず、日印交流史上高く評価されて良いのではなかろうか。

帰国後、幹部の方から「日印協会の手配のお蔭で現地印日協会の方々が、交歓会等をもって大歓迎をして下さり、有意義な親善の一時を過しました。」との報告があり、連絡に当った担当者として光栄に思っている。

ここに、早大ワンゲル隊員の心意気に感じ、祝杯をささげたい。どうか隊員諸君の若さと情熱、印度でかみしめた汗と喜びを忘れることなく、将来立派な社会人として活躍されるときの糧にして貰いたいと念じつつ筆を置く。

# 相互理解のペダル

青年海外協力隊事務局
藤巻　洋

海外渡航未経験の日本人が、インドという国についていだくイメージは、一体どんなものであろうか。

一年中暑く、慢性的な食糧不足に悩み、男は全てターバンを巻き、カーストによる身分制度が強く残っており、インド象がゾロゾロしている……

私が今から十年前（昭和四十三年）、青年海外協力隊員としてインドへ赴任する時点で、頭に描いたインドも、恥しいことに前記のイメージに僅かに毛の生えた程度のものであった。しかし、デリーに到着し、カルカッタ経由で任地オリッサ州に赴任して一ケ月も生活してみると、金さえあれば食糧は容易に手に入り、とてつもなく大きな国であり、長い歴史があり、日本で考えていた頭の中の単純なインドは、すぐに吹飛んでしまった。

牛に犁を牽せて、耕起している田畑のすぐ隣りで、四十馬力、五十馬力のトラクターがプラウで耕起していることは、農村の風景として珍しいものではない。まさしくインドの国そのものが、即、博物館と言えるような多様性をもった国である。

今年一月（昭和五十三年）のある寒い日、早稲田大学ワンダーフォーゲル部の神保さんから、自転車によるインド大陸横断を計画中なので、現地事情を聞かせて欲しい、という電話をいただいた際は、なんと無謀なことを計画していることか、というのが、正直な実感であった。しかし、実際に事務局へ来られて、計画書を見せていただくと、一日の行程ごとに距離、道路の高低差、宿泊予定地、病院の所在地等々綿密に調査されており、これだけ周到な準備をしていれば参加者には何ら問題はなく、心配されることは、現地での盗難のみであると思われ、時間的な都合がつけば私も参加させてもらいたいと、思った次第である。協力隊事務局には、この種の問合せが日常多々あるが、殆んどの場合、何の事前調査もせずに来局し、質問の内容さえ明確でない人々が多いのが現状である。これら一般の来局者と比較しても、既に出発する前から、この計

画の九十%は成功すると思われた。

私は、四年間の在印中、ボンベイ――ライプール間は、二回自動車を運転して通っており、又、カルカッタ――ライプール間は、十回以上往復しているので、カルカッタ隊のコースには、特に関心がもたれた。

デリー、ボンベイ、カルカッタ等の大都市は、ある面では、日本と大差ないと言えるが、一歩農村へ足を踏み入れてみると、日本では考えられぬ様な生活が営まれている。例えば、屋根の上を電線が通っていても、殆んどの農民には電燈は無縁であり、ランプの生活が永々として受継がれている。

この様な中で、日本の大学生のナマの姿をインド人に見てもらうと共に、日常の生活が宗教によって大きく支配されている現状を眺め、村の茶屋で、水牛の乳が豊富に入ったミルクティーを飲み、口がしびれる程辛いカレーを手で食べる生活を体験して来た皆さんのインドでの毎日は、何物にも変えがたい、貴重な財産である。特に昨今、海外旅行者が都市近郊の観光地のみを見てその国を語っているのと比較しても、名実共に、足を棒にしつつ、インドの現状を確実に把握されたことと思います。

今後は、このナマの体験を、変に加工することなく、日本の人々に本当のインドを知らせることが、早稲田大学ワンダーフォーゲル部に残された、もう一つの使命であり、かつこれを全とうしてくれることを祈ります。

最後に、苦難なこの合宿を無事終了された皆様方の努力に対し、心から敬意を表します。

# インドは

トラベル・メイト社
森　脇　準　一

私がインドへ行ったのは、今から七年前の一九七一年のことです。初めての海外旅行に何故インドをえらんだかといえば、当時ベストセラーになった、小田実の「何んでも見てやろう」という本の、インドの部分が気にいったためです。その頃、今の様に旅行の情報などは全然なく、とりあえず船で香港まで乗り継いで、後は日本航空のカルカッタまでの切符を買ったのです。

香港までは、船の中で知り合いになった連中と一緒でした。ところがそこからバンコクへは一人で行くことになってしまったのです。その時の心細いこと。飛行機に乗るにはどうすればいいかということさえ知らなかったのですから。日本航空の制服を着た女の子の後をうろ

うろつきまとい、十分ごとに、飛行機はまだですかと聞き回りました。本当に乗れるのか不安だったのです。

この頃は、見るもの聞くものがめずらしく、いかにも私は旅行者ですというふうに肩をいからせておりました。素晴らしい夕日を背に、リュックをかつぎながら、途中で出会ったかわいい女の子と恋を語り、日に焼けた精かんな顔でドスのきいた声で……と思ったわけです。最初は。しかし、現実はいかにも重とうございました。

くそ暑い夕日を背に、重いリュックにフウフウいいながら、かわいい女の子には無視され、日焼けとよごれでまっ黒になった顔で、たどたどしい英語を小さな声で、ボソボソ言うのみでした。まことにさまにならないもんでして。

だんだん、いからせていた肩がおりて来ました。もろに私自身が、どんどん外に出ていくわけで、少しぐらいいきがっていても間に合わないくらい、次々と色々なことが起りました。結局できることは、自分以上のものでもなく、自分以下のものでもないということが少しずつわかって来ました。

そうすると、インド自体が何のことはない、ただのインドだったのです。神秘の国だけでもないし、宗教の国でもないし、ヘビの多い、病気と貧困の国ではなかったのです。田舎は田舎だし、都会は都会だし、ドロボウはドロボウだし、善人は善人であったのです。何のことはない。インドに私自身の姿をうつして一喜一憂していただけなのです。

ただ、ほんのちょっと文化的にタフでありさえすれば、インドであっても、なんてことはなかったのです。ただこのタフさへの道のりのなんと長いことか。

最後に格言を一つ、

「タフでなければ生きてゆけない。やさしくなければ生きる価値がない。」インド旅行は、まったくこの二つのつなわたりです。

## 南インドで

大橋　正明

私がワンゲル部の諸君と初めて出会ったのは、三年前、妙高・尾瀬の体育実技の折でした。心が通い合った山の生活、そこで私の〝インド病〟が部員の諸君に感染し、今度のインド合宿の発端になったのかもしれません。なにしろ、私は、半年のインド滞在を終え、帰国したばかりでしたから……。

今回、インド合宿のお手伝いが出来た事で、思い出深い体育実技の恩返しが僅かでも出来たのではと、大変嬉しく思っています。

今年の二月二十日、部員諸君が重い自転車と大きな期待を抱えて飛行機に乗り込んでいったその日、私も、数時間遅れで、羽田からインドを目指して飛び立ちました。

昨年十一月、南インドを二つのサイクロン（台風）が襲い、タミル・ナードゥとアーンドラ・プラデーシュの二州を中心に、死者約十万、被災者数百万人と伝えられる大被害がありました。

この報道をきっかけに、日印友好団体等が「南インド・サイクロン被害を救援する会」を結成し、十二月～二月の街頭宣伝を中心に広範なカンパ活動を行ない、総額約百五十万円もの資金が集められました。この救援金を、なるべく有効に役立ててもらうため、直接被災地に届けるのが、今度の私の仕事なのです。

インドに着いて間もない二十四日朝、事前調査を終えカルカッタのハウラ駅に降り立った私は、偶然、デリーから二十四時間の汽車旅を終えたばかりのカルカッタ隊に出会いました。隊員の諸君は、インドでの生活で初めての事ばかりが連続しているらしく、驚いたり感心したりのこの姿に、本当にインド亜大陸自転車横断がやれるのかと、少々不安に思ったものです。

この日半日、日本山妙法寺で一緒に疲れを癒した後、私は同じハウラ駅から夜汽車に乗って、南インドへ向いました。アーンドラ・プラデーシュ州南部のビシャワダ市に、救援活動を行っているサルボダヤ運動（マハトマ・ガンディーの理念に基づいた社会運動）の現地組織「アーティック・サマタ・マンダル（梵語で経済平等達成のための組織という意味）」を訪ねる目的です。

このサイクロンで最悪の被害を蒙ったディヴ・シーマ地区は、ビシャワダ市から約八十キロメートル、市内を流れるクリシュナ河の河口にあたる広大なデルタ地域です。

夏に近い南インドの太陽が照りつけ、蜃気楼が立ちのぼる、見渡す限りの大平原、それだけでは単なる田舎の風景ですが、今なおいたる所に惨禍の爪痕が残されていました。当夜、この辺一帯を七メートルもの高潮が襲い、沿岸十数キロに在った百余りの村々のうち、約六十村を完全に破壊し、一万人以上の人命を一瞬のうちに奪い去ったのですから……。

立ち並ぶ高いヤシの木が、一様にその葉を枯らせ、一定の方向（高潮に流された方向）に傾いています。多くの人達が住んでいた泥作りの家は、その跡形も残さず

に消滅し、レンガ作りの家々が、赤茶色の土くれに変っています。押し寄せた高潮の溜り水に、家畜の死骸が浮かび、汚染された井戸に代って政府の給水車の所に色とりどりのサリーをまとった女達が瓶を抱えて集まってきます。

しかしもっとも問題なのは、村人達が全ての生産手段を失ってしまった事です。被災直後より多くの救援の手がさしのばされ、当面の生活を支える「衣・食・住」は〝レリーフ〟されてきました。だが、いつまでもこの状態を続ける訳にはいきません。自分達の生活を早急に再建する必要があります。――ところが、農民の生きる畑が海水の塩分に汚染され、漁民の命である舟や網が流されてしまっているのです。

ここから、救援活動は第二段階に入ります。単なる〝レリーフ〟から生活再建を目指した〝リハビリテーション〟が、三月段階の課題でした。村人達は、救援団体や政府に雇われた形で、道路の土盛り、飲料用水池掘り、あるいは、畑の塩分を洗い流す大規模な灌漑計画に基づいた水路作り等々、自らの生活を取り戻すために汗を流していました。

私達の救援資金を託した「アーティック・サマタ・マンダル」の人達も、「本当の救援とは、村人を乞食にするのではなく、以前より良い状態の村を創り出す事だ」と、さらに一歩進んだ〝デベロップメント〟を目標に、日々村々を回り、長期プロジェクトを計画・推進しています。

今回の被災をきっかけに、インド農村に残る大土地所有制やカースト制といった問題が少しでも克服され、新たな平和な村々が再建される事が、救援活動の真の目的といえます。

暑さと飲料水不足に悩まされながらも、私と同行の清水さんは、数十の村々をジープで見て回りました。村人達の表情は、数カ月前の惨禍で多くの肉親を失ったとは思えない程明るくさわやかでしたが、村によっては、身寄りを失なった老婆や乳飲み児を抱えた若い母親が、車に駆け寄って来ては援助を乞う姿が、印象的でした。

そんな南インドの空の下で、インド合宿の日程表を取り出し「今日はどのあたりかなあ」と、中部インドを走っているワンゲル諸君の行動を、うわさしあったものです。

ワンゲル部の諸君が触れたインドを忘れる事なく、今後ますます御活躍されますよう、祈っております。

インド亜大陸自転車横断成功　万才!!

# 今の現役が・・・

安田平八

昨年の春頃だったか、監督の青木稔君が会社へ訪ねて来て、「今度現役は海外遠征を計画しているんです。」という。

「そろそろ時期だから良いだろうが、何処へ行く心算なのか。」

「インドです。」

「えッ、インドってヒマラヤのつもりか、何だい。」

「いや、自転車で高地を縦断するのです。」

インドと聞いて驚き、更に自転車旅行と聞いて叱驚した。しかしこれも時代なのかと、考え直し、「今の現役は」と云い募るOB達の話を思い出したりして、気をとり直して、一言聞き尋ねた。

「現役は山へ行っているのか。山は好きなのか。」

「はい。山は好きだし、行っています。今年の合宿は云々……。」　山好きを証明する長広舌が返って来そうだったので、それを遮って、

「もう良い。解った。インドで自転車をブッとばして来い。」

稲門会の何とか、というよりも、OBの一人として、ワンゲルを創めた者の一人として、感概の深いものがあった。三十年前、ワンゲルは山岳部へのアンチテーゼとして、とか云い乍らも、山だけではない。山野を跋渉するのだと云い乍らも、事実は山ばかりを追いかけて来て、里道を歩くのには、頭で理解し乍らも、心で抵抗を感じて来たと思う。この間二十数代のOB達の間では、その体験を合宿を通じて、行った人も、そうでない人も、このことは、心から割り切れなかったテーマではなかったろうか。

それを「部」の全力を挙げて「インドへ」「自転車で」正に山野を跋渉するワンゲルになったんだ、という感概にふけったのであった。

話は早かった。

そして準備は着々と進んだ。

稲門会も山口君中心でまとめてくれた。

そして実行された。

それは、成功だった、と評価された。「合宿が成功だった」とは、ワンゲルのテーゼが評価されたと私は受けとっている。

何年ぶりかで、現役諸君とインド合宿を通じて、交際った私は、そこに自転車旅行をして来た諸君が、五年前、

十年前、否二十年前の現役諸君と、同じものをもっている事を見出した。（皆山好きな奴等だ。）

## 山本稔氏との対談から

我部における第一回の海外遠征（昭和三七年十一月）は台湾でおこなわれた。まだまだ渡航自由化以前のことでパスポートが羊の皮の時代である。隊長をつとめられた山本稔ＯＢに台湾遠征の意義などを語ってもらい、今回のインド合宿についての感想をうかがってみた。

―海外遠征に対してはどうお考えですか

山本　この前の座該会（五十三年一月六日・於さんばれい）でも話したのだけれどね、ＯＢの中にはいわゆる早稲田の伝統を守って、それで機械類は使うべきじゃないというような意見が中間層ＯＢに多い。

―活動内容を登山に限定すべきだということですね。

山本　僕は、たとえ近代兵器を使おうが、船を使おうが……というような感覚を持っている。そして徒歩に対する最も親しい距離にあるものは自転車だという感じを持っているんです。そういう意味で僕は今回一つの大きな前進をしたなと思っています。

―それは過去三回の海外がステップとなっているからでしょう。

山本　そう第一回台湾、第二回ボルネオ、第三回台湾、第四回インドと僕は順々に前進したと思います。

―その辺の具体的な背景をお聞きしたいのですが、特に第一回を中心にして。高田牧舎で行なわれた「海外経験者との話し合い」（五十三年一月二十一日）でお聞きしたのですが、第一回遠征当時は、まだまだ海外へ出ること自体が困難でパスポートが羊の皮でできていたと聞いておりますが。

山本　昭和三十七年だ。その当時どうしても遠征隊を出したいという希望が激しかったのは、山岳部はアコンカグア（二十八年・関根吉郎隊長）をやっているじゃないかということが胸にあった。又マナスル（三十一年槇有恒隊長）に登った日下田実君達との対抗心もあった。

―パスポートをとること自体難かしかったようですね。

山本　そう、なかなかでられなくて、でるでると言いながら、ほとんどのパーティーはパスポートがもらえなくて脱落しました。うちは通った。

――三十七年と言いますと一九六二年ですね。この頃は、六十年マッキンレー、六十二年コルディラ・ブランカ、六十五年ローツェ・シャールと山岳部では頻繁に海外遠征を送り出していますね。

山本　山岳部の場合は日本山岳会を通して外務省に交渉しやすかったがワンゲルにはそれがない。困難だった。しかし早稲田の山岳部OBの関根吉郎であるとか折井健一OBらいろんな山岳部OBの協力も得ました。

――山岳部とワンゲルとは昔から対抗意識を持ち合っていたようですが。

山本　私達、幹部においては接点はとっていた……。それともう一つの問題はですね、私が遠征隊長で渡辺教授（現顧問）が団長で、そして女子を含めて台湾の街を親善にまわる。これは副隊長の吉良が率い、私と木村（十二代）が主力を率いて登頂するという、親善部隊と登山隊の二つの構成であった。

――親善ということも海外遠征をする際に大切な要素ですね。

山本　それから今度のインド合宿がこの四回の遠征を通じて、非常にいい受け継ぎをしたということはね遠征隊を送り出すために準備したり、努力したりする非常に地道なことをやった国内隊の、あの精神ができあがったのは第一回目じゃないかと思う。その地味な負荷隊のようなことをやるワンゲルの習性というものが、ひじょうにできあがったんじゃないかと思う。僕はそうした魂ができて、国内で頑張る人がそれだけ地味なことをやる、最後に船が出るまで手を振って見送るという精神がワンゲルにできたから、今回相当多くの現役を率いてあなた方が行動できたと僕は思う。

――今回のインド合宿ではOBの方々や、関係者の方々あわせて三百人近い方が支援してくれ、二十七人の隊員がインドへ行けたわけです。実に十倍の人間が動いているのですね。この送り出す側の精神というものは継承しなくてはいけませんね。

山本　僕は青木（八代）が本土横断をやった時に監督だったものですから、それで僕はワンダーフォーゲル部は山岳部と系統を変えねばいけないと……山岳部は高さと技術とに挑んでいく、ワンダーフォーゲルというのは距離をもとうじゃないかと。僕は距離ということに非常に関心の強いOBですね。ですから次の海外合宿がいつくるかわからな

いけれども、その辺に期待を持つのです。

――山岳部とのいき方のちがいですね。インド合宿には距離の追求ということも基本テーマでした。

山本　僕は実技の講師をやっている時に、山岳部では日下田実君が講師をしていた。体育局で講師の会があるとワンダーフォーゲル部と山岳部はどうちがいますかと質問がある。

――僕もよくきかれます。

山本　その時に僕ははっきりしたことをやろう。日下田君、君は登山家としての指導者なんだ……と。僕は野越え山越え、民族の中を通り、距離をつくりあげていくと。山岳部には絶対負けることのない部をつくりあげていくのだと、僕は明言したのです。そして日下田君もそれにすごく感動してくれた。だから今度のインド走破二千四百キロメートルは大成功だったと思っています。

――どうもありがとうございます。

メモ　この対談は福井顧問の御厚意で山本OBとお会いする機会を与えられ、黒磯にある南ケ丘牧場にておこなったものを編集しました。

新井規夫

（昭和五十三年八月二日）

# 新しい道をもとめて

里見昭二郎

インド合宿の成功に際して、心からおめでとうの言葉を述べたい。ここにあらためて、監督・コーチ陣の適切な指導と本部スタッフの協力に敬意を表するとともに、現役の行動力をたたえたいと思う。

この合宿の印象を率直にのべるならば、これまでの海外計画にくらべて全般の流れが順調であり、準備段階から帰国に至るまで、よく関係者をして納得させるに足るものがあった。このことは別の面から言えば、他をしてむやみと反発させないだけの余裕なり実力が、ようやく部活動の周辺にもにじみでてきた証拠にほかならないといえるのではなかろうか。

インド合宿で一番の気がかりな点は、やはり病気のことであった。昨年の夏休みも終りころ、東南アジアから帰国した知人にコレラが発見され、本人が強制隔離されたり、彼の属する職場が消毒されるなどの始末で、まことに騒がしい出来事があった。また丁度そのころになるが、十数年ぶりに会ったOBから、インドの水がとても悪いこと、また農村での疫病のこわさなど、豊富な海外

体験をたっぷりと聞かされたが、その指摘には同感できるところも多く、まさに私の心配をいいあてたものであった。

それやこれやで、インド地方部での衛生状態はまったくよくないという先入観があって、何としても病気のことが気がかりになっていた。その後、合宿計画が次々と明らかにされるにしたがい、現役と行動をともにできる有能なドクターの参加を知って、やや心配は薄らいだもののやはり安全性のことは頭からはなれなかった。

さて、帰国後の合宿報告会のことになるが、会場は潑剌として活気にみちており、現役は一段とたくましさを加えていた。私の心配は、いうなれば杞憂にすぎないことがわかったが、それだけ隊長ほかリーダー諸君の苦労に対して、心からねぎらいのことばをかけずには居れなかった。

＊

部の創立以来、すでに三十年の歳月が流れている。人間でいえば、もう立派に大人の年齢といえよう。この間、春夏秋冬、各代ごとにユニークな合宿が行なわれ、それらをふりかえってみると、まさに百花繚乱のありさまを呈している。さらに海外に赴くことすでに四回を数え、いずれも部の歴史に輝かしい足跡を残してきた。

この三十年という年月にわたる粘りづよい部活動は、他面、部員個々人にとっては自己実現の戦いであり、努力の積み重ねの記録であった。今日、比類のない豊かさに恵まれて、克己とか忍耐、質実剛健といった徳目は、ほとんど無視されかかっているかにみえるが、常により困難なものを求める心、なかでもアドヴェンチュアの精神は、人間の本性に根ざすものである。これまで部においては、すべてを果敢に実行しようとする気風が培われてきたが、インド合宿は、今日の低迷した雰囲気に対して、一陣の新風を吹き込んだという意味で、まさに快挙であったといいうる。

今回の海外合宿では、カルカッタ――ボンベイ間の約二千四百キロを見事に走破したが、同時に、日印の交流と親善に尽くして、ワンダーフォーゲル活動に新分野を開いた。この記録が認められて、栄えある体育名誉賞を受賞したことは、まことによろこびに堪えない。インド合宿に示された部の伝統と現役の不屈のあゆみを、私は誇りに思うものである。

＊

インド大陸を走りながら、現役諸君は土地の人のなまの声を聞き貴重な体験を積んだことと思う。道（みち）は古代から現代にいたるまで、はかり知れないほどの役

割を果たしてきた。みちは未知に通じる。悠久の時の流れをきざんだインドの土地を歩いて、学ぶことすこぶる大なるものがあったに相違ない。このように永遠の世界に向って開かれたエネルギーを、偏狭な技術にとらわれずに今後、どのように育ててゆくか、部において充分に論じ、かつ実践してほしい課題である。

インド合宿の報告を聞きながら、不断の鍛練と規律のなかで、つねに前進をつづける現役のひたむきな姿勢に接し、部活動に特有な緊張感を久しぶりに味わうことができた。

しかし、部活動の経験者ならば、当然にわかりきったことであっても、これを他の人に伝えるとなるときわめて難しい問題がある。たとえば、ワンダーフォーゲル活動とは何か、その理念とはなにか、といったことについて、第三者をして納得させるほど決まった表現がみつからず、まことにもどかしさを感じる場合などが、それである。

部活動についての解釈は、各人各様ともいえるが、私自身はこんなふうに考えている。自然とのかかわりにおいて、部の活動は途方もないひろがりをもっており、ときには一般の理解のわくをはみ出したところも認められる。したがって、ことばを越えた部活動の実体に、こうだとはっきりした名称は与えがたく、捉えどころのない領域も存在する。このような意味では、まことに「名の名づく可きは、常に名に非ず」といった先哲のことばを思い起こさせるほどである。しかしもし強いて、部活動に共通した一つの現われ方を示すとなれば、これまでの体験から、それは未知との出会いということではないかと思っている。

現代といえども、私たちにとってはなお未知の世界が戦いを挑んでいる。開拓性という目標は、部にとってはいささか色あせた感がなきにしもあらずだが、それは、オリジナリティの精神と言いかえてもよく、私にとってはいまなお魅力を失わない目標である。

＊

インド合宿の実現につづいて、これを発展的に継承するものは何か。もちろん今の時点では具体的にはまだ明らかではないが、その計画をたてる基準の一つとして、私はここで是非とも〈小野 梓 記念賞〉のことを紹介しておきたい。

小野 梓 記念賞は、明治十五年大学創立当初の功労者小野 梓 先生を記念し、建学の精神を顕揚する目的で、昭和三十三年に制定されたものである。大隈侯を早稲田の父とするならば、小野先生は建学の母とも称される方であるが、記念賞は、学術賞、芸術賞、スポーツ賞の三

部門にわたっている。このうち小野 梓 記念スポーツ賞は、世界記録の樹立その他これに準ずる卓抜な業績をあげた個人または団体に対して授与されるものである。

校歌に、「集り散じて　人は変れど　仰ぐは同じき理想の光」という一節がある。部においても、そのめざすところについて、同じことが言えるように思えてならない。部活動には、私たちの心を奥深いところからゆさぶる何ものかが一貫して流れており、それ故にこそ、かけがえのない青春の情熱を、思いきり投入して悔いないものといえよう。

創部以来、部はあらゆる困難をのり越えて活動を展開してきた。これからは部活動の質の高さにおいて、他のスポーツにおける世界記録に匹敵するものを目標にしてゆく。このように願うものは、私一人だけではないと思う。世界に向かって雄飛する基礎をかためるため、現役諸君の一層の精進を期待してやまないものである。

（昭和五十三年七月一日）

# 部活動における海外

青木　正

わが部の海外活動も今回のインド合宿で四度目の経験を重ねた。

第一回目の台湾を除けば他はすべて全部員による合宿という形態で行われたが、各合宿の経緯と私自身、前回の台湾合宿を経験した立場から見て、この形態をどのようにするかという点について更に深く検討が加えられるべきだと考え、この機会に主な問題点を挙げてその手掛りにしたいと思う。

全部員参加の合宿という形態が抱える最初の問題点は、その実施時期に関するものである。

期間の短い場合を除けば、現役の合宿である以上その時期は春・夏・冬の休暇中に限定されるが、春または冬の場合、十月にリーダーの交代が行われる結果、実施までの時間が長くても五ケ月足らずしかないために、リーダーの経験が不十分な段階でパーティを組まなければならないことと準備期間不足の二点が挙げられる。

準備期間不足の問題を解決する方法の一つは、前の代から準備を始めることである。しかしそれは、前の代の

全面的な協力を前提とし、必然的にその活動を制約する。すなわち計画が二代にわたることを意味している。にもかかわらず、前の代にとって実質的には非常に中途半端な関わり方しかできないという矛盾を生ずるものである。

なお、リーダー経験や準備期間の不足を一挙に解決する方法として、リーダー交代の時期を合宿終了後にすることも考えられないわけではないが、その時限りの措置とすることも出来ないのであるから、部にとっての大問題である。しかしそれ以上に、四年生の就職という全く別の大きな問題との関連で考えても現実的な方法とはいえないだろう。

さて合宿形態の海外活動が夏に行われる場合はどうであろうか。

リーダーの経験や準備期間の不足については心配なく見えるが、それより困難な問題に直面する。その一つはプランニングの段階でメンバーが確定できないことである。メンバーの力量はおろか人数すら不明ではプランの立てようもないが、だからといってそれが確定してからでは春の場合以上に準備期間が不足してしまう。そこで様々な仮定を設けて幾通りものプラン作りをするという、莫大な労力を要する作業が避けられないこととなる。それは、部員の訓練という面ではともかく、計画実行の面では全く無駄なことである。

そしてもう一つの問題は、未経験の新入部員を短期間で教育しなければならないことである。通常は夏合宿を過ぎてやっと部員としての自覚らしいものが生れてくるのに、右も左も判らないうちに一人前の部員としての行動を要求するのは無理なことである。そのためにプランそのものがどうしても無難なものになると同時に、多くの場合、次の代によって新人の再教育が行われることとなるのである。だがこれは現在のように年間活動のスケジュールが過密な状態では簡単なことではない。

なお、過密スケジュールの問題については、あらためて是非述べたいと思う。

次に検討すべき問題点は、経済的な面に関するものである。第一に、合宿であれば経済的にも自力で出来る範囲で計画することが望ましいが、全部員が海外へ出る場合には交通費だけを考えても相当な額にのぼり、なかなかそのようにはならないことである。この点についてはあくまでも原則論との見方もあるが、現役の立場では心すべき問題であろうと思う。

第二には、部員が資金獲得に費す時間と労力についてである。前述した過密スケジュールの関係もあり現役の負担は決して軽くない。しかしそれ以上に経済的な側面

で見逃すことのできないのは、極端な負担の増大が必然的に入部希望者の制限につながるのではないかという危惧である。部活動を金持ちだけのものとしないためにも充分な注意が払われるべきであろう。

以上、合宿形態の海外活動に関する問題点の中から主な二つの点について簡単に触れたが、これを機会に部内の海外活動に関する議論が活発に行われることを期待して筆をおきたいと思う。

# 感想文

# インドの医療について感じたこと

安倍　己紀男

私が、隊員の健康をあずかるなどという大それた使命を帯びてノコノコとインドまで行ってきたなんて、今思うと何と無謀なことをした事か、と我ながらあきれてしまいます。準備期間は三ケ月。ほとんど何もせずに、果して皆んなについていけるのか、もし何かアクシデントがおこったら等、不安におののく毎日でした。不思議と遠くへ行くという実感があまりわかず、また、インドへ着いたあとも、しばらくは、遠くへ来たという実感がありませんでした。私がしっかりせねばと思ったのは、インドに着いてもうずい分走った頃です。路上に犬が車にはねられて死んでいるのを見た時です。自転車に乗ったままチラット見ただけですが、頭から血を流しころがっている姿を見て、もし隊員の誰れかがあんな怪我をしたらどうしようという不安が胸をよぎりました。それまで種々の事態を考えて、それに対する処置も決めておりましたが、いざとなったら果してできるかという気持がその時生まれて、その半面とにかくみんな生きて日本へ帰らねばと思いました。とにかくできることはすべてして、半身不随になろうが生かすこと、これが私の唯一の使命だと痛感したしだいです。

インドに対して、行く前は何となく、未開という感覚を持っていたのですが、インドへ行ってみた驚いたのは、薬局と医者が町と呼べる位の所なら大ていあるという事でした。日本での計画段階では、果してどのような医療事情であるのかわからず、むしろ農村部では医療施設はないだろうと思っていたのですが、これはうれしい誤算でした。日本へ帰ってきて調べたところでは、インドには約九十の医科大学があり、医学生が一万人、医者は十万人ほどいるそうです。人口五千人に対して医者一名です。日本では十三万人の医者がいて、人口一千人に対して一名の医者がおります。現地でみてきた感じもこの位だったと思います。次に医療の質ですが、幸いにも我々は現地の医療機関に御世話になることがなかったのでよくわからないのですが、薬局には種々の薬が置いてあるようでした。また、値段も安いようでした。又、私はカタックでインドの医学生と話す機会を得ることができたのですが、彼は大変よくできました。彼は医科大学の六年生でしたが、未熟な私にいろいろ貴重なアドバイスをくれ、大変助けになりました。きっと質の高い医療が存在すると思います。

しかし、町の人から聞いた話によりますと、インドでは平均寿命が四十才位なんだそうです。想像ですが、これは乳児死亡が非常に多いためだと思います。たくさん生まれてたくさん死ぬ。一昔前の日本の状態と同じだと思います。ライ病の人が駅で乞食をしていました。象皮病の子供が寺で乞食をしていました。カルカッタの駅前では、たくさんの子供や大人が毛布一枚で寝ていました。やはり、日本と比べれば劣悪な衛生状態です。しかし、私がカタックで御世話になったような優秀な医学生がどんどん医者になっていけば、きっと変わってゆくに違いないと思います。

## スバル

石井照久

『スバル』車の名前でもなく、星座の名前でもない。俺にとって忘れられないインドの少年の名前である。彼は、第一ラウンド三日目の宿泊地ジャレスワールという人口千人程度の村で茶店の店番をしていた。年齢はたぶん十才くらいだと思うが、背は小さく目が印象的で、利発的な顔をした少年である。隊員の突然の発病で、一日ここで停滞となったので暇つぶしに茶店によくいったが、カルカッタ隊の隊員も彼の人柄にひかれてか、ガラム・ドゥードゥ（ホット・ミルク）やチャイ（ミルクティー）をよく飲んでいた。彼のはたらいている姿を見るのが好きで、一日の大部分を彼の店ですごした。

彼の働いている姿は、労働によろこびをもっているのでもなく、我々に対して卑屈でもなく、たんたんとインドの大自然の中に調和し、無理なく自然だった。

彼は近所の子供達のように学校へは行っていないが、同世代の少年達よりはるかに利発的で大人だった。

彼には学問もないし財産もない。誠実さだけで一生を小さなジャレスワールで送るだろう。しかし、そんな学問や財産とかいうものを越えて、一人のインドの誇り高き男として生きていくに違いない。

知性とか富で真の人間の形成はできないと思った。

ジャレスワール出発の朝、私達のプレゼント（日本の百円ライター）をはにかみながら、うけとってくれた。いつまでも見送ってくれたスバル、今日も店先でチャイを作っていることだろう。

# 熱烈大歓迎　インド編

平木　裕実子

四年前台湾へ行ったときにも、私達は各地で大歓迎を受けた。

台山協の方々、早稲田同学会の方々等、いろんな方に招待されてレセプションに出席したが、大抵の場合、会場に着くと先ず目に飛び込んできたものは、「熱烈大歓迎」と、デカデカ書かれた文句だった。

私は、息つく暇もなくおしよせてくる歓迎のスケジュールをこなしていたインドでの日々の真只中においてこそ、まさしく、この「熱烈大歓迎」という言葉を想起したのである。

そして、インドでの熱烈大歓迎は、食事と酒攻め、学生交歓などというパターンを、はるかにこえていた。

そもそも、私達を歓迎してくれるという階級が上から下まで勢揃い、そのやり口も、熱烈から強烈・狂烈と様々で、場所も、自宅あり、学校あり、レストランあり、たらい回しあり、路上での大歓迎も幾度となく。バスで遠足というのもありまして。

しかし、特筆に値すべきは、マスコミ陣の歓迎である。地方新聞の記者のインタビューに、私達は何度か応じた。

数人の場合もあったし、全員で応じたこともあったが、いずれにしても、生みの苦しみともいうべき永い沈黙の挙句、インド人には理解し難い英語がとび出してしまうのだから、お互い気の毒としか言いようがない。

それでも何とか、最低限でいいから誤解のないように、私達の活動の目的や概要を説明した。

最後には、サンキュー、ではテイク・フォトね、ハイ並んで、パシャ!!

かくして次の日の新聞には、私達が登場するのである。当然のことながら、これにより路上での歓迎は一層熱をおびる。

## 短き命のスター誕生・・・

こういうマスコミ攻勢の中で、一番印象に残っているのは、何といってもブルダナでのインタビューである。

ここでは、全く家庭的な歓迎を、私達は心ゆくまで楽しんでいた。そして、インタビューというのも仰々しいものではなく、小じんまりとした、親密感の持てるものだった。

ところが、それが甘かった。

どういうわけか選ばれたのが、山田Lと芥川君と私、そして、もうすっかり親しくなってしまったインドの自転車野郎マヘシュ氏がインタビュアーとして現われ、顔の広いマヘシュ氏の仲間と思しきマスコミマンは、テープの切り替え係という設定。また、これは新聞ではなくラジオ放送するのだということらしい。

インタビューも佳境に入り、

「アクタガワ、あなたがインドへ行くと言ったとき、御両親は？」

「ええ、賛成してくれました。というのは僕達はブディストですから、ブッダが生まれたインドへ行って、寺院や遺跡を見るのは大変良いことだという風に思ってくれたからです。」

「ヒラキ、あなたの両親や友達は？」

「友達は、きゃあ素適！面白そう！と言いました。両親は、何？インド?!あんな暑い所へ行ったら、おまえ悪い病気にでもかかって帰って来られなくなるよ、と言って最後まで反対しました。」

「ヤマダ、あなた達のこの旅の目的は？」

「我々の国日本とは、全く違う自然、違う文化に接し、そしてインドの人々と友好的に付き合うためです。単に一二〇〇キロを自転車旅行するだけでなく。」

「アクタガワ、あなたはインドに何を求めますか？」

「ヨーロッパ人なども含めて、僕達高度文明社会の人間は、物質的世界に疲れています。インドへ来ようという人は皆、物質の氾濫にうんざりして、もっと素朴な、精神的なものを求めているのだと思います。」

これを、ちゃんと英語でトークしたのである。内容も結構まとも、と、私達は内心の満悦を抑えることができなかった。

ところが、よりにもよってこの部分はマスコミ氏の手違いで、テープに入らなかったのである。

かくして私達は、まったく同じシーンを再現させられたのだが、二度目は、緊張感も薄れてしまい、“VIVID”な答えはできなかった。

さて、次の目的地、カムガオンでは、マヘシュ氏の紹介で専門学校のホステルに泊れることになった。

私達のために用意された一室には十四個の白いマットが並べられていた。しかし、その上に身体を横たえてひと休みする暇さえなく、何だ何だと踏み込んでくる学生達にいささか辟易して不貞寝していた折もおり、ラジオから一種異様な言語が聴こえてきた。

英語らしいが、聴いていてどう考えても英語とは判別し難い発音であった。

言わずと知れた、先日のインタビューの放送である。身内の者がヤンヤ騒ぎたてるので、囲りに居たインド人達も、その放送が如何なるものであるか、かろうじて解ったらしかった。

私はシェラフを被って、顔から火を吹くような恥ずかしさに身悶えせんばかりであった。

それは単に、下手な英語や我が声色のいやらしさ故にではない。互いの理解の範囲をはるかに超えたところにある大歓迎のお祭り騒ぎのアホらしさを、ちらりと垣間みたような気がしたからである。

これしきのことに大騒ぎをするインド人が馬鹿だというのではない、むしろ、歓迎を受けるのは結果としてあるべきなのに、打ち続く歓迎騒動に翻弄され、疲労困憊し、行く手さえ見失なわんばかりの私達の姿の滑稽さが、ラジオの中でしゃべっているたどたどしい英語に象徴されているように思われたのである。

かくしてインドには三つの顔があった。

熱烈大歓迎の渦と、限り無く続く熱い高原を汗と沈黙の中に進む私達と、それらには無関係に淡々と流れるインド人達の生活のざわめきと。

私達は、この三つを何とかつなげようとして悪戦苦闘した。でも、何となくちぐはぐなままに終ってしまった。

しかし、日本へ帰ってからの半年の間に生まれた余韻は、この三つの顔のイメージをじわりじわりと重ねつつある。

いまは、これらをつなげるのに言葉はいらないという気が、何となくするだけである。

## インドで出合った日本人

新井規夫

### その一・矢野青年

僕達はカルカッタの街で日本山妙法寺という所に三日間お世話になった。このお寺に着いた時、一人の日本青年が出迎えてくれた。ガーゼでできたようなインド服をゆったり着こなし、頭を丸めた彼はとてもすっきりとした感じを見る者に受けさせる。このインドの地で仏教に身を投じているのかと思いきや、彼、矢野青年はすでに二年半にわたって、北半球の大陸を旅しているという。話によれば大学四年の秋に日本を飛び出し、数ケ月の予定

がいつしか二年半にもなってしまったという。

僕は彼がたんたんと話すのを興味深く聞いていたのだが、「青年は荒野をめざす」という小説にそっくりではないかと思ったりした。放浪すること、それは勇気のいる行為だろう。どこかに必ず自己の社会的立場を証明する何か(identity)がないと人間、不安になるものだからだ。インドで自転車旅行をし、四十日後には日本に帰る僕達。帰れば学生生活が待っている。しかし、あてもなく、ピザの切れるのを待って次々と世界の国々を渡り歩く彼はいったい何を考えているのだろうか。確かに書物を通してものを考えることよりも、よほど明確な世界観が確立できるだろうが・・・・・。

その二　与古田青年

実行動を開始して二日目だった。僕達は国道六号を西へ西へと走っていると、向こうからオレンジ色のタイツをはいた自転車野郎が一人向ってくるではないか!!めがねをかけた彼はにっこり「こんにちは」と挨拶してくれた。日本人なのだ。観光地ならいざ知らずこんな所で日本人に会うなんて、それも単独で自転車旅行をしている彼に僕達は、親しみと好感を持ったのはいうまでもない。すぐに彼をとり囲んで写真をとる。彼は琉球大のワンゲル出身である。大学卒業後、アルバイトで資金を稼ぎ、約一年間の予定で旅をするという。ボンベイから走り出しカルカッタまで行き、ネパールへわたり、しばらくブラブラした後アジアハイウェイを使ってヨーロッパに入るという遠大な計画に取り組んでいるのである。とても大胆ではないか。彼の話に、僕達はみな敬服してしまった。同時に彼との出会いは、不安な気持ちを持ちつつ行動を開始したばかりの僕達に、大きな自信となった。

帰国後僕はこの十月に彼から手紙をもらった。テヘランからだった。彼が初心を貫徹し、ヨーロッパへ無事到達することを祈りたい。

その三　依田上人

第一ラウンドの停滞地カタックでは三日間の休養があった。この休養を利用して、僕達はベンガル湾に近い避暑地ブーリーに足をのばした。その帰りにブバネシュワールとカタックとのちょうど中間に位置するダウラギリにある日本山妙法寺を訪れた。ここの住職依田上人とは何度か日本を立つ前から連絡をとっていた関係もあってのことだった。この寺は周囲を広々とした草原に囲まれ、小高い丘の上に建てられていた。街らしい街もないし、部落も見あたらない。

依田さんは太い黒ぶちの眼鏡をかけ、がっちりした体格の方だった。母親と二人でもう八年間ここでくらしているという。宗教の力がいかに強いものであるかを思い知らされる。そろそろ旅の疲れも出始めてきた僕達にとって、いただいた日本茶と羊かんは格別のものであった。あの味は忘れられない。

## その四　佐々井上人

一九七八年三月二十二日。この日は僕達にとって記念すべき日となった。何故ならば、ボンベイ隊と我々カルカッタ隊がそれぞれインド亜大陸の西端と東端から出発し、デカン高原の中央ナグプールで再会したからである。それは早稲田大学ワンダーフォーゲル部がインド亜大陸を横断した歴史的瞬間であった。この日、何より僕達の計画成功を喜んでいてくれる人がいた。佐々井上人である。僕達がナグプールの街へお昼頃入場し、ボンベイ隊の連中と合流した際、「成功です。成功です。」としゃがれた声で「成功です。」を連発し僕の手を堅く握り、何度も何度もふってくれた人。佐々井さんは、我々が計画を進めていた七七年の夏頃から手紙で毎日のように連絡をとっていた人である。計画で一番重要となった連絡網の要となっていただいた。ボンベイとカルカッタに分隊した後の二パーティーの動きは絶えず中央の佐々井さんへ連絡され、お互い相手の隊の動きを佐々井さんを通して知ることができるようにしたのだ。

送られてくる手紙の時代がかったスタイルに、はるかなインドを想いつつ、その懇切丁寧な助言に僕達はいつも励まされていた。「佐々井さんてどんな人かなぁ」と僕達は、しげしげと手紙を読みながら連想していたものだ。佐々井上人はこれまでに東南アジアを点々とされ、インドに入りすでに十数年になるという。お宅に呼ばれた時に、佐々井さんが日本を出た当時の写真があった。二十年以上も前の若々しい顔と現在の佐々井さんの顔を見比べながら僕は考え込んでしまった。二十年という気も遠くなるような時間を、宗教の世界で生きてこられたという事実は何をもの語るのか。宗教っていったい何だろうと僕は再び考えこんでしまった。

## その五　土井先生（ミセス・バーノット）

土井先生のお宅を訪問したのは三月二十九日、インドを立つ三日前のことだった。僕達はすでにこのインド合宿四十日の日程の大半を消化し、あとは帰国便を待つだけだった。隊員はみなおみやげを求めニューデリーの街を奔走する。この計画も最終段階に入っていた。土井先生はネルー大学で日本語を教えていらっしゃる。旦那さ

んであるバーノット氏は旅行会社を経営していて、僕達がインドに着いた夜、キングスイングリッシュでインドを旅する上での注意点や、現在のインド情勢、インド人について語ってくれたのが耳にこびりついている。

土井夫人に「何故インドに住まわれるのですか」とたずねたところ「だってインドはとっても広いし、だれが何しようと他人のこと全く気にしなくて私には住みいいの。」とはっきりおっしゃられたのが印象深かった。家ではおふたりとも、いやお子さんのラジ・クマール君も、みな日本語で生活している。会話だけ聞いたなら、日本人同志のおしゃべりと思うに違いない。言葉が通じないということが、どんなにつらいことであるかを、いやというほど体験した僕にとって、言語の障害を完全に克服し、さらに民族を越えお互いが理解し合って夫婦生活を営んでいらっしゃるお二人はとてもすばらしいカップルに思われた。

後日談であるが、六月三十日お子さんを連れてお里帰りした土井先生に再会することができ、楽しい夕べをすごしたことを記しておこう。

以上、僕はインドで出会った日本人の印象を紀行文風にまとめてみた。人生冒険児の矢野青年、与古田青年、宗教に己れの人生をかける依田上人、佐々井上人、そして日本語の普及に情熱を傾ける土井先生……僕にとって新鮮な印象を受けた人達ばかりだ。どの方もスタイルはちがっても、みな情熱家である。さて自分は今後どう生きていくのだろうか、まだまだはっきりとしそうもないのだが、情熱をもって生きていきたいものだ。

## 旅行者か生活者か？

山田達男

インドから帰国後、友人達から「インドはどうだった？」と会うたびに聞かれた。その度に私は「おもしろかったし、勉強にもなった。ただあの国には長く住めないな。」と答えたものだった。真に長く住める国じゃないというのが実感だった。

インドに出発する前、また行動中にも、私は下級生に対して、「俺達は単なる旅行者でなく生活者になってインドの様子を見てこよう。」とよく言ったものだった。私にはインド合宿の計画が普通の観光旅行とは違うという大きな自負心があったのだと思う。しかし実際にインドに五十日近く居て単なる旅行者の域を脱し得なかった。

先発隊の一員としてニューデリーの街で一週間滞在した時に、最初のうちは露店の食堂で食事をとり「けっこう美味いじゃないか」なんて言っていたのが、三〜四日たつと、夕食だけは中心街の高級レストランで洋食や中華料理を食べるようになってしまった。それでもまだ合宿前半はよかったが、後半も最後のほうになると、もう露店の食堂で食事をすることができなくなってしまった。インドの食事に馴れるよりはむしろインドの料理が嫌いになっていったわけだ。今はっきり言って「あんなものを食って五十日間生活できるもんじゃない。」と思う。この段階で私は生活者志向の考えを捨ててしまったわけである。

もし、外国へ行って自分がその国で生活者になれないのなら、その国の文化や人間に対する評価などはできないと思う。実際、私は日本人のインド紀行の本などに出てくる「悠久の国」だとか「永遠の国」だとか「神秘の国」なんていうインドの代名詞はまやかし以外の何物でもないと思う。

生活者たり得ない旅行者は、自分達の見た事、聞いた事、経験した事を自分達の中で消化し、自分達の中で生かして行くことが重要な事だ。そう思うと、私はインドに長く住めないかもしれない。インドの事を深く理解することはできないかもしれないが、私のインドでの経験・印象を素直に自分に活かせるのではないかという気がしてきた。

## 「悪いやつ」とののしられたこと

太田敏彦

カルカッタをいよいよ出発した日、カルカッタから数十キロの小さな村で一休みした。ココナッを売っていたので、注文した（ココナッは、喉のかわきをいやすために好んで飲んだ。内陸部に入るに従って見かけなくなったが）。ココナッ売りは、鎌で器用に飲み口を切ってくれる。全部で二十個以上も飲んだ。

一個三十パイサとのことだったが、いざ金を払う段になると、六十パイサだという。言い争っていると、たくさんの人々が集ってくる。中には口をはさんでくる者もいて、必ず同胞に味方する。こちらも三十パイサと最初にきいたのだし、ムキになって、三十分以上も言い争っていた。結局、根負けして六十パイサ分払ったのだが、それまでの体験で、ここのやつは、すぐ金をぼろうとするから注意しようという気持があって、このココナッ売

りを相手に一種のゲームを楽しんだ、という気持ちがあったことは否定できない。

このあと、近くの茶屋でチャイをのみながら、そばに座っていた老人に、片言のヒンディー語で得意になって道をたずねると、彼は仏頂面で、おまえたちは悪いやつだ、どこへなりと早く行ってしまえ、とののしった。ブーラー・ワーラー（悪いやつ）と、ジャルディ・ジャオ（早く行け）ということばが、ばかに鮮明にきこえた。少々の金を値切ったことに対して、また大挙して突然おしよせた我々に対して彼はおこっていたのか、または、それ以外の理由があるのかはわからない。ぼくは、その老人に対して反抗できないものを感じて、黙って立ち去るだけだった。

## インド合宿

向後久夫

カルカッタを発ったその日、それも大使館の藤田さんと別れて最初の一本をとった時のことである。カリサニという、お茶屋が二・三軒あるだけの小さな村でのことである。二隊に別れて行動していたので、その村についた時には、既に他の隊がついていて、僕達の為にココナッツを用意しておいてくれていた。飲んでいる時に、村の人々が集まり始め、七・八十人集まったであろうか。自転車のまわりに、小さな川の対岸に、はたまた道路の向こうから、どこにそんなに人が住んでいるのかと思うような場所にである。飲み終わって代金を支払おうとすると六十パイサ（約二十円）だという。ところが、折衝にあたった太田の話によると三十パイサだという。話が違うので、我々を騙そうとしているなと思い、太田と二人で主人と話をしていると、主人は英語が分からない。こちらはヒンディー語が殆んど分からない。それでも数字だけはどちらも分かった。主人は三十パイサでよいという。ところがまわりに集まったおせっかいな英語のできるヤツが六十パイサだと言って譲らない。主人はとまどいぎみに笑っているだけである。英語の話せない者も、ニヤニヤ笑いながらこちらをみている。太田も僕も相当頭にきて、太田などは、大きな目をさらに大きく見開いてどなっている。全く、主人そっちのけである。三十パイサの人数分支払おうとして金を渡しても受けとらない。三十分位そんな事をしていただろうか。その時は、ここで午前中の行動は終わり、午後二時まで休むことになっていたので、そのことを考え、結局六十パイサ払うことに

なった。何んと頭にきたことだったろう。

そんなことをしているうちに、親切そうな英語のできる青年が現われたので、その若者に苦情を言う。過ぎたことはしかたがないとして話をし、写真を撮ったりしていると、寺院を案内してやるという。僕は葉書を出したかったので郵便局はあるかと聞くと、同じ方向だというので案内してもらうことにする。僕達がそれまで通った道路は、舗装されていたが、村の中へ入ると幅は二mぐらいで、泥道または石がごろごろの道で、両側は竹やヤシ、その他の樹木がうっそうとしていて、かなり入りくんでいる。家々は土を主体に材木というより木をそのまま使って作ってあると言った感じである。そしてその家々をすっぽりとおおうように木々があるのである。だから、はじめ、どこからこんな人が、と思ったわけであるが、これで納得できたわけである。郵便局は昼の休みに入り、三時まで閉じてしまったところだったので、そのままヒンズー寺院を案内してもらうことにする。寺院と言っても小さな祠が一つあるだけで、その中に神様がまつられているのであった。ちょうど日本の村にある祠のようで、中に安置されている神が違い、その祠も土でできており、水色や褐色の絵具でぬられているという状態であった。中には神を前に一人の老人が頭を垂れ何やら祈っていた。その傍に、さらに小さなシークの神様を祭った祠があったが、若者の話によると、ヒンズー寺院のほうは毎朝たくさんの村人がお参りするが、シーク寺院は少ないということであった。そのあとさらに、クラブをみせてやるというのである。何のクラブだろうかといぶかしく思いながらもついてゆくことにする。途中、彼の家の前を通り、父兄を紹介される。彼の兄はこの村のチャンピオンだそうである。いつのまにか子供達が後をついてくる。畑の中の道を通り、竹林の中をぬけて広場につくと、小さな物置のような小屋があった。小屋の中へ入ると、バーベル、ダンベル、鉄棒等があり、はじめてボディービルのクラブであることがわかった。それらの用具は使い古されているという感じがして科学的と言うには程遠いものであったが、毎朝ここでトレーニングをするのだと得意そうに説明してくれた。最後にインドの自転車に乗ってみろというので、広場を二・三周すると、子供達もその若者に笑いながら喜こんでくれた。

初めこの村についた時には、何てところにきてしまったのかと思っていたが、話してみると親切な者もいる。いや、悪い者の方が少ないのだと感じた。日本にいる時は、インド人はずるいということばかり聞かされていた

が、そういう人ばかりではない。これはインドでの僕のほんの一切れの体験であるが、全体を通してもインド人は親切であった。時には親切が度を越えたこともしばしばあったけれども。実際に自分でしてみなければ物事は解らない、というのをつくづく感じた合宿であった。

## イェトマル

神保淳一

ボンベイを出発して三週間たった三月十九日、ナグプール入りを二日後に控えて、イェトマルに入った。この日は、きれいな庭園をもつダムを通り、両側に雑木林の広がる道を通り、奥多摩でも走っているかのような、今まで見てきた荒涼たるものとはまるで異なる風景の中を走っていた。

街中に入り、例によって川相を伴に宿を探しに行く。このころになると、直観的に適当な宿のある場所がわかるようになってきていた。すぐに、ゲスト・ハウスを探し出して交渉するが、予約があって断わられる。近くの大学へ行ってみる。大学は、他の都市でもずいぶん見てきたが、ここは一風変わっていた。

日本人があちこちに居る。むこうも笑っているので、こちらも笑いながら近寄っていく。「こんにちは！」「ハロー！」。彼らは日本人ではなかった。よく聞いてみると、バングラデシュとビルマにはさまれた、インド・アッサム州南部のナガランドの出身ということだった。ここには、インパールとか、コヒマといった都市がある。第二次大戦中、日本軍が入っていた地方である。全くよく似ている。彼らも同じ思いのようだ。

この日は、ちょうど卒業式だった。正装した卒業生らしい人たちのまわりには、家族・親戚や教授・学友がとり囲んでいる。写真を撮ったり、談笑したり。日本のそれと同じ光景が展開されている。あまりに日本的な光景に不意に出会って異様な感じがしたが、すぐに何かホッとした気分になった。

この大学は、キリスト教系の神学校だった。娯楽室を宿泊所として借りる。学生は、インドはもちろん、ヨーロッパ・アメリカ・ニュージーランド・アフリカ・アジアと実に国際的だった。かなり有名な学校らしく、さまざまな国から集まっている。キリスト教徒であるから、インド人学生も牛肉・豚肉・その他の肉類はすべて食べる。このキャンパスだけが他と隔離されているようだ。

学生の部屋に遊びに行く。日曜日の午後とあって、彼

らも自由時間を散歩や読書・休養などにあてている。彼らは、実に真面目で、キリスト教や聖書について、とくとくと説いて聞かせる。日本の話も出たが、概してよいイメージをもっているようだった。二週間前に訪れた、アーメダナガールのカレッジの寮とは大分異なり、規律正しい生活で、卒業後は神父として布教活動に入っていくだろう彼らの顔をみていると、「なるほど」という気がしてきた。

夜は、記念行事として音楽会があった。インドの民族音楽はもちろん、西洋の音楽までさまざまな楽器を使っていた。途中で帰らなければならなかったのは実に残念だったが、楽しい会であった。

この日は今から思うと、一種のカンフル剤的な一日だった。日本的な風景・人間・行事などに接して、ホッとした気分になり、インドに居ることを一瞬忘れることもあった。毎日インド人との折衝などいろいろな面でインドにどっぷりと浸っていたのがリフレッシュされたようで、特に印象に残る一日であった。

# 印度合宿雑感

大島和夫

遙か昔の事の様に思えるインド合宿だが、日頃日記を書かない主義で、もし書いても二日以上は絶対続かない僕が初めて書いた日記を読み返してみると、鮮やかに瞼の裏にインドでの出来事や光景が浮かんで来る。どのページ、どのページにも決まってインド人や部員の誰かに対する怒りの言葉が書かれていて、あの頃のイライラぶりを如実に表わしているが、それでも記憶が鮮明なのは、普段の合宿では味わえないほどの印象を受けたからだろう。特に印象に残っている事。三月十七日の金曜日、ライブールのRAJ映画館という所での事である。その日の日記のタイトルは、「印度版帰って来た渡り鳥」となっている。料金は、一ルピー六十パイサで完全な勧善懲悪。となりに座った五〜六才の男の子がピーナッツを僕に勧めながら、身ぶり手ぶりを交えて先のストーリーをヒンディー語で教えてくれたが全くわからん。しかし、スクリーンを見ているだけであらかたわかった。

こうやって書いていると、楽しかった事だけが浮かんで来るが、こういう合宿の欠点は、それが最初で最後で

あるという点ではないかと思う。初めてで、これっきりなのである。失敗は許されないのである。もし、もう一度行ったら、今度は冷静に回りを見渡たせるのではないかと思う。

## バダラにて

川相智史

永遠に広がるデカンを貫く一本の道。その道の脇のバス停留所に人だかりが出来た。ワーナー、タブラという楽器を巧みに操りながら、歌う流浪の楽士の演奏を録音しているのだ。複雑なリズムとそれにまとわりつくかのような歌声が神秘的な、瞑想的な響きを呈する。歌が終わり、録音を再生してみせた。見物人から笑いがおこった。楽士の驚いた姿が滑稽でさえあるのだ。自分の歌声を聞くのは初めてだろうし、目が見えないだけに驚きが大きいのだろう。体を半身に構え、顎はつき出し、それから見えない目を開こうとでもするように、白眼を吊り上げるようにして、一生懸命に耳をそばだてている。隣りのインド人が肩をつっつく。振り向くと彼は笑みを浮べて、一点を指さす。見ると楽士の手が震えているのである。自分はなにか悪いことをしたような気持ちになった。彼のかなでる旋律とリズムは神への讃歌であり、祈りであったはずだ。インドの民族歌に恋愛歌はないと聞く。神聖な歌を茶化したような気がする。インドそのものを見下してしまったような気もする。彼はどもった口調でもう一曲歌うといったが、自分は彼に一ルピーを握らせて、逃るようにその場から去った。

## こじき

峰高正行

最初ニューデリーにいた時、太田さんと大島といっしょに日本に電話をかけに行ったあと、ニューデリーの街の歩道を歩いていた時、どこからともなく四〜五人の五才から十才までぐらいの子供たちが僕たちのあとからついてきて「いちルピー」「いちルピー」といい、手のひらだけが少し白い、黒い手をだしてきた。僕はなるほどこれが日本にいる時からよく聞いていたインドのこじきだな、と思った。薄汚ない服というよりボロを身につけ、髪の毛などアブラぎった上に、さらにゴミとホコリがついた感じである。もちろん裸足である。先発隊

で慣れていた太田さんは「チョロー、チョロー」といって何度も追払らおうとするがしつこい。「いちルピー」「いちルピー」太田さん「ダメーダメ」「いちルピー」「ワンルピー」「ワンルピー」太田さんさらに語気を強めて「チョロー、チョロー」なかなかしつこい。僕は初めてで、そんなにむやみに追払らわなくてもすぐにあきらめて帰ってしまうものと思って、黙って子供達の言うことにとりあわぬふりをして歩いていた。すると突然「ギャアー」という太田さんの声が横でしてびっくりした。子供の一人が太田さんのポケットに手をつっこんだのだ。太田さんが本気でおこったので、子供たちはニヤニヤしながらとうとうあきらめたらしく何やらヒンディー語なのだろうか、わけのわからないことばを残して去っていった。その間ずっと路上生活者のこじきの目がぼくたちの方に向いていたような気がしてぞっとした。

# インドで一番印象に残ったこと

村山　文晴

もやもやした不安と期待をこめて初めてペダルをこぎ始めたその日、われわれはカルカッタからおよそ百キロメートル離れた小さな町、バンスクーラの郊外に着いた。すでに陽は、はるかかなたの地平線に接しており、夕闇はすぐそこまでせまっていた。

まず宿を探さなければならない。三年生の太田さんと僕は一キロメートル程先のバンスクーラの中心へと走った。

「Where is the hotel?」と手あたりしだい聞きまくった。が、ある人は北の方向を指さし、ある人は南の方向を指さし、僕たちは同じところを行ったりきたりした。言っていることがバラバラなのだ。考えたあげく、まず警察に行き、そこでホテルの場所を聞くことにした。今度は警察ということですぐにわかった。門を入ると男が二・三人ひじかけいすにふんぞり返ってすわっていた。われわれは自己紹介をして今晩の宿が見つからずに困りはてていることを話した。すると横柄な口調で、この町にはホテルはないなどという。がっかりして帰ろうとすると、バンガローならあるが旅行者は泊めない、などと勝手なことを言いだしたりした。

（これは権力と賄賂にうったえるしか道はない）

そう直感すると、すぐに本隊を呼びに行き、隊長に直接談判をたのんだ。話によると、隊長が自信に満ちた顔で名刺を見せると、奥から署長らしき人が出てきたので

またしても自信に満ちた顔で百円の使い捨てのライターを出すと急に態度が変わり、そういえばロイヤルホテルがあるなどと言いだしたそうである。それを聞いてわれわれは色めき立った。ロイヤルホテルか……。急に華やかな甘美な世界が身体全体をとり囲み、プールが、シャンデリアが目の前にちらついた。

署長らしき人の部下の先導で、暗闇の中を今日来た道を自転車をひきながら歩いた。

（はてな？途中にそんなりっぱなホテルがあったかしら？）

そんな疑問が頭をよぎったが、すぐにロイヤルホテルという言葉が頭にうかび、プールが、ごちそうの並んだ白いテーブルが目の前にちらつき、そんな疑問をうち消すのだった。

二十分ぐらい歩いただろうか。「ここだ」と男が突然立ちどまった。しかしグルッと三百六十度見回してみたがそれらしきものはない。あるのは一軒の古ぼけた茶店だけだ。「ここだ」と彼はもう一度言うとその古ぼけた茶店を指さした。よく見ると軒先の看板に消えかかった字で“ROY HOTEL”と書いてあるではないか。目の前からプールが、シャンデリアが、白いテーブルがはかなく消えた。

中は十畳ぐらいの真四角の室で、半分ぐらいわらがしきつめてあり、かたすみの一台の、ひもであんだベッドの上に、生きているのか死んでいるのかわからないような男が横たわっており、そのかたわらでにわとりがたわむれていた。結局、自転車を中に入れると場所がほとんどなくなってしまい、われわれは家の前の車がビュンビュン通り過ぎていく道路のわきで、いつトラックがとびこんでくるかもしれないという不安におびえながらも、一日が無事に終わったという何か幸福な気分で眠りについた。

# 美しい日本語と私

芥川泰男

あれはアグラだった。

二年の某先輩が「今日、力車に乗ったら車夫が美しい日本語を喋っているのを聞いた。」というのである。私もその日本語を聞いて「ああ、美しい。」と思った。そして日本人に生まれたことを誇りに思ったのである。しかしそれがどんな言葉であったか思い出そうとしても思い出せない。今となっては非常に残念だ。ただ、人

の心に強烈な印象を与える言葉であったのは確かである。

それから数時間たった夕暮れ、私が同年部員の佐藤君と宿舎の前を散歩していると、往来の方から美しい日本語が聞こえてきた。私達は異国で日本語を聞いたうれしさで、思わずその声の主に駆け寄った。そうしてみると、その声の主は日本人でなく例の車夫であった。

その言葉の持つ不思議な魅力にひき込まれたのだろうか、気がつくと私達は車上の人になっていた。力車をひきながら車夫はその日本語を連発した。美しい響きはインド人にもわかるのであろう。彼はそれを一つの美しい音の組み合わせとして楽しんでいるようであった。

彼はあるダウン・タウンで私達をおろした。そこには、ぎらぎらとしたいくつもの目が私達を待っていた。そこでインドの下層の人々と初めて肌で接したのだった。私にとってこれは初めての経験でありショックも大きかった。つまりどう接してよいのかわからなかったのである。しかし私はこの合宿が異人種との接触を目的としている限り、この困難を避けてはならぬと感じた。

三十分程であったろうか。私はその接触においてインド人の呼吸を、息吹きを、胸の鼓動をあたかも直接肉体を通じて感得したような気がした。佐藤君も同じ様な印象を受けたらしく、二人して上気した顔を見合わせ満足の笑みを洩らしたのである。この時二人はめいめい百ルピーずつ車夫に請求されたのだがこれが少しも高いと思われなかった。私はインド合宿の四十日間は実にこの一瞬の為にあったのではなかったかと思ったのである。

あの美しい日本語を喋る車夫はどうしただろうか。今考えてみれば不思議な体験だった。第一、あれは日本語だったのであろうか。

## インド合宿

金森祐治

宿が一軒しかない小さな町でした。宿の裏手は小高い丘になっており、大小様々な石がゴロゴロしていました。日中は暑いので、甘いとはとても言えないスイカなんぞを食ってぐたーとしていましたが、三時を過ぎるとやや日射しも弱くなり、四時になると、元気をもりかえしてきて、その丘を「さあ登ろう」と言う事になりました。近所の悪ガキ十人足らずと一緒です。カメラマンの片所も同行しました。

ゆるやかな石コロの斜面をどんどん行くと、頂上らし

き所に着きました。私は、そこにしばらく感動のあまり立ちつくしてしまいました。周囲がすべて見渡せました。道路をゆく人々、力車、さまよう牛たち等々……。遠くにダムがあり、小さな山もあるようです。西へまっすぐ道路がのびています。明日通る道路です。

私は、そこにケルンを積み、近くの岩に私の名を彫りました。ガキ共がしきりに写真をとれといっています。実はフィルムはもうないのです。私が風景を目一杯とってしまったのです。仕方ないのでシャッターだけ押してやると、大変な喜びようです。一人、服装もよく時計もしている、いいところの坊ちゃんらしきガキがいたので、「一枚につき一ルピーだ」と言うと本当に一ルピー出しそうな気配だったので少しあわてました。どこでも子供をだますというのはよくない事です。

日が沈み始めました。遠く地平線が見えます。太陽は真赤です。「ギンギンギラギラ夕陽が沈む……」大分、気分的に盛り上ってきました。

ガキ共があまりうるさいので、「君たち帰りたまえ」と日本語で言って下を指さしますと、皆、走って帰ってゆきます。インド人のガキも素直なところがあるのを初めて知りました。

おっと、太陽が、夕陽が沈みます。沈む、沈む……。感無量でした。タバコは格別うまかったです。私はラクダに乗って太陽に向かってゆく自分を想像しました。あっ、時計を見るとメシの時間まであといくらもありません。片所と、飛んで帰りました。

スキヤキでした。

スキヤキの味がしました。

## 印象に残ったこと

佐藤　巧

（前略）彼はおごる所なく、実に素朴な仏教徒であり、私は深く心をうたれた。パテルさんの好意により、私達は彼の家に宿舎を移すことになった。森山さんに別れを告げて日本寺を去る。あの正直な子供達やモンゴリアンに再び会えないのが残念である。ボンベイは坂の多い町である。長い坂を登りつめ岬に出ると、そこにパテルさんの家があった。それは七階立ての、エレベーター付の豪邸である。六階はパテル氏自身の部屋だが、他の空いている部屋は人に貸している。我々は三階を使わせてもらった。（中略）パテルさんの家は岬の突端に位置し、回りは海であり眺めはすこぶる良い。窓は折りたたみ式

の全面開放窓で、対岸のビル街が見える。天井は、日本で言えば総檜木張りであって彫刻がしてある。まるで映画か夢でも見ているようだ。さすがはフィルム会社の社長さんである。インドは映画の製作本数が世界一だとかで、街にはやたら映画の看板が目立つ。インドで最もポピュラーな日本映画は「雪割草」という古い映画だとパテル氏が語ってくれた。パテルさんの娘はバルティさんという。年の頃二十二、三で美人という程ではないが、愛きょうのある顔立をしている。インド人には珍らしく、欧米風のジーンズスタイルでシティガールという感じだ。だがサリーを着て正装するとこちらがビビってしまう。思わず「バフット、スンダル!!（きれいだ!!）」といったら「アリガトウゴザイマス。」と日本語で答えた。彼女が森脇さんからもらったという因幡晃のL・Pをかけてくれた。パテルさんが壁のスイッチを押すと、天井からスクリーンがサンダーバードの秘密装置のように出てきたので、皆やんやの拍手喝采。テレビといい、丸い形のスピーカーといい何から何までこっていた。アラビア海を囲む湾岸の街並はシアトルのごとき百万ドルの夜景。九時半になると、ボンベイ湾の海中より月がユラユラとのぼってきた。ムーンライトがアラビア海を照し、夜空には南の星座が……。ロマンティックな世界。バルティさんが「マミーやパパが恋しくはない？日本が恋しくはない？」と聞いた。感傷にはひたっていなかったが、夜景の美しさと壮麗な豪邸にただただ、ため息が出るばかり。I am very happy !!　パテル氏が「明日ジューフービーチに行くといい。」と言うので皆で行くことになった。空にはアラビア海の赤い月……。

一九七八年二月二十四日付
「インド日記」より

## 初めてのふれあい

正田　益司

昨晩からの下痢に悩まされる僕は、みんなと外出せずに一人、寺に留った。どうにも腹がへってたまらんのでダヒーでも食おうかと、隣の茶店に行ってみた。そこには、寺の下男であるジャコブも来ていた。ダヒーを食い終って店の子供に料金を聞くと、一ルピーとのことだ。ところが、横からジャコブが「三十パイサだ。」と言いだす。子供達は怒って「一ルピーだ!!」とどなっている。ジャコブは僕の為に値切ろうとしたのだった。二人で寺に帰り、僕が便所へ行こうとした時、「あなたは明日出

発するのですか？」と彼は聞いてきた。「私は三日間たくさんの人々がいて幸せでした。」とニコニコしながら言う。初めは方便だろうと思って、「僕も非常に幸せでしたよ。」と言うと、「明日から寺はたった二人だけになってしまいます。私は淋しいです。」と言う。「また来ますよ。」と僕が言うと「いいえ、あなたは来ないでしょう。」と言う。ドキッとして、「いや、またいつか、きっとここに来ますよ。」と僕が言った時、「ありがとう。」そう言ってジャコブは目頭を押えたではないか。後で新井さんにその話をしたら「飯ぐらい、さそってやるんだったなぁ。」と言っていた。おそらく、僕達は二度と彼のもとを訪れる事はないだろう。ジャコブ。彼はおとなしくて、やさしい男だった。

# インド合宿感想文

鈴木　良太郎

デリーの市場の早朝の喧噪、ハウラ駅をおおっていた川霧。ヤシの木が茂るベンガルの田園地帯を、朝日を浴びながら駈け抜けて行ったキラキラ輝く僕達の自転車。毎日がレセプションぜめだったオリッサの、沿道の「歓迎（ウェルカム）」の大合唱。取り巻く子供達の顔、顔。数えあげればきりがない。今ではそんな事が一つ一つ、時という偉大な浄化作用によって、嫌なこと、汚ないものは取り除かれ、薄いベールをかぶせられて、思い出という風景画の中にはめこまれている。目を閉じてその輪郭のぼやけた画を思い浮かべてみると、本当に夢のようだ。自分は一体インドへ行ったのか、ということさえ怪しくなってくる。何故だかその風景画の中には、どこにも僕がいないのだ。

合宿に出発する前は、インドという全く異質の世界をじっくり見て、インド人と接し、自分なりに何かをつかんでやろうと思っていたけれども、ナグプールに着くまでは自転車の事で頭がいっぱいで体の調子も悪かったので、自分からインドというものに積極的に接するのを怠ってしまった。ただ通りすぎただけになってしまったのだ。従って僕にとってのインドとはナグプール・アグラ・デリーの日々と同様なのだ。これでは一般の観光客と変わるところがないが、本当だから仕方ない。その中で特に印象に残っているのはデリーの夜のことだ。珍しい土産を買おうと、インド人に話かけたのが始まりで、そいつに最初はタクシーで、それから徒歩で一時間近くひっぱり回された。少し街路を離れると電気なんて無いか

ら真っ暗である。道は人り組んでいて、時折チャバティを焼いている炉の火が見える位である。集まって話をしている連中が胡散臭そうにこちらを見る。この時は心底、恐怖を感じた。何しろ場所は何処だか全くわからないし、かなり奥まったところである。一人位殺されたって隠す場所はいっぱいあるし、また気に食わぬところがあれば僕を置き去りにしてもよいわけである。僕はユースホステルの門限もあるし、コンノートプレースの公園に馬淵を待たせていたので、気が気でなかった。とにかく、無事に面倒な取引を済ませるのだが、疲れるからもう書かない。タクシー代のことでまた一悶着あったし、スリルに満ちた素晴らしい夜だった。ただ、この事を話し合える奴がもういないことを寂しく思うだけである。

# 編集後記

ようやく、この報告書を発行することができました。私達の夢とロマンに満ちたこの計画が立案されてから丸二年が過ぎました。無事帰国後、四月の赤痢事件、五月の体育名誉賞受賞、そして八月の夏合宿における事故といろいろなことが起こりました。しかし、とにかくインド合宿はこれですべて完結しました。私達のこの報告書が今後の現役の活動に、さらにはその他一般の海外活動のテキストとして役立ってくれればと思います。

最後に、合宿に際して御協力していただきました各関係諸機関の皆様方、及び神沢部長以下顧問先生、諸先輩の方々には厚く御礼を申しあげます。

編集委員

神保淳一　新井規夫

川相智史　鈴木良太郎


# インド合宿報告書

発行日　昭和五十四年二月

発行者　早稲田大学体育局ワンダーフォーゲル部

編集者　神保淳一

発行所　東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一
早稲田大学体育館内
早稲田大学ワンダーフォーゲル部
電話　二〇三ー四四七九

印刷所　千加真印刷株式会社
中央区日本橋茅場町三ノ一〇ノ五
電話　六六八ー七五〇八(代)